

---

# 十一、四（BLEACH）

南条武都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十一、四（BLEACH）

### 【Nコード】

N7565F

### 【作者名】

南条武都

### 【あらすじ】

遠くなつた記憶は、不意に蘇る。恐怖と、感謝を伴つて。BLEACH 一角と四番隊オリキャラ連作。（自サイト掲載）

## 愛しき、世界 前編

遠くなつた記憶は、不意に蘇る。恐怖と、感謝を伴つて。

次の瞬間目の前には、めちやくちやに破壊された町並みと、死体の山が広がっていた。萎えた体は動かす事も叶わず、否応なしにその光景を網膜に焼き付ける。

死体の山。ちぎれた手足、溢れ出す血、何も語らない虚ろな目。先ほどまで確かに生きていたそれらは皆動かない、ただの肉塊に変じていた。

「……あ……」

声にならない声が、口からこぼれた。同時に吐き気がこみ上げてきて、体を折つて地面にはいつくばると、何もない腹の中から苦いものがせりあげ、黄色い液体があふれ出す。体をひくひくさせながら何度も吐いて、ようやくおさまった頃、ふらりとよろけて地面に倒れた。

指一本、動かせない。頭がぼうつとして、耳鳴りがする。吐しゃ物のすっぱい臭いが鼻をふさぐ。

死。

その言葉は知らなかったが、今目の前に、生死の境があるのは本能的にわかつていた。恐ろしさは無かった。もう、苦しまなくてよいのだと思うと、かすかな喜びが心を掠めた。

今度こそ、死が訪れる。

「……あ……あ……」

僅かにもがいて、目を閉じた。闇の中は不思議な安らぎに満ちていて、暖かいように思えた。

しかし、闇はそう長く続かなかった。

「……な……かり……」

鈴を震わすような、やわらかい声が降ってくる。あたかもその声が、温もりをもたらしてくれるかのようだった。冷え切った体にじんわりと温みが染み、徐々に意識を引き上げられていく。

「……聞こえ……か？ ……私の声が、わかりますか？」

「……っ……」

ぼんやり、と目を開く。ぶれた視界に影が映った。暖かさが全身を覆い、何度か瞬きを繰り返していたら、影が人のそれだということとがわかってきた。大人。大人の女。黒髪を長く伸ばした、穏やかな表情の、女。

「しつかりなさい。もう、大丈夫ですよ」

女は、光を纏っていた。やさしい微笑みは白い輝きを運び、目がつぶれそうなほど美しく見えた。

「……あっ……」

たじろいで、逃げようと動きかけたが、女がそれを止めた。手を伸ばしてこちらの体を抱き上げ、腕の中に抱える。

「大丈夫。怖い事はもうありませんよ。今は、お休みなさい」

先ほどとはまた違う、温もり。体を包み込む柔らかい感触は、なぜだかひどく安心させられる。息を吐いて、目を閉じた。再び闇に覆われたが、今度のそれはどこか冷たく、よそよそしかった。

\* \* \*

暖かい。寒くないし、痛くもない。くさい臭いもしない。むしろ、甘い匂いがする。

目を開くと、天井が目に入った。整然と格子状に並んだ天井は見えた事が無くて、何度も瞬きをする。

（どこ？）

起きあがろうと身じろぎしたが、体が重くて動かない。と、枕元で水の音がした。

「目が覚めましたか」

視線を向けると、そこには大人の女が居た。長い黒髪を編み、黒い着物に白い羽織を着たその人は、目を細めてにっこり微笑む。

「気分はどうですか？ 熱は下がったようですが、どこか痛むところはありますか」

穏やかなその声が自分に向けられてると知って、居心地が悪くなる。こんな風に優しく声をかけてくれる大人には今まで出会った事がなかったから、どう答えていいのか分からない。

驚くほど柔らかい布団の中でもぞもぞ動きながら、首を振ると、女はそうですか、と言って、こちらの額に濡れた布を置いた。

「無理をしてはいけませんよ。あなたは、二週間も眠り続けていたのですから。少し、食べられますか？」

傷一つ無い白い手が、頬に触れた。しっとりした感触に驚くも、食べる、という言葉のほうに意識がいった。食べる、食べられるの？ 目で訴えると、女はまた笑みを浮かべて、

「良かった、食欲はあるんですね。今、おかゆを持ってきますから、少しお待ちなさい」

す、と静かな所作で立ち上がり、部屋を出て行った。その後ろ姿をぎよる、と動かしただ目だけで見送り、もう一度天井を見る。

（どこ。だれ）

少なくとも、自分が今まで暮らしてきた場所でない事は、確かだ。あそこはこれほど静かでも、綺麗でもなかった。何故、自分はここに居るのだろう。記憶を辿ろうとしたら、頭にずき、と強い痛みが走って、思わず身が縮こまる。

（わかんない）

痛みに顔をしかめて、目を閉じる。する、と睡魔が忍び寄ってきて、すぐに何もかも感じなくなった。

目が覚めたのは、食欲をそそる暖かい匂いがしたからだった。ぱ、と目を開いて顔を動かすと、さっきの女が皿と水差しを枕元に置いたところだった。

「あら、起きたんですね。よく眠っていたと思ったのだけれど」

女の言葉は、耳に入っすぐに抜ける。今は、皿に目が釘付けだった。ほかほかと白い湯気をたてるそれには、白い飯がつやつやと光輝いて盛られている。ぐう、と腹が鳴った。盛大なその音に、女は目を丸くした後、小さく笑った。

「ふふ。では、食べましょうか」

さじで飯をすくって、ふー、ふー、と息を吹きかけて、こちらの口に添えてくる。白い飯はするり、と口の中に入ってきた。ほとんど嚙まずに飲むと、暖かく甘い味がじんわり、喉を通っていくのが分かる。

「……っ」

もっと食べたい。そう思っさじに嚙み付いたら、女は「慌てないで。急いで食べると、お腹がびっくりしてしまいますよ」と、口に運んでくれた。少しずつだったので物足りなく感じたが、皿が空になる頃には、腹もくちくなくなった。

「これをお飲みなさい。お薬ですから、楽になりますよ」

女は水差しをこちらの口にくわえさせた。何日かぶりに飲む水は、しかしあの街で飲んでいたそれとは違い、冷たく、甘く、少し苦い、不思議な味がする。

こくこく、と飲み干すと、体全体がぽかぽか暖かくなって、先ほどの急速な睡魔とは違う、緩慢な眠りが忍び寄ってくるのが分かる。「……ゆっくり、お眠りなさい。次に目が覚めた時には、もっと良くなっていますよ」

女は水差しを置いて、頭を撫でてきた。素直に頷いて目を閉じると、これまで感じた事がないほど優しい眠りが、押し寄せてきた。

女の言う通り、眠りから覚めるたびに、体の具合はどんどん良くなっていった。目覚めてから一週間後には起きあがれるようになり、食事も普通に取れるようになった。

女は、卯ノ花 烈と言った。ここがあの街ではなく、瀟靈廷とい

うところにある部屋だ、という事も教えてもらった。

「あなたの名前は、何というのですか？」

そう尋ねられて、ゆきね、と答える。

誰がつけたのか知らない、記憶の片隅に残っていた、自分の名前。あの街では、おい、とか、こら、とか、その、とか、そんな風にしか呼ばれなかったから、名前なんて忘れかけていた。意味があるとも思っていなかった。

けれど、烈と呼んで欲しいと言った女は、にっこり笑って、

「そう。雪音、ですか。良い名前ですね。あなたは、雪を見た事がありますか？」

……無いんですね。それならば、今度見せてあげましょう。雪は空から降り注いで、広い大地を一面、純白に染め上げて、それは美しいものです。あなたの名前は、とても綺麗な名前なのですよ。」

そういつて頭を撫でてくれた。綺麗、なんて言われた事がなかったから、雪音は俯いた。どうしたのですか、と聞かれ、

「……わかんない。ことば、いえない」

拙い口調で言う。話をしている内に、雪音のぎこちない言葉の意味をくみ取るようになっていた烈は、顔をのぞき込んできた。

「ほめられた時、どういつて良いか、分からないという事ですか？」

「……う」

頷く。

「そのような時は、こう言えば良いですよ。      ありがとう、と」

「あ……あり？ ……」

「ありがとう。相手の気持ちを受け入れ、感謝する言葉です。言つてご覧なさい」

「あ……ありが、とう」

「そう。良く出来ましたね」

烈は嬉しそうに顔をほころばせて、雪音の顔を手で包み込んだ。与えられた絹の服のように滑らかなその手は、とまどいを覚えるほどに温かった。

## 愛しき、世界 後編

総隊長の執務室に、墨の匂いが漂う。書類にさらさらと筆を滑らせながら、山本元柳斎重國はそれで、と問うた。

「あの子供の様子はどうじゃ、卯ノ花」

報告を終えた卯ノ花は、わずかに目線を下げた。

「酷く衰弱しています。まだ幼いものですから、あの場で何が起きたか聞き出すには、時間が必要となりました」

死に満ちた街の中で唯一見つけた、あの子供。発見した際、血にまみれ怯えきった様子から、いとけない瞳でさぞ恐ろしいものを目撃したに違いない。そう思うと、哀れで胸がしめつけられるような思いがする。

「出来うるのならば」

これが許されるのかどうか、分からない。だが言わなければ後悔するだろう。卯ノ花は山本と視線を合わせ、穏やかに言った。

「出来うるのならば、わたくしは、あの子を預かりたいと思っています。少なくとも、日常生活を送れるようになるまでは」

「ふむ」

山本は顎髭をしごいて唸った。考え込む様子でしばらく黙り込んだ後、よかろう、と頷く。

「世話はおぬしに任せる。時間がかかってもかまわん。今回の事態について、少しでも聞き出すように。何しろ、あの子供は唯一の目撃者じゃからの」

「……はい」

卯ノ花は静かに頭を垂れた。その時が、まだ先である事に少しほつとして。

\* \* \*



子供の名は、雪音と言った。

言葉がたどたどしく、大人を見るといつも怯えた目をして逃げようとするから、あの街ではよほど酷い暮らしをしていたのだろう。やせこけ、あちこちに暴力の跡を残した体も哀れで、治療に当たっている間、卯ノ花は涙がこぼれるのを禁じ得なかった。そしてつきっきりで看病しようと決意し、隊舎にある卯ノ花の自室で起臥させ、隊長職の傍ら、根気よく世話を続けた。

その献身的な介護のためか、最初の内は目を合わせる事無く、ただひたすら怯えていた雪音は、徐々に緊張を解していった。

身体がすっかり回復した頃には、卯ノ花の後をどこへでもついて行くようになるほどに、なついた。

一度部屋の外に出ると雪音は、その目に映るもの全てが物珍しいのか、瞳を大きく開いて、きよろきよろと落ちつきなく辺りを見、興味のあるものには躊躇いなく手を伸ばした。

しかし誰かに話しかけられると、さっと卯ノ花の後ろに隠れてしまう。

卯ノ花はそんな雪音へ常に優しく暖かい言葉をかけ、その手をとって導き、夜は添い寝をして寝付くまで子守歌を歌った。

卯ノ花は子供を持った事は無い。だが、もし自分の子がいれば、こんな風なのだろうと思えたから、自然、愛着がわいた。

だから雪音を預かり、一年が経過した頃、そろそろ事の真相を聞きたいと総隊長から催促された際には、胸がつぶれそうな思いで、彼女を伴い、執務室を訪れた。

「おうおう、雪音よ。この間よりもまた、美人になったの」

雪音を前にした山本は、護廷十三隊の総隊長というよりは、孫を可愛がる祖父のようだった。目尻をさげて微笑み、あめ玉を雪音の手に握らせる。

「ありがとう、山本おじいちゃん。これ、好き。甘くておいしい」  
雪音は恥ずかしそうに、しかしはつきりした口調で答えた。その

可愛らしい様子に、山本はますます笑み崩れた。

しかし、来賓室へ卯ノ花と共に招き入れ、給仕が茶と菓子を差し出して下がってから、山本はすぐに本題を切り出した。

「それでどうじゃ、卯ノ花。雪音はあの時の事をなんぞ、語ったかの？ 以前は話そうとすると、頭が痛くなる、というておったが」

卯ノ花は顔を曇らせた。

「いいえ。ですが時折、夢を見ているようで、うなされて跳ね起きる事があります。言葉に出して言いはしませんが、おそらく、少しずつは思い出しているでしょう」

「そうか」

山本は、無心にあめ玉をしゃぶる雪音を見て、目を細めた。少し間を置いたのは、山本もまた、あの時の惨事をこの幼子の胸に蘇らせる事が哀れと思ったからだ。

しかし総隊長は雪音の顔をのぞき込むと、穏やかな、それでいて拒絶することを許さない強さで語りかけた。

「雪音。一つお主に聞きたい事があるんじゃない」

「？」

真剣な様子に何事かと、顔をあげる雪音。

「お主が生まれ育った、あの街

むくろがらす  
骸鴉の事を、聞きたい」

「！」

雪音の顔がこわばる。問いを拒むように、小さな手が卯ノ花の羽織を握りしめた。山本はそれを見て、穏和に微笑む。

「うむ、思い出すのは怖かるう。辛かるう。じゃが、わしらはあの街で、いったい何が起きたのかを知らねばならぬ。なぜあのような惨状となったのか、知らねばならぬ。それを知っておるのは、雪音、お主だけじゃ」

雪音の華奢な身体が震え始める。

「ほんの少しでも良い。お主があの時何を見たか 語ってはくれぬか。お主の言葉だけが、唯一の手がかりなのじゃ」

「……」

「雪音」

言葉を失ったかのように、雪音の唇だけが動く。卯ノ花はその背をそつと撫でて、名を呼んだ。雪音は卯ノ花の顔を見上げ、泣きそふな表情でしがみついていた。

「……て」

肩に手を回した卯ノ花に、鼓動の音が伝わってくるほど動揺しながら、雪音が小さく呟く。身を乗り出して耳を傾ける山本の目を、怯える小動物のように落ちつきない瞳で見つめ返しながら、

「手が、ぶった」

震える言葉を、紡ぎ出した。

手が、ぶった。壺、落ちた。地面、濡れた。手、ぶった。何度もぶった。白。黒。気持ちわるい。お腹、けられた。吐いた。頭、ふまれた。赤い。痛い。

耳がきーんとなった。音。たくさん、音。さっきより、いたい。すごくいたい。頭われる。耳いたい。じめん、ゆれる。

あつい。お湯みたいにあつい。音。どくどく。耳こわれる。かわく。見えない。白とくろ。たくさん、ひと。おなじひと、なんにんも。こえ。こえ。知らないこえ。ゆれる。ぜんぶゆれる。じめん、われた。

じめん、われた。ゆれた。こえ。おおきいこえ。おとな、さけんだ。しろ。ひかり。くろ。ぜんぶみえない。きこえない。まっしろ。ぜんぶまっしろ。ぜんぶ。ぜんぶ、ぜんぶ……

「……雪音！」

不意に雪音の身体が痙攣したかと思うと、床に落ちた。がくがく震える身体がど、と大きくのけぞる。驚いて伸びた卯ノ花の手が、雪音の身体に触れるより前に、

バシッ！

大きな破裂音をたてて弾かれる。

「！」

卯ノ花は目を見張った。

白目を向き、えびぞりになりながら痙攣する少女は、不意に喉の奥から笑い声をしぼりだした。気が触れたように明るいその笑いと共に、目に見えるほど濃密な霊圧がど、と噴き出した。

霊圧は一度もがくように小さくなった後、渦を巻いて部屋の中に吹き荒れた。烈風を伴った霊圧で卓や椅子が弾き飛ばされ、窓ガラスが粉々に碎け散る。

「総隊長！」

吹き付ける霊圧に押されながら卯ノ花が叫んだ時には、山本はすでに行動していた。

「縛道の三十二、過墜天！」

裂帛の気合いと共に紡ぎ出された白色の巨大な光が、吹き荒れる霊圧の上にのしかかった。一時、光と霊圧の力は拮抗してきしみ、耳障りな甲高い音を奏でたが、しかし次の瞬間光が霊圧を飲み込み、破裂し、降り注いだ。

「雪音……！」

まぶしさに目を半ば閉じながら、卯ノ花は名を呼ぶ。

光の雨の中、体を丸めた少女は、床の上でひくひく蠢く。卯ノ花はとっさに駆け寄って、脈をとり、口元に手をあて、まぶたをめくった。

「卯ノ花、どうじゃ。加減はしたが」

山本もそのそばに膝をついて、雪音をのぞき込む。卯ノ花は、ほ、と息をついた。手をかざして治癒の光を注ぎながら、

「大丈夫。気絶しているだけです」

「そうか」

山本も音の無いため息を吐いて、それから部屋の中を見渡した。

整然と片付けられていた部屋はいまや見る影もなかった。卓や椅子は半ばひしゃげてひっくり返り、壺は碎けて飛び散り、ずたずたに裂けた壁掛けがぶらんとぶら下がり、書類は散らばって、枠の弾

けとんだ窓からひらひら飛んでいく。

コレクシヨンの和食器がことごとくひび割れているのを見て、山本がむう、と思わず肩を落とした時、

「総隊長、これは……何事ですか?!」

騒ぎを聞きつけた副隊長の雀部長次郎が、貴賓室に飛び込んできた。惨状に驚いて足を止めるのに山本が向き直り、

「不測の事態じゃ、騒ぎにするな。急ぎここを片付けい」

ぴしゃり、と疑問を受け付けずに言い放ったので、雀部は背筋を伸ばして「はっ」と応えた。そして、使用人を呼ぶため、足早に去る。それを見送った山本は、卯ノ花の腕に抱かれた雪音を見下ろした。先ほどまでりんごのように頬を赤らめ、嬉しそうに飴をしゃぶっていた幼子は、紙のように真っ白な顔色で、目を閉じたまま、ぶるぶる震えている。

「卯ノ花」

呼びかけに顔を上げた卯ノ花の表情は固い。

「雪音の力、お主は知っておったか」

「……いいえ。多少の霊力を持ち合わせているのは承知しておりますが、まさかこのような……」

「わしも気づかなんだ。先の力、自身の魂魄さえ壊しかねぬほどの大きさ。しかも、まだ霊圧は上がると見た」

「………はい」

卯ノ花はぎゅ、と雪音を抱きしめる。珍しく恐れを含んだその表情は、おそらく山本と同じ可能性を考えてるのだろうと思う。山本は、しゅ、と髭をしいた。うつすらと目を開き、

「卯ノ花、空軀かいくうの件。技術開発局と協力して、至急調査を進めよ。

………極秘にの」

優しく聞こえるほど穏やかな声で言うと、卯ノ花はハッと顔をあげ、それから頷いた。雪音を抱く手に、震えるほどの力を込めて。

## 愛しき、世界 後編（後書き）

ここまでお読みいただいて有り難うございました！作者の南条です。これはBLEACHの十一番隊三席・斑目一角と、四番隊のオリジナルキャラ・鑑原雪音を主人公にしたラブコメ&シリアスなお話です。

一話完結の長編連作ですので、基本的にどこから読んでも楽しめると思いますが、ぜひこのお話から順に、二人がどう出会い、どう関わっていくのかを見ていただきたいと思います。（この二人以外の死神も頻繁に顔を出します）

元のお話は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です。

まだ完結しておらず、間の話が抜けている部分もありますが、先が気になる方はそちらをご覧ください。ちなみに現在掲載中の作品の内、後半のほうは甘かゆい感じの展開です（笑）

では、今後もよろしくおつきあいくださいませ。

## 世界に、一歩

目の前に紙と筆、硯が並んだ卓を置かれ、雪音は目を瞬いた。おず、と顔を上げて卯ノ花を見ると、彼女は普段通り穏やかな表情で、「今日からお勉強を始めましょう、雪音」

そう宣言する。聞きなれない単語に、雪音は顔をしかめた。

「べん、きょう？」

「ええ。あなたの知らない事を知るためにね」

「知らない事を、知る」

「そうです。さ、その本を開いて御覧なさい」

言われるまま、恐る恐る冊子をめくつてみると、そこには大きな文字と小さな文字が様々に書かれている。

「それは練習用の教本です。挿し当たっては、まず文字の勉強から始めましょう」

「もし……」

雪音はまじまじ、と本を見つめる。文字、というものがあることが、人がそれを使って物事を表現することは知っていたが、一見不規則な記号の羅列は、雪音には到底理解できなかった。誰も教えてくれなかったからだ。

「もし……べんきょう、したら、読める？」

問いかけると、卯ノ花はいつものようににっこり微笑んで、頷いた。

「利発なあなたなら、きっとすぐ読めるようになりますよ。そうすればきっと、新しい世界が開けるでしょう」

そうして始まった勉強は、時に卯ノ花、時に四番隊の死神、時に卯ノ花家の使用人と相手を変えながら進められていった。

最初は紙を全て墨だらけにして、文字とも絵ともつかないものを書いていた雪音だったが、しかしやがて手本と見まごうばかりの文

字を書くようになり、それに伴い話し言葉からもぎこちなさが取れていった。

かな全てを読み書きできるようになった後は、漢字の読み書きと並行して本の読み取りが行われ、雪音の識字教育は順調に進行していった。

これまで知り得なかった世界に踏み込んだ雪音は、周囲が驚くほどの熱意を持って、読書にのめりこんだ。外見の年齢が十を過ぎる頃には、書庫にこもって一日本を読みふけるほどになった。

そんなある日、教本の中で意味が分からないところを質問しようと、卯ノ花の執務室を訪れた雪音は、部屋の主が居ないと知って、がっかり肩を落とした。

（烈、どこにいるのかな。隊舎にいないのかな）

分からないことはそのままにしないように、と教え込まれていたから、雪音は四番隊隊舎の中を歩き回って探した。しかしどこを探しても、卯ノ花は居ない。

（どうしよう。胡蝶も居ないし）

四番隊の死神で、勉強を教えてくれる女性も姿が見えないから、雪音は途方に暮れた。そこいらにいる人を捕まえて、卯ノ花や胡蝶の居所を聞くか、いつそその人に意味を尋ねてみるか、と考えたところで、

「卯ノ花隊長！」

わ、という叫び声が外から窓を通って飛び込んできた。

「!？」

驚いて窓枠に飛びつくと、下に妙な生き物が地面に寝そべっているのが見えた。

いや、寝そべっているのではない、からだがひらべったく、尾をひよろりと伸ばしたそれは、図鑑で見たエイにそっくりだった。エイはごぷり、と喉？を膨らませると、口の中から唾液と一緒に人間を吐き出した。

「あ……胡蝶！」



中から出てきたのは胡蝶だった。真っ白な顔色で、服にはべったりと重たい赤がにじんでいる。きつく目を閉じている様を見て、雪音は昔見た死体の山を思い出した。

「……っ」

足元から震え上がるような冷気が昇ってくる錯覚を覚えたが、その時胡蝶が目を開いて、大きく咳き込んだ。

「大丈夫ですか？ 胡蝶」

その胡蝶の脇に、卯ノ花がしゃがみこんで声をかける。

胡蝶が何と答えたのかまでは聞こえなかったが、多分大丈夫とか何とか、そういった事を言ったのだらう。卯ノ花はそうですか、と頷いて、エイの方にす、と鞘を差し出した。

と、エイは不意にぐにやりと形をゆがませ、餅のように柔らかく変じながら、鞘の中へと吸い込まれてしまう。その巨体がすべて収まった時には、鞘の先には刀の柄が現れていた。

「解毒と治療はしましたが、貧血が酷いようです。すぐに病室へ運びなさい」

卯ノ花は鞘についた紐を肩にかけると、集まってきた隊員にきびきびと指示を飛ばす。雪音はハツとして窓から離れると、玄関へと駆けた。

ばたばたと慌しく足音を立てて、卯ノ花の元にたどり着く。厳しい表情で死神達と言葉を交わしていた卯ノ花は、雪音に気がつくとき、軽く眉根を寄せた。

「雪音、そんなに騒々しくしてはいけませんよ。廊下は静かに」

「う、うん、ごめんなさい。あの、胡蝶、胡蝶はどうしたの？」

謝りながら問いかけたら、卯ノ花はふっと表情を和らげて、

「胡蝶は任務の最中に、傷を負ったのです。命に大事ありませんから、心配はいりませんよ」

安心させるように言った。そしてすぐまた表情を改め、指示を待っている隊員に顔を向ける。

「私はこれから報告に行かねばなりませんから、後は任せましたよ」

「はっ！ 行つてらっしゃいませ！」

「雪音、皆の邪魔にならないようにね」

一言残して、卯ノ花は羽織を翻し、颯爽と歩いていく。頭を下げてそれを送った隊員は、

「……卯ノ花隊長はやっぱりするこいなあ」

独り言のように言いながら、体を起こす。

「え？ 何が？」

やや呆気にとられたまま問いかけると、隊員は胡蝶を指で示した。「いや、彼女は虚の毒にやられてね。少しの傷でも命取りになる猛毒で、これまで何人もの隊員がそれにやられてしまったんだが、卯ノ花隊長のおかげで助かったんだ。もし隊長が同行されてなかったら、俺達の小隊は全滅してたよ」

「全滅……」

「本当に今回は、命拾いしたな。あの方がいらっしゃるからこそ、俺達も安心して前線に立てるってもんだよ」

「そ、なんだ……」

心底感服した様子の隊員から、担架に乗せられて運ばれていく胡蝶へ視線を移す。横たわった胡蝶の顔は相変わらず白いが、しかし傷一つなくしつかりした呼吸を繰り返している。

「……」

雪音はぎゅ、と本を抱きしめた。道の先に行く卯ノ花の姿はもう見えなくなっている。

\* \* \*

「烈……様」

「はい？」

夜。膳を前に食事をしていた時、不意に雪音が呟いたので、烈は目を上げた。視線が合うと、雪音は、はにかむように唇を噛んで、「へ、変？ 烈様、っていうの」

「いいえ、変ではありませんけれど、急にどうしたのですか？」

雪音はこれまでずっと卯ノ花を烈、と呼び捨てにしてきた。それは卯ノ花を軽んじているのではなく、敬称を知らぬ故で、身内同然なのだからよかろうと、卯ノ花も注意せずにいた。

それが突然様付けをされれば、何があつたのかと氣になるのは当然だ。雪音はもじもじ、と煮物を箸でいじって、

「今日、胡蝶が死にそうになつたところを、烈……様が助けたつて聞いたの。

あそこにいた人が命拾ひしたつて言つて、有り難う……感謝、してて。

それつて、人を死ななく出来るのつて、凄いなつて雪音も思つたの。だから、凄い人にはけーい、敬意をはらわなきゃいけないつて本にも書いてあつたから、烈様、なの」

「……そうですか」

一生懸命に己の心の動きを語る雪音の姿はいじましくて、しかし、「人を死ななく出来る」という不自然な表現が氣にかかつて、卯ノ花は曇つた微笑を浮かべた。

無惨に滅びた街から救い出してから、数年。

保護した当初は虚ろな表情しか見せなかつた雪音は今、普通の子供と同じように、くるくる表情を変えながら、自分の言葉で好きな事を語れるようになった。

しかし言葉を交わしていると時折、あの街にあつた死の澱が、まだ雪音の底に残つていゝる事を感じるときがある。今の言葉とてそうだ。

雪音にとつて、人とは生きているか、死んでいるかではない。死んでいるか、いないか、その二つのみしかないのだ。

まだこれほど幼いのに、少女の瞳は常に死へ向いている。その心から死の影を払い、心底から明るく笑えるようになるには、どれだけの時間が必要となるのだらう。その事が哀れで、悲しい氣持ちにさせられて、卯ノ花はそつと目を伏せる。その時、

「……烈様、雪音もしたいな」

ぽつ、と雪音が呟いた。自分の考えに没頭していた卯ノ花が、え、と顔を上げると、雪音はおずおずとした上目遣いでこちらを見ている。

「雪音も烈様みたいに、人を死ななく出来るように、したいな。どうすれば出来るの？ あ、でっかいエイみたいなのがあればいいの？ 烈様、どうやってあのエイ捕まえたの？」

遠慮がちだが、十分好奇心に満ちた声で問いかけられ、卯ノ花はくすりと笑った。

「いいえ、捕まえたものではありませんよ。あれは私の斬魄刀が形を変えたもので、人を癒す能力があるのです」

「さんぱくとう……それって、死神のみんなが持つてる刀、だよな」

「ええ、そうです」

「なら雪音、死神になる」

「……え？ 何ですって？」

不意の宣言に、卯ノ花は面食らった。冗談かその場の勢いか、と思ったが、雪音はぎゅ、と拳を握りしめて、

「雪音、烈様みたいになりたい。烈様は死神だから、死神になったら、雪音も人死ななく出来るようになるよね」

「それは……いえ、雪音、それは向き不向きというものがありますし、そもそも死神とはどういったものか、分かっているのですか？」

「知ってるよ。死神はソウル・ソサエティと現世にある魂魄の量を、均等に保つ調整者で、現世に行つて整の霊をこっちに送ったり、虚を倒したりするんですよ」

「そう、ですけど」

教本をそっくり暗唱したような、いや、実際暗唱しているのだろ、う、正しい死神の定義をすらすら述べられて、卯ノ花はますます困惑する。

雪音を死神にしよう、等という事は考えた事も無かった。

何はともあれ、雪音をまず落ち着いた生活になじませる事が第一

だったし、死神の仕事は大小の差こそあれ、危険を伴う。この弱い少女には、到底合わない仕事だろう。

しかし、言葉にした事で余計に意志堅固となったのか、雪音は大きな瞳を更に大きくして、

「雪音、死神になるの。それでね、今日みたいに胡蝶が怪我したら、雪音が死ななくしてあげるの。そうしたらきつと、胡蝶はありがとうって言うてくれるの。死なないでいてくれるの。」

だから烈様、いいよね？ 雪音、死神になってもいいよね？」

「雪音……」

きらきら輝くような笑顔でそう問いかけてきたので、卯ノ花は言葉を失った。

雪音はこれまで見た事が無いほど楽しそうに、死神になったらどんな事をするか、夢中になって話している。

叶うかどうか分からない将来の夢を語る様は、しかし普通の子供と寸分違わぬ無邪気さで、見ているとぼう、と胸が温かくなるような気がしてきた。

「……そうですね」

箸を置いた卯ノ花は、まっすぐにこちらを見上げるつぶらな瞳を見つめ返し、思う。

叶う、叶わないは問題ではない。この子が願いを持ち、それがこの子の生きる糧となるのなら。

「良いでしょう、雪音。死神になりたいと言うのであれば、今日からもつともつと、たくさんのお勉強をしましょう。死神になるために知らなければならぬ事は、たくさんありますからね」

卯ノ花はにつこり微笑んで、そう言った。すると雪音はぱっと顔を輝かせて、うん、と頷く。

「雪音、絶対、烈様みたいな死神になるの。絶対、絶対に！」

## 世界に、一歩（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

物を知らない雪音がなぜ死神になろうと思ったのか、その理由のお話です。

まだ子供っぽく控えめではありますが、世界を知る手段を得て、引っ込み思案だった少女はかわり始めました。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## 輝くもの

「烈様。折り入って、ご相談があります」

「まあ、何かしら。そんなに畏まって」

背筋を伸ばして正座し、改まった様子で口火を切った雪音に、生け花を楽しんでいた卯ノ花は視線を向けた。

真央霊術院入学を目指し、日々勉強に励む雪音は、年頃の少女の面差しながら、最近とみに大人びた振る舞いをするようになってきた。

それは護廷十三隊の隊長を務める卯ノ花への尊敬から発するものではあったが、幼い頃から彼女を育ててきた卯ノ花にとって、雪音の成長は嬉しくもあり、またこそばゆくも感じられて、つい微笑んでしまう。

その微笑につられたのか、少し肩の力を落とした雪音は、先ほどよりは少し柔らかい口調で言う。

「私に霊圧のコントロール方法と、霊圧を抑圧する鬼道を教えてもらえませんか」

「あら」

卯ノ花は、微かに眉根を寄せた。

「そういった事はまだ早いものではありませんか？ 鬼道は今理論を勉強しているところでしよう。霊圧を操作する鬼道は、今のあなたには難しいと思います。それに学院に入れば、きちんと授業で学べますよ」

諭すように言ったが、雪音は首を振る。

「勿論それは承知しています。ですが烈様もご存知の通り、私の霊圧はきわめて不安定で、烈様に縛道をかけてもらわなければ、暴走してしまいます。これでは、いつ霊圧が制御不能になるかと不安です。」

今のままでは、いつまでも烈様のお手を煩わせる事になりますし、

ましてや死神になる事など叶わないでしょう」

雪音は手について、頭を下げた。

「ですから、私は自分で、霊圧の制御が出来るようになりたいのです。お忙しいのは承知しております、ですがどうか、ご教授下さい、烈様」

「……困りましたね」

剣山に花を挿して、卯ノ花はため息をもらした。

雪音が、自身の霊圧を制御したいと思う気持ちは分かる。しかしだからといって、卯ノ花自ら、コントロール方法や縛道を教える時間がない。

このところ大型虚の出現が相次ぎ、戦闘で出た負傷者がひっきりなしに救護詰所にやってくる。今日は久しぶりの休暇を取って家政を仕切ったが、明日からまた詰所にこもらなければならぬ。とても、雪音の勉強を手伝ってやる暇は無い。どうすべきか。

ずっと身を後ろに引いて、生け花の全体のバランスを見ながら考えていた卯ノ花は、そうですね、と静かに言葉を紡いだ。

「では、技術開発局の局長にご相談してみてもはどうでしょう」

「局長に？ 何故ですか？」

思いがけない人物に、顔を上げた雪音は目を丸くする。挿した杜若を引き抜き、茎を少し切りながら、卯ノ花は答えた。

「あなたの霊圧は、あなた自身の意思一つでは、制御できない性質のもののように私には思えます。」

それを自身の思う通りにしたいと望むのであれば、まず、あなたの霊圧をコントロールするための助けとなるものが必要なのではないのでしょうか」

「それは、どういったもので……」

「私には分かりません。しかし局長は以前より魂魄の研究を熱心になさっていますから、おそらくソウル・ソサエティで最も私達の構造 霊力、霊圧の何たるかをご存知だと思うのです。」

霊圧制御の一助となるものは、あるかもしれませんし、無いかも



しれません。どちらにしてもそういった事は、私などよりも局長の方が詳しいはずです。

ですから、局長のところへ行って御覧なさい。何かしら、手がかりが見つかるかもしれませんよ」

「……」

しばらく考え込むように黙った後、雪音はハイ、と答えて、再度平伏した。

「ではこれから、技術開発局の浦原局長のところへ参ります。ご休憩中のところ、お邪魔して申し訳ありませんでした」

「いいのよ、雪音。あまり畏まらないで頂戴。よそよそしくされると、寂しくなってしまうわ」

あくまでも堅苦しい様子にそう言つと、雪音は体を起こした。

「だって、もう子供ではないのだから、はじめはつけないといけないでしょう？　今まであたし、本当に失礼な事ばかりしていたから、きちんとしなきゃ、と思って」

卯ノ花はふ、と目を細めて笑った。

「あなたは良い子ですよ。だから二人でいる時くらいは、気を楽にして頂戴な。そうでなければとても寛げないわ」

「……はい。有難うございます」

「こら」

頼んだ先から言葉が改まったので、卯ノ花が叱責するふりをする  
と、雪音は恥ずかしそうに肩をすくめて、

「ありがとう、烈様」

そう言い直して、微笑んだ。

\* \* \*

「おや、雪音さん、いらっしやい。どうぞこちらへ。今お茶出しますよ」

「はあ、お構いなく」

すんなり隊長室の中へ招き入れられ、雪音は恐縮しながら座布団に腰を下ろした。

技術開発局局長、および十二番隊隊長という立場にありながら、浦原喜助という男はいつも腰が低く、卯ノ花の養い子でしかない雪音を自ら歓待してくれる。

ちやぶ台の上に湯飲みと茶菓子を並べ、よっこいしょ、と腰を下ろした浦原は、

「それで、今日はボクに何の御用ですか？ わざわざ隊舎に訪ねてくるなんて、珍しいですね」

ずずーっと茶をすすりながら尋ねてくる。

「あの……」

雪音は少し躊躇った。浦原は自分の事情をとうに知っていて、これまでも卯ノ花と共に雪音の面倒をあれこれ見てくれたのだが、面と向かって話す機会はなかなか無かった。

相手は何もかも知っているとは言え、さほど親しいわけでもない浦原に話すには、気が進まない。

口ごもっていると、浦原はとんでもない事を言い出した。

「もしかして好きなコでも出来ました？」

「は？」

顔をあげたら、浦原はパンツと扇子を開いて、どこから出したのか紙吹雪を舞い散らせ、

「そういう事ならボクに任せて下さいよ。何が入用ですか、睡眠薬・媚薬・疲労薬、ご要望にお答えして何でも作りますよ」

「ち、違いますよ！ 何言ってるんですか、浦原局長！」

焦って否定すると、浦原は扇子を閉じ、

「やだなあ、冗談っスよ冗談」

「……局長……」

バチーン、とわざとらしくウィンクをしてきたので、雪音は脱力してしまう。相変わらず、何が本気で何が冗談なのか分からないんだ。

「そうじゃなくて、今日伺ったのは、あたしの霊圧のことなんです」  
気を取り直して、雪音は自分の用件を語った。はいはい、と相槌をうつて話を聞いた浦原は、つるりとした顎を撫でて視線を上向かせる。

「ふむ、霊圧を安定させるものっすか。そりゃあ、ある事はあるっすよ」

「えっ、本当ですか!？」

つい身を乗り出してしまふ。

「ボクも色々研究してますからね、霊圧を制限する装置ってのは、試作段階ですけど、あります」

「じゃあ、その装置を」

浦原は宥めるように手で制して、

「まあ、そう急がないで。ただね、雪音さんには、それを使えないんじゃないかと思うんですよ」

「ど、どうしてですか？」

「雪音さんの場合、一度箍が外れると一気に霊圧が跳ね上がって、一緒に意識が飛んじやうでしょ？」

制御装置って言っても、ある程度は霊圧を同調してもらわなきゃなりませんから。使う本人が自我喪失状態じゃ、役に立ちませんよ」  
「そう……なんですか……」

希望が見えたと思ったのに、あっさり打ち砕かれて、雪音はがっかりした。しかし浦原は大丈夫、とばたばた手で仰いでみせた。

「卯ノ花さんはいいい所ついてますよ。要素っていうのはすなわち、雪音さんの霊圧と波長の合うものを見つければ良いって事なんスよ」  
「波長の合うもの？」

「そーっす。霊圧には人それぞれ固有の波長があつて、それと同様の波長を持つものなら共鳴して、霊圧を何倍にも高めたり、逆に抑圧したりする、要するに霊圧をコントロールする事が出来るんス。

さっき行った制御装置も、基本はこれと同じです。もっと汎用的に使えるように、改良はしてるんスけどね」

「はあ……」

難しいことは良く分からないが、要するにそれさえあれば、問題は解決らしい。

「じゃあ、あたしの霊圧と波長が合うものって、何ですか？」

尋ねてみると、浦原はパチン、と手を合わせた。

「それは試してみなきゃあ分からないっす。もしこれから雪音さんに時間があるなら、ちょっとボクと実験室に行きませんか？」

\* \* \*

職務を終えた卯ノ花は、まっすぐ技術開発局へ足を向けた。そこで雪音と浦原が、霊圧を制御する要素を探す実験をしている、と連絡を受けていたからだ。

「失礼します」

「いらつしやい、卯ノ花隊長。お早いお着きで」

ところ狭しと物が並ぶ実験室へ足を踏み入れると、椅子に座って足を組んだ浦原が穏やかに声をあげた。

「お世話になります、浦原隊長。雪音は……」

「あつちっすよ。今良いところっす」

頭を軽く下げながら問うと、浦原は手で奥を示した。そちらへ顔を向け、卯ノ花は驚きに目を見張る。

複雑な線で構成された陣の中央に、雪音は居た。外界と隔絶された円の中、霊圧が結界の壁を撫でて青白い放電光と破裂音を立てながらのたうつているが、それは以前暴走した時と比べて、格段に弱いものになっている。

「何か、見つかったのですか？」

膝をつき、脂汗を浮かべる雪音を見つめながら問うと、そーっすね、と浦原はのんきに言った。

「色々試してはみたんですけどね、雪音さんと一番相性良い要素は、どうやら銀みたいっす」

「銀？」

言われてみれば、雪音は細い棒のようなものを握り締めている。

「金属つてのは、元々霊圧との共鳴率が高い物質なんですよ。液体から固体まで、あれこれしましたけど、あそこまで雪音さんの霊圧に共鳴できたのは、銀だけっス」

雪音が棒を両手で掴み、ぐ、と力を入れると、雪音の外に放出される霊圧が更に弱まった。

チリチリチリチリ、と空気をくすぐるような細かな音が響き、光り輝く棒が振動し始める。

浦原は背もたれから身を起こし、雪音に声をかけた。

「雪音さん、そこまで行ったのなら上等ですよ。ために、鬼道かけてみます？」

「き……どう……？」

集中しているせい、雪音は言葉を切れ切れに発した。僅かにこちらを向いたその視線を受け止め、卯ノ花は一步前に出て、

「私の言葉を復唱なさい、雪音」

す、と手を差し伸べる。雪音はぎこちなく頷いて、卯ノ花の声に続いて鬼道の言葉を紡いだ。

「戒、揺るがす世界を掌握し、押しつぶし、新たなる一を爆ぜろ…」

…縛道の三十二、過墜天！」

バシッ！！

「うっ！」

一際大きな音を立てて、結界が揺らめく。白光に目を焼かれそうになって、手をかざし光を避けた卯ノ花が、次にまぶたを上げた時、雪音は床に倒れていた。

「雪音！」

ひく、と痙攣する様に、あの時の光景が蘇った。浦原が結界を解くのもどかしく、卯ノ花は雪音のもとに駆け寄り、抱き起こす。雪音は額にびっしょり汗をかき、青ざめた顔で激しく息を継いだ。

「雪音、大丈夫ですか？」

冷たい体にぞつとして、癒しの力を注ぐと手をかざしかけた卯ノ花だったが、しかし雪音は大丈夫です、と首を振った。乱れた息を整えようと、大きく深呼吸を繰り返す。

「どうつスか、雪音さん。気分のほうは」

その前にしゃがんだ浦原が顔を覗き込むと、雪音は力なく顎をあげ、

「……いい、です。これ、今、あたしが、鬼道で、霊圧、おさえるんです、よね」

「そーつスよ。いや大したもんスねー、卯ノ花さんの支援があつたとはいえ、三十二番の縛道を使えるとは。鬼道の才能あるつスよ、雪音さん」

「あ、りが……と……」

褒められた雪音は弱々しく微笑むと、そのままずっと意識を失った。

雪音の霊圧は今、低い状態で制御され、安定した状態にある。それを感じ取った卯ノ花はその体を抱えなおし、ほう、と息を吐いた。浦原に頭を下げる。

「ご助力有難うございます、浦原隊長。これでこの子も少しは安心して、生活する事が出来るでしょう」

浦原はいーつスよ、と軽く言った。目じりが下がった瞳をすつ、と細めて、

「死神になりたいなら、こんなところでへたばってちゃ話にならないつスからね。大変なのはこれからつスよ」

口を横に引いてにつ、と笑う。卯ノ花は呼吸が安らいだ雪音を見下ろし、

「そうですね。……その通りです」

穏やかに呟いて、雪音の額に張り付いた髪を払ってやった。

## 輝くもの（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

今回は霊圧絡みで浦原隊長が登場です。最初に書いた時点では、現世のテンションそのままの浦原さんだったのですが、過去話を参考に抑え気味になりました。扇子はその名残です。

霊圧の相性云々は適当にデッチあげたので、あまりつまらないであげてください。浦原さんが開発中の霊圧を制限する装置は、隊長格に使用する限定霊印の装置です。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## 繋がり、結び

時を経て、春。一度の不合格の後、雪音は真央霊術院に入学した。そこでこれまで自身が知らなかった事を学ぶ楽しみ、また、得た知識を実際に活用することの喜びは例えようのない幸福で、雪音は寝る間も惜しむほど熱心に、勉学に勤しむ日々を送っていた。

\* \* \*

「……では、今日はここまで。次回レポート提出を忘れないように」  
鐘と同時に講師が教本を伏せると、それまで静まりかえっていた教室が、わぁ、と息を吹き返す。生徒達がばらばら出て行く中、最前列に座って、黒板の内容を写していた雪音は、

「……よし、っと」

ノートを閉じて立ち上がった。次の講義は隣の棟の教室だから、早く移動しなければならない。急ぎ鞆に本を詰めて立ち上がり、教室を出て歩き出す。が、

「……あっ」

びくつと立ち止まった。廊下の向こうからやってきた三人の少年達が、雪音の姿を見て顔をしかめ、ついで、冷ややかに笑ってみせたのだ。

彼らは雪音に近づいてくると、進路を阻むように取り囲んだ。顔をのぞき込んで侮蔑に満ちた口調で、

「何だ、まだ居たのか、お前」

「とつくの昔に退学したと思ったのに。さすが流魂街の奴は、しぶといよな。神経が図太いっていうか」

「おいおい、そう言うなよ。何しろこいつは卯ノ花様に拾われたんだから、れっきとした貴族様なんだぜ。俺たちと同じ、さ」

「……っ」



鞆を抱えて、雪音は身を引いた。

真央霊術院に入学してから知った事だが、この学院は貴族出身の子弟が圧倒的に多い。

学院の門戸は広く開かれていて、霊力の素養があって入学試験に合格すれば、出自を問わず入学することが出来る。

しかし建前はどうかあれ、貴族と平民の間には歴然とした溝が存在し、流魂街出身者はそれと知られると、影でいじめを受けることがある。

「そうだったな。うまくやったよな、卯ノ花様にどうやって取り入ったんだか」

「そりゃあれだろ、土下座して飯食わせてくれって泣きついたんだろ」

「卯ノ花様はお優しいからなあ、野良犬でも放っておけなかったんだな」

同期生のこの三人は、雪音にとってそういう相手だった。

何故か知らないが、こちらの素性がある程度知っているらしく、顔を合わせるたびに雪音をこき下ろし、実習などで組む時があれば、わざと雪音に失敗させるなどの嫌がらせをしてくるのだ。

雪音はぐ、と唇をかみしめて俯いた。

面罵されるのは、慣れている。じつところ覚えていれば、いつかそれが過ぎ去っていく事は分かっていた。しかしそれを反抗と受け取ったのか、少年の一人が雪音に近づいてきて、どん、と肩を押した。

「何シカトこいてんだよ、お前。何とか言えよ」

「あつ……」

押されたせいで鞆が手から滑り、床に落ちた。口をきちんと締めていなかったのだ、どしゃ、と中身が散らばる。慌てて拾おうとしたが、

「どんくさいな、何やってんだよ。床が汚れるじゃないか」

少年が邪魔をするように、荷物をぐちゃぐちゃとかき回した。その手が紙をひよいと拾い上げ、

「あん？ 進路希望書じゃないか」

「あつ！」

取り戻そうとしても、少年は立ち上がって、雪音の手に届かない高さまで持っていつてしまう。

「か、返してっ……」

「へーえ、護廷十三隊……ああ？ おい、見てみるよ、これ」

「どれどれ」

「……おいおい、四番隊希望って！ マジかよ！」

紙を覗き込んだ少年達の間で、どっ、と笑いが上がる。

「？」

あからさまな嘲笑に、雪音は戸惑って眉根を寄せる。紙を持った少年は顔を歪めて、冷ややかに笑った。

「四番隊をわざわざ希望する奴なんて、普通いないぜ」

「ど、して」

「どうして？ 何だよ、知らないのかよお前。四番隊はな、護廷十三隊で一番弱い連中がいくところなんだぜ。霊力がない、虚一匹殺せない、雑用しか脳のないおちこぼればっかりだもんな」

「な……」

違う。

否定の言葉を口にしようとして、しかし息が喉に詰まった。

四番隊の力がどれだけ、人々の救いになっているかも知らないのか。胡蝶や烈の顔が頭をよぎり、カツと体が熱くなる。

「ま、でもそうだな。卯ノ花様の引きがなきゃお前なんか、護廷十三隊にも入れやしないだろ」

違う。

烈のひいきなど無い。

「入隊しても四番隊しか入るところしか無いよな。流魂街のおちこぼれはさ」

腹の底から沸き起こる熱いものが何なのか分からないまま、拳を固める。

「そうそう。それにお前、めちゃくちゃ霊圧低いしな。能無しの吹き溜まりがお似合いだよ」

……違う！

「……あ、あ、あああああつ！」

次の瞬間、雪音は少年に飛びかかっていた。

\* \* \*

「……や、やめなさいっ！」

不意に後ろから衝撃が来た。背中から腕が回って身体を拘束し、ぐん、と引つ張られる。

「っ」

雪音は反射的に暴れたが、足が床を離れたので、我に返った。後ろから羽交い絞めにされ、しかも空中に浮かんでいる。ぎよつとして振り返ると、見知らぬ少女が、困った顔をしながら雪音を抱え込んでいた。

「はなっ、離して……」

「だ、駄目、喧嘩なんて駄目よあなた、落ち着いてっ」

じたばたしたが、この少女は雪音よりもずっと背が高く、力も強かった。拘束から抜け出そうともがきながら、雪音は廊下を見下ろす。そこには鼻から血を流した少年が座り込んでいた。

ぺ、と口から血を吐き出し、怒りの形相で少年がよりりと立ち上がった。仲間がもうやめろよ、と止める手を振り払って、

「てっ……めえ、野良犬のくせに、何しやがる……！」

「あつ、駄目！」

少女の制止も聞かず、少年は羽交い締めになされた雪音の胸ぐらを掴み、拳を振り上げる。が、

「そこまでになさい」

「!?!」

凜、とした声が、その動きを縫い止めた。いつの間にか、少年の拳に細い手が重なり、ゆっくりと下に下ろさせる。

「誰だ！」

殺気だった少年が振り返った先には、女性が立っていた。黒髪を頭の後ろでまとめ、整然とした空気を身に纏ったその女性は、端正な顔に厳しい表情を浮かべて、少年を抑えている。

「あつ……都先輩」

雪音を押さえている少女が呟くのが聞こえた。都と呼ばれた女性はちらりとこちらへ視線を向け、

「虎徹さん、その子を下ろしてあげなさい」

穏やかな口調で促すのに従って、少女は雪音を地面に下ろした。

その手が離れた途端、

「っ」

雪音は足から崩れ落ちるようにして廊下に膝をつく。雪音もまた、少年にあちこち殴られたらしい。重たい痛みがどつと襲い掛かってきて、萎えた足は体を支える事が出来ず、細かに震えて少しもいう事を聞かない。拳はあまりにも強く握りしめたせいか、固く結んだまま開く事が出来ず、あちこちすりむけてじんじん痛んだ。

「……廊下で喧嘩なんて、何事かしら。原因は？」

都は両者を見比べた。しかし雪音は答えるどころではなく、自分の体を抱きしめてうずくまるだけだった。弱ったその様子にかえって勢いづいたのか、少年は鼻血をぬぐいながら、

「俺は何もしてないのに、こいつが突然殴りかかってきたんです！  
悪いのはそいつだ！」

声を裏返して叫び、雪音に指をつきつける。頭に響くその声に、雪音は違うと言いつ返したかったが、全身を駆けめぐる痛みで声が出ない。都は雪音を見下ろし、

「……」

思案するように眉根を寄せた。と、

「あの……都先輩。それ、違うと思います」

おずおず、とした声が割り込んできた。

(え?)

不意の言葉に驚いて、雪音が顔を上げると、先ほど雪音を押さえつけていた少女が広い肩をすぼめて、

「私、そこでたまたま見ていたんですけど……この人たちが一方的に、この子を悪く言ったから、それでこの子が怒っちゃって、こんな喧嘩になっちゃったんです」

訥々と主張する。思いがけない非難に、顔を腫らした少年は息を飲み、

「な、何言つてんだお前！ こんな野良犬に味方する気かよ！ こいつが悪いんだ、俺にこんな怪我させたんだ、とつとと退学処分にするばいいんだ！」

逆上して、廊下の端にまで聞こえそうなほど絶叫し始める。何か、と周囲に人が集まり始めたので、都は顔をしかめて、

「分かったわ。確かに取っ組み合いの喧嘩を始めたのは、彼女が先だったようね。でも、それはあなた達にも十分非があるのではないかしら」

少年の腕を取り、他の二人へも視線を送った。

「ひとまず保健室へ行きましょう。話は治療が終わってから聞いてあげますから。」

……皆さん、早く次の授業へ向かいなさい。見世物ではありませんせんよ」

都は人垣に向かって手を振って解散を命じ、雪音の方を振り返った。目が合うと、労わるような優しい表情で微笑み、

「虎徹さん。彼女を連れてきてあげて下さい」

雪音の脇に立つ背の高い少女へ言う。

「は、はいっ！ 分かりました！」

少女はハッと背筋を伸ばして返事をし、少年を連れて歩き出した都を見送った後、雪音のそばに膝をついた。

「大丈夫？ あなた」

「……っ」

辛うじて頷いたが、立ち上がる事も出来ないのが分かったのか、無理しないでいいわよ。鞆は私が持つから、ほら、肩貸して？」

少女は高い背を折って、雪音の体を支えて立たせてくれた。見知らぬ人に触れられるのは苦手なので、雪音は体を強張らせて「いい……」と断ろうとしたが、か細い声だったので聞こえなかったらしい、少女はそのまま歩き出してしまふ。

「酷かったわね、さっきの。あの人たち、何であんな事言うのかしら。あなたは何もしてないのに」

「……」

そんな事は知らない。だが、もし理由があるとすれば、多分自分にあるのだと思う。

彼らのいう事はまちがっていなかった。自分は確かに汚泥のような街で育った野良犬で、烈が同情で手を差し伸べてくれなければ、こんなに明るく綺麗な場所にいられるはずがなかったのだから。

しかし少女はそんな雪音の気持ちなど気づく事なく、

「もしかしたら、あれかしら。あなたをやっかんでるのかもしれないわね」

ふと思いついたように言った。

「……やっかん……？」

やっかんで。嫉妬、という意味だったか。言葉を頭の中で変換して、雪音は首をかしげた。何故、彼らが自分に嫉妬する必要があるのだろう。

少女は雪音が首を傾げるのを見て、ふふ、と息を漏らした。

「だってこの間の試験、あなた一番取ったでしょう？ それも二番と圧倒的に差をつけてたもの、頭が良くて羨ましいと思う人がいてもおかしくないわよ」

「……そ、なんだ」

授業は楽しいし、良い点を取ると、烈がいつも言葉を尽くして褒めてくれる。それが嬉しくて、期待に応えようと一生懸命勉強して

いたのだが、それで人に嫉妬されるなんて、考えもしなかった。

そういえば、彼らがいつにも増して絡んでくるのは、試験の後だった気がする、と思い起こしていると、少女がこちらの顔を覗き込んできた。

「な、……なに？」

突然近くに顔が来たのにびっくりして、雪音は顔をひいた。少女は「あつ、ご、ごめんね」と謝って、

「あのね、知らないかもしれないけど私、結構あなたと同じ講義を取ってるの。先生に指された時もすらすら答えるから、すごいなあっていつも思ってた」

ばつが悪そうに顔をしかめる。

「それで、ごめんね、聞くつもりなかったんだけど、さっき進路希望の話聞こえてきちゃって。四番隊、入りたいのね」

「……う、うん」

自分ではそんな事考えもしなかったが、周囲の目から見た四番隊はおちこぼれ集団なのかと思うと、胸の奥が痛くなる。眉間にしわを寄せた雪音に、少女はにこつと笑った。

「あのね、実は私も四番隊の入隊を希望してるの」

「……え？」

「私は先頭切って戦う事より、人の手助けのほうが性に合ってて、能力的にも、治癒の方が向いてるみたいだから。」

でも四番隊って、さっきの人たちが言ってたみたいに、護廷十三隊の中で最弱だって陰口叩かれてるらしくて……でも、だからあなたも四番隊を目指してるって聞いて、嬉しかったの。

四番隊に入りたいのは、私だけじゃないんだって思って。それで……」

そこまで話して、少女はあ、と口を手で覆った。顔を赤くする。

「ご、ごめんなさい、勝手にぺらぺら喋っちゃって。私の志望動機なんて、どうでもいいいわよね」

「……ううん」

雪音は小さく首を振った。四番隊をけなされたショックは未だ大  
きかったが、自分以外にも四番隊を志望している人がいるという事  
は嬉しかった。自然、顔がほころぶ。すると少女はこちらの顔を窺  
うように、

「あの、もしよかったら……友達に、なってもらえないかな？ 私、  
知り合いも居なくて、ちよつと心細かったの。あなたと一緒に勉強  
出来たら、嬉しいんだけど……」

遠慮がちに申し出てくる。

友達。

その言葉に、今度は雪音が赤くなつた。今まで大人の中にばかり  
いて、同じ年頃の友達など、いたことが無かつた。こんなに優しそ  
うな少女なら、出自の卑しい自分でも構ってもらえるかもしれない。  
そばにいる事を、許してくれるかもしれない。

「う……うん、有り難う。友達、嬉しい」

どきどきしているせいでぎこちない片言で了承すると、少女はぱ  
あつと顔一杯に笑みを浮かべた。

「良かった！ じゃあ改めて、私は虎徹勇音よ」

「あたしは……卯ノ花。卯ノ花雪音。えつと……宜しくお願いしま  
す……いたつ！」

ぺこ、と頭を下げたら、肩に痛みが走った。

「きゃっ、大丈夫？！ ごめんね、保健室すぐそこだから、頑張っ  
てね」

勇音は励ましの言葉をかけながら、雪音を抱え直した。しっかり  
と自分の身体を支えてくれる少女の腕の温もりを感じながら、雪音  
はうん、と小さく頷いた。

初めて出来た、友達。

その言葉が、痛む身体さえ癒してくれるように思えて、不思議と  
心が和んだ。



## 繋がり、結び（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

今回はお友達ができた！というお話です。周囲が大人ばかりの環境で育ってきたので、初めての同年代の友達が出来たので、相当嬉しかったようです。また、あこがれの人になる都さんも出てきています。この方、海燕さんと結婚する前の旧姓が分らないので、名前を呼ぶ時は気を遣います（笑）

男の子に突っかかっていくあたりは、後年出てくる勝ち気さが若干顔を出してきています……

最新作は自サイト「南通り」（<http://members.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## 歡喜の日

着物を胸に抱いて走る。目指すは、あの人のところ。

「み、や、こ、さーん！！！！」

天にも届けとばかりに名を呼ぶと、彼女は足を止めて、こちらを振り返った。ああ、と顔が柔らかくゆるむ。

「雪音。どうしたの、そんなに慌てて」

「あのっ……あの！」

雪音は、ざ、と都の前で足を止めて、弾む息を整える。そして、  
ば、と着物を前につきだした。

「護廷十三隊、入隊試験受かりました！ 明日から、都さんと同僚ですっ！」

「あら」

都は雪音の勢いに目を丸くした後、

「そう、とうとう受かったのね。おめでとう、雪音」

ふわりと笑う。しかし、

「いつになったら通るのかと思っていたけれどね。鬼道実技、すれすれだったんですって？」

にこにこしながらつつこまれ、雪音は思わず、う、と言葉に詰まった。

「だ、だって苦手なんですもん、鬼道……。でも、ちゃんを受かりましたよ！」

「そうね、良く頑張りました」

そう言いながら、雪音の頭をよしよし、と撫でてくれる。雪音は喜びで胸がはち切れそうになって、真新しい死覇装を抱えてにやついていると、

「何だ、誰かと思えば雪音じゃねえか」

ひよい、とぼさぼさ頭の男が話に入ってきた。

「志波さん。居たんですか」

「ああ？ 何だオメー、その言いぐさは」

まるで目に入らなかつたので率直に言ったら、相手は不機嫌そうに口を尖らせた。

「つーか、その志波さんつてのやめろよ。俺とこいつ、どっち呼んでるんだか、わかりやしねえ。海燕でいい」

そう言つて都と自分を指さすので、今度は雪音が口を尖らせる。

「えー、そんな事ないですよ、都さんは都さん、って呼ぶし。っていつか都さん、何でこんなのと結婚したんですかー？ 都さんなら、もつと素敵な人といったたた！……！」

話をしている最中に頭を掴まれ、つい悲鳴をあげた。海燕は据わった目で睨み付けてきて、

「こんなのは何だ、ええこら？ オメーな、うちの隊に配属されたら覚悟しやがれ。上官に対する口の利き方つーもんを、徹底的に仕込んでやるからな」

ぎりぎり、と締め上げられる。

「痛い痛い痛い！ 都さんっ、助けて！ 暴力男に殺される！」

雪音が助けを求めると、都はくすくす笑つて、海燕の手に触れた。「それくらいにしてあげなさいな。悪気は無いんだから」

「お前な、都、こいつに甘すぎるんだよ。後輩なら、もつときつちりがつちり教育しとけよ」

雪音は手が離れた頭を押さえて、べ、と舌を出す。

「ふーんだ、志波さんと違って、都さんは優しいんですー。それにあたしは十三番隊じゃなくて、四番隊に配属なんですー。志波さんなんかの下で働いたりしませーん」

「なっまいきな奴だな……」

苦虫をかみつぶしたような顔の海燕。都はまた笑う。

「念願の四番隊に入れたのね」

言われて、雪音は満面の笑みで大きく頷く。

「烈様つて優しそうに見えて厳しいから、能力が無ければうちの隊

には入れませんよ、って仰ってたんですよ。でもあたし、絶対四番隊いくって決めてたから、入隊出来てすごく嬉しいです！ 都さんと同じ隊になれないのは残念だけど」

「ふふ。希望が叶って、良かったわね」

都は雪音の顔をのぞき込んできて、笑った。

「では、明日から頑張ってね、卯ノ花隊員。あなたの活躍を楽しみにしているわよ」

海燕は雪音の頭をくしゃくしゃ、と撫でて、笑った。

「あんまりはしゃいで、ドジるんじゃないぞ？ 怪我したら診させてやるからよ」

穏やかな笑みと、陽気な笑み。二人の性格は全く違うのに、どこか似通ったその微笑みが向けられている事が嬉しくて、  
「はい！」

雪音は死覇装を抱きしめて、笑った。

## 歓喜の日（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

憧れの二人に入隊のご報告。短いですが、三人の関係性を書き出す事が出来たので満足です。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## 四番隊名物1

出会いは人生を変える。

出会いによつて、あたしは生きる意味を教えられた。

出会いによつて、あたしは暖かく優しい思いやりを与えられた。

出会いによつて、あたしは闇ではなく、光に目を向けられるようになった。

そして、あの日。

あたしは、全てを変える、運命の出会いを果たす。

\* \* \*

風が吹いて、窓の外に干した敷布をはたはたとなびかせる。今日は良い天気だ。これならたまっていた洗い物も、すぐ乾くだろう。

「その山、持ってきてくれる？ 全部洗っちゃうから」

包帯を消毒液につけて洗いながらあたしが言つと、

「は、はい。これですね」

後輩の友実君は、つみあがった包帯の籠をよいしょと持ち上げた。そのままこつちに来ようとして、前が見えないものだからよたよたと頼りなく左右に揺れてしまう。

「ちよつと、それ床にぶちまけないでね」

今にも転びそうでひやひやしながら声をかけた時、廊下の向こうから慌しい足音が聞こえてきた。

「？」

ずいぶん急いでる、何だろうと入口に目をやったら、十二班の沖若君がどたと走りすぎ、すぐに止まって引き返してきた。

「か、鑑原さん、こちらでしたか！ すみません、ちよつと来ていただけませんか！？」

「え、何？ 急患？ 班長はどうしたの？」

息せき切った様子に驚いて、問う。

今の時間なら、救護担当は十二班が詰めているので、一度によほどの人数が運び込まれない限り、手は足りているはずだ。もし下位隊員に手が終えないほどの重症なら、十二班の班長席官が呼ばれるわざわざ担当時間外のあたしを探しに来る必要なんて、無いはずなのに。

そう思ったのに、彼は妙に慌てた様子で、

「今つ、急患で運び込まれてきた患者がつ、受付で暴れていて、班長殴られて気絶しちゃって……僕達だけじゃ、とても抑えられないんですつ。鑑原さんに来ていただかないと、怪我人増えますつ」

「あ、暴れてる！？ だって、その人急患なんですよね？」

友実君がぎよつとする。急患で運ばれてくるような怪我人や病人が、詰所で暴れるなんてこと、普通は考えられないから、そりゃ驚くだろう。

だけどそういう事がままあるのが、護廷十三隊の救護詰所で、そういう事によく引つ張り出されるのも、なぜかあたしなのだ。

「ああ、そう……」

他に男手もあるつてのに、何であたしが。思いつきりげんなりしながら、あたしは仕方なく立ち上がった。

「分かった、今行くわ」

急かす十二班の子を案内に部屋を出て行こうとして、後ろを振り返る。友実君が、あたしの後についてこようとしていたので、手で止めた。

「友実君はそのまま、包帯洗って、干しておいて。あたしは、あつちの手伝い行くから」

「え、あつ、は、はい！」

沖若君の後を、というより途中で追い抜かして、廊下を走る。その先の受付へと近づくほど大きくなっていくどよめき、悲鳴、怒声。ああああ、何かよっぽどの大事になってるっぽい。

あたしはだんつ、と部屋に踏み込んだ。そして、

「……………何これ……………」

踏み込んだ途端、目の前に広がる光景にめまいを覚えた。

部屋の中央に、ぼろぼろの着物をまとい、全身血まみれになって  
暴れてる男がいた。

「お、落ち着いてください！　これから処置を、処置をしますから  
！」

その動きを止めようとしがみつく連中をちぎっては投げ、ちぎっ  
ては投げて、周囲に四番隊隊員の屍（気絶中）を積み上げ、

「離せ、馬鹿野郎！　俺あ、まだ負けてねえんだ！」

腹の底に響くような怒声で、男が吼えた。その声と同時に霊圧が  
衝撃となつて噴き出し、あたしの隣で息を切らしていた沖若君がヒ  
ツ、と悲鳴をあげる。

見るからに重傷を負っているのに、刃物みたいな鋭い霊圧。なる  
ほど、これじゃあ、霊圧の低い下位隊員が圧倒されてしまうのも仕  
方ない。

「あれ、何番隊の誰？」

びり、とこめかみの辺りに感じた震えに顔をしかめながらあたし  
が聞くと、ぶるぶる震える沖若君が「じゅ、十一番隊の、斑目さん  
です」と答える。

その答えに、ひき、と更に顔がひきつった。ああもう、十一番隊  
つて、ほんとにあほばかりなんだから！　何でこう、面倒ばかり  
引き起こすか！

あたしは怒りを抑えようと努力しながら、ずんずん男に近づいて  
いった。

「一角、駄目だよ暴れちゃ！」

斑目の腕を掴んで宥めているのは、こっちも見覚えの無い男だっ  
た。優男然としてるけど、暴れて外に出て行こうとする斑目が動け  
ないのは、彼が抑えているためらしい。あたしは立ちふさがるみた  
いに、ずん、と男の前に立った。

「何だっ、てめえっ」



髪をいっぺんも残さずそりあげた頭からだらだら血を流し、肩で息をしながら、斑目があたしを睨み付けて来た。

野生の獣を思わせる、殺気に満ちた視線と霊圧が一瞬あたしの感覚を揺らしたけど、すぐにやり過ごせた。すばやく全身に視線を投げたら、立っているのが不思議なくらいの重体なのが分かって、

（くそつ、馬鹿男が！）

強い苛立ちがこみあげてくる。こんな怪我してるくせに、何が負けてねえ、だ！ あたしは相手をぎらつと睨みつけて、

「何だじゃないわよ、このハゲ」

「あぁっ！？」

吐き捨てるように言ったら、額に青筋を浮かべて斑目がガンつてくる。けど、血噴き出してふらふらの状態で凄まれたって、怖くないわよ。

「あんた自分の今の状態、分かってんの？ そんな体でここを飛び出したところで、途中で倒れてのたれ死ぬのが関の山よ。大人しく治療を受けなさいよ」

「うるせえ、てめえに関係ねえ！ 俺は、あの虚と決着をつけなきゃならねえんだ！」

かみつくような勢いで言われ、怒りをそのまま現したみたいに、霊圧がはじけ飛ぶ。周囲の隊員がその圧力に怯えて身を引いたけど、あたしはハッ、と鼻で笑ってしまった。

「その頭は髪だけじゃなくて、中身まで無いわけ？ そんだけずたぼろになって、それでもそいつを倒せなかったんなら、何度やったって同じよ。」

また負けてここに転がり込んできて、あたし達の手を煩わせるつてんなら、今飛び出していつて、とつと死んできなさいよ。こつちだつて、そのほうが面倒がなくていいわよ！」

「おい、それは言いすぎだろ！ あんた四番隊の人間じゃないのか！」

あたしの言葉に、斑目を抑えていた男が咎めの声を上げた。その

せいで力が緩んだのか、斑目は男の腕を払いのけ、ガッ！ とあたしの襟首を掴んできた。あたしはすごい勢いで、体ごと引きずられるように持ち上げられてしまう。

「てめえ……死にてえのか」

斑目がぶるぶる手を震わせながら、睨み殺せそうな目であたしを見上げてくる。でも、怖くない。首が絞まって苦しいけど、こんな死に損ないに脅されて怯むもんか。あたしは腰の後ろから竹筒を取り出して、さつと傾けた。「あ？」竹筒の中からいきなり液体が降りかかってきてびっくりしたのか、斑目の動きが止まる。次の瞬間、

「なっ、てめ、なに、……うお……っ」

斑目はぐりん、と白目を向き、足元から崩れるようにどおん、と倒れてしまう。

「いつ……！」

床に放り出されて、したたかに背中を打ってしまう。痛い、けどへたばってる場合じゃない。あたしは斑目のそばに膝をついて、まぶたをめくり、脈を取った。

うん、しっかり気絶してる。よしOK、さすがあたしの特製震点、効果抜群！

「第二治療室、準備して！ すぐに斑目隊員の治療を始めます！ 鈴、吉峰、花菱の三名は手術補助に、沖若は班長を掘り起こして副隊長に報告、他はこの片付けと負傷者の治療をしなさい！」

「は、はい！」

「分かりました、ただちに！」

あたしは声を張り上げて、呆気に取られた隊員達の尻をたたいてから、昏倒した斑目を運ぶため、腕を掴む。と、

「僕も手伝うよ」

さつき斑目を抑えていた男が、手を貸してくれた。斑目の腕を肩に回して引きずり起こしながら、

「君、度胸あるね。こんな状態の一角にかみつかれて、引き下がないなんて」

感心したように言ってくる。反対から腕を回して、あたしはけつ、と唸った。

「この四番隊で、怪我人があかし達に勝てる道理なんて、無いのよ」

## 四番隊名物2

「一角。気分はどう？」

目を覚ますと、寝台の脇には弓親が居た。俺は何度か瞬きをして意識をはっきりさせようとしたが、霞でもかかっているみてえに、頭がぼんやりしてくるくらする。しかも身体にぐるぐる包帯を巻かれているせいで、身動きも取れない。

「弓親か。……最悪だ。ツイてねえ」

ぶすつとして言い放つが、弓親はそう？ と首を傾げた。

「随分、顔色が良くなったと思うよ。あと二、三日も寝てれば良いみたいだから、この際ゆつくり休んでおきなよ」

二、三日だあ？ 俺は目をむいて弓親を見た。

「おい、冗談だろ？ こんなの大した怪我じゃねえよ、そんなに寝てたら、あの虚がどつかの誰かにやられちまうかもしれないだろ」

「一応、まだこの隊も補足出来ないみたいだから、安心しなよ」  
なだめるように言つて、弓親は肩をすくめた。

「それに今は、無理して動かない方がいいよ。無茶したらまた、あの女に昏倒させられるよ？」

「あの女？」

「ほら。一角がここに来た時、こっちの手を煩わせるくらいなら死ねって言つてた、あの女」

「……あのクソ女か」

顔を思い出すだけでむかつときて、俺は唸った。あの時液体のなかった場所をこし、とこすつて、ぶつぶつ文句を言う。

「何なんだあいつは、戦いもしねえでぶるぶる震えてるだけの四番隊のくせに、あの大層な口の利き方はよ」

「面白いよね。血まみれの一角相手に真っ向から立ち向かっていくから、僕はちよつと感心しちゃったよ」

「面白くねえ！ 俺はあいつが妙な薬使いやがったせいで、まだ頭

がふらふらするんだぞ！」

怒鳴ったらまためまいがして、俺はきつく目を閉じた。弓親はくと笑う。

「どうやらあの女、名物隊員らしいよ？ 四番隊のくせに態度が大きくて、毒舌で患者を震え上がらせてるって。うちの隊の連中が詰所で暴れたら、寒空の下にたたき出されたって聞いたよ」

「ああ？ なんだそりゃ」

俺はまぶたを開けた。何の冗談かと弓親を見たが、表情を見ると嘘ではないらしい。弓親は、長かったのを切り揃えた髪に指を通して、

「さつきもここに来る前、その前庭で何かしてたみたいだよ。まだ居るんじゃないかな」

目で窓を指す。示されるまま、俺は起きあがって、かまちに手をかけた。途端、

「……冗談じゃないわよ！ こんな値段で買えるわけないでしょう！」

周囲の静寂を突き破るような怒声があがった。何かと身を乗り出してみれば、弓親が言った通り、あの女が前庭に居た。どっかの商人らしい男と品物を広げて話をしていたらしく、手に持った紙をぱしん、とたたき、

「通常の二割増しなんて法外よ、足下見てんじゃないわよ。これだけまとめて購入するんだから、むしろ割引するのが筋つてもندیよ！？」

「しかしですねえ、実際この商品は品薄でしてねえ。お得意様のご用命ですから、うちでも随分苦労して集めてお持ちしてるんですよ。まあ、こう言っただけですが、出来ればその手数料にちよつと上乘せして頂ければと。この時期にこれだけの数を揃えられるのは、うちだけですよ？」

「ハッ、そりゃそうでしょ、事前にあんたのところが需要を見越して、大量買い付けで保管してんだから」

「うつ……何故それを、あ、いやその」

「倉庫に喰るほど在庫がある癖に、無い振りして渋ってんじゃないわよ！ 死神相手にこんな阿漕あじぎな商売する気なら、今後の取引は備前屋さんに回すからね！」

「ああつ、それはご勘弁下さい！ 備前屋さんに出てこられたら、うちは干上がってしまいます！ 分かりました、お値段のほうは勉強させて頂いて……このくらいでは？」

「ぱちぱちとそろばんに指を滑らせる商人。女はそれをのぞき込み、容赦なく玉を弾いた。」

「これなら良いわ」

「ひつ……こ、これはちよつと……。せめてこれで」

再度商人が玉の数を変えると、女は腰に手をあててフン、と鼻を鳴らした。

「しょうがないわね、それで譲歩してあげるわ。じゃあ今日はここにあるだけ納品してもらうから、残りは三日以内に持ってきてちょうだい。少しでも遅れたり数が足りなかったら、その時は……」

「わ、わわわわかっておりますー！」

ほとんど悲鳴のような声で、商人は平身低頭、品物を箱に詰め込み、女と一緒に詰所に入っていた。それを見送った俺は、うへえ、と口を曲げる。

「何だありゃ、ほとんど脅迫じゃねえか」

「商売人かヤクザかってところだね」

俺と並んで窓から眺めていた弓親が、感心した様子で頷いた。確かにあの勢いでまくしたてられたら、普通の奴は怖じ気づくだろう。しかしそれにしたって、うちの隊の連中も情けねえ。あの商人みてえなのならともかく、仮にも十一番隊の隊員が、たかが女一人にたたき出されるなんざ何事だ。俺はすっかり自分の事を棚に上げて憤慨した。そんなふぬけた話、更木隊の沽券に関わるぜ。

「よし、決めた。あの女、今度会ったら礼儀つてもんをたたき込んでやるぞ。虚一匹斬れねえ奴に、デカイ顔させてられるか」

俺が決意を込めて拳を手のひらに打ち付けると、弓親は再び椅子に座って、まあ好きにしなよ、と言った。

「面白いとは思っけど、あんなに騒々しい女は美しくないからね。ちよっとくらい、痛い目にあわせてやったら」

### 四番隊名物3

「……抗生剤の量はそれでいいわ。じゃ、後はよろしく」

「はい、有難うございました！」

ぺこ、と頭を下げる友実君に手を振って、あたしは個室を出た。

さて、次の患者は、と隣室の木札を見て、思わず顔をしかめる。

部屋の番号と患者の名前が記される木札には、十一番隊斑目一角と墨痕鮮やかに書かれていた。

十一番隊の連中は大概、どいつもこいつも野蛮で下品でどうしようもないけど、この斑目とかいう男は、その中でも群を抜いてあほだ。救護詰所の受付で暴れて、瀕死の重傷を負ってるくせに虚を倒しに行く、なんて息巻いてた様を思い出すだけで、頭が痛くなる。

（まともに相手してたら、大喧嘩になりそう。さっさと診察終わらせよ）

あたしは部屋の前で一つ深呼吸すると、

「斑目さん、失礼します」

出来るだけ穏やかな声をかけて、戸を開けた。途端、

「来やがったな、クソ女」

寝台の上にあぐらをかいた斑目が、こっちを睨み付け威嚇の一声をかけてくる。

「……………」

来たよ。うざ。

あたしはうんざりしてため息をついた。十一番隊ならこんなふうに、初手から脅してくるだろう、と思った通りの反応だ。

おまけにまだ横になってなきゃいけないのに、何勝手に起きてんだ、この野郎は。怪我の程度が本気で分かってないんじゃないの、あほが。

「何だよその目は、ああ？」

あたしの気持ちがあるまま顔に出ちゃったのか、斑目は眉間のし



わを深くし、

「てめえ、よくもこの俺に妙な薬使いやがったな。おかげでこんな有様だ、これであの虚を取り逃したら、かわりにてめえを叩つ斬るぞ」

脅しめいた口調で唸るけど、いちいち相手にしてもしようがない。あたしは部屋に入ると、ずかずかと寝台に歩み寄った。いきなり眼前にまで近づいたから、喧嘩を売られると思ったのか、「んだコラ、やるか？」と身構える斑目。でもあたしは、包帯が巻かれた斑目の肩をがしつと掴んで、

「いつ……！！」

奴が怪我の痛みにひるんだその隙について、突き飛ばすように勢いよく、寝台に背中を叩きつけてやった。

「ぐはっ……！」

盛大に寝台をきしませ、激痛に硬直する斑目。それを見下ろして、あたしは腰に手をあてて、あほ、と鼻で笑う。

「そんなボロボロの状態で、あたしを斬れるもんならやってみなさいよ。ぐだぐだ詰まらない脅しをするだけで脳の無いあほね、あんたは」

「んなつ……な、何だとてめえ！ てめえこそ治すしか脳がねえ、役立たずじゃねえか！ 虚相手に刀抜く事もできねえ四番隊の腰抜けが、何抜かしやがる！」

あたしに掴まれた肩を手で覆いながら、斑目が吼える。その言い草にむかつとして、あたしはぎろ、と睨み下ろした。

「はあ？ あほじゃないのあんた。四番隊はね、あんた達に出来ない治療や、物資の補給が仕事なの。」

刀振り回して虚に飛びかかっていくだけで、何にも考えないで済むあんた達とは、根本的に存在理由が違うのよ」

「けっ。そんなもん、戦えねえ奴らの言い訳でしかねえだろ。護廷十三隊のお荷物部隊が、何を偉そうに存在理由だ、馬鹿が」

「はっ。そのお荷物部隊に命救ってもらったのは、どこの間抜けよ。」

何だかんだ言ったってあんたなんか、今ここから動く事だつて出来ないくせに」

「んだと……うつつ！」

まだ毒づく気配なので、あたしは斑目の鳩尾に拳を入れた。息を詰まらせてびくびく痙攣するのを冷たく見放し、柵から包帯を取り出す。さっき掴んだせいで傷口が開いたのか、斑目の肩の包帯に血が滲み始めていた。

「うだうだ無駄口叩いてないで、大人しく寝てなさいよ。怪我さえ治れば、あんたみたいな患者、こつちから願ひ下げなんだから」

「てっ……め……さ、さわんな……」

顔を青くして息を荒げながら、斑目が呻く。けど、相手をする気はないので、

「ほら、起きれるんでしょ。薬つけなおすから、体起こして」

べし、と斑目の綺麗にハゲあがった頭を叩く。斑目はまだ青い顔色で、こつちを睨み殺せそうな目のまま、それでもむっくり起き上がった。

あたしは手早く斑目の上体に巻かれた包帯を外し、傷の上に貼られた薬布を取替えた。そうして改めてその凶体を眺めて、へえ、と密かに感心する。

斑目は確か、入隊して間もないはずだけど、体だけは随分立派でがつしりしていて、筋肉の引き締まった胸板もかなり厚い。大口叩くだけの根拠は一応、あるわけだ。

「そのまま、動くんじゃないわよ」

「……あ？ て、おい、何を」

釘を刺して、あたしは斑目に抱きつくような感じで包帯を巻き始めた。

「なっ、なんっ……！」

こういう事は良くあるので、あたしは今更どうつてことないけど、斑目は予想外だったらしい。びくつとして身を引きかけるので、あたしはぐるりと一周した包帯をきつく引っ張った。

「動くなっつってんでしょうが！ これ以上手間かけさせたら、薬使うわよ！」

「う、お……くっ」

怒鳴ると、斑目は戸惑った顔で大人しくなった。よしよし、最初からそうしてればいいのよ。

そうして包帯を巻きながら見るとはなしに見てると、斑目の体にはあちこちに傷跡があった。

ほとんど皮膚の色と同化するくらい古いものから、まだ生々しい肉色をしたもの、小さいものから大きなもので、本当にたくさん見る限り、死んでもおかしくないほどの重傷を負った事もあるみたいだ。

「……ちっ」

その痕をつくづくと観察して、あたしは思わず舌打ちしてしまった。

十一番隊は護廷十三隊の中でも、戦闘に特化した隊だ。戦いにおいても最前線に立つことが多く、必然、怪我人や死人も他の隊より飛び抜けて多い。

だけど連中は、傷つく事を恐れない。たとえ敵が自分より強い存在だとしても、恐れるどころかむしろ嬉々として立ち向かい、己の体を省みることがない。

以前から喧嘩好きのチンピラ死神が集まる、と揶揄されていた隊は、しかしこのところ戦闘狂の病にでもかかったかのように、その無謀さに拍車をかけていた。

それは、きつと。あの更木とかいう男が、隊長になったせいだ。

「……ほんつと最悪だわ、更木隊長」

「……あ？」

ぼそつと呟いた言葉を聴きつけて、斑目が身じろぐ。

あたしは包帯の端を止め終え、寝台から離れながら、苛立った。

あの人が隊長になったせいで、しなくてもいい大怪我をして危うく死に掛ける隊員が、以前より増えた。現場の状況を聞けば聞くほ

ど、何故そこで立ち向かっていくのか、勇退して命を捨てる事をしていいのかと腹が立つ。

「隊員の命を預かって指揮するのが隊長の役割でしょうに、狂犬みたいに暴れるあんた達を止めるどころか、自分から率先して斬り合いに行くなんて、何考えてるの？」

更木隊長なんて、ちよつとでも強い相手と見れば誰彼構わず喧嘩を売るし、隊員が怪我しようが何しようがお構いなし、最っ低じゃないの」

死神の職務は、世界の均衡を保つ事で、戦いを楽しむ事じゃない。うっん、そんな建前より何より、命を無為に、危険に晒すことが許せない。

あたし達が、一つしかない命を救うために日々、どれだけ心を砕いているか。どれだけ力を注いでも、命を救うことが出来なくて、無力感に叩きのめされる事も、知らないで。

「更木隊長は、人が死ぬ事なんて何とも思っていないのよね。何しろ前の隊長を、あんなに楽しそうに殺したんだから」

でも、腹を立てたあたしが言葉を紡いだのは、そこまでだった。

突然首にど、と重い衝撃が来て、視界がぶれた。

「ッ！？」

息が詰まる。一瞬目の前が白黒に明滅する。ぎりぎり喉に食い込む感触に辛うじて視線を下げると、冷たいものが一瞬背筋を走った。

「……………」

斑目が、殺気に満ちた鋭い霊圧を発し、その目にきらきらと怒りを滾らせて、あたしの首を掴んでいた。鞭のような指が気道を封じて、息が出来ない。以前の締め上げなんて比べものにならない力だった。空気を欲して、くは、と喘いだあたしを眼前に引き寄せた斑目は、

「隊長を貶すんじゃない」

地の底を這うような低い、低い声で恫喝した。

「俺の事をどう言おうが構わねえが、隊長は別だ。何も知らねえ癖に、好き勝手な事言ってんじゃねえよ、クソ女。殺すぞ」

さつき口げんかをしていた時とは全く違う、本気の脅迫。めりめりと軋む音が脳に響いた。このまま、首の骨を折られるかもしれない。きーんと耳鳴りがして、気が遠くなる。

「は……っ！」

辛うじて、締め付ける手に爪を立てると、斑目は一度きつく力を込めた後、ぶん、と振り放すようにあたしを解放した。

「うつく、げほっ！」

あたしは床になげだされて、空気を貪った。そのまましばらく、激しく咳き込む。

そしてようやく呼吸を整えて首に触れると、食い込んでいた指の感触がまだはつきりとあった。これ、きつと絞められた跡がくつきり残ってる。本当に殺されるところだった、と思ったら、ぐらりとめまいがした。

「くっ……」

口からこぼれたよだれを拭いて顔を上げると、斑目は寝台に上体を起こして頭の後ろで手を組み、外に視線をやっていた。こつちの事なんて知るか、とでも言いたげな冷たい横顔だ。一切を拒絶するその表情を見て、あたしは自分が失言をした事によろやく気がついた。

さつき言ったのは、全部本気の事。訂正しろと言われても、する気はない。だけど、それをよりによつて、十一番隊の人間相手に言う事は無かつたろう。斑目に挑発されて、という理由ならともかく、自分の個人的な思い込みで更木隊長を批判したのも、まずかった。

「んっ……」

あたしは唾を飲み込み、立ち上がった。まだ少し乱れている呼吸を強いて抑えると、こちらを見ようもしない斑目に向かって、

「申し訳ありませんでした、斑目さん」

頭を下げ謝る。斑目は「あ？」と不機嫌そうな声を漏らした。

「……随分、素直に謝るじゃねえか。大層な口利いても所詮四番隊だ、脅されてびびったのかよ、腑抜けが」

「違います」

あくまで四番隊を馬鹿にした口調にいらつとしたけれど、ここはあたしが下手に出なきゃ。あたしは頭を上げ、振り向いた斑目の目をまっすぐに見る。

「斑目さんは、更木隊長を尊敬しているんでしょう。尊敬する人を悪し様に言われれば、腹が立つのは当然です。」

あたしには更木隊長も十一番隊も理解できませんが、少なくともさっきのは失言でした。だから謝るんです。……申し訳ありませんでした」

「……………」

斑目は応とも否とも言わなかった。あたしも、まさかこんな言葉だけですぐ怒りが解けるなんて思ってたので、床に散らばった包帯や薬の瓶を無言で集めて仕舞い、もう一度頭を下げた。そして背を向けて、部屋を出て行こうとした時、

「おい、待て」

不意に声がかけられる。振り返ると、寝台の上の斑目はじつとあたしを睨み付けて、でもすぐに視線を外した。

「首、冷やしとけ。悪かった」

「え」

ぶっきらぼうな調子だったので、言葉を理解するのが一瞬遅れた。

（謝られて、る？）

失言したのはこっちなのに。まだ熱い首に触れたあたしは、何となく気まずい思いで、

「いえ。どうも」

それだけ応えて、部屋を出た。戸を閉めてふう、とため息をつく。十一番隊のあほめ。関わるとやっぱり、ろくな事にならない。でも少なくとも今回は、斑目の怒りは理解出来た。

（あたしだって、烈様を貶されたらキレるもんね、マジで）

尊敬する人を馬鹿にされるのは、自分の事より腹が立つものだ。いけ好かない、十一番隊の斑目一角。だけど隊長を尊敬してるところとか、乱暴はしてきたけど最後に謝ったところとか、他の奴よりはマシ……な気がする。

でも、何にしてもあんな奴の診療するなんて嫌だ。どう考えても、相性悪い。

これ以上、面倒な患者を扱うのはごめんだし、今度当番を他の人に代わってもらおう。んで、退院するまで、関わらないようにしよう。と。

そう決意したら少し気が楽になった。ふつと肩の力を抜いたあたりは、ようよう廊下を歩き出した。

\* \* \*

しかしこの後、あたしは退院までの間、斑目の治療担当に任命される羽目に陥る。気性の荒い斑目の相手が出来るのは他に居ないからと、よりにもよって、卯ノ花隊長直々のご命令で。

「何であたしが、こんなあほの面倒みなきやいけないのよ……」

「同感だクソ女、何で毎日朝晩、てめえの根性ひんまがった面、拝まなきやならねえんだ」

……誰かこいつの舌引っこ抜いてくれ、マジで！

### 四番隊名物3（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

大変お待たせしました、ようやく一角が出てきました……！時期としては、雪音は四番隊の席官クラス、一角は入隊してしばらくたった頃です。双方ともまだ若いので、現在よりとんがった感じになっています。

現在の一角なら、女性に手をあげるような事はしないと思うのですが、若い頃はそのあたり、まだ気を遣っていなかったんじゃないかなあ、と想像した結果です。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です



## 酒の徳

隊舎の二階をつなぐ渡り廊下を歩いていると、

「おい、パゲー」

「あぁっ!？」

失礼きわまりない呼びかけが耳に入って、一角はぐりつと振り返った。廊下の後ろからとたと、と松本乱菊が歩み寄ってくる。

「ちょうど良かった、今十一番隊に行こうかと思ってたのよ」

「松本おゝ……てめえ、今何ていいやがった」

「ん？ 十一番隊に行こうかと」

「そこじゃねえ！ さっき俺に声かけた時だ！」

「あぁ、パゲー？」

「けろつと悪びれずに言うなコルア！ 俺はハゲじゃねえ！」

何だそんな事、と乱菊は肩にかかった髪を背中に払う。

「あんたこそ何言ってるんの、見事にツルーツとした頭じゃないの。遠くからでも分かるのよねー、太陽反射して」

「……大概にしねえと、女だからって容赦しねえぞ……」

背後に炎を背負い、指の骨をならす一角。しかし松本は全くもって斟酌せず、

「そんな事よりさ、今日の飲み会の場所決まったのよ。風弦洞ふうげんどうって知ってる？」

さつさと自分の話を進める。一角はこめかみにビキビキと青筋を浮かべたが、これ以上こたわったところで、乱菊は相手にしないだろう。一角はため息をついて諦め、仕方なく話に付き合う事にした。

「あぁ、入った事はねえけど知ってる。六時からだっけか」

「そぞ。メンバーは……あっ」

乱菊は不意に通路の手すりから身を乗り出した。何事かと思いきや、

「おい、雪音ー！ 今日の飲み、風弦洞だからねー！」

辺りを憚らない大声で叫ぶ。ちょうど下を歩いていた死神　雪音が、その呼びかけに足を止めて、乱菊を見上げた。

「はい、分かってます、さっき、京楽隊長から聞きましたから。ちよつとぎりぎりになるけど、ちゃんと行きます！。じゃ、また後でー！」

手を振って、そのまま去っていく。一角はひく、と顔をひきつらせた。

「おい、松本。今日もしかして、あいつも来んのか」

「ん？　そうよ。あんた雪音と一緒に飲むの、初めてだっけ？」

「……俺あいかねえぞ」

「はあ？」

乱菊は予想外、と言いたげに目を丸くした。

「何よ、いきなり。あんた雪音嫌いなのか？」

「つたりめーだろ、あんな無法四番隊員！　入院中、あいつのおかげで何度死線を渡ったか……！」

屈辱的な日々を思い出し、思わず拳をぎゅう、と固めていると、乱菊はからから笑った。

「それなら尚更、今日来なさいって。お酒飲むと雪音、すっごい面白いんだから」

「あ？　何だそりゃ。酔って暴れて、暴行事件でも起こすのかよ」鼻で笑ったが、乱菊は意味ありげに口の端をあげて、ちつつ、と指を振ってみせた。

「そ・れ・は、来てのお楽しみ　ちよつと他では見られないもの、見られるわよ？」

\* \* \*

その夜。瀨霊廷の歓楽街、その一角に位置する居酒屋・風弦洞に、人々が集まる。

天井につきそうなほどの巨体を揺らし、店内を軽快に駆け回る店

主のかけ声が響き渡る中、死神の一行が卓を囲み、和やかな宴を開いていた。

しかし、時間ぎりぎりになって飛び込んできた雪音は、駆けつけの一杯を干した後、

「……で、何であたしの席がここに決まってるんですか、乱菊さん」  
心底不愉快そうに顔を歪めて、卓の角に座っている乱菊に尋ねた。  
乱菊はだあってえ、とからかうような声を漏らす。

「一角がどうしても雪音と飲みたいっていうから、特別にとっておいたのよお」

「口が裂けてもそんな事言うか！」

雪音を挟んで向こう側にいる一角が、ガァツと吠えつけた。雪音はますます眉間のしわを深く刻む。

「唾飛ばさないでよ、あんた。お酒がまずーくなるでしょ」

「ああ？ そりゃこっちの台詞だ、ボケが。何が悲しくて、てめえのそのブツサイクな顔見て飲まなきゃいけないんだよ」

「ハゲよりはマシでしょ。ハゲよりは」

「ハゲじゃねえよ俺は！ 剃ってるんだって何度言や分かるんだ！」

「十円ハゲとかあるんじゃないの？ それ誤魔化すために、全部剃ってるんですよ」

「てめえ……そんなに鬼灯丸の錆になりてえのか……」

ちきつ、と鯉口を切る一角。しかし乱闘になる前に、一角の正面に座った京楽春水が宥めた。

「まあまあ落ち着いて、こんなところで刃傷沙汰起こしたら、お店に迷惑かかるでしょ？ ほら二人とも、杯空いてるじゃないの」

「あ、どうも」

「頂きます、すみません」

銚子を差し向けられて、一角と雪音はそれぞれ杯を受けた。一角はゆっくり、口の中で転がすようにして含んだが、雪音のほうは、まるで水を飲むような自然さでくいつと飲み干し、すぐさま京楽に返杯する。

「どうぞ、一献」

「ありがとう、雪音ちゃん。ン、可愛い女の子にお酌してもらえると、一段とお酒が美味しくなるねえ」

やに下がり、さりげなく雪音の手を握った京楽だったが、いえいえとんでもない、とにこにこ笑う雪音に思い切りつねられた。

「アイタツ！」

「伊勢さんが居ないからって、オイタは駄目ですからね、京楽隊長」

「ちえ、っ、雪音ちゃん冷たいなあ……」

「普通です！ 全く……」

京楽をいなしながらも慣れた手酌で酒をつぎ、杯を進めている。そのペースの速さに、一角は半ば呆れて、

「おい、お前飲み過ぎじゃねえのか。ンな勢いで飲んで大丈夫かよ」  
つい口を挟むと、雪音は別に、とそっけなく応えた。

「いつもこれくらいよ、ご心配なく」

「そそ。雪音ねー、相当イケる口なのよ、一角」

机に頬杖をついて、乱菊がにやっと笑った。

「この間も朝まで一緒に飲んだもんねー。どんだけ空けたっけ？」

「んーと……吟醸三本、そば焼酎二本、現世のお酒……ワイン、でしたっけ、あれを一本」

「飲み過ぎだろそれ！」

どう考えても女二人で飲む量じゃない。一角は盛大につっこんだが、「あ、それと麦酒<sup>ビール</sup>五本？」平然と付け足す雪音。

「さすがに次の日は参ったわよね、酒臭くて」

「お風呂入っても、全然取れなかったんですよー。久しぶりに深酒しすぎちゃった」

「しすぎちゃった、ってレベルじゃないよねえ……」

これじゃ酔いつぶす事も出来ないよ、と呟いた京楽の頭に手刀をお見舞いして、雪音は銚子を傾けた。ぽつ、としずくが杯の中に落ちる。

「あれ、無くなっちゃった。すみませーん、兎鳴き、お代わりー！」

「本気で酒豪なんだな、お前。オヤジかよ」

ほとんど一人で銚子を空けた雪音に呆れて、一角は杯に口をつけた。雪音はむっ、として睨み付ける。

「五月蠅いわね、あんたには関係ないでしょ？　ちびちびちびちび、男の癖にみみっちい飲み方して」

「ああ！？　何抜かしやがる、俺はてめーみたいな馬鹿飲みはしねえんだよ！」

そういう一角も流魂街に居た頃は、手に入る安酒を片っ端から浴びるように飲んでいた。が、旨い酒の味を知るようになってからは、じっくり味わって飲むようになったのだ。

「てめえのこった、どうせ酒の善し悪しもわかんねえような馬鹿舌なんたる。量入りや満足するような味音痴に、文句をつけられる謂われはねえよ」

吐き捨てるように言う、何ですって、と雪音が眉をつり上げた。

「ふっざけんじゃないわよ、誰が馬鹿舌の味音痴ですって！？　その台詞、あんたにそっくり叩き返すわこのハゲ！」

「ハゲは関係ねえだろ！」

「ちよつと、止めなさいよ」

「うわっ！」

「きゃっ！？」

ガン、と額を付き合わせていると、間に冊子がばしっと挟み込まれた。乱菊があきれ顔で言う。

「あんた達ね、酒の事で喧嘩なんて野暮するくらいなら、いつそ勝負でもしてみれば？」

「は……勝負？」

「何を」

乱菊は、二人を遮った品書きをぶんぶん、と振ってみせた。

「ほら、こつて酒の種類、こんだけあるから。どうせなら聞き酒勝負なんてどうよ」

「聞き酒勝負……」

「そ。それなら雪音と一角のどっちが味音痴か、はつきりするですよ？」

一角と雪音は、互いににらみ合った。しばしの沈黙の後、同時に顔を乱菊へ向けて、

「その勝負、乗った！」

声を合わせて宣言する。乱菊はそうこなくちゃ、と手を打ち、  
「すいませーん、ちょっとお願いがあるですけどぉ」

妙に弾んだ声音で、店員に声をかけた。

「これ、何でしょう」

「……黒鷲」

「じゃ、これは？」

「一気呵成だ」

「当たり前。次は……これ、どうよ？ 雪音ちゃん」

「ん……逢坂の誓い」

「うわ、これも当たり前。すごい、どっちも外れなしだわ」

雪音と一角の名前を書いた紙に正否を記していた乱菊は、感嘆の声を上げた。

急遽始まった聞き酒勝負は、一角も雪音もひかぬまま、既に一人十本、二人合わせて二十本目に入っていた。綺麗に丸の並んだ表をのぞき込み、京楽もすごいねえと、ほとほと感心した様子で言う。  
「これだけやれば、どっちが味音痴って事もないんじゃないの？  
もういい加減、勝負なんてやめたら」

「いいや、こうなったら勝ち負け決まるまで、絶対やめねえぞ！」  
酔いが回ってきた勢いもあって、一角は鼻息荒く怒鳴った。杯を差し出し、

「おら、次だ次、十本目だ！ 早く出せコラ！」  
脅すような勢いで酒を要求してくる。いやだなあ酔っぱらいは、と肩をすぼめながら京楽が杯を受け取り、二人から見えない位置に置いた酒瓶の群れに向かって歩き出そうとした時、

「……うにゅん」

不意にたらん、と緩んだ感じの音が響いた。

「あ？」

「ん？」

「お？」

一斉に疑問の声を上げた三人が、発生源へ同時に視線を向けると、そこには頬を赤らめ、目をとろんとさせた雪音がいた。雪音は杯を煽って、至極旨そうに酒を飲み干すと、そのままぐらり、と大きく身体を揺らした。

「お、おいつ、何してんだ！」

突然の事に驚き、一角はとっさに手を伸ばして、雪音の背中を抱き留める。と、雪音は夢うつつの表情で一角を見上げた後、

「わあい、ハゲ坊主だあっ！」

妙にはしゃいだ声をあげて、一角に抱きついてくる。

「ギャーッ!？」

勢いよくしがみつかれた一角は、そのまま後ろに押し倒された。

「な、何しやがる、てめえ！」

慌てて起きあがろうとするも、雪音はしっかり一角の首に手を回して、ごろごろと喉を鳴らしそんな表情で、

「やーん、このハゲ胸ひろーい、おっきーい、きもちい」

などと言いながら、胸に顔をすりつけてきた。

「ば、ばばばばかつ、よせ！」

予想外の行動に、一角はぶわっ、と全身に汗を噴き出しながら雪音を引つpegす。突き放された雪音は、今度はそこにいた乱菊に、

「乱菊さあん、ハゲに突き飛ばされたあっ」

などと言いながら、がばっと抱きついて、ふくよかな胸に顔を埋めた。

「ああいいなあ、僕も仲間にフゴッ！」

でれ、と鼻の下を伸ばして覗き込んできた京楽に裏拳を入れた乱菊は、よしよし、と雪音の頭を撫でた。

「はいはい、酷いわねーあのハゲ。雪音は何もしてないのにねえ？」  
「ば、ばかやろ、何もしてないじゃねえだろ、いきなり襲いかかってきやがって！」

起きあがり、乱れた死覇装の前をかき合わせて一角が怒鳴ると、乱菊はにや、と笑って、

「んふふ、驚いた？ 言っただでしょ、他では見られないものが見られるって」

なぜか得意げに胸を張った。何の事だ、と聞き返そうとして、一角は思い出した。そういえば昼間、雪音の事で乱菊が何か言っていた気がする。

「ま、まさかこれかよ、こいつが酒飲んだら面白いってのは」

「はれ、ひりやなかったの？」

殴られた鼻を押さえて、京楽がのほほん、と言った。

「雪音ちゃんも酔っ払うと、とっても甘えん坊になるからカーワユインだよねえ」

「そうそう。いつもツンケンしてる反動なんですかね、子供みたいになっちゃって」

「乱菊さあん、もっとお酒のみたあい」……」

「ああ、そうね。じゃ、ここはしきり直して……雪原ゆきはらでも飲む？」

「わーい、雪原だいすきい、飲む飲む」

るるん、と歌い出しそうな上機嫌で乱菊にすり寄る雪音。その様子を、やけにほんわかした表情で見守る乱菊と京楽。一人蚊帳の外に置かれた一角は、

「……………何なんだ、あいつは一体……」

常とは全く違う雪音の様子に、何だかものすごい疲れを感じて、ぐったりと肩を落としてしまった。

\* \* \*

翌日。



「あ」

「お」

一角と雪音は廊下でばったり出会った。昨日の有様を思い出し、とつさに言葉が出ず口ごもる一角。しかし雪音のほうは全く頓着せず、

「昨日は無事帰れたの？ 何かふらっふらしてたけど」

いつものはきはきした口調で話しかけてきた。ふらふらしていたのは事実だが、それは酔ったせいじゃなく、あの後も散々雪音に絡まれて疲れたせいだ。

「誰のせいでああなっと思ったんだ、てめえは……」

恨みがましい声音で呟くと、雪音は眉根を潜めた。

「何よ、あたしのせいじゃないでしょうが。たかだか十種の聞き酒で酔ったあんたが悪いんですよ。酒弱くて勝負に負けたからって、逆ギレしてんじゃないわよ」

「ああ？ 誰が酒弱くて、勝負に負けたって！？」

何すつとぼけてんだ、と一角は噛みついた。しかし雪音はハッ、と小憎らしく鼻で笑う。

「だってあんた、結局十本目のお酒がわかんなかったんでしょ？」

乱菊さんがちゃーんと記録取ってたんだから」

「十本目……って馬鹿やろ、あれはてめえが邪魔してきたから、勝負が流れちまつたんじゃねえか！」

「はあ？ 何言ってるのよ、あたしは邪魔なんてしてません。夢でも見たんじゃないの」

「夢ってお前、……ちよつと、待て」

更に言いつのろうとして、一角ははたと気がついた。

雪音は口が悪い女だが、こうもあからさまな嘘をつくような奴でない事は、短い付き合いの中でも何となく分かっていて。という事は、雪音がこれほどはつきり否定するのは、

「お前……まさか、全っ然、覚えてねえのか」

おそるおそる尋ねてみると、雪音は「何が？」と、まるっきり分

かっけない様子で応える。

とてもとぼけているように見えないその表情に、一角は愕然とした。飲み過ぎて正気を失い、次の日思い返しても何をしていたか覚えていない、という事はよくある。しかし、

（こいつ、記憶無くしてる事にも気がついてねえのかよ！）

雪音の場合は、もっと重症のようだ。覚えていない事さえ、自覚していない。

「何よ、その顔。人を化け物にでも見るみたいに」

驚愕して目を剥く一角に、雪音が不快感を訴える。普段ならこれに応酬して喧嘩に発展するところだが、今日ばかりはそんな気分にはなれない。

「……お前な」

ぼん、と雪音の肩に手を置いた一角は、珍しく真面目な顔で、心からの願いを込めて言った。

「酒は飲んでも、吞まれるな」

「……………はあ？」

しかし雪音はその言葉の意味がさっぱりつかめず、間の抜けた声をあげたのだった。

## 酒の徳（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

酔っぱらいの世話は大変ですよ、というお話です（笑）酔った時に甘えてくる女性は可愛いなあと思いますが、絡み上戸は困りますね。

お話の中で出てくるお酒はすべて架空のものです。それっぽい名前を探してくるのが楽しかったです。それと利き酒は同じお酒を飲んで当てなければ意味がないと思いますが、そこは気にしないでください（笑）

最新作は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## 鬼散膏

部屋の棚にびっしり並んだ瓶を整理していたら、

「おーい、誰かいねえのか」

入り口の方から声が聞こえてきた。気づかなかった、いつの間にか人が来てたみたい。やばい、出ないと。

「はい！ 少々お待ち下さい！」

あたしは手に持っていた瓶をひとまず棚に戻して、

「すみません、遅くなり……げ。」

出て行って丁重に謝ろうとして、思わず唸ってしまった。保管部屋の戸口に立っていたのがハゲ、もとい、十一番隊の一角だったからだ。目が合うと、向こうも、ぐえ、とでも言いたげな顔で、

「またお前かよ、雪音」

いやそーーにため息をついた。

「そこかしこに出没しやがって、お前分身でもしてんのか。つーかそんなに暇か、四番隊ってのは、ええ？」

初っぱなから喧嘩売ってくるかこの野郎。あたしも、多分苦虫を十匹くらいかみつぶしたような顔で答える。

「何いってんのよ、ここの管理は四番隊の仕事なの。大体、どこかの隊の連中が能なしで、何の仕事もしないせいで、その分真面目で誠実なあたし達が割り食ってんのよ」

「おう待てよ、その『どこかの隊の能なし連中』ってのは誰の事言ってるんだ」

「そこが引つかかるなら、思い当たる節があるという事ではありませんが、斑目さん」

「急に敬語になるな！ 馬鹿にしてんのか、てめえは！」

「うだうだ抜かさず御用件をどうぞ。こちらへ来られたということは、薬のご用立てですか」

「……むっかつくな、てめえ」

一言低い声で唸ってから、一角は気を取り直したようにふんつ、と鼻を鳴らし、

「ここで一番効く血止めをよこせ」

「血止め、ですか」

上から見下ろす物言いは気に入らなかったものの、早いところ用事を済ませて帰ってもらった方がお互いによさそうなので、あたしは後ろの棚を振り返った。下の方から黄色の瓶を取り、差し出す。

「それなら、鬼散膏で宜しいですか？」

「あん？ きさんこう？ 何だそりゃ、聞いた事ねえな。効くのかよ」

何だ、その頭っから疑ってるような口調は。とことん失礼な。あたしはむっとして、

「効くわよ。何たってこの薬の名前は『鬼が泣くほどの痛みも散る軟膏』って意味なんだから」

「……誰がつけたんだ、そんな子供だましの、おとし話みてえな名前」

「あたしよ！ 隊長が手を叩いて気に入って下さった名前なんだから、なめんなこら！」

思わずムキーンと拳を振り上げようとしたら、一角がびっくりしたみたいな声をもらした。

「これ、お前が作った薬なのか？」

「そうよ。悪い？」

「悪いたあ言つてねえだろ。意外だったただけだ。お前、机に座ってごりごり薬作る、とかやってそうに見えねえから」

「あなた、あたしの事馬鹿にしてない？」

四番隊の人間なら、だれだって薬の一つや二つ、作るわよ。普通に。つか、あたしは薬作ってる時間のほうが多いし。

「へえ。お前が作った薬、ねえ」

一角はやたらへえへえ言いながら（やっぱ馬鹿にしてんじやないの）瓶の蓋を開けて、指で薬をすくい取った。それをどうするの

かと思つたら、

「ちよつと持つてろ」

瓶をこつちに押しつけてきた。そして肩に担いでいた刀の鯉口を切つて、

「え!？」

刃の上に自分の手のひらを滑らせた。当然手が切れて、傷口からだらだら血が溢れ出す。

「ちよつ、何してんのあんた!」

びつくりして一角の手を掴もうとしたら、あつちも驚いた様子でぱつと避けた。

「何つて、てめえの薬を試してやろうつてんだろつが」

「は?」

薬を試す? 何の事かと思つたら、一角はさつき取った薬を、傷にぐいとなすりつけた。これも当然、薬は綺麗に傷口を塞いで、ぴたりと血を止める。へえ、と一角が嬉しそうな声を上げた。

「本当に効くじゃねえか、これ。よし、貰つてくぜ」

「それはいいけど、ちよつと、手貸しなさいよ」

「あ? 何でだ」

「何でつて、今怪我作つたでしょうが。治すから」

一角は面倒そうに手を振った。

「こんなの、怪我の内にはいらねえよ。もう血いとまってるしな。お前の薬のおかげで」

……そ、そうですか。まあ、確かにそう深い傷じゃないから、自然にふさがるだろうけど。

なんて思つてたら、いきなり一角があたしの顔をのぞき込んできた。

「何赤くなつてんだ、お前」

「は? なつてないわよ」

ぎくつとして身を引いて、頬を手で隠す。うわ、ほんとに顔が熱い。一角はきょとん、と目を瞬いた後、おかしそくに笑った。

「なってるだろ、すげー真っ赤。何だよ、ちょっとほめたくらいで、そんな照れんなよ」

「照れてませんっ。御用件がそれだけなら、とっとお帰り下さいっ！」

あたしは一角をぐいと押して、背を向けた。ああもう、治れこの赤面性、何でこんな奴の前で赤くならなきゃいけないんだっ！しかもまだ笑ってるしあのハゲ！

## 鬼散膏（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

一角のお相手に四番隊とくれば、これは入れておかなければならない、という事で出来た、血止め薬のお話です。でも、柄の中に入れておくと逆に使いにくい気がするんですけど、どうなんでしょう……。粘度が低い薬なのかもしれませんね。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です



## 俎上 前編

「れーんーじークン。こないなところにおったんやね」

「え……あつ、市丸隊長!？」

隊舎の休憩室で休んでいた阿散井恋次は、不意の呼びかけに顔をあげて慌てた。

いつ来たのか、六番隊隊長の市丸ギンが、畳の上に座っている恋次を見下ろしている。

「ああえて、バタバタせんと。虚退治で足怪我してきたんやろ？ 雛森ちゃんに聞いたから、お見舞い」

ギンは無理に動こうとする恋次を手を振って止め、畳に投げ出された足を見る。

「わざわざ、すみません。恥ずかしながら……不覚をとりました」

護廷十三隊に入っつてようやく最近慣れたところで、こんな怪我をしてしまった。情けないと落ち込む恋次に、ギンは気楽な笑い声を上げた。

「なにゆうてんの、怪我なんてこれからいくらでもするんやから、今の内に慣れとき」

「は、はあ……」

そんなに軽くていいんだろつか、とギンの調子に不安を覚える恋次。そんな恋次をさらにあおるように、そーや、とギンは手を打った。

「ええ機会やし、恋次クン、こころで一発肝試ししとこか」

「は……き、肝試し？ いや、俺、これから四番隊に行くつもりなんですけど……」

打ち身やかすり傷ばかりで大した怪我はないが、右足だけは歩けないくらい痛い。誰かに手を借りて、総合救護詰所へ行こうと思っ  
ていたところで、ギンの遊びに付き合ってる暇はない。と思ったの  
だが、

「せやから」

なぜだかギンは、にー、と口を真横に引いて笑った。

「肝試しや、ゆうてんの」

「すみません。隊長に肩貸してもらうなんて……」

ようやく詰所へ辿り着き、恋次は恐縮して謝った。恋次の腕を肩に回し、歩くのを手伝ってきたギンは、へらつと笑う。

「さっきからすみませんばかりやねえ、恋次くん。ええよ、ボクも久しぶりに肝試ししたかってん」

「あの、市丸隊長……。さっきから肝試し、肝試しって言ってますけど……何の事ですか？」

いぶかしげに尋ねると、ギンは慣れた様子で詰所の中を辿りながら、

「護廷十三隊に入ったら誰でも、いつかはここのお世話になるんですよ、そのままだめてく奴もあるん。泣きながら」

「な、泣きながら!？」

厳しい試験をぐぐり抜けてやっと入隊できたのに、何で!？

ハテナマークを浮かべつつ蒼白になる恋次。そういえば、四番隊の怖い噂を、一足先に入院した同期のイズルから色々聞いていた気がする。四番隊でいたいどんな試練が待ち受けているというのか、なんだかだんだん怖くなってきた。

ギンはにまーつと笑って、足を止めた。

「ほら、着いたで。いっちょ肝試しできなや」

気軽な口調で言うと、いきなり、恋次を目の前の部屋にひょいと放り込んだ。

「え、わ、ああ!?!？」

「ひ、えやつ?!?!」

突き飛ばされるままふらふら、と入ったところで、人と真正面からぶつかった。転ぶ、と反射的にこらえようとして足を踏ん張り、途端、

(ギャー！ー！)

頭の芯まで揺るがすような激痛が突き抜け、バランスを崩す。ぶつかった人は恋次より小柄だったので、そのままなすすべもなく、どたー！と床に転んだ。

「あ、い、て……！」

床に額をぶつけたのと、足を踏ん張ったせいで痛みがいや増し、恋次はほとんど泣きそうになった。そこへ、

「あらら、あかんよー恋次くん。昼間っから、女の子押し倒したりしちゃあ」

ギンの至極のんびりした声が降って来た。いったい誰のせいだと声を上げようとした時、

「うぐ……ちよつと……重い……！」

下からくぐもった声が聞こえた。はつとして見下ろすと、そこには苦虫をかみつぶしたような顔をした女の子がいた。ぶつかったのはこの人か、と認識すると同時に、自分が下敷きにしている事に気がつき、

「あ、す、すみません！ 怪我無いですか」

床に手について、何とか上半身を持ち上げた。

女の子は恋次の下からさつと抜け出した。恋次を見、ついで後ろのギンを見て、もの凄く嫌そうにため息をつく。

「市丸隊長……怪我人の怪我増やすような真似、しないで下さいよ。連れてくるなら普通に連れてきて下さい」

言いながら、恋次の腕を掴んでぐいっと引つ張る。その手を借りて立ちかけた恋次は、そのまま後ろの寝台に突き飛ばされた。

「うわっ！」

「雪音ちゃんも大概乱暴やないの。ボクとそう変わらんと思うけどなあ」

ひよこひよこ、と中に入ってきたギンは、二人の間に立った。

「ほな、自己紹介せなね。雪音ちゃん、こっちは藍染さんとこないだ入った、阿散井恋次くん。」

ちよーつととんがった外見しとるけど良い子やから、仲良うした  
ってや」

「はあ……………」

「恋次クン、こっちは四番隊第六席の鑑原雪音ちゃん。口悪いけど  
腕はええよ。別名、四番隊の『鬼瓦』ゆわれてるんよ」

「お、おにがわら……………」

「あの、そのとことん失礼な渾名はあだなやめて下さい。呼んでるのは市  
丸隊長だけでしょうが」

雪音はげんなりした顔のまま、恋次を見た。恋次は彼女の名を反  
芻して、さーつと血の気が引く音を聞いた。

（四番隊……………六席……………鑑原雪音……………鬼隊員……！）

## 俎上 後編

入院から帰ってきた吉良イズルは、細面をさらにげっそりさせていた。療養中の食事がそんなにまずかったのかと冗談で聞いたら、彼は真っ青になって、

『阿散井くん、もし四番隊にいく事になったら、鑑原六席には絶対近寄っちゃいけない!』

そう力説してきた。勢いに驚いて何でだ、と聞くと、イズルはぶるぶる震えながら胃の辺りを押さえ、

『鑑原六席、怖いんだよ……。治療している間ずっと怒ってるわ、ちよつとでも動こうとすると、体を押さえて怒鳴りつけてくるわ……それが毎日、ぼくはもう救護室で息が詰まるかと思ったよ。』

しかも最初にいきなり、「あんな虚相手に怪我するなんて、才能ないんじゃないの」って言われたんだよ！ 真央霊術院主席のこのぼくが!』

最後は関係ないのでは、と思いつつ、入院して毎日それじゃきついな、と言った。そしたら、目に涙までためたイズルがきつと顔を上げて宣言した。

『ぼくはもう金輪際、救護詰所には入院しないと誓うよ。あの人の世話になるくらいなら、死ぬ気で虚に立ち向かっていった方がマシだ』

そのあまりにもきつぱりした様子に、それは無理じゃないか、という突っ込みが入れられなくて、じゃあ怪我しないように頑張れ、と気楽に返したのだった、が。

「……………」

怖い。鑑原六席の周囲に漂うぴりぴりした空気が、怖い。

寝台の上に足を伸ばして座った状態で、イズルの話を思い出し、恋次は早くも青ざめていた。

あの時は、気弱なイズルが大げさに言っているだけだ、と軽く流していたが、いざ自分が怪我をして動けない状態で対峙すると、六席は、確かに怖い。

眉間に深くしわを刻み、この上なく不機嫌な顔で恋次の怪我の具合を調べ、時々乱暴とも思える手つきで体の向きを変えさせてくる。所作一つ一つがどこことなく攻撃的で、しかも一言も口を利かない。だから余計に怖い。まないたの上の鯉はこんな心境なのだろうか、これから何をされるのか、ものすごく不安になってしまふ。恋次はほとんど硬直状態で、雪音の触診を受け続けた。

「雪音ちゃん、恋次クンの怪我、どない？」

それを見物するように、腕を組み、救護室の壁にもたれたギンが雪音に尋ねてきた。雪音はちらりとそちらを見、

「打撲と擦過傷、それから右脛骨けいこつの骨折です。入院の必要はありません」

「へえー、そう。アツシドワイヤー相手にそれくらいで済んだのやったら、大したもんやね、恋次くん」

「は、はあ」

「そうですか？ アツシドワイヤー程度なら、こんな怪我をせず、もつとスマートに倒せていいと思いますけど」

（ぐっ）

自分でも手際が悪かったと思っていたので、雪音の言葉はきいた。恋次は思わず歯を食いしばり、雪音を見た。苛立ちを含んだ顔は、我ながら人相が悪かったらうと思う、雪音が何か言いたいのかと鋭い視線を返してくる。あわや喧嘩が始まるか、というところで、  
「まあまあ、恋次くんはまだ入ったばかりやし、長い目で見たつてや。才能あるよつて、将来の席官候補やて、藍染さんも言うてたよ」

ギンがとりなすように言ったので、険悪な空気が和らいだ。というより、思いもかけない言葉に、恋次が照れて動揺した。

護廷十三隊に入るのなればひ五番隊に、と誘ってくれた藍染隊長

は、穏やかな容貌と性格ゆえに、およそ戦闘に向かないようにも見えるが、その実力は隊長の役に相応しい。

いつかあんな風になれたら、と憧れてしまうような人だから、その人に認められるのは、嬉しかった。

「そ、そうですか……」

「この調子では席官はまだ、遠いですね」

しかし雪音は水を差すように言って、袴をまくった恋次の足に添え木を当てた。それをすっかり固定したところで治癒術をかける。

雪音の手から光が降り注いだ、と思った時にはもう痛みがすう、と引いたので、恋次は驚いた。ものの数十秒で雪音が治癒をやめ、添え木を外した時には、

「すげえ……もう治ってる」

骨折していたのが嘘じゃないか、と思うほど、足が普通に動かせるようになっていた。ギンがぱちぱち、と手をたたく。

「さすが雪音ちゃん、仕事速いわぁー。すぐ治って良かったね、恋次くん」

「は、はい！　ありがとうございます、鑑原六席」

まさかこんなに早く怪我が治るとは思わなかった。感動して勢よく頭を下げ、また上げる。と、雪音は驚いたように目を丸くしていた。視線が合うと、すう、と頬に赤みが差す。

「礼を言われるほどじゃないわよ。仕事だし」

ふい、と目をそらして言った台詞は相変わらず刺々しいが、表情がさつきより柔らかくなったような気がする。

（なんだ。いい人じゃねえか、鑑原六席って）

イズルが散々脅したから無闇に怯えてしまったが、そんな必要は無かったのかもしれない。鑑原の言葉や態度は確かにきついが、治療が手早く、少しも辛くなかった。

ほっとして、肩の力を抜きかけた恋次だったが、

「じゃ、次。上脱いで」

再び仕事の顔に戻った雪音の言葉に、再度硬直した。

「は、ぬ、ぬぐ!? も、もう治療終わったんですよ?」

慌てて問うと、雪音はしかめっ面になって、

「終わってないわよ、まだ上半身に打撲とか色々あるでしょ。一応他の怪我が無いかちゃんと看たいから、脱いで」

「い、や、あの、他のは大した事ないっすから。わざわざ見てもらう必要は無いっす!」

思わず胸元をかき合わせ、壁際にずざつ、と逃げてしまう恋次。  
一瞬呆気にとられた様子でぼかん、と口をあけた雪音は、あほか、  
と一言言い捨てると、

「良いから大人しくしろ!」

がんと寝台に乗って恋次に迫り、

「わ、わー!!」

暴れるのをどうやってか押さえ込んで、がば、と上着をはいだ。

わお、とギンが楽しそうな声をあげる。

「ええねえ恋次くん、女の子に脱がしてもらて。しかもはなから上に乗ってもらえるなんて、役得やなあ。おねーさんにええ事いっぱい教えてもらい」

「な、何言ってるんすか、市丸隊長!! ちょ、助けてくださいよ!」  
ギンの言葉がどういふ事を指してるかに気づき、体勢も体勢なので恋次は真っ赤になったが、雪音はあのですねえ、と呆れ声を出した。

「市丸隊長、あほな事言ってるので、職務にお戻り下さい。さつき副隊長が探しておいででしたよ」

「ええー、いやや。今戻たら、書類仕事せなあかん。そんなんより、ここで恋次くんと雪音ちゃん見てるほうが、面白いわ。」

あ、それとも、ボクがいない方がええかな。雪音ちゃん、恋次くんとはよ二人きりになりたい?」

「ち・が・い・ま・す。別に襲ったりしませんから、安心してとつととお引取り下さい。市丸隊長がいると、治療の邪魔です」

「つれないなあ、雪音ちゃんたら。まあええわ、いくよ。恋次くん、



後でどないやったか、ボクに教えてね」

「市丸隊長！」

雪音と恋次の相反する叫びをうけて、ギンはするっと救護室を出ていってしまった。

「……全く、あの人は」

ギンの気配が完全に消えた頃、雪音がため息混じりに呟いた。それから恋次を引っ張り起こし、

「ほら、座って」

寝台の端に座らせ、自分はその前に椅子をひいて座った。足に車のついた棚を引き寄せて、恋次の体を看始める。

途端、恋次は先ほどとは違う意味がちがちに体を強張らせてしまった。細い指が傷口に塗り薬を擦り付けるたびに、びくっと震えてしまう。

（ひー、はやく終わってくれ……）

耳まで熱くなってきて、ほとんどパニック状態に陥りかける恋次を、ちらちら見上げながら薬を塗っていた雪音は、その作業が終わると同時に口を開いた。

「ちよつと、市丸隊長に何吹き込まれたんだか知らないけど、そうびくびくしないでくれる？ やりにくくてしょうがないわ。別にあなたを襲ったりしない、って言ってるでしょうが」

「あ、や、その、そういう事じゃなくて、俺恥ずかしくて」

苛々した口調に慌ててしまい、つい口がすべる。

「恥ずかしい？」

言葉をとらえて首を傾げる雪音。しまった言うんじゃなかった、と思っても、もう遅い。カーツ、と顔中赤くして小さくなる恋次の様子に、理由を理解したのか、

「ああ」

雪音は塗り薬を棚の箱に戻し、湿布を取った。

「無理やり脱がしたのは悪かったわよ。でも、こっちはあくまで患

者として扱つてるだけなんだから、そう意識しないの。恥ずかしがるだけ、無駄に手間隙かかるだけでしょ」

至極冷静に説明してくる。

なるほど、常日頃、男女問わず怪我人に接している四番隊の人間なら、確かに裸は見慣れたものなのかもしれない。

しかしそう言われたところで、こっちは女性の前で服を脱ぐ事に慣れていないのだ、照れたって仕方ないだろうとも思う。そういうおもうと思つたら、湿布をぺとり、と胸の打ち身に貼られた。

「おうわっ！」

突然の冷たさに思わずのけぞる。その反応に驚いて身を引いた雪音は、きょとんとした後、吹き出した。

「何っー声出してんのよ、あんた。ほら、これで終わり。服着ていいわよ」

「え、あ、ああ。はい」

（わ、笑った……）

それまでずっと不機嫌顔だった雪音が笑った事に驚いて、恋次は間延びした返事をした。ごそごそ服を着なおして、立ち上がった。右足でとんとん、と地面を蹴ってみるが、痛みは全く無い。

「特に心配いらなと思うけど、どこか調子悪いところがあつたら、また来て頂戴。あたしが居なくても、ここの誰かに言えばいいから」

「は、はい。あの、鑑原六席、本当にありがとうございました。おかげで楽、に？」

頭を下げようとしたら、手で額を止められた。びっくりして雪音を見ると、彼女はにやっと笑って、

「お礼はもう良いから、稽古の一つでもしてきなさいよ、新人君。今みたいに弱っちいままだと、そのうち本当に押し倒されるわよ。護廷十三隊の女は、強いんだから」

「いてっ！」

ぺんっ、と恋次の額を叩いたのだった。

「なんか……意外と、普通の人だった、な」

叩かれた額を撫でながら、恋次は隊舎への道をてくてく歩いていく。

イズルから聞かされていた話から想像していたほど、恐ろしげな人ではなかった。確かに口は悪かったし、少々怯えさせられたけども、最後に笑った顔は、結構人なつつこかったと思う。

「怯えただけ損だったか」

やれやれと開放的な気分でのびをした恋次は、ふとある事に気づく。そういえば四番隊舎へ行く前、ギンが言っていた事

「……もしかして肝試しって、鑑原六席の診察の事が……？」

確かにある種の肝試しではあったが……しかし。鬼瓦なんていう恐ろしげな渾名をつけたり、肝試しと称したり、ギンは雪音の事が嫌いなのだろうか。それとも、気に入っているからこそそのちょっかいなのだろうか。

（とりあえず、今度会う時があっても、六席には言わない方が良くんだろうな）

告げ口した時の事を考えると、双方からとんでもない事をされそうで怖い。恋次は自分の腕を抱えてぶるつと震えると、逃げるように足を速めた。

## 俎上 後編（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

恋次・市丸の二人が出てきました。恋次も好きなキャラなので、書いていて楽しかったです。何となく年上の女性に弱い印象があります。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## シャル ウィ ドリンク

「雪音、まだ終わんねえのか」

「んー……」

後ろからの声に、はしごの上で大判の本をめくっていた雪音は、曖昧な返事を返した。それから、ん？ と顔をあげ、振り返る。

「なっ……一角！ あんた、どこから入ってきたの！？」

「その戸口からに決まってるだろ」

「あ、あほか！」

雪音は本を抱えて梯子を下りると、棚の上に座って足を組んでいる一角に詰め寄った。

「ここは関係者以外、立ち入り禁止だつての！ 出てけ！」

「ああん？ いいじゃねえか、別に。お前今まで気づかなかつたんだし」

「いいわけあるか！ ここは機密情報満載なの！ あんたが勝手に入ってきたりしたら、あたしの責任問題になるの！」

「何だよ、そんなヤバイ情報保管してんのか、四番隊は」

興味を持ったのか、近くの棚に手を伸ばす一角。雪音はその腕を本でバシッとたたき落とした。

「いてっ！」

「手え出すな！ 患者の個人情報とか、劇薬の調合方法とか、外に漏れたらまずいものが山のようにあるのよ！」

「ンなら口で言やいいだろ！ 叩くな！」

「口で言っても聞かないからでしょ！？ つーかあんた、何しにきたのよマジで！」

指を突きつけると、棚を降りた一角はけっ、と歯をむいた。

「これから飲み会やるから、わざわざ誘いに来てやったんじゃないか！」

「飲み会？ 無理です」

即答され、カク、とこける一角。

「はええ！ 何だよ、考えもしねえのかよ、あんだけ酒好きのくせに」

「しょーがないでしょ。まだ時間かかりそうなんだもん」

「んなの、適当に終わらせとけよ。明日でもいいじゃねえか」

ひよい、と本を取り上げられ、雪音はちよつと、と眉間にしわを寄せた。取り返そうとするも、頭上遙か高くに持ち上げられてしまい、跳ねても届かない。

「何してんのよ、返せっ」

「ばーか、取れるもんなら取ってみな」

必死の様子がおかしくて、一角は鼻で笑った。びき、と青筋を浮かべた雪音は、迷いもなく一角の股間を蹴り上げる。

ガギツ！

「……！！！！」

鈍い音がして、一瞬硬直した一角がその場に崩れ落ち、無言で悶絶した。雪音は落ちてきた本を受け止めると、

「まだ調べ物するんだから、邪魔すんならさっさと帰んなさいよ、このハゲ」

ふん、と鼻を鳴らして、再びはしごをのぼる。床に座り込んだ一角は、涙目で顔をあげ、数分間にわたって聞くに堪えない罵詈雑言を吐き捨てた後、

「て、てめえ、なんか、もう二度と、さそわねー、からな！ このクソ女！ 死ね！」

よろよろ立ち上がり、外に出て行った。

「別に誘ってなんて言っていないでしょうが」

雪音は冷たい眼差しでそれを見送った後、すぐ手元の本に目を落とした。すつ、と意識がそちらへ集中し、周囲の音が遠くなる。

それから後。ふ、と視線を上げた雪音は、壁にかかった時計を見て、すでに十一時をすぎている事に気づいた。

「あ、やば……やりすぎた」

身体を動かすと、あちこち固まっていたらしく、ばきばき、と派手な音が鳴って痛みが走る。

「う……うーいたたた……。今日は、この辺にしとくか……」

本を閉じて棚に戻し、こわばる身体で慎重に降りていく。部屋の片づけをして、伸びをしながら戸口に向かったところで、ふと棚の上の紙切れに気づいた。

「ん？」

何気なく手に取って見る。飲み屋の名刺だ。この間新しく出来た店で、古今東西の酒がそろっていて、食事も旨いと評判になっていたところだった気がする。ひっくり返して裏を見ると、店の地図の上に、汚い字で、

『来ねえと 店中の酒 先に飲み干す 仕事ばっかしてんじゃねーよ バカ』

などと書いてある。

「……一角？」

こんな事を言いそうな奴も、この場所に名刺を置いていけそうな奴も、他に思い至らない。雪音はまじまじと名刺を見つめた。それから、不意にくすり、と笑う。

「分かったわよ。そんなに来て欲しいなら、行っただげるわよ」

さっきの謝罪に、酒の一杯もおごってやりたいし。雪音はそう思いながら名刺を懐にしまうと、火を消し、外へ出て行った。

## シャル ウィ ドリンク（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

酒飲みの交流が続いています、ということ（笑）雪音は仕事の邪魔をされると不機嫌になります。が、ひどい仕打ちですね（笑）

最新作は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です



## 超えて

「……はい、こっちは終了。じゃあ次は背中ね。後ろ向いて」  
「うす」

雪音の言葉に、恋次は背中を向けた。背中への傷は擦過傷で、範囲は広いが深くはない。これなら塗り薬で十分だな、と手当てを始めた雪音は、ふと思い出したことを口にした。

「そっぴや阿散井君って、朽木さんと仲良いの？」

「ハ！？」

「うわ！」

いきなり勢いよく振り返ってきたので、恋次の手で薬ビンをはじかれそうになる。間髪持ち直して、雪音は恋次の頭を引っぱいた。

「ちよつと、何してんのあんたは！ 動くな！」

「す、すみません」

慌てて謝って、恋次は再び元の体勢に戻る。もう、と口を尖らせて、傷の無いところに飛んでしまった消毒液を拭いていると、

「あの、朽木……さんって、誰ですか。まさか、朽木隊長の事ですか？」

探るように恋次が尋ねてきた。雪音は、妙に慎重な口調だな、と思いつながら答える。

「そっぴやなくて、ほら、十三番隊の。朽木隊長が引き取った子。ルキアちゃん、だっけ」

「……」

沈黙が落ちて、恋次が体を強張らせた。素肌に触れていたから、はつきり変化がわかる。

「ごめん、何かまずい事聞いた？」

「あ。いや。そんな事ないです」

恋次は硬直を解いて、息をついた。

「あいつは幼馴染、だったんです。ガキの頃の」

なんでもない風を装いながら、この男にしては齒切れの悪い返事を返して来る。雪音はまずったな、と眉を寄せた。理由は分からないが、あまり触れてほしくなさそうだ。

「ああ、そうなんだ」

それで話を終わらせるつもりが、

「何で急に、そんな事が気になったんすか？」

恋次の方から話を振ってきてしまった。雪音は一瞬言葉を選んで黙り、しかし変に気を遣うと逆に迷惑かも、と思いなおして、普通に返す事にした。

「この間、海燕さんと都さんと立ち話してたんだけどね。」

その時、遠くから見てる、っていうか、こう、用事があるけど近づいていいものか、みたいに迷ってる感じの子がいて。

顔は知ってたけど、名前知らなかったからさ。都さんに聞いたら、朽木ルキアだつて教えてくれたの。

で、そういえば前、阿散井君がその名前言ってたことがあったなあと

「えっ、俺が！？ いつですか」

「えーっと、二月くらい前。ふたつきちよつとだけ入院してたでしょ。その時、寝言で」

「……………まじっすか」

「まじっす」

恋次はまた黙った。ふと見上げると、恋次の耳がみるみる赤くなつていく。あらま、と雪音は思わずニヤついた。

「何、もしかして朽木さんって、阿散井君の初恋とか？」

「なっ！」

「動くなっつってんでしょ。殴るよ」

またバタバタ暴れそうだったので、釘を刺すと、恋次は大人しくなった。が、今度は首まで赤くなり始めたので、おかしくなつてしまふ。

「へーそうなんだ。あの子、阿散井君のねー。もしかして、まだ初恋継続中？ 道理で、誰に言い寄られても付き合わないわけだ」

「ちっ、違います。そんなじゃ無いっスよ」

「えーなんでよ。話したことないけど、朽木さん可愛いじゃない。ちっちゃくてきゅんって感じ。ぎゅーしたい」

「……ぎゅーって……。いや、鑑原さんが知らないだけで、あいつチビのくせに、殴る蹴る偉そうな口は利く、すっげー生意気なんすよ」

ぶつぶつと、だが親しみのこもった口調で言うから、恋次にとって心許せる相手なんだな、と思う。そして、自分には幼馴染という存在がないから、羨ましいとも思う。

「いいじゃない、気心知れた相手って感じで。幼馴染みの恋人かあ、いいな」

「だから、違いますって。あいつは家族みたいなもんで……。つーかそんな事、あるわけないじゃないすか」

「何で？」

「……」

再度、恋次の体が硬直する。短い沈黙の後に出た声は、生硬だった。

「あいつは、もう朽木家の人間だから。俺みたいなチンピラとは、いつまでも一緒にいられないっス」

「……………」

今度は、気軽に何で、とはいえなかった。

雪音自身、流魂街の出だ。護廷十三隊に入るまで、卯ノ花家で世話になっていたからこそ余計に、貴族と平民の、厳然たる身分差と軋轢は理解している。

例え、護廷十三隊に入り、席官となり、表面上は貴族と対等の立場と言われても、両者の間には越えられない溝があるのだ。

「そっか」

何と言っていいか分からなくて、雪音は短く呟いた。しかしすぐ

思い直して、余計なお世話をやく。

「ルキアちゃんが朽木の家に入ってから、会いに行った事あるの？」

恋次は緊張したように肩を持ち上げた後、深々と息を吐き出した。返事が返って来ない。

（会わないって決めてるんだな、多分）

雪音はやれやれ、とわざとらしくため息をもらす。

「阿散井君って馬鹿正直だね。っていうか馬鹿だね。大馬鹿」

「……断言しないでくださいよ」

恋次が苦笑する。雪音は、だって馬鹿じゃない、と繰り返して、話を打ち切った。それ以上口を挟めないと思ったので。

## 超えて（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

今回は恋次のお話。ルキアと恋次の関係は好きです。恋次の感情は恋愛というより家族愛に近いとは思いますが。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## 四番隊五席

「十一番隊って、何でアホばっかなんですか」

「あ？」

手当を終えたところでかけられた質問に、剣八はじろりと相手を見た。剣八ほど大柄な男に上から見下ろされれば、普通威圧的に感じるものだが、彼の前で包帯を片づけた四番隊の女は全く動じなかった。

「だから、何でアホばっかなんですか、十一番隊の連中って。どいつもこいつも、敵に猪みたいに突っかっていて、ずたばろになっ

て私たちの手を煩わせて。  
あなた達が居なければ、私たちの仕事がいぶん減るんです。はつきりいつて、大・迷・惑・なんです」

護廷十三隊中最強と名高い十一番隊は、血気盛んな男達で構成されているから、救護・補給部隊であり、最弱と揶揄される四番隊とはすこぶる相性が悪い。

その構図は、十一番隊の面々が四番隊を怯えさせ従わせるというのが普通なので、こうまであからさまに面罵する四番隊隊員は珍しい。しかも、文句を言っている相手は、十一番隊隊長の更木剣八なのだ。

「いい度胸してやがるな、お前」

あまりにも堂々と文句を言われ、剣八は怒るより感心してしまう。女は肩をすくませた。

「折角隊長がいらっしゃったので、これを機会に上申させて頂こうと思いました。隊長殿から隊員の皆さんに注意してもらえませんか」  
「無理だな」

手当された腕を動かして、剣八はあっさり応える。女が不満げに眉をつり上げるのを見て、にい、と笑った。

「喧嘩は楽しむ事が第一だろ。戦いの真つ最中に、てめえの体を傷

つけないようになって、そんなつまらねえ事気にしてやってられるかよ。

大体、この俺にできねえ事を、あいつらに言って聞くわきゃねえな」

「……」

女はうろんげなまなざしで剣八を見上げた後、首を振って立ち上がった。

「アホにつける薬は無いって事です。よく分かりました。失礼致します」

「ちよつと待て」

そのまま背を向けて行ってしまいそうだったので、剣八は女の腕を掴んだ。怪我をした手で掴んだので、さほど力を入れたつもりではなかったが、引つ張られて女は後ろにこけかける。

「何するんですかつ！」

「お前、名は」

「は？」

「てめえの名前だよ。教えろ」

「……話の脈絡がつかめませんけど……。鑑原です。四番隊第五席、鑑原雪音」

「雪音か」

「え、何でいきなり名前呼び？」

名前呼びが思い切り予想外だったのか、女、雪音は一瞬素に戻って、ため口で問い返してきた。

\* \* \*

「あつ、鑑原さん。お疲れ様です」

眉間にしわを寄せた雪音が扉を開けると、補給品の整理をしていた花太郎が顔を上げた。雪音はおさなりに唸って彼のそばに座る。

「花君。おつかれ」

大きなため息をはき出した彼女に、花太郎は気遣わしげな笑顔を向けた。

「さつき、十一番隊の更木隊長がいらしてたんですね」

「うん、そーね」

「話し声聞こえてきましたけど、鑑原さん、更木隊長相手によくあそこまで言いましたね……。ばく、ひやひやしましたよ」

剣八が無意識に発する霊圧だけで、周囲を圧する。隣の部屋にいた花太郎でさえ、冷や汗をかいてしまうほどだったのだから、相對していた雪音が感じていた圧はどれほどのものだったろう。

その中で、何らたじろぐ事なく悪態をつくなど、もはや勇氣というより、無謀というか、命を捨てに行っていると思えない。

雪音は肩をすくませた。

「隊長相手だからこそ、あそこまで言えたのよ。あの程度で怒り心頭になるような奴が隊長だったら、器が小さすぎるって」

「そ、そうですかねえ……」

二番隊の碎蜂隊長あたりは激怒しそうだが。そう思いながら薬瓶を箱に入れると、脇から手を伸ばして、雪音が手伝いだした。顔はまだ不機嫌なままだ。

「ほんつと、十一番隊って意味わかんないわね。喧嘩が楽しいから怪我しても全然気にしないって、何なのよ。」

隊員がアホなのかと思ったら、隊長もアホだったなんて、最悪。

むかつくわー」

「か、鑑原さん、言い過ぎじゃないかと……。十一番隊、嫌いなんですか？」

四番隊は十一番隊からさげすまれているので、その扱いに愚痴を言う四番隊員は多い。が、雪音は齒に衣着せなさすぎだ。

もう更木隊長は居ないだろうが、びくびくしながら花太郎が言つと、彼女は口を尖らせて、震点の蓋をきつく閉める。

「怪我する奴は、嫌いよ。誰と限らずね」

「え、じゃあ何で、いつも怪我人ばかりの四番隊に居るんで……」



いや、何でもないです」

雪音は自分が言いたくないことを聞かれると、途端に機嫌が悪くなるのだ。じろ、と睨み付けられて、花太郎は小さくなるしかなかった。

#### 四番隊五席（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

剣八と花太郎君登場です。

最初に走り書きしたのが剣八の話で、初期の段階では彼と雪音のお話になるはずでしたが……剣八が動かなかったので無理でした（笑）  
こついう勝ち気な女性、好きそうな気はするんですが。

花太郎君は雪音に厳しい事を言われながらも可愛がられている後輩です。時々地雷を踏みます（笑）

最新作は自サイト「南通り」（<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

#### 四番隊常連客

「はい、これで今日は終わり」

そういつて雪音が包帯の端を止めて手を離すと、一角はさっそく足を動かした。

「おーすげー、もう痛くねえや」

この間まで、何力所も骨が折れて身じろぎも出来ない状態だったのが、膝を曲げて足の指一本一本を動かせるようになっていた。

背骨に縦に沿って長い釘を打ち込んでいるような激痛もだが、何より自由に動けない事が苦痛だった一角なので、こうして元通り足が動くようになったのはとても嬉しい。

「さっすが雪音だな。薬の効きがすげえいいわ、大したもんだぜ」

嬉しくて、手放しのほめ言葉を口にする。と、雪音は虚を突かれたように目を瞬かせた後、

「……良いから、おとなしくしてなさいよ」

うつすらほおを赤らめてそっぽを向いた。普段なら上から押さえつけるような居丈高な口調なのに、今は違う。

へっへっ、と笑って、一角は寝台の上で体をひねり、床に足をおろした。

「可愛いねえ、照れてんのかよ、雪音ちゃん」

からかうと、きつい視線が向けられる。

「あんたぶっ飛ばすわよ。っていうか、まだ立つちゃ駄目だったの。どこ行こうとしてんのよ」

「隊舎にもどんだよ。もう二日も横になりっぱなしだったから、体がなまっちまった」

雪音が眉間にぎゅっとしわを寄せ、診療記録の紙を挟んだ板で、いきなり一角の頭をひっぱたいた。

「いてっ！ 何しやる」

「あんたあほか！ 全治一週間だってさっき言ったでしょ、人の話

聞いてんの！？

しばらくは稽古も討伐任務も厳禁だったのよこのハゲ！」

「こんな怪我で一週間もうだうだしてられっかよ、あとハゲじゃねえよ馬鹿雪音！」

「骨くつつけて傷口塞いだけなんだから、詰所出るまでに血まみれで床はいずりまわる事になるわよ。

っていうかそれで良いって言うんなら、今ここであたしが体かつさばいてやるからそこになおれ」

「てめえ、腐っても四番隊の隊員が、怪我人の怪我増やしてどうすんだよ！ そのメスしまえ！」

取っ組み合つてにらみ合っていると、入り口の布をよけて、綾瀬川弓親が部屋に入ってきた。

「うるさいなあ。何してるのさ、一角、雪音ちゃん」

「「だつてこいつが！」」

同じタイミングでお互いを指さす二人を見て、だいたい状況が分かつたらしい。

「はいはい、いちいち喧嘩しないでよ」

べり、と二人を引きはがす。

「離せ弓親！ こうなつたら、今日こそきっちり決着つけてやる！」  
じたばた暴れる一角の頭を、弓親はぺちんと弾いた。

「どうせまた一角が馬鹿な事言つて、雪音ちゃんがキレたんだろ？  
そんな事どうでもいいんだよ」

「どうでもいい！？」

「いいの。それより雪音ちゃん、頼んでたもの出来た？」

一角をあつさり無理して、弓親は雪音に向き直る。弓親に押さえつけられた額をさすっていた雪音は、

「え？ あ、うん、今日ちょうど渡しに行こうと思つてた。えつと

……あつた、はい」

背に負った鞆をこそそ探つて、小さな瓶を取り出した。淡い青がグラデーションに入っているガラス瓶は、光に反射してきらりと

光る。中にはとろりとした液体が入っているようだ。

弓親がぱつと顔を輝かせてそれを受け取った。

「ありがとう！　よかったー、もう少しで、きれるところだったんだよね」

「何だ、それ」

ひとまず矛を収めた一角が尋ねると、弓親はやたらくねくねした動きで、

「椿油だよ。色々試してみたけど、雪音ちゃんが作ってくれるのが一番、僕の髪を美しくつやつやにしてくれるんだ」

「へーそうかよ」

弓親の動きが気持ち悪いと思いながら、平坦な返事を返した一角に、雪音はにやりと笑って言った。

「何ならあなたにも作ってあげようか。育毛剤」

「いらねえよ！　ハゲじゃねえつつつてんだろぅが！」

「それにしても、十一番隊って毎日毎日、あたし達に手間暇かけさせるから、ほんと鬱陶しいわー。何で、たかが虚討伐でこんなずたぼろになるのかしら。無能？」

三人分の茶を入れた雪音は、椅子に腰掛けて、実にしみじみとした口調でいった。

「喧嘩売ってんなら、買うつつつてんだろぅが」

ひとまず大人しく寝台に横たわった一角が額に青筋を浮かべ、ドスのきいた声で唸る。が、雪音は聞き流した。あらぬ方向を見ながら、はあ、とため息をつく。

「どうせ十一番隊の人が来るなら、草鹿副隊長だけ毎日いらっしやればいいのに。あ、弓親はいつ来てもオツケーだから」

「当然だね」

「何でこいつだけ」

「だって弓親、全然怪我しないもん」

「僕の美しい肌に、醜い傷跡なんてつけないからね」

「怪我しない人なら、いつ遊びにきても大歓迎よ」

「四番隊のくせに、怪我人嫌がるなよ……。んじゃ、副隊長は何で来て欲しいんだ？」

「可愛いから」

「即答だよこいつ」

突っ込むと、雪音はだって！ とこぶしをぎゅっと固める。

「だって草鹿副隊長、超超超可愛いじゃないの！ プリティーじゃないの！ ちっちゃくて、ちょこちょこしてて、お人形さんみたいで、ああもう可愛い。更木隊長みたいに、背中につけたい。部屋に飾りたいっ。一回でいいから、ぎゅーって抱きしめたいっ！」

頬を赤らめ、いつになくきらきらと目を輝かせる雪音は、猛烈に別人ばい。

「……変態じゃねえか、それじゃ」

引き気味に呟く一角に、弓親はずー、と茶をすすった。

「ただ可愛いものが好きなだけでしょ。雪音ちゃん、小さいものに目が無いし。こういうところは、女の子らしいよね」

「ほー。こいつ女だったのか」

ゴッ。

言葉が終わるか終わらないか、雪音の肘が一角のみぞおちに勢よく落ちた。

#### 四番隊常連客（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

犬猿の仲がいつの間にか仲良し？になりました。

最新作は自サイト「南通り」（<http://members.jcom.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

## バレンタインデー 1

「バレンタイン？ ああ、そういえば、そういう時期ですね」

書類棚の整理をしながら言う雪音に、乱菊がブー、と口を尖らせた。

「なあに、その気のない返事。若い娘らしく、もうちょっとさー、キヤッ 張り切らなきゃ みたいな反応ないの？」

「……何期待してんだか知りませんが、ありません。」

「……っていつか、あたしとそう年かわらないでしょ、乱菊さん」

雪音は口を曲げて、棚に視線を戻す。乱菊がこういう事を言い出す時は、大抵人で遊ぼうとする時だ。相手にしない方が良いのは、これまでの経験で良く分かっている。

「でもさー、あの人にあげたいとか、そういうの無いの？」

「無いです」

「全然？ 一角とかは？」

「は？」

思いもかけない名前に、思わず振り返る。乱菊はにやー、と笑った。

「ほら、ちゃんと居るんじゃないの。チョコは手作り？ それとも現世に買いに行く？」

「いや、何でそこで一角が出てくるんですか」

「だって、付き合ってたんじゃないの？」

「誰が」

「あんたが」

「……誰と」

「一角と」

ばさばさばさ、と手からファイルの山が落ちる。雪音は心底嫌そうな顔で乱菊を見、深々、とため息をついた。

「……松本副隊長。仕事さぼってないで、もう戻ったらどうですか。」



あほな事を考えすぎです」

「何よ、違うの？ あんだけ仲良いくせに」

「何いってんですか、全く」

確かに仲は良いが、付き合った覚えはない。どうせまた、乱菊が  
好き勝手な妄想を働かせてるだけだろう。雪音は、もう本当に相手  
をするのはやめようと心に決めた。落としたファイルを集めながら、  
ふと思い出す。

「ああ、でもバレンティンにいつもあげてる人なら、いますね」

「えっ！ 誰！？」

「山本総隊長」

「はあ！？ あんた、じじいコンだったの」

「違う！」

相手にしないと決めたのに、あんまりな言い様に思わずつつこん  
でしまう。

大体、護廷十三隊総隊長を、仮にも副隊長がじじい呼ばわりとは  
何事か。そのところをこんこんと説教しようとしたが、乱菊はこ  
っちの話など全く聞く耳持たず、

「じゃあ何で？」

あつさり話の腰を折って尋ねてくる。本当に自分勝手な人だな、  
とげんなりため息をつきながら、雪音は答えた。

「何でって、総隊長にはいつもお世話になってるから、せめてもの  
お礼です。」

そうだ、富貴屋の芋羊羹、買って来なきゃ」

人気だからすぐ売り切れちゃうんだよね、と呟く雪音に、乱菊は  
再びブー、と声を上げた。

「何それー、雪音が一角に何あげるか、皆で賭けてたのにー」

「何してんですかあんたは！」

人のいないところで、何遊んでるんだこの人は！

## バレンタインデー 2

「弓親、いるー？」

乱菊が声をかけながら戸を開けると、弓親が顔を上げた。昼日中から酒盛りをしていたらしい、手に杯を持っている。

「あらっ、飲んでるの？ あたしも入れてっ」

うきうき声を弾ませて座に加わった乱菊に、弓親と対面して座っていた一角が嫌そうな声を漏らした。

「何だよ、またサボりに来たのかよ、松本」

「あ、一角居なんだ」

「居なんだ、じゃねえだろ。ここは十一番隊だぞ。お前が居る方がおかしいだろうが」

文句を言つても、乱菊はまあいいじゃない、とあっさり流して、勝手につまみ始める。差し出された杯に、弓親が仕方なく酒を注ぎながら、

「で、何？ 僕に用があつたんじゃないの、乱菊さん」

尋ねると、乱菊は酒を煽ってから「そうそう」と口火を切る。

「雪音のことだけどさ、一角に何もあげるつもりないんだって」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、この賭けはお流れかな」

「ブッ！」

いきなり名前が出てきたので、一角は酒を吹いた。汚いなあ、と顔をしかめる弓親に食いつく。

「ちよつと待て！ 賭けって何の話だ！」

弓親は僕が言い出したんじゃないよ、と言いつつ答えた。

「今度のバレンタインの時、雪音ちゃんが一角に何あげるか、皆で賭けてたんだよ。僕はお酒関係と踏んでただけだな」

「あたしは超可愛いチョコと、雪音本人」

「本人、って……おまつ、お前ら、何勝手にやってんだ！ まさかそれ、雪音に話したのか！？」

「うん。だって結果が分からないと、賭けにならないし」

「なに『聞くの当たり前じゃない』みたいな顔してんだ、お前はっ！」

しれつと告白する乱菊に、一角は思わず拳を固めた。

「そんな馬鹿な事してんじやねえっ！　っーか大体、あいつがそんな気の利いた事するわけねえだろ！　俺はこれまでだって、一度も貰った事ねえよ！」

「あー、そうなんだ。寂しいわね」

「るっせえ！」

少なからず気にしていたのでちよっぴり傷ついて、思わず怒鳴る一角。弓親は魚をつつきつ、言う。

「そついや雪音ちゃんって、イベント事にはあんまり興味ないみたいだね。僕も貰った事ないな」

乱菊は詰まらなさそうに、酒を口に運んだ。

「でもさあ、最近一角とデキたっばいから、そういうのもありかと思っただけどなー」

「何だよ、そのデキたってのは」

一角は、また何を言い出すかと顔を引きつらせる。だからあ、と乱菊は人差し指を立てて、振ってみせた。

「雪音と一角が付き合ってるみたいーって噂があるからさ」

「付き合ってるねえよ。どっから出た噂だ、そいつあ」

「あたしの名推理」

「お前かよ！　変な妄想してんじやねえよ！」

「えー、だって二人でご飯とか良く行ってるでしょ」

「ダチでも行くだろ、それくらい」

「飲み会終わったときだって、つぶれた雪音をお持ち帰りしてるじゃない」

「部屋に送ってるだけで、何もしてねえ！」

「何だ、そつなの。意気地なし」

「……！！」

「一角、食事中に乱闘はやめてよ」

こめかみに青筋を浮かべた一角が、刀を抜こうとする前に止めて、弓親は猪口をくい、とあおった。満足げなため息をもらして、

「ま、付き合ってないにしても、雪音ちゃんと一角、仲はいいからね。今年こそは何かしらあるかな、と思ったんだけど、やっぱり駄目だったか」

「そうみたいねー。雪音も『ありえない』くらいの勢いで否定してたし。もうね、天地がひっくり返っても無いって感じだった」

「……だあら、そうだって言っただろうが」

雪音を女として見ていないが、そう断言されてしまうのも、何となく気に障る。一角はむすつとして、そつぽを向いた。が、

「でも、バレンタインに毎年あげてる人はいるってよ」

「は？」

乱菊の言葉に、思わず顔の向きを戻してしまう。

「へえ、雪音ちゃんにそういう人が居たなんて、初耳だな。もしかして、長年の思い人が居るとか？」

弓親も興味を持って、身を乗り出した。男つけが欠片もない雪音に、そういう相手がいたとは。一体誰のことかと思いきや、

「山本総隊長、だって」

「はあ！？」

「……ずいぶんと、渋好みなんだね。雪音ちゃんって」

意外な名前に、一角も弓親も目を丸くしてしまう。そうよねえ、と乱菊は髪をかきあげた。

「雪音曰く、いつもお世話になってるから、そのお礼ってことらしいんだけどさ。なあんでよりによって、バレンタインに山本のじいさんなんだか、よくわかんないわ」

「でも、確かに山本総隊長に可愛がられてるっぽいよね、雪音ちゃん。お爺ちゃんと孫みたい、というか」

「富貴屋の芋羊羹、あげるみたいよ」

「ああ、あそこのが好物なんだっけ、総隊長」

ぺちやくちやとお喋りをする二人を斜めに見やって、一角は八、と息を吐き出した。

「別にどうでもいいじゃねえか、そんなの。あいつはそういう色気のない奴なんだから」

話をそれで打ち切るつもりで、投げやりに言い捨てる。が、

「なーによ一角、貰えないからって、拗ねる事ないじゃない。もしかしたら気が変わって、ラブラブなのくれるかもよ？」

慰めるつもりか煽るつもりか、乱菊がそんな事を言い出したので、一角は思わずガアツと吼えた。

「そんなのある訳ねえだろうが、馬鹿野郎！」

（賭けのネタにされたなんて聞いたら、あいつあ意地でも持ってるねえよ！ 雪音はそういう奴だ、畜生！）

断言しつつ、しかしそれもちょっぴり寂しい気がする一角だった。

### バレンタインデー 3

終業時間後も仕事に追われ、あちこちの隊舎を回っていた雪音は、十番隊隊舎で、妙に甘い香りと、焦げ臭い臭いが混じって漂っている事に気づいた。

「ん……何これ？」

何気なく匂いの元を辿っていったら、炊事場のところにたどり着いたので、覗いてみる。そこには何故か八番隊の伊勢七緒、五番隊の雛森桃が、十番隊の乱菊と一緒にいた。

「伊勢さんに、桃ちゃん？ こんなところで、何してるの」

「あ、鑑原さん！ 今、ケーキ作ってるんですよ」

言いながら振り返った雛森は、手の中にホイップクリームのボウルを抱えている。ココアパウダーの量を計りながら、乱菊がにこやかに言った。

「バレンタインの準備中なの。良かったら、雪音も参加してく？」

「結構です。遠慮します」

ついこないだ、乱菊が自分をネタに妙な賭けをしていた事が発覚したのだ。ここで参加したら、どんな遊びに使われるか、分かったものではない。

雪音が冷たく即答すると、乱菊はそう？　と言って、再び作業に戻った。途端、悲鳴を上げる。

「うわ、七緒！ 何で塩なんか入れてんの？！」

「え、あ、隠し味になるかと……」

「ならない！ ならないからそれ！」

「あつ、こつちのチョコレート煙出てます！」

「わ、火強すぎ！ 焦げてる焦げてる！」

「きゃー、ちよつと、待つてください！」

乱菊や七緒がどたばたと走り回る炊事場は、まるで戦場のようだ。  
「……えーと。頑張ってください」

周囲に漂う何とも言いがたい匂いに、雪音はそーっと遠ざかって、その場をこっそり逃げ出した。

「皆、一生懸命ねー」

隊舎の外に出た雪音は、遠くなくてもまだ聞こえる騒動に、独り言を呟いた。と、

「何がツスか？」

「うひゃあっ！」

不意に後ろから声が降ってきて、思わずびくつとする。振り返ると、そこには恋次が立っていた。仕事帰りらしく、鞆を背負っている。

「あ、阿散井君、いきなり声かけないでくれる？！　びっくりするじゃないのっ」

「すみません。そんな驚かれるとは思ってなかったんで」

怒られて、ばつが悪そうに謝る恋次。雪音が、まあいいけど、と胸をなでおろすのを見て、

「で、何が一生懸命なんすか？」

あらためて質問してきた。雪音は十番隊隊舎を指で示して、

「炊事場で、乱菊さん達がバレンタインのお菓子を作ってたから。皆一生懸命やってんだなーと思って」

「ああ」

恋次はへら、と顔を緩めた。

「さつきから良い匂いすると思ったら、チョコだったんスね。そうか、もうすぐバレンタインかー」

「嬉しそうね、阿散井君。チョコくれるような彼女が出来たの？」

あ、もしかして、朽木さんからもらえるとか」

何気なく言ったら、恋次の笑みが、苦笑に変わった。

「いや、そういう訳じゃないっすけど、俺甘いもの好きなんで。バレンタインになると、現世から色んなチョコとか和菓子とか入ってくるんで、色々食べられて嬉しいんス。

つか、ルキアはそういうところに気が回るような奴じゃないし」

「ああ、そうなんだ」

また軽く地雷を踏んでしまったか、と雪音は頭をかいいた。すると恋次が、

「雪音さんは？ 誰かにチヨコあげるんスか？」

なんて尋ねてきたので、雪音の眉間にぎち、としわが寄った。

「……まさか阿散井君、あんたもあの賭けに参加してたんじゃないでしょうね」

「は？ 賭け？ って、何すか」

きよとん、と目を瞬くところを見ると、全く知らないらしい。「ああ、いいや。知らないなら気にしないで」と手を振って、雪音は肩をすくめる。

「あたしはそういうの、興味ないから。総隊長に芋羊羹を差し上げるくらいよ」

「あ、もしかして富貴屋の奴ですか？ あそこの芋羊羹、総隊長ご最腹なんすよねー、俺も好きっすよ。高いから、たまにしか食べないけど」

味を思い出すように、目を閉じて口を動かす恋次を見て、雪音はくすつと笑ってしまった。

「そんなに好きなら、阿散井君にもあげようか？」

何気なく言うと、恋次は「え！」と背筋をピンと伸ばして、目を丸くした。

「マジっすか！？ 良いんですか、俺なんかが貰っちゃって」

「良いわよ。ついでだし」

「うわ、ほんとですか！ すげー嬉しい、ありがとう雪音さん！ 後でちゃんとお返ししますよ！」

恋次は心底嬉しそうに笑って、雪音の手を握ってぶんぶん上下に振った。雪音は、そのあまりの喜びように押されながら、

「ど、どういたしまして」

と答えたのだった。



## バレンタインデー 4

二月十四日、バレンタインデー。

男も女も何となく落ち着きが無く、瀟々たる内に浮ついた空気が漂うその日、仕事を終えた雪音は、総隊長の私室を訪れていた。

「粗末なのですが、どうぞ」

畳の上に菓子の包みを差し出し、頭を下げる雪音。その前に座した山本は、ほうほう、と軽い笑い声をあげた。

「ありがたく頂戴するぞ。毎年気を遣わせてすまんのう、雪音」

「そんな、とんでもないことです」

顔を上げて、雪音はにこつと笑った。実の祖父のように慕っている山本に、こうして礼を言われるのは、嬉しい。

「山本お爺様には、いつも大変お世話になっていますから。こんなものでは、感謝の気持ちを表しきれません」

素直に言つと、山本はまた笑った。

「何を言つておる。お主が元気に笑つていてくれる事こそ、最上の孝行じゃ。これで後は、結婚でもして落ち着いてくれれば、言う事はないんじゃないがの」

「……えーつと、それはまあ、おいおい」

やばい、話が長くなる。そう思つて言葉を濁した雪音の顔を見て、山本はほん？ と白い眉毛をあげた。

「なんじゃ、おぬしにもそろそろ良い男が出来たのかの。この後、誰ぞかにちよこれいとを渡しにいくのか？」

妙な勘違いをされて、雪音は手を振った。

「いえいえ、居ませんよ、そんな相手。あたしはまだまだ半人前ですから、結婚だの何だの、考える余裕なくて」

「ふうむ、ならばわしが一つ二つ、見繕つてやろうかの？ 折りよく、縁談話を持ってきたのが、確かここに……」

山本がそういつて棚に手を伸ばすのを見て、雪音は慌てた。

「それではっ、職務がありますのでこれで失礼致します、総隊長！」  
がばっと平伏し、相手に何か言う隙を与えずにすばやく退出する。  
写真を手に使っていた山本は、雪音の足音が遠ざかっていくのを聞いて、残念そうにそれを棚に戻した。そして、

「……梅」

小さく呟く。と、どこからともなく黒尽くめの男が、山本の背後に現れた。

「はっ、ここに」

「雪音が誰ぞかにちょこれいとを渡すようなそぶりは、あつたかの？」

「いえ。ですが、十一番隊第八席の阿散井恋次が、富貴屋の芋羊羹を雪音様より頂く約束をしているようです」

山本の細い目が、ぎらっと開いた。瘦躯からゆらり、と霊圧が立ち上り、梅と呼ばれた男が萎縮して身を縮める。

「ほほう……十一番隊の小僧がの……」

山本は煙管を手にとって、火皿に刻み煙草を詰めながら、淡々とした口調で言った。

「梅。この後も雪音を見張り、もし小僧が雪音に何ぞ無理強いするような事があれば、斬れ。わしが許す」

「はっ」

答えた梅は、すぐさまその場から消え去った。

火をつけた煙管をくわえた山本は、雪音が置いていった包みを開くと、しわだらけの顔を緩めて笑う。

「……さて、わしは芋羊羹を頂くかの。これ、誰か。茶を持て」

（あー、危なかった。また縁談話につかまるところだった……）

瀟々たる中を走りながら、雪音はふーっとため息をついた。こんな自分に目をかけてくれる山本には、感謝しきれないほど感謝している。が、雪音は結婚なんて、まだ興味がない。勧められても困る

だけだ。

大体、貴族のように血脈を作る必要のない一般人にとって、結婚は、現世のそれほど重要なものではない。護廷十三隊でも、結婚している、もしくはしていた者の方が少数なのだから、無理に縁談をする必要だつてないはずだ。

（まあ、お爺様のあれは、ありがたい親心つてもものなんだろうけど）  
一人ごちながら、目的地が近くなったので、足を緩める。走ったせいで乱れた髪を手櫛で直しながら歩いていたら、前から、五番隊隊長の藍染惣右介がやってくるのが見えた。

「あつ、藍染隊長」

ぴつと背筋を伸ばして挨拶をすると、藍染もこちらに気がついて、ふわつと笑った。

「やあ、雪音君。もう仕事は終わりかい？」

「は、はい。藍染隊長……は、それは、チョコレートですよ」

藍染は両手に紙袋を持っていた。その中にはぎっしり、色とりどりの包装がなされたチョコレートが詰まっている。藍染は少し困ったように苦笑を浮かべた。

「ああ、そうなんだ。ちよつと外を歩いていたら、次々と渡されてしまつてね。気持ち嬉しいんだが、これでは身動きが取れないから、一度隊舎に戻ろうと思うんだ」

「慕われてらっしゃるんですね。さすが、藍染隊長」

緊張しながら早口に言うと、藍染は目を細めて、苦笑をまた優しい笑みに変えた。

「雪音君は、どうなのかな？」

「は？」

「君からチョコレートを貰えたら、僕はとても嬉しいんだが。一つ、頂けないかな？」

「……え、ええっ!？」

雪音はぎよつとして、思わず大声を上げてしまった。

藍染は温和で優しく、身分が低い者にもわけ隔てなく、気さくに

接してくれる。また、穏やかな外見とは似つかわしくなく、戦闘において自ら前線に立って、その圧倒的な霊圧で鮮やかに戦う事のできる人物なので、非常に多くの隊員に好かれていた。

だがその高潔さ故か、あるいは清澄な霊圧のせいかな、雪音は藍染と対峙するたび、妙に緊張してしまうのだ。藍染は好悪を云々できるような相手ではなく、ましてやチヨコレートを渡すなんて、軽々しいことが出来るわけがない。

そんな思いがつい声に出してしまったのだが、

「あつ、し、失礼しましたっ」

「冗談だよ。まさか脅し取ろうなんて、思ってたやしないさ」  
焦って謝る雪音に、藍染はくすくす笑って済ましてくれた。

「それじゃ、僕は戻るから。雪音君も頑張りなさい」

そういつて、爽やかに手を振って、五番隊隊舎に向かって歩いていく。

「は、はい！ お疲れ様でした！」

雪音はその背中にぺこっと頭を下げた。十分遠くなったか、と思う頃に頭を上げて、胸をなでおろす。

「ああ……びっくりした。藍染隊長もあんな冗談言っのね……」

あの雛森が尊敬して止まない人だから、もっとまじめな感じかと思っていたのだが。まあ、実直なだけでは、あれほど慕われる事もないのだろうけれど。

「……っと、早く行かないと」

ふう、と息を吐いた雪音は、気を取り直して再び歩き始めた。すでに日が傾きはじめている。

## バレンタインデー 5

ようやく十一番隊隊舎についた。雪音は、一度立ち止まってふう、と息を吐き出す。四番隊から一番隊、そして十一番隊と隊舎を移動してきたので、結構な距離だ。

（遅くなっちゃった）

予定より遅れたが、恋次はまだ隊舎にいるはずだ。そこで中をのぞき、すみませーん、と声を出したところで、

「あつ、雪音さん！ 待ってましたよっ」

どすどす床を踏みしめながら、恋次が出迎えに走ってきた。雪音は顔の前に手を立てて、「ごめん、待たせて！」謝る。

「いやいいっすよ。むしろ、わざわざ来てもらっちゃってすみません。俺の方から出向くのが筋なのに」

「そんな事良いわよ、気にしないで。……じゃ、はい、これ。約束のもの」

そういつて、雪音は抱えていた包みを差し出した。恋次がぱつと顔を輝かせて、それを受け取る。

「ありがとうございます！ すげー嬉しいッス！ うわー、富貴屋の羊羹、食うのいづぶりだろ。この重さがまたいいんすよねー、食べ応えあつて」

今にも包みを破いてかぶりつきそうなのはしゃぎように、雪音は思わず笑ってしまった。

「あはは、そんなに喜んでもらえるなら、あげた甲斐があるわ。味わって食べてね」

「はい、頂きます！ あ、どうせなら、雪音さんも一緒に食べませんか？」

「え？」

思いがけない言葉に、きょとん、と目を瞬く。恋次は隊舎の敷地にある食堂棟のほうを示して、

「今なら夕飯前で食堂空いてるし、こないだ阿虎<sup>あこ</sup>で玉露買っておい  
たんすよ。旨いっすよー」

「良いの？ あたしも貰っちゃって」

それだけ好きなら、最初から最後まで、自分だけで味わいたいの  
ではなかるうか。そう思ってた聞いたが、恋次は氣さくに笑う。

「当然っすよ、雪音さんがくれたもんなんすから。時間があるなら、  
一つどうっすか？」

「ほんとに良いの？」

「勿論」

雪音はんー、と考える間を置いた。

この後はどうせ部屋に戻るだけだし、あの芋羊羹は人にあげるば  
かりで、自分は久しく食べていない。夕飯前で小腹も空いているし、  
恋次がこうまで言ってくれるのなら、それに甘えていいかもしれな  
い。

「うーん、じゃあ、ちょっとだけ頂こうかな」

そう答えると、恋次は早くも歩き出して、「じゃ、こっち来て下  
さい」うきうき弾んだ声で、雪音を誘った。

がらつ、と食堂の扉を開いた恋次は、そこに一角と弓親の姿を認  
めて、あれつと声を上げた。

「一角さん、弓親さん、お疲れ様っす。もう飯っすか？」

「おう、恋次。飯前に、ちょっと一杯な」

「お疲れ様。……あれ？ 雪音ちゃん」

弓親が恋次の後ろになかば隠れている雪音に目ざとく気がつき、  
声をかける。雪音は恋次に続いて中に入りながら、や、と手をあげ  
る。

「ちょっとお邪魔するわよ」

「珍しいね、雪音ちゃんがうちに顔出すなんて。何か用？ あ、も  
しかして一角にチョコあげにきたとか」  
「なっ」

いきなり話題に出てぎよっとする一角と、「はあ？」と眉をあげる雪音。

「何でそうなるのよ。違うわよ」

「何だ、違うんだ。残念だったね、一角」

「あ、あのなあ！ 俺は別に、こんな奴からチヨコ貰いたいとか言っ  
てねえだろ！」

「指差すなハゲ」

唐突にこんな奴呼ばわりされて、雪音は軽くキレかった。しかし、事情が分からないながらも、不穏な空気を察した恋次がまあまあ、と場をとりなす。

「良かったら一角さん達も、羊羹食べませんか。雪音さんから貰ったんすけど」

が、その言葉で弓親の目がきらんと光った。すばやく立ち上がって恋次の手元を覗き込み、

「富貴屋の芋羊羹だ。そうか、雪音ちゃんの本命って恋次だったんだ」

不穏な台詞を吐いたものだから、

「……はあっ！？」「」

その場の三人がいつせいに、素つ頓狂な声を上げてしまった。

「恋次、お前いつの間に、ンな事になってんだー！」

一角に鋭く問われて、恋次は少し赤くなって、イヤイヤイヤ！と勢い良く手を振った。

「し、知らないっすよ俺！ 何で羊羹でそんな話になるんすか！」

「だって、雪音ちゃんがバレンタインに、総隊長以外の男に贈り物するなんて、これまで無かったんだよね？ それなのにわざわざ、恋次の好みに合いそうなものを寄越すなんて、これはもう本命以外の何者でもないじゃないか」

「え……え、ええ！？」

予想外の指摘に、耳まで赤くなって狼狽する恋次。その様子に思わず顔を引きつらせながら、

（落ち着け、落ち着け俺……本命が居るんなら、義理チョコでも俺によさねえのは当然だろ、当然……）

懸命に自己暗示をかけて、理性を保とうと努力する一角。その二人と雪音を見比べて、何やら楽しそうな笑みを浮かべる弓親。

しかし、話題の渦中であって雪音は、ないない、と冷静に手を振って否定した。

「これは、総隊長に芋羊羹差し上げるって話をしてたら、阿散井君も好きだっていうから、ついでに買ってきただけよ。含みはありません」

「何だ、そうなんだ。つまらないな……」

「……弓親、あんた乱菊さんの影響受けすぎじゃないの……？」

いや、そもそも似ているから意気投合しているのかもしれない。雪音は呆れながら、恋次の袖を軽く引いた。

「ほら阿散井君、いつまでもぼーっとしてないで。皆で食べるんですよ？ お皿と湯飲み、どこにあるの」

「え、あ、ああ、はい、すみません。こっちです」

まだ赤面したまま、炊事場に入る恋次と雪音。二人を見送った弓親は座りなおして、一角を見た。にや、と笑う。

「一角、顔緩んでるよ」

「……あ！？ べ、別に揺るんじやいねえよっ」

言われて、ぴしゃりと頬をたたく一角。確かに、緩んでいる。

「はいはい、良かったね、恋次が雪音ちゃんの本命じゃなくて」

軽くいなされて、一角はぴき、と眉間にしわを寄せた。

「あ、あのなあ弓親、お前なんか勘違いしてねえか？ 俺はあいつの事、女だなんて思っちゃいねえんだ。あいつが誰に惚れてようが、関係ねえよ」

「うん、そうなんだろうね」

「あ？」

あっさり肯定されて拍子抜けしていると、

「でもチョコは欲しいんでしょ？」



ずばつと言われて、思わず言葉に詰まってしまった。「な、ち、ちげえ……」慌てて否定の言葉を口にしようとしたところで、

「大体、何でそんなにチョコが欲しいわけ？」

「うわっ!？」

いきなり後ろから雪音が話に加わってきたので、一角はびくつと肩を震わせてしまった。

「おまつ、いつのまに帰ってきたよ！　つか、どこから話聞いて……」

「あ？　のあたりからっス」

盆を手に戻ってきた恋次が答えて、各々に切り分けた羊羹を配り、弓親の隣に腰を落着ける。雪音は持ってきた急須で茶を入れ、湯飲みを皆の前に置いて、一角の隣に座った。

「だからさ、バレンタインになると、チョコチョコって皆騒ぐけど、あれって何なわけ？　そりゃ、片思いの子とか、恋人同士とかで盛り上がるなら分かるけどさ、あんたみたいに全然関係なさそうな奴らも、ものほしそうな顔してるじゃない」

「……悪かったな、関係なくて」

思い切り急所をつかれ、一角はむすつと頬杖をついた。まあしよ  
うがないわよね、と追いつちをかける雪音。

「十一番隊の男なんて、皆むさくるしくて乱暴なあほばっかだもん。可愛い女の子からチョコ貰うなんて、無いわよねー。さっき藍染隊長に会ったけど、両手の紙袋一杯持ってたわよ。欲しいなら、一個貰ってきたら？」

「馬鹿か！　いらねえよ、そんなもん！」

「ま、だからこそ欲しいって事なんだと思うけどね。バレンタインのチョコって、女の子にもてる度合いを測るって面もあるから、男としては、一つくらいは貰いたいのが心情なんだよ」

「ずずー、と茶を飲みながら、他人事のように弓親が言う。「そうなの？」と雪音に話を振られて、一角は頑として答えまい、とそっぽを向いた。

「何だ、要するに面子の問題ってわけか」

雪音は羊羹を菓子切りで切って、口に運んだ。んゝ美味しい、と幸せそうに味わってから、

「馬鹿みたい。本命で貰えるんならともかく、お義理でもらったってしょうがないじゃないの。ねえ、全然心こもってなくても、それでも欲しいもんなの？」

ばっさり切り捨てて、かくつと肩を落とした一角を肘でこづいた。一角はぎろつと鋭く雪音をにらみ付けると、

「うつせえ！ てめえのなんか、死んでもいらねえよ！」

ガツと怒鳴りつけて、羊羹をつかみ、そのまま口に放り込んだ。むしむし、と味わう事も無く食らう一角に、

「あつそ。あげるなんて、こっちも言ってないし」

雪音は湯飲みを持ち上げて、茶をゆっくり飲む。

その二人を前にした弓親と恋次はそつと顔を見合わせると、お互い小さく肩をすくめてしまった。

## バレンタインデー 6

草木も眠る丑三つ時。ほの白い街灯の下、人氣も無くなった道を、二人の人影がふらりふらり、と歩いていく。

「おら、しつかり歩けよ、お前は」

「えゝ、歩いてるよあ、まっすぐまっすぐ」

「どこがだ！ンなふらふらしてると、どぶに落ちるぞ！」

足元が頼りない雪音を見かねて、一角は腕を掴み、引きずるようにして歩き始めた。

あの後四人で流れた居酒屋で、例によってへべれけになるほど飲んだ雪音を、また例によって一角が送る羽目になった。

『お前のほうが部屋近いだろうが。送ってけよ』

一角はそういつて恋次に押し付けようとしたのだが、

『一角、いいの？ 雪音ちゃん直々に芋羊羹もらったことだし、恋次が思い余って押し倒すかも』

『しませんよ、そんな事！！いつまでそのネタ引きずるんすか！』

真顔の弓親の冗談に、頭まで赤くなって噛み付いた恋次が、

『送っていつて妙な噂を流されるのは雪音さんに悪いし、俺だって嫌です。一角さんがいつも送ってるんだから、そうすりゃいいじゃないですか』

と、断固拒否したので、仕方なく一角が雪音を預かったのだ。

「ったく、お前なあ、飲むなら人に迷惑かけない分だけ飲めよな。

何で俺が毎度毎度……」

ぶつぶつ文句を言うつと、雪音はなによう、と拳を振り上げた。

「チヨコ一貰えないような奴にい、そんな事言われる筋合いありません」

「チヨコはこの際関係ねえだろ！？」

まだ言うか、と吠え掛かると、雪音は突然、両手で抱え込むように一角の腕にしがみつき、酔って焦点の合わない目でこちらを見上

げてきた。

「な、何だよ……」

いきなり密着したので、ついどきまぎしてしまう。

「ねえ一角、ほんとにそんなにチョコ欲しいのー？」

雪音がそれの回らない口調で尋ねてきた。

「だっ、おま、俺はいらねえって何度も何度も言っただろ！」

人の話を聞け！と怒鳴る一角だが、雪音は動じなかった。むー、と唸って、

「もし一角があ、阿散井君みたいに素直に喜んでくれるならあ、あげてもいいと思ったのにい」

「なっ……な、何だよ、それ」

思いがけない言葉に、一角は思わず赤くなってしまった。

（こ、こいつ酔ってんのか？ それともマジなのか？）

まさか雪音が、そんな事を言い出すとは思ってもしなかったので、急にどきどきしてくる。

酒を飲んで熱くなった体で、こんなにくっつかれて、チョコをあげてもいいなんて言われると、その気が無くて、その気になってしまいそう、焦ってしまう。しかも胸が。胸が、腕に。

「ねえ、どーなのー、一角。ほんとに、チョコ、ほしくないの？」

一角を上目遣いに見上げ、つやつやした唇を尖らせて、雪音が言う。一角は、いよいよ激しくなってきた鼓動に狼狽しながら、

「俺は……その、俺は……」

ごくつと唾を飲み込んで、

「ほ……。ほ、欲しい」

言葉を搾り出すように、やっとのことと言った。

しん、と沈黙が落ちる。一角は引きつった顔で、雪音は口を尖らせたままの顔で互いを見つめあった。と、

「……ぶ、はー！ 言った、とーとー、ほしって言ったー！」

不意に雪音がげらげら笑い出した。目の前で盛大に吹き出され、事態が理解できなくて目が点になった一角は、腕を放し、腹を抱えて

笑う雪音の姿を見て、さつきとは違う意味で、耳まで赤くなった。

「てめえ雪音、からかいやがったのか！！！！」

思わず拳を振り上げると、雪音はえー違うもん、と笑いながら手を振った。

「ちゃあんとあげるよお、明日でもいいならねー。でもやつぱ欲しいんじゃーん一角う、自分に嘘ついちゃ駄目じゃーん」

「う、ぐっ……」

つい本音を言ってしまっただけに、ぐうの音も出ない一角。雪音は頼りない足取りでスキップらしきものをしながら、

「わたくしこと、十一番隊第三席の斑目一角はあ、バレンタインにチョコもらいたくって仕方ありませーんっ」と

節つけて、とんでもない事を大声で言い始めたので、

「ば、ばかやろ、やめねえかつ！」

一角は走っていった雪音を押さえつけた。雪音はきやー襲われると言いながら、またきやらきやら笑い出す。その、いっそ無邪気なまでに楽しそうな顔を見て、一角はこめかみに青筋を浮かべた。

（くそっ、こんな奴に少しでもその気になった俺が、馬鹿だった！）

「いいからさっさと帰るぞ、この酔っ払いが！」

言って、さつきより乱暴に腕を掴んで引く張ると、雪音はハイイと返事だけは良くして、歩き出す。妙に上機嫌で鼻歌まで歌いだすその能天気さに、一角は思わずげんなり、ため息をついた。

このネタでしばらくはからかわれまくるのは、もう目に見えている。いっそのこの後こいつの部屋で飲んで、酔い潰して記憶を消させようか、なんて事まで考え始めてしまう。しかしそうなれば、きつとチョコは貰えなくなるだろう。

（たかがチョコ一つに、こんなこだわってどうすんだ、俺も）

本当はチョコなんて、どうでもいいはずだ。小さな事にこだわる自分が馬鹿馬鹿しくて、しかし諦めてしまうのも癪で、一角は苦虫を噛み潰したような顔でがしと道を進んでいく。

その一角に引つ張られて歩く雪音が、痛いよーだの、歩けないだ

の言っていたが、全部無視した。

そして、その次の日。

「はい、これ。約束通り持ってきたわよ」

二日酔いの気配もなく、すっきりした顔の雪音は、一角にぽんと包みを手渡してきた。

「お……おう」

昨日の事を思い出し、複雑な顔でそれを見下ろす一角に、雪音が不満そうな声を漏らす。

「ちよつと、折角持ってきてあげたのに、お礼の一つも無いわけ？」

「うるせえっ、分かってるよ！ その……、あ……」

「あ？」

「……………ありがとう、ございましたっ！」

半ばやけくそで言い放つ。雪音は笑って、ぱちぱち、と手を叩いた。

「良く出来ました。じゃ、そういうわけで、それ開けて」

「あ？」

何でそんな事を指示されるのか、と思ったら、

「あたしも食べたいんだもん、それ。現世で有名なブランドのチョコで、すっごい美味しいんだって」

きらきら輝く目でそんな事を言い出す。一角はひく、と顔を引きつらせる。

「てめえが食いてえだけかよ！」

思いつきり怒鳴り声を上げた。しかし、雪音がけるつと「そうよ。良いじゃない、お情けであげるんだから、それくらい」と、至極冷たいコメントを返してきたので、一角はくっ、と歯を食いしばって包装紙を破き始めた。

（畜生、バレンタインなんてくそくらえだ……！）

それでも、今年は一つ、チョコを貰えた一角だった。

## バレンタインデー 6（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

一角は惚れてないといいつつ、無意識に意識（って変な言い方ですが）し始めてる感じです。そうじゃなければ、一角がこうまでチョコにこだわらないと思うので。

本当は剣八も出る予定でしたが、うまくまとまらないので削りました。

あ、恋次は雪音ラブじゃありません。いきなり惚れた腫れたの話になって、びっくりしただけです（笑）弓親はこういうイベントではしゃぐ事がなさそう。

それと、雪音が買ったのは、ゴディバのチョコです（笑）

楽しんでいただけましたでしょうか？よろしければ感想などお聞かせいただければ嬉しいです（^^）

## 振り返れば

「うゝん……」

居酒屋で一角と待ち合わせた雪音は、水を飲むように一杯目を空けた後、何やら思わしげに唸った。

「何だよ、浮かない顔だな」

珍しいこともあるものだ、とお通しをつつきながら一角が尋ねる。雪音はうゝん、と気のない返事を返してから、

「そうだ、一角。ちよつとお願いがあるんだけど」

何か思いついた様子で一角を見た。

「おう、何だよ」

何の気なしに答えた一角だったが、

「あのさ、あたしの事襲つてくれない？」

「ブバツ！」

とんでもない事を言われて、思わず酒を噴出した。

「うわ、汚い！ 何ふいてんのよ、あんたは！」

しびきがかかりそうになって、身を引いた雪音が非難がましく言うが、文句を言われる筋合いはない。一角はむせながら、

「お、お前が変な事言うからだろ？！ 何だよ襲えつて、お前実は

そういうプレイがお好みかよ」

「ガフツ！」

今度は雪音が息を詰まらせる番だった。

「違うわあほ、何だプレイって！ 変な想像するな！」

だん、と拳を卓に叩きつけ、真っ赤になって否定してくる。

「じゃあ、何なんだよそりゃ」

一角が問うと、雪音は気を取り直して咳払いをした。

「いや、あのね。さつきちよつと気になる事があつたのよ」

それは、雪音が仕事を終えて、待ち合わせ場所の居酒屋へ向かつ



て歩いていたときの事だった。

瀟靈廷の外、南流魂街十二地区にあるその店は、店主が以前、瀟靈廷の貴族の家で板前をしていたという噂もある無口な老人で、そこでしか味わえない魚料理が、通の間でひそかな人気を呼んでいる。しかし、流魂街という場所柄、近辺はあまり治安が良くないため、柄の悪い連中がうろついている事もある。

雪音がそういった連中に捕まったのは、店まであともう少しというところだった。

普段なら、死神の死覇装はこういったチンピラ避けに使えるので絡まれる事はないのだが、雪音を取り囲んだ男達は軒並み、酒か煙草か薬かは知らないが、正気をなくすほどに酔っていたらしい。

『こんなところを一人歩きなんざ危ねえなあ』

『嬢ちゃんみたいなカワイコちゃんがふらふらしてると、俺らみたいなのに絡まれるぜ？』

『なあ、ちよつと一緒に遊ぼうぜ』

『……はあ。独創性のかけらもない……』

まるで台本でもあるかのように、分かりやすい絡み方をする連中で、雪音は思わずため息をついた。あきれ返ったその様子が癪に障ったのか、男達の一人が雪音の胸倉をつかんだ。

『ああん？ 何だそのツラは？ お高くとまってんじゃねえぞ、コラア！』

頭二つ分も大きい男にぐいと引き寄せられ、足が地面を離れる。

眼前で唾を飛ばして罵倒され、雪音はムカツとした。

『うつさい、息臭い！ 近づくな！』  
ドッ！

『うがっ！』

怒鳴りつけると同時に胸倉を掴む手をぱん、と弾き、空に浮いたまま男の体を蹴り飛ばした。吹っ飛ばされた男は、ごろごろごろと勢い良く地面を転がって壁に激突し、そのまま白目をむいて気絶する。

『て、てめえこのくそ女!』

『ぶつころせ!』

一見か弱い女に仲間が一撃で倒されて、頭に血がのぼったのだろう。それまで好色な笑みを浮かべていた男達は、怒りに顔を赤黒く染めながら襲い掛かってきた。

しかし体格こそ男達と比べて劣っているが、死神として様々な戦闘訓練をつみ、いまや席官となった雪音が、酔っ払い相手に後れを取るはずがない。数分の乱闘の後、雪音はごろごろ倒れた男達の中で、一人悠然と着物のほこりを払っていた。

『つたく、相手を見て喧嘩売りなさいよっての』

運動にもなりやしない、とその場を立ち去りかけて、しかし雪音はふと違和感を覚えた。

『……?』

気絶した連中を見回し、じつと見つめ、数を数えてみる。一、二、

三、……六、七。

『あれ? 七人?』

もう一度数えなおしてみるが、結果は同じだった。雪音は自分が倒した数を思い返してみたが、何度数えても六人しかない。途中で加勢が入ったわけではないのに、なぜ一人増えているのだろう。

『んん……あ、あれ!?』

更に見直して、雪音はハツとして男の一人に駆け寄った。仰向けに倒れたその男はひくひく痙攣していて、肩の辺りがやぶけ、じんわり、と血がにじんでいる。

「……で、診てみたらそれが、明らかに刃物の傷だったのよ。しかも毒付だったみたいで。まあ、ほついても支障なさそうだったから、そのままにしておいたけど」

「お前な……道すがらに喧嘩してくるなよ……」

あっけらかんと話す雪音に、一角はげんなりした。

いくら死神とはいえ、こんなのも一応女だ。黙ってやられると

は言わないけれど、せめて事を荒立てずに逃げるとか、そういう選択をしてほしいと思うのだが。

「だって、鬱陶しかったんだもん」

至極あっさり言われ、ああそうですか、と一角は呆れた声をもらした。

「まあいいや、それで？」

ひとまず話を促すと、だからね、と雪音はきすの天ぷらをつまんだ。

「とにかく、そいつらの中で、刃物を持ち出した奴なんていなかったからさ。誰かが手を貸してくれたんだと思うんだけど、あたり見ても誰もいなかったの。」

で、よくよく見てみたらその毒も、そんじょそこらで簡単に手に入るものじゃないっぽかったんだよね」

「ああん？ てえと？」

「服に紫の染みが出来てたから、意識喪失・痙攣・貧血の症状とあわせて考えたら、多分蝶鱗毒ちやうりんだと思う。きちんとした設備が無いと生成できない麻痺毒だから、流魂街のチンピラが手に入れられるよ  
うなもんじゃないの」

「……へー。そうかよ」

話を振ったのは自分だが、毒の話を聞きながら食事をするのは何となく落ち着かない。

もうちよつと、時と場所を選んで話してほしい。しかもそんな生き生きした目をしないでほしい、と思いながら一角は平坦な返事を返して、猪口を卓に置いた。

「じゃ、何か。通りすがりの死神かなんかが、お前を助けたってわけか」

「なのかなあ、と思うんだけど。でも、何か変な感じするのよね」  
テンションが下がった一角に気づかず、雪音は小首をかしげた。

「その後まっすぐ、ここに来たんだけど、どーも……誰か、ついてきてるような気がするような」

「あん？ 何だ、その助っ人が後つけてきてるってか？」

一角はそれらしい人物がいるかと店内を見回してみるが、いるのは料理をつついて舌鼓を打っている、普通の客ばかりだ。妙な霊圧を放ってるような奴もいない。

「うーん、気のせいかもしれないけど……」

「助っ人ならとつと顔出して、恩でも何でも売りやいいもんだがな」

「あんたなら売りそうよね。しかも一生」

「うるせえよ。つーか、そこまでは話分かったけどよ、さっきの襲えつてのは、それとどう関係してくるんだよ」

「ああ、そうそう。だからね」

雪音はぼん、と手を叩いて言った。

「良い人か悪い人か知らないけど、こんなふうの後つけられるのなんて嫌だから、引つ張り出してみたいなあと思つて。また誰かに襲われるような事があれば、また手助けが入るかもしれないじゃない？ だから、一角があたしを襲うふりして、助っ人がひょっこり出てきたところを、捕まえたいと」

「ちよつと待てこら」

名案！ といわんばかりにニコニコ笑う雪音に、一角はべし、と突っ込みを入れた。

「それ、下手したら俺が毒にやられるって事じゃねえか。何勝手に人をおとりにしようとしてんだ、オイ」

「えー、大丈夫だつてえ」

雪音は無責任にひらひらと手を振って断言する。

「一角はケダモノ、もとい獣の勘が鋭いから、刃物飛んできたらすぐ気がつくつて」

「言い直しても、失敬な内容だつて事は変わりねえだろ！！」

そんなこんなで、食事を終えた二人は、とつぷり夜が暮れた流魂街をふらつた。あの後いつもの口論をした後、結局雪音にねじこ

まれて、一角はこの帰り道で彼女を襲うふりをする羽目になってしまった。

（まったく、何で俺がこんなことしなきゃならねんだ）

ぶつぶつ言いながら周囲を探ってみる。先ほどと同じように霊圧は感じられないが、よくよく気をつけてみると、確かに何かこそこそした気配が、感覚にひっかかる。

戦闘経験が少なく、霊圧も読めない雪音はともかく、研ぎ澄まされた一角の感覚でも、集中しなければ分からない程の気配だ。

（こりゃ、よっぽどの奴だな）

油断していると、本当に下手を打つかもしれない。しかしこいつを引つ張り出せば、なかなか面白い戦いが出来そうだ。

一角はうんざりした気分を改め、口の端に笑みを浮かべながら、前を歩く雪音を見た。これから始まる芝居のためか、妙に明るい声で歌を歌い、上機嫌を装っているが、何となく不自然だ。

「お前、わざとらしいぞ」

小声で言つと、雪音はこちらを振り返ってなによう、と声を絞って返事する。

「普段通りにしなきゃ、バレちゃうじゃないの。いいからほら、早くしてよ」

「お前のそれがもう、普段通りじゃねー……。まったく、んじゃ始めるぞ」

ざ、と地面を蹴って、一角は雪音の背後からガバツと抱きついた。雪音の体が腕の中にすっぽりおさまって、あれこいつこんなに小さかったつけ、と思った一角は、

「うきやあー!!」

「うお!？」

演技とは思えない雪音の甲高い悲鳴に、思わず驚きの声をもらしてしまった。

「な、何すんのよ、ちょっと!」

雪音の思いがけない非難に、一角は面食らう。

「何って、お前襲うふりしてんじゃねえか」

「ば、馬鹿、襲うつてのは斬りかかってくるとかそういうのでしょー!?」

「あ、そうなのか？」

てつきりこつという事だと思っていたので、間の抜けた返事をしてしまう。

「そ、そうに決まって、ってちょっとあんたどこ触ってんのよ!」  
「ん? って、あ」

一角は自分の手を見下ろして動きを止めた。雪音がじたばた暴れたせいで、最初腰にまわしていた手がその上にずれて、胸に。しっかりと。

「い、いやー! 変態いー!! はなせー!!」

本気で顔を真っ赤にして、雪音はさらにもがいた。

「ば、馬鹿、落ち着けて、今離すつ……!」

慌てた一角が雪音を解放したその時、ヒュ、と風を切る音が耳に届いた。

「!」

バツと上体を後ろにひくと、鼻先を細い小刀が掠める。それが視界から消えるより先に、一角は飛んできた方に潜む影を見つけた。

「そこか!」

地面をえぐる勢いで、そちらへ跳ぶ。影は身を翻して逃げ出したが、身構えていた分、一角の動きの方が早かった。あつという間に追いつき、服の端をつかんで力任せに引き、抜いた刀を首に突きつける。

「くっ」

「人の後こそそそつけまわしやがって、てめえ一体……あん?」

鋭い誰何の言葉は、途中で止まってしまった。

一角に羽交い絞めにされた男は、目元以外の全てを隠した黒装束に身を包んでいる。実際会った事はなかったが、この格好をしている人間がどつという仕事をしているか、知識として知っていたから、

「てめえ、隠密機動の奴か？」

まさかと思いいながら尋ねると、男はびくつと身じろぎして、一角の足を踵で踏みつけた。

「いてっ！」

さほど痛くはなかったが、不意の攻撃に驚いて、一角は手の力を緩めてしまった。男は一角の腕の下からふつとすり抜け、そのまま走り去ろうとする。が、後から追いついてきた雪音に進路を阻まれた。

「雪音様、あつ！」

とつさに名前を呼んだ、という雰囲気で、男が硬直する。息を切らして足を止めた雪音は、ぎょつとして目を見開いた。

「何、あんた誰？ 何であたしの名前を知ってるの？」

「……！」

狼狽した男は他の方角へ足を向けかけたが、しかし一角がすばやく足を払い、地面に転ばせた。

「うぐっ」

「じたばたすんじゃねえ、この野郎！」

背中をだんつと踏みつけて、一角は一喝する。その荒っぽさに、雪音がちよつとやりすぎ、と注意したが、こうでもしないとこの男は逃げてしまっただろう。

「てめえ、どうやら雪音と知ってて、後つけまわしてたみてえだな。何のつもりでんな事してたのか、吐けコラア！」

「う、うぐぐっ……！」

「い、一角一角、それじゃ息できないってば！」

\* \* \*

夜も遅く。常ならば早々に寝付くため、この時間にはすでに真っ暗になっているはずの総隊長の私室は、時ならぬ客人の訪れで、煌々と明かりをともしていた。

寝巻きに着替えた山本は、前に座した雪音の顔を見て、ひげを撫でると、

「むう。バレたか」

どこか拗ねているような声で呟く。

「バレたか、じゃありません！」

対して雪音はきつと眉を吊り上げ、脇に控えて小さくなっている男を指差す。

「この人があたしの後つけまわしてたの、お爺様のご命令って聞いたんですけど！」

「梅、口を割つてしもうたのか」

「は……申し訳ございません。話さねば、碎蜂総司令官へ掛け合うと雪音様が仰られまして……そこまでの大事にしては、と」

「むう……致し方ない。まあ、そう怒るな、雪音」

「これまでずうつと、朝となく夜となく、知らない人が付きまತ್ತてたなんて知ったら、怒るに決まってるでしょう！ 何でそんな事命令してるんですか、あたしの監視ですか！？」

「いやいや、それは違うぞ、雪音」

山本は慌てたように手を振って否定した。悩ましげに眉を八の字に描き、

「わしはのう、おぬしの身が心配でならんのじゃ。前々から思っておったが、おぬしは普段しっかりしておるが、時々周囲に対する警戒心が全く欠けてしまふじやろう。

特に酒を飲んだ時の無防備ぶりは酷い、あれではおぬしの身になんぞ間違いが起きてしまふやもしれぬ」

「……そこはまあ、否定できないですけど」

痛いところをつかれて、勢いをそがれる雪音。山本はそうじゃろう、と我が意を得たりとばかりに大きく頷いて、

「じゃからの、万が一にもおぬしの身に危険が及ばぬよう、そのの梅がばでいーがーどとして、つかず離れずおぬしを守っておったのじゃ。



おぬしは気づかなかつたろうが、梅が間一髪のところを助けたことは、これまで何度もあつたんじゃぞ」

「何度もつて……。……ちょっと待つてください、お爺様。もしかしてこの間、しつこくナンパしてきた男が、いきなり泡吹いて倒れたのは……」

「うむ。梅の手柄じゃの」

「七年前、付き合つてた人との別れ話がこじれて殴られそうになつた時、謎の爆発で吹っ飛ばされたのも」

「あれはひどい男じゃつたの！。誠実そうな奴と見ておつたのだが、ただの小心者で」

「……………お・じ・い・さ・まああ！」

雪音はパンツ！と卓を叩き、怒りの形相で山本に怒鳴りつけた。「自分の身くらい、自分で守れます！。日常生活でひそかに人につけまわされるなんて、絶対嫌です！。今後一切、こんな事は止めてください！」

「し、しかしのう、雪音」

「問答無用！」

言い募ろつとするのを、指を突きつけて黙らせる。

「お爺様には色々とお世話になりましたが、それとこれとは別！。もしまた、こんな事してあたしの生活を脅かすような事があれば、今後一切、お爺様とのお付き合いをやめさせてもらいます！」

「な、なんじゃと！？。それは何か、もうおじいちゃんとは呼んでくれぬということか！」

「当然です！。おじいちゃんが孫の監視なんてしないでしょが！。というかそもそも、総隊長という責任ある立場で職権濫用するなんて最低です！。見損ないました！」

「うつ、く……」

山本と雪音はそのままにらみ合った。が、やがて山本ががつくりと肩を落とし、

「……分かつた、おぬしの言うとおりじゃ。今後はこのような事は

一切しない。わしの名に賭けて誓おう」

渋々、といった様子で宣言する。雪音はなおも疑わしげに山本を見ていたが、あんまりにもしょぼんとした様子が哀れだったので、ため息をついた。

「分かりました。じゃあ、今日はこれで失礼します。夜分遅くに突然、申し訳ありませんでした」

くるっと背を向けて部屋を出る。かつてないほど激怒した雪音が機嫌を直してくれた事にほっとして、胸をなでおろした山本だったがしかし、

「……明日、誓約書持つていきますからね！」

戻ってきた雪音から強い口調で放たれた言葉に、もう一度肩を落として、

「……うむ、分かった」

小さな声で呟いたのだった。

門柱によりかかって夜空を見上げていた一角は、地面を噛むような強い足音を聞きつけ、身を起こした。

「よう、話はついたのか」

「一応ね……」

雪音はまだ怒りが去らない様子でぶつきらばうに言い捨て、門をくぐってそのまま歩き続ける。肩を怒らせた後姿に、

（総隊長、こいつの逆鱗にふれちまったみてえだなあ……）

と思いながら、一角は声をかける。

「落ち着けよ、雪音。総隊長だって、悪気があった事じゃなかったんだろ？」

「あたしに何かあった時のために、張り付かせてたって言ってたけど」

「ははあ、なるほどな。過保護な総隊長らしいや」

「悪気がなきゃ何してもいい、ってもんじゃないわよ、あり得ない、信じられない」

「ま、要はお前の身を案じてだろ。やり方はそりゃあ、まずかったかもしれないが、そんだけお前の事可愛がつてるって事じゃねえか。怒るのも仕方ねえけど、あんまりとっちめてやんなよ。じいさん凹むぞ」

「……」

雪音はふう、と息を吐き出して、歩調を緩めた。一角が横に並ぶと、表情はまだ不満げだったが、うつすら頬が赤くなっている。

「……分かってるわよ、心配してもらってるのは。あたしなんかに目にかけて、大切にしてくださるのは、本当にありがたいことだと思ってる」

だけど、と再び眉間にしわを刻んで、雪音は拳を握り締めた。

「今度のはどー考えてもやりすぎでしょ！ あたしが知らなかっただけで、これまでやってきた事全部、総隊長に筒抜けだったのよ！？ 昔の彼氏の話まで知ってて、あたしは顔から火が出る思いだったわよ！」

「あー……」

これはさすがにフォローできない。言葉を濁して半笑いを浮かべた一角は、彼氏という言葉でふと連想するものがあった、何も考えずに口に出した。

「そつえば、お前よ」

「え？」

「意外と胸デカイんだな」

「……」

次の瞬間、様々な怒りを込めた雪音の拳が、一角の顔にめりこんだのは、言うまでもない。

## 振り返れば（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

バレンタインに出てきた梅さんのお話、おじいちゃん怒られるの巻。  
ついでに一角役得です（笑）

作品は楽しんでいただけましたでしょうか？よろしければ感想など  
お聞かせいただければ嬉しいです（^^）

## それは月のごとく

死体は嫌いだ。

何も語らない肉塊にすぎないから。

廊下を歩く。ひたすら歩く。行き会った人達が皆驚いた顔で道を開けたり、何か声をかけてくるけど、全て無視して歩く。

煩わしかった。この目に、この手に触れるもの全てが煩わしかった。何もかも無くなってしまえ、と叫びたくなるほど、煩わしかった。

「！」

角を曲がったところで、壁にぶつかった。痛い。したたかにぶつけた鼻を押さえてうめくと、

「雪音？」

低い声が上がから降ってきた。見上げたけれど、体の距離が近くて相手の背が天を突くほど高いので、顔が見えない。無言のまま見上げているこちらを、相手のがぞき込んできた。

「何だお前。何泣いてんだ」

「……らき……」

更木隊長だ。名を口にして、それがきっかけになったかのようにど、と胸に熱い固まりが突きあがってきた。堰が切れる。

「う、え」

「あ？」

「……う……あ、あああああつ！」

抑えられない叫び声が喉を突き破る。あたしは更木隊長の服にしがみついて、子供みたいに泣き出した。一度あふれた悲鳴は、止める事が出来なかった。

「……で、何をそんなに泣いてやがんだ、お前は」

どれくらいの時間が経つたろう。泣きじゃくるあたしを廊下から適当な部屋に連れ込んで、仕方なしという感じで付き合ってくれた更木隊長が声をかけてきた。

あたしは腫れた目をこする。

「……あの……十三番隊の」

「ん？」

「十三番隊の、三席が」

「ああ。虚にやられた奴か」

「その、救護……と、言うか。隊葬の、準備をしてて」

ここに戻ってきた都さんは無惨な姿だった。胸から下を食いちぎられた姿は、その顔が生前と変わらぬ美しさを保っているだけに、趣味の悪いオブジェのようだった。

都さんは、賢く、美しく、強い人だった。いつでも明るく笑っているような人だった。尊敬していたし、大好きだった。

「そしたら、海燕副隊長も、亡くなったって、聞いて」

体は見なかった。任務に同行した朽木家のルキアちゃんが、海燕副隊長の実家の志波家へ渡しにいったと聞いた。

浮竹隊長から聞き出した死に様は、都さんのそれと同じように悲惨だった。虚に斬魄刀の能力を無効化され、体に乗っ取られ。

最後は、斬った、と。淡々と語られたからこそ、余計に、浮竹隊長の無念さが伝わってきた。でも浮竹隊長から漂う死臭にどうしようもなくなつて、あたしはその場から逃げ出した。

「なんで」

なんで、あんな死に方をしなければならなかったのだろう。海燕副隊長も、都さんも、これからずっと十三番隊にいると思ってた。

どんな事があつても、いつでも笑ってそこに居てくれると思ってた。「なん、で」

そう思ったら、枯れたと思った涙がまた溢れてきた。涙をぬぐう気力もなくて、畳にへたり込んだあたしを、

「そりゃ弱えからだろ」

更木隊長が突き放した。言葉の鋭さにぎくりとして顔を上げると、更木隊長は詰まらなそうな顔でこっちを見下ろしている。

「あいつらが死んだのは、糞虚より弱かったからだろ。運が無かったってこった、諦める」

「よわ、弱い？」

この人は、誰の事を言っているんだろう。一瞬本気でそう思った。海燕副隊長と都さん、どちらも尋常ならざる霊圧の持ち主で、虚なんか目じゃなくて。

「弱えから死んだ。ただそれだけの事じゃねえか。それだけの事で、何でお前が、目玉が溶けそうなほど泣くのか、わからねえな。お前、十三番隊でもねえだろうが」

「……」

あ、く、と口が動く。更木隊長を非難しようとして、罵ろうとして、でも声が出ない。

急所をつかれた。そう思った。そうだ、あたしは十三番隊じゃない。でも海燕副隊長と都さん、二人と仲良くさせてもらったからその死は、悲しい。

だけど、そうじゃない。今あたしが悲しいのは、苦しいのは、そのせいじゃない。

「だって」

体を食いちぎられて横たわる都さんの顔を見て。

浮竹隊長から海燕副隊長の死に様を聞いて。

「だって、あたしにはもう、何も出来ないから」

どれだけ治療術を施そうと、どれだけ良薬を作ってもその口に含ませようと、もう彼らは生き返らない。

自分には何も出来ない。力がない。それが、

「くやし、くて」

そこからはもう言葉にならなかった。泣いて、叫んで、暴れて、やがて疲れて眠りに落ちた。

起きた時には自分の部屋に戻されていた。誰かが運んでくれたのだろう。ふと思いつく、眠る直前、大きな手がぐしゃぐしゃ、とあたしの頭を撫でたような気がした。

更木隊長が？ そう思っ、まさか、と首を振る。

あたしが泣いていた間、更木隊長がどうしていたかは分からない。途中で嫌になつて逃げたのかもしれない、覚えていない。

あたしは枕元の鎮静剤を飲んで、目を閉じた。夢の無い眠りに落ちて、もう二度と起きなくなかった。

……  
チ  
リ  
ッ



## それは月のごとく（後書き）

ここまでお読みいただき、ありがとうございました！

更木隊長って結構優しいところがあると思うんです。という夢です

（笑）

浮竹隊長はルキアの事を考えて、斬った人の名を伏せてます。

見舞い

……アハ……

ク……クフ……

……フフフ……

形の良い唇が笑う。軽やかな笑い声を漏らす。なのに、なぜこうもざらざらとして聞こえるのだろう。

……アハ……

ク……クフ……

……フフフ……

白い手が頬に触れる。しゅ、と動いて、口の上に被さってくる。氷のように冷たい。あまりの冷たさに、唇が動かせない。

……アハ……

ク……クフ……

……フフフ……

影が被さってくる。動けない。息が出来ない。苦しい。助けて。誰か。

「ネエ」

甘い声が耳元で囁く。

「ココカラ ダシテ」

嫌だ！叫ぼうとする。

「主の時ではない」

低い声が耳元で囁く。

……アハ……

ク……クフ……

……フフフ……

「イマハ」

手が外された。影が遠ざかる。ふわり、と暖かいものが顔に触れた。

「寝よ。未だ、早い」

低い声に引きずられるように、意識が闇の中へ落ちていく。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

部屋の中をのぞき込むと、雪音は寝台の上で身を起こしていた。黒い死覇装ではなく、白い寝間着に身を包んだ雪音は、いつもよりも体が小さく見える。

「……」

入り口から見える雪音の横顔は、覇気が無い。ぼりぼり、と頬をかいて、ちよつと迷う。

だが、このまま回れ右をしたところで、今更戻れる訳がない。んー、と口を曲げて、ようよう足を踏み入れる。

「よー雪音！ 元気か？」

「……一角」

つとめて明るい声で言うと、雪音はゆるり、とこちらを向いた。頬のこけたその顔はまるで別人のようで、ぎよつとする。

ぎよつとしたが、俺はすぐに表情を戻した。どかつ、と乱暴に椅子に座り、

「何だよ、寝込んでるって話だから来てみりゃ、存外元気そうじゃ

ねえか。もしかしてお前、ずる休みでもしてんのか？　せつかく俺が、見舞いの品まで持ってきてやったつてのによ」

ぽいっとばかりに、菓子包みを雪音に渡す。

受け取った雪音は、えらくゆっくりした動作で見下ろして、それから俺を見た。ゆる、という感じで、気の抜けた笑みを浮かべる。

「わざわざありがとう。後で頂くわ」

「……おう」

毒気がないどころか、生気さえ感じられない。俺は思わず眉根を寄せた。

雪音がこうなった原因は聞いている。

十三番隊の副隊長と三席が虚にやられた。こいつはその二人に懷いていたから、無残な最期を見聞きして、すっかり落ち込んだらしい。倒れて寝込んだ。一時は、命の危険すらあったと聞いた。

卯ノ花隊長がつきつきりで看病したお陰で、今はこうして起き上がれるようになったが、それでもまだ食が細く、人を寄せ付けようとしなない。

こうして近くにいても、雪音の意識はどこか遠くいるようだった。変な感じだった。俺の知ってる雪音は、酒飲んでからから笑って人に絡みまくる迷惑な奴で、憎んでるじゃなかつたかと思えるほどの悪口を叩きながら、手際よく、それでもって意外と優しく手当てをするような奴だった。

こんな空ろな目をした雪音は、よく似た別人のように見えて、落ち着かなかつた。

「あー、つと。そうだ、雪音。俺以外にもさ、見舞いに来てくれた人がいるんだよ」

自分でもわざとらしいごまかし方だと思える口調で、俺は言った。雪音がふ、と首を傾げて「誰？」静かな、無関心な声で問いかけてくる。

居たたまれなくなつて目をそらし、俺は入り口に向かって声をかけた。

「隊長！ 入ってきてくださいよ」

「おう」

俺の言葉を待ってましたとばかりに、入り口からぬ、と更木隊長が顔を出した。雪音の、驚いたように息を飲む音。それが次の瞬間には、

「……えっ。更木隊長……く、草鹿ふくたいちよう?!」  
驚きの声に変わった。

「ったく、何で俺が見舞いになんか行かなきゃならねんだ、おい」  
ぼりぼりと胸元をかきながら、更木隊長が言った。その後に随伴する俺は、平身低頭する。

「すんません、わざわざ」

「あいつのせいで、俺あいらぬ疑いをかけられたんだぞ。俺が泣かしたんじゃねえってのによ」

「……ですね」

頷いて、俺はため息をつく。

雪音が寝込むようになったきっかけを作ったのはこの人だった。後でその事情を聞いてみたら、隊長が廊下で行き会ったところで雪音が隊長の服を掴んでいきなりわんわん泣き出して、どうしようもないから部屋に連れ込んで泣き止むのを待った……という事だった。

が、状況だけ見れば、どう見ても更木隊長が雪音に悪さして泣かしたとしか取れない。

元々、気の強い雪音が泣き崩れるなんていう、普段からは想像できないような状況のせいもあったんだろうが、外から見た隊長の評判自体が芳しくないのも、噂はまことしやかに広まった。

そこに隊長への悪意も手伝って、噂はしまいには「更木剣八が、四番隊隊員を犯して殺そうとした」なんてとんでもねえ内容にまでなって、総隊長まで出てくる羽目になっちまった。

幸い、雪音を診た卯ノ花隊長の進言で、疑いは晴れたが、こんな

騒動になった原因に、隊長が近づきたくないと思うのも尤もだろう。俺だって、雪音がこう何日も寝込んだりしなきゃ、見舞いなんて行く気にはならなかった。

弓親と一緒に、噂の収束に奔走させられて、稽古も出られなかったんだからな。

「ったく、そもそも、見舞いならやちるだけで良かったじゃねえか。雪音の奴、やちるときゃーきゃー騒いでるしよ」

「あー、いや、まあ……あいつ、可愛いものとかちっこいものとか、好きらしいんで。隊長にもきちんと謝りたかったって言うってたじゃないスか」

隊長に迷惑かけた事を思い出した雪音が、慌てて謝ってくれたから、助かった。

隊長本人に、副隊長が隊長から離れないもんだから、一緒に来てもらったとはいえなかったしな。

ついでに、隊長の霊圧にあてられたら、雪音の具合がもっと悪くなるだろうから、早々に退室してもらった、なんて事はもつとない。

もごもご口ごもる俺をちらつと見た隊長は、

「お前、雪音に惚れてんのか？」

「ハア?!」

予想外の質問に、思わず声が裏返る。何の冗談かと見上げるが、隊長は至極真面目な顔をしている。つか、この人は、喧嘩が絡まない日常会話ではあんまり笑わねえんだよな。

「何でいきなり、そんな事になるンすか」

「妙に奴を気にかけてやがるし、さっきからやけに口が重いからよ。雪音の前で、しどろもどろだったじゃねえか」

「それは……いや、隊長、普段のあいつ知ってます？ あいつ、いつもだったら、こっちの神経逆なでするような事をポンポン言う奴なんスよ。」

時々叩つ殺してやろうかと思うくらいなのに、それがあぁもボケ

「つとされちゃ、調子も狂いますよ」

「ま、確かに」

隊長も雪音の毒舌を知ってるらしい。納得して頷いた後、けどな、と話を続ける。

「なんにしても、あの女はやめとけ。深入りすると、ろくな事にならねえぞ」

「……何ですか？」

隊長が、女の事をこうも言うのは珍しい。好奇心半分で聞き返す。隊長はごき、と首を鳴らした。

「あの女、こっちが怪我一つするだけで大騒ぎするだろ。」

どっかに行つて戻ってくるたんびに、ああもぎゃんぎゃん泣き喚かれてみる。こっちの身がもたねえよ」

そこで一旦言葉を切った後、隊長はつけたした。

「もし男が死んだら、あいつも死んじまうだろう。俺だったら、そんな女はいらねえ。自分で生きられねえ奴の面倒なんざ、見てられるかよ」

「……そうっスね」

俺は廊下に視線を落として、言った。

親しく付き合つてた十三番隊隊員の死に接して、雪音は打ち倒された。自分の命さえ無くしちまいそうなほど、憔悴しちまった。それは多分、親しみを感じていただけ、より大きな衝撃で。

俺は、思わず足を止めて立ち尽くした。

部屋を出る直前、一角、と雪音が俺を呼んだ。振り返ると、副隊長を膝の上に乗せて頭を撫でていた雪音が、俺が来たばかりの時とは全く違う顔で笑った。

「ありがとっ、一角。元気出た」

ぱ、と光が咲いたみたいな綺麗な笑みだった。

俺は一瞬言葉を失った。慌てて、

「次はお前が見舞いしろよ。また、世話になりに来るからな」

ごまかすように言うと、雪音はうん、と嬉しそうに答えた。

「どうした、一角」

俺は瞬きをした。雪音の顔が掻き消え、少し先に行ったところで立ち止まった隊長が、いぶかしげにこっちを振り返っている。

「あつ、すんません！」

急いで駆け寄りながら、俺は自分の魄動が妙に早く鼓動してる音を聞いた。

手を、伸ばしてはいけないのかもしれない。頭の片隅で漠然とそう思っ、そんな事俺には関係ねえだろとすぐに打ち消した。



## 違う人

「鑑原さん、失礼します」

花太郎が声をかけながら中に入ると、雪音は窓を開けて、かまち框に頬杖をついていた。

彼女は花太郎の声など聞こえなかったようで、風に吹かれるままぼんやりと、自分の右手を眺めている。

陽炎のように儚げな雰囲気は消えたものの、それは普段とは程遠い生氣のない表情で、見るものをぎくりとさせる。

「……鑑原さん？」

花太郎はもう一度、おそろおそろ声をかける。雪音がハッとわれに返った。

「ああ、花君来てたんだ。何？」

「いえ……あの、大丈夫ですか？ ご飯食べました？」

まだ本調子じゃないのか、気にかかって尋ねたが、返事代わりに米粒ひとつ残さず綺麗に平らげられた膳がずい、と差し出される。

「この通り、もう大丈夫よ。ごめんね、花君にまで世話かけちゃって」

しゃきしゃきとした語り口は、以前のそれと同じだ。膳を受け取った花太郎は安心して、思わずほ、と息を吐き出した。

「そんな事良いですよ。この調子なら、もうそろそろ復帰ですか？」

「うん、明日から。今日の午後には、隊長にご挨拶してくるわ」

「そうですね、良かったです。鑑原さんが居ないと、皆落ち着かないんですよ。十一番隊の人達も、一日に何回も雪音さんの事聞いてくるし」

世辞でなく正直に言ったのに、雪音は顔をしかめた。

「それ、復帰しないでほしいと思ってるからじゃないの？ あたしが出ると、大概喧嘩になるし」

「あはは……」

十一番隊の隊員がどう思ってるかは分からないが、雪音が担当すると喧嘩になるのは事実なので、花太郎は引きつった笑いをあげた。膳を棚の上に置き、薬の袋を取って残量を確認する。復帰後もしばらくは薬を服用するかもしれない、もう少し補充しておこうと鞆に手を入れた時、

「ねえ、花君」

ふ、と息を吐いて、雪音が花太郎を見た。思いがけず真剣な眼差しに、

「な、何でしょう」

どきつとして姿勢を正す。雪音は何度か小さく口を開き、躊躇うように閉じた後、首を振った。

「いや、何でもなし。……ああ、悪いんだけど、ちょっとあたしの部屋に行つて、死覇装取つてきてもらえるかな」

「え、あ、はい」

身構えていたのにほぐらかされて、花太郎はどきまぎと返事をした。薬を補充し、膳を持ち、慌しく部屋を出て行く。

だが、出て行く直前に振り返った時、雪音は寝台に腰掛け、また自分の手をじつと見つめていた。

その顔は真剣で、人を寄せ付けない冷たさを感じさせて、花太郎は慌てて目をそらした。なんだか、違う人のように見えて、少し怖かった。

## 覚悟

「明日より、職務に復帰します。このたびは隊長や隊員の皆様にご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

死覇装に身を包み、畳に深々と頭を下げた雪音に、烈は穏やかな微笑を浮かべた。

「構いませんよ。体のほうは、もう大事ありませんね？」

確認をかねて問う。雪音は顔を上げ、肃々とした表情で頷いた。

「おかげさまで、元通りです。休んでしまった分だけ、精一杯働かせていただきます」

「そうね」

烈はゆるりと言葉を返し、一呼吸置いた。雪音の目を見つめて、それで、と言葉を継ぐ。

「それで、答えは出ましたか？」

「……」

雪音は口元に力を入れた。それまでまっすぐ烈を見つめていた視線がぶれ、落ち着きなくさ迷い、畳の上に落ちる。

「……いいえ」

沈黙を落とした後の声は低かった。

「療養中、ずっと考えました。今も考えてます。問いは問いを呼び、答えは一步も進まずに堂々巡りで、どうしようもありません」

膝の上に置いた手が、ぎゅ、と握りこぶしを作る。烈はそれを、好ましくも、痛ましくも思った。

この生真面目な娘が抱えた問題は大きく、それを解決する手立てを見つける事は容易ではなく、手助けも出来ない。出来るのはただ、上官として言葉を与える事だけ。

「では、もっと長い休養を取りますか」

「……」

びくつとして、雪音が烈を見た。感情の表れやすい顔に、動揺が

揺らめいている。

「……それは、除隊せよという事でしょうか？」

「あなたがそう取るのなら、構いません」

意地悪な言葉。そう自覚して、烈は唇に苦笑が浮かびそうになるのを抑えた。ここで微笑めば、今の言葉が冗談と思ってしまうかもしれない。

「私達は人の命を預かっています。例え親兄弟が目の前で傷つき息絶えようとしていても、最後まで命を救う事を躊躇ってはいけません」

「あたしは！」

そんな事はしない、と言いたかったのだろうが、烈は雪音の言葉を遮った。

「今回の件であなたは、親しい人の命が失われる悲しみを、言い換えれば恐怖を知りました。その恐れはあなたの中に根を下ろし、決して消え去ることはないでしょう。」

この先、今そこに、命を失いそうになっている人を前にした時、あなたは惑う事なく、手を差し伸べる事が出来ますか？

……そしてまた、その時自制を無くし、己を失う事は無いと、誓えますか？」

「……っ」

雪音はもう一度視線を落として、眉間にしわを刻んだ。病床でこの事を考えなかったはずはないが、烈にあらためて突きつけられ、動揺しているのだろう。

烈は語調を荒げるでもなく、穏便な表情のまま、雪音に問うた。恐怖のあまり、自分の手で最期を看取る事を恐れまいか。結果、救えたはずの命を、見捨てる事はしまいか。

そして、命を救う覚悟がないのであれば、雪音が四番隊にいる意味があるのか、と。

重い沈黙が落ちた。

うつらかな日差しが縁側から部屋の中に滑り込み、畳に光を投げかける。

小鳥が飛来し、庭の木に宿った。小さな足で跳びながら枝を移動し、軽やかな声で歌っている。

どこからか篠笛の音色がかすかに聞こえてきて、それに唱和する。歌は時に合い、時に離れながら、どこまでも続くように思われたが、不意に小鳥が飛び立って途切れた。篠笛もびたり、と止まり、痛いほどの静寂が辺りを占める。

「あたしは」

不意に、雪音の声が閑寂を破る。雪音は動揺の色濃い表情のまま、それでもまっすぐ烈を見つめ、言った。

「傷ついた人を見る事が怖いです。いつも、いつも、逃げ出したくなります。それは今も昔も変わりません。」

「だけど」

雪音の顔が歪む。泣き笑いのように。

「だけど、逃げて、あたしの願いは変わりません。」

怖くて、怖くて、仕方ないけど、でもあたしは、人を救いたいんです。自分の力で人を助ける事が出来るのなら、そうしたいんです。……いえ、そうします。これから先、あたしの掌中で命を失う事があっても、今度は、逃げずに」

「そうですか」

烈はやんわり微笑み、立ち上がって、雪音の前に膝をついた。病でこけた頬をそっと包み込み、

「それならば、強くおなりなさい。あなたは弱く、儚い。その手で多くの命を救いたいと願うのであれば、あなたはもっと強くならなければなりません。身も、心も、何もかも。」

鑑原五席。

強く、毅然<sup>つよく</sup>おなりなさい。私は、あなたに期待していますよ」

雪音の目が揺れた。潤み、激しく瞬きをする。辛うじて泣くのをこらえて、雪音は小さく頷いた。

「はい。ありがとうございます。」

## 順位

「えーっと……」

戸口からひよこつと、中を覗く。部屋の中には男達がたむろして  
いて、杯を傾けたり、話に興じたり、さいころを転がしたりと思い  
思いの時間を過ごしているようだ。黒々とした人波を見渡してい  
ると、戸口の近くで笑い声をあげた男が気がついた。げ、と顔が歪む。  
「四番隊の暴力女じゃねえか！ 十一番隊に何の用だ！」

「四番隊？」

「アア？ 鑑原かよ」

ざ、と一斉に顔がこちらに向いて、雪音は思わず「うわ」と呻い  
てしまった。

「マキマキうるさい。あんた達客が来たくらいで、いちいちガンつ  
けてんじやないわよ」

「マキマキ言うな！」

「お前なんか客じゃねえよ！」

「用がねえなら帰れバカヤロー！」

キーツと猿のように歯を剥く荒巻達に、雪音はしつ、しつ、と手  
を振って、もう一度部屋の中を見渡した。居ないなあ、と口を曲げ  
たところで、

「何だ、この騒ぎは？ ……つて、雪音じゃねえか」

後ろからぬ、と一角が顔を出した。途端、静かになる隊員たち、ぱ  
つと笑顔になる雪音。

「一角！ 良かった、あんた探してたのよ。何処行ってもいないん  
だもん、ぐるつと歩き回っちゃった」

「……おう」

一角はこころもち上体を後ろにそらした後、「そりゃ悪かったな」  
と呟いた。何かをこまかすように頭をかいて、

「俺に何の用だよ。お前、今日非番だろ。確か」

ぶつきらばつに問う。対して雪音は、腰をかがめて足元の荷物を取り、それを一角に差し出した。

「お礼渡そうと思って。遅くなっちゃったけど」  
「礼？」

雪音が差し出しているのは、手漉き和紙に包まれた日本酒だった。辛口その酒は確かに一角の好みではあったが、雪音から貰う筋はない。何の事かと眉根をよせる一角に、雪音はにこにこ微笑んだまま言う。

「ほら、あたしが寝込んだ時、お見舞いに来てくれたじゃない？  
あの時お菓子も貰ったから、そのお礼」

「ばつ……」

一角は一瞬言葉に詰まった後、ギロツと部屋の中をにらみ付けた。息を潜めて成り行きを見守っていた隊員たちが、射殺せそうなその眼光に怯え、慌てて目をそらす。

一角はひとまず戸口から離れた廊下へ、雪音の腕を掴んで移動して、

「ばつかやる。そんなの、わざわざ礼に来るほどの事でもねえだろ。  
俺は何にもしてねえ」

語調強く言うが、雪音は首を振った。

「そんな事ないよ。一角のおかげで元気になったんだもの、感謝してるんだって。だから、お礼。」

好きよね？ 地獄車。それとも雪原のほう良かった？」

「だつ、から、そういう事じゃなくてだな……」

「あー！ ゆつきーだあ！」

一角の焦りを吹き飛ばす甲高い声が響き渡る。と、雪音の背筋が弦のように伸びて、

「ああ！ やちる副隊長！」

一角の手に酒瓶を押し付けたと思ったら、あつという間に目の前から消える。振り返ると、雪音は至極幸せそうな顔で、草鹿やちるを抱きしめていた。



「やーん、お会いしたかったです、やちる副隊長！」

「むぐむぐ……ぷは、苦しいよゆっきー。でもゆっきー、元気になったんだー！ 良かったね」

「はい、おかげさまで！ ご心配をおかけしました。でも、副隊長に氣遣っていただけるなんて、雪音はソウル・ソサエティーの幸せ者です！」

あつこれ、やちる副隊長に食べていただきたいと思って持ってきました。福田屋の金平糖ですよっ」

「わーい、ふくだやのこんぺーとー、おいしいよね。一緒に食べようよ、ゆっきー！」

「はい、ご相伴に預かります！ きゃっ」

雪音は、周囲に花を撒き散らすような勢いで恥じらいながら、やちると手をつないでとことこ去っていく。一人取り残された一角は、しばし硬直した後、手の中の日本酒を見下ろし、

「……ついだよ。俺は。」

無然とした。それから、別にそれはかまわねえんだけど、と言いつくをする。誰が聞いているわけでもないのに。

遠いようで近いその彼方に

菊の花束を手に、道を進む。

足取りは、重い。

「……ふう」

何度目になるか分からないため息をついて、あたしは足を止めた。自分の気持ちを落ち着かせるために見上げた空は、くすんだ青色で、少しも気が晴れなかった。

『海燕さんのお墓参りに行って来ます』

職場に復帰してようやく以前のペースがつかめた頃、あたしは思い切って烈様にそう申し出た。烈様はあたしの気持ちを見透かすように目を細め、送り出してくれた。この花束は、烈様からの手向けだ。隊舎にあつた線香も一束くすねて、あたしは海燕さんの実家へ向かっている。

だけど道のりは遅々として進まなかった。少し進んでは足を止め、また歩き出しては立ち止まってしまふ。

（本当は、行きたくないのかな、あたし）

海燕さんは都さんの旦那さんだったから、二人でいるところに混ぜてもらって、ご飯を食べにいたり、お花見に行ったりと良く遊んでもらっていた。

大雑把な人だったけど、気さくで、どんな事にも真っ向から立ち向かうその姿は正直格好よくて、さすが都さんは見る目があるなあ、とちよっと思ったりもした。その強さが羨ましくて、照れ臭くてあまり言葉にできなかったけど、あたしは海燕さんが好きだった。

だから。だから、これから海燕さんのお墓を参って、あの人の死を現実のものとして見るのが、怖い。

（……………でも、行かなきゃ）

都さんのお墓には、月命日以外に、一人になりたい時や誰にも聞かせられない悩みを打ち明ける時なんかによくちよくちよく行ってるの

に、海燕さんにはまだ一度も会いにいつてない。怖いけど、悲しいけど、どこかで海燕さんの事も、もう亡くなった人として区切りをつけなきゃいけないんだから、行かなきゃ。

「よっし！」

気合を吐き出して、あたしは再び歩き出した。

「……………何あれ」

もう途中で躊躇わず、ずんずん先を進んでいたけれど、海燕さんの実家近くと思しき場所まで来て、面食らった。流魂街外れ、というかもう家の一つもないような郊外に、建物がある。住所と周りの様子からして、多分あそこがそう、なんだと思うけど……………

「……………何で垂れ幕……………っていつか足……………？」

家の左右にどでかい足のオブジェが逆さまに立っている。そしてその指に紐を引っ掛けた垂れ幕には、これまたどでかく『志波空鶴』と達筆な文字が躍っていた。

「ええと……………」

確か海燕さんの妹さんが空鶴って名前だったから、実家は間違いないであれよね……………。何ていうか、ある意味芸術作品なのかもしれないけど……………うわぁ、近寄りたくない。あんな変な家。

ちよつと回れ右して帰りたい気分になった時、どばん！ と大きな音が聞こえて、家の中から人が出てきた。

離れていても聞こえるくらいの勢いで扉を開けたのは、どうやら女の人みたいだ。大柄な男の人二人を連れて、何か話しながら家の裏手に回ろうとしている。

もしかしたらあの人が空鶴さんかも。帰りたい気持ちを無理にねじ伏せて、あたしはあの奇妙な家に走りより、

「あ、あのっ！」

三人が見えなくなる前に、上ずった声をかけた。

「あん？」

「おや、お客人ですかな」

「どなたですか」

あたしの声に、女の人が、ついで男の人たちが振り返る。あ、この男の人たち、双子だ。がっちりした体格に反して、ちっちゃい目をした顔が二つ並んで、何だか妙な迫力がある。

ええと、と気後れして言葉に詰まったら、女の人が前に出てきて、あたしをじろりとにらみ付けた。うわ、この人は双子よりもっと迫力がある。

姉御っぽいつていうのかな、大きい瞳なのに目つきが鋭くて、にらみ付けられると訳もなく謝りたくなってしまふ。右上腕には「空」の刺青、左はそもそも腕がなくて、背中には刀を背負っている。おまけに、はだけた着物の下には乱菊さん並みに大きい胸がどんと存在を主張していて、何だかもうむやみやたらに威厳のある女性だった。

「なんだデメエ。死神が何か用か？」

女の人のはあたしを、というかあたしの死覇装をじろじろ見た後、その外見によく似合うべらんめえ口調で問いかけてくる。あたしは慌てて腰を折って、

「急に押しかけてすみません、空鶴さんですか？ あたし、護廷十三隊四番隊所属の鑑原雪音です。海燕さんのお墓参りに伺いました！」

早口に用件を告げた。

「いかにも俺は空鶴だが……墓参りねえ」

訝る声音に顔をあげると、女の人が眉根をよせ、男の人たちも困ったような顔を見合わせている。

「あの……ご都合悪いでしょうか」

おそろおそろ尋ねたら、女の人が肩をすくめた。

「別に悪かねえがな、アニキの墓はねえよ」

「え？ ……お墓、こちらじゃないんですか？」

海燕さんが亡くなったとき、朽木さんがここにつれてきたって聞いたのに。

「しいていうなら、あっちだな」

いって、空鶴さんは人差し指を上に向けた。その指に従って見上げた先には、細く高くのびる煙突があった。

「……???」

意味わかんない。どう見てもあれ、墓石じゃないし。問いかけるようにもう一度空鶴さんに視線を向けると、

「アニキはあれで空に打ち上げたんだよ」

あっけらかんと答えたので、あたしはぼかんとしてしまった。え、なに？　今、亡くなった海燕さんを、あの煙突で、空に打ち上げて……

「え、えええええ！？う、打ち上げたあああ！？　な、な、なんで！」

「俺あ花火師だからな」

「答えになってない！　おかしいでしょそれ！」

「ああん？」

力いっぱい突っ込みを入れたら、空鶴さんの目が座った。いきなりあたしの胸倉を掴んで引き寄せ、

「何だデメエ、俺のやる事に文句あんのか？」

ドスのきいた低い声ですごんでこられたので、

「……いえ、ないです」

思わず引っ込んでしまった。だ、駄目だ、なんかこの人海燕さんがより強力になった感じで敵わない。ここは四の五の言わず、とつとと退散したほうがよさそうな気がする。

「あ、あの、じゃあ失礼しました……」

襟を掴む手が離れたのを幸いと頭を下げようとした時、  
「別に急いで帰ることねえだろ」

空鶴さんがくい、と立てた親指で後ろを指した。示しているのは、さっきの煙突だ。

「あんなもんしかねえが、せっかくなんだ、墓参りしてけ。アニキも喜ぶだろうさ。金彦、銀彦、案内してやれ」

「はっ！」

「え？ あ、あの……」

いやもういいです、と遠慮する暇もなく。あたしは大柄な双子に挟まれるようにして、ずるずる家の裏へと引きずってつれていかれてしまった。

その煙突は、今まで見たことがないほど高かった。近くで見ると大人5・6人でやっと抱えられそうな太い柱がずしん、と鎮座ましましていて迫力がある。丸い台座の上に引き上げられ、

「さ、こちらですぞ、鑑原殿」

「存分に参られよ」

「は、はあ……」

びし、とポーズを決めた双子に急かされ、あたしは渋々煙突の前に腰を下ろした。どうしたものかと首をひねったけれど、とりあえず菊の花を置いてみる。ついで、懷から線香も取り出したけど、火をつけても立てる場所がないので、そっちはしまい込んだ。そして手を合わせて目を閉じる。

お墓じゃない、海燕さんのいないところでお祈りするのは変な感じだ。打ち上げたって、空鶴さんは何でそんなことしたんだろう。さつきちらっと、花火師だっていつてたっけ？ 花火師って皆そういう弔いをするのかな？ いやまさか……とかそんな事を考えていたら、不意に風の音が強く響いた。

（……あ）

ふわりと暖かい風が頬をなでる。さわさわと草が揺れて、鳥の鳴き声が微かに聞こえてくる。じっとしていると、日の光で体がじんわり暖かくなってくる。ゆっくり呼吸してみたら、緑と土の匂いが胸に満ちた。

「……」

目を開けて、あたしは煙突を見上げた。それはさつきと変わらず空に向かって伸びていて、少しも揺るがない。あたしは、脇に控え

てる双子にあの、と声をかけた。

「空鶴さんって、本当にこれで海燕さんを打ち上げたんですか？」

「うむ、その通りですよ」

「それって、もしかして、海燕さんの体をそのまま……？」

もしそうなら、相当エグい事になりそうなんだけど。と思ったら、まさか！ と双子達が同時に首を振った。

「じゃあ、どうやって？」

「それはですな……」

「うむ……」

途端、二人の口が重くなる。何かいいにくいことなんだろうが。再度問いかけようとした時、

「アニキは、粉々になったんだ」

不意に後ろから声がかかった。振り返ると、家の裏口から、空鶴さんが歩み出てきた。台座の上に上つてずんずん近づいてきて、あたしの隣にすわり、ついで手に持っていた日本酒の瓶をどん、と下ろす。一緒に持っていたぐい呑みを床に置いて、空鶴さんは口を開いた。

「うちに帰ってきてからしばらくしたら、アニキの体は砂みたいに粉々になっちまったんだ。指のひとかけらも残さずに」

「こなごなって……何で、そんな事に」

ソウルソサエティで死んだ魂魄は、その体を構成していたものが、霊子に還る。ひとかけらも残さずに、といえば同じだけど、霊子分解は徐々に、人間が土に還るのと同じくらいゆっくりと行われるのが普通だ。

海燕さんが亡くなってからどれくらい時間がかかったかは知らないけど、少なくとも家に戻ってきて一日二日で起きる事象じゃない事は確かだと思う。

「もしかして、虚と闘った時の傷が原因とか？」

「さあな、知らねえよ、っと」

結構重要問題を空鶴さんはあっさり流して、日本酒の蓋を開けた。

もう少し詳しく聞こうと身を乗り出したのに、空鶴さんは瓶を傾けて杯に注ぎ込みながら、話をそらした。

「お前、四番隊の鑑原とかいったな。とすると、あれか。都の後輩か」

「あ……はい、そうです。ご存知でしたか？」

「ご存知ってほどじゃねえがな。都とアニキが時々、お前の話をしていたのを思い出した」

「え、都さん達が！？ な、何て言っていました？」

二人があたしの事話してたって、どんな事を？ ときどきしながら聞いたら、空鶴さんが口の端を上げて笑う。

「アニキは、くそ生意気で鬼道ど下手な後輩がいるって言ってた」「うつ……」

思わず床に手をついてしまう。そ、そういう評価ですか……。面と向かって、冗談めかして言われたことはあるけど、自分の居ないところでもそんな事言われてたなんて、かなりショックだ。

「そら、持てよ」

「は、はい……」

凹んだまま、ぐい呑みを手にする。透明な水面にはあたしの情けない顔が映り込み、すぐに揺れて歪んだ。空鶴さんがくつつ、と声を漏らして、同じように杯を持った。

「それと、見所のある奴だとも言ってたぜ」

「え？」

「あいつは根性あるから、ちょっとくらい壁にぶつかったって止まりやしない。死神になるなら、それくらいの気概がなきゃあな、とか何とか」

「……」

「都は、何つつてたかな……。ああ、気持ち優しい子だから、自分一人で悩みを抱え込むような事はしないでほしい、とか言ってたか」

「……そ、うですか……」



さつき凹んだ分、余計に感動して、あたしは声に詰まってしまった。二人が、そんなふうに言ってくれてたなんて。

あの二人に、あたしは何も出来なかった。

共に戦う事も、二人の命を救う事も出来なかった。

心地よい居場所を、優しい温もりを、与えられるばかりで、何も返せなかった。

それなのに、二人はあたしを認めてくれていた。心配してくれていた。

（都さん……海燕さん）

ぎゅ、と唇をかみしめた時、視界にぐい呑みが入ってきた。顔を上げると、空鶴さんが手を差し伸べている。

「そら、献杯だ。アニキと、都に」

「あ……はい」

ああ、さつきから何でお酒を準備してるんだろうと思ったら、二人に捧げるためだったのか。

一瞬間をおいてから、意図を理解したあたしは、掌中のぐい呑みを空鶴さんのそれとぶつけた。透明なお酒の表面に小さな波紋が出来て広がっていく。

その波紋にそつと唇をついたら、口の中にすーっとお酒の味が広がった。辛口だけど重くなく、喉をするりと滑り落ちる感じで、後にはお米の甘い香りがほんのり残る。思わず目を閉じてじっくり味わい、ほう、とため息をもらす。

「美味しいお酒ですね」

感嘆の声音で呟くと、一息に飲み干した空鶴さんはニツと笑った。「こいつはアニキが好きだった酒だ。アニキが帰ってくるたまの休みには、こいつを呑みながら、朝まで大騒ぎしたもんさ」

「へえ……」

海燕さんの周りにはいつも人が集まってくるから、宴会ときた日にはそれはもう大盛り上がりで楽しかった。ここでもきつと、海燕さんはそんな風に、皆に慕われていたんだろうな。そう思ったら、

何だか肩の力がふ、と抜けた。

空鶴さんは杯を床に置いて瓶をつかみ、それを煙突の根本に振りかけて、ぐいっと見上げた。目を細めてしばらく黙り込む。

真摯なその横顔にかけられる言葉がなくて、あたしも口をつぐんだ。ちびちび呑みながら目を閉じると、最初にこの煙突の前に来た時と同じ静寂に包み込まれる。

近くの林から、鳥が飛び立つ。枝の揺れる音。ふわりと通り過ぎる風。青臭い草と、菊の香り。少しきつめの、お酒の匂い。ふう、とため息を聞こえた。目を開けたら、空鶴さんが少し乱暴な手つきで瓶を傾けている。あたしはそれを受け止めて、自分の手に持ち、「一献、どうぞ」

口を向けた。空鶴さんは虚を突かれたように目を瞬かせたけど、ああ、と答えてぐい呑みを持った。差し出されたそれに注ぎ込みながら、言う。

「ここは良いお墓ですね、空鶴さん」

「あん？」

「空と土と太陽と。全部が感じられる、良いところだと思います。それに」

ぐ、と見上げた煙突は、どこか気高さを感じさせるほど堂々と、空に向かって伸びている。

「あの上からならきつと、ソウル・ソサエティが皆、見えますよね」  
「……………」

「間違つてたらすみません。空鶴さんは、海燕さんをソウル・ソサエティの空にかえす為に、打ち上げたんじゃないありませんか？」

問いかけると、空鶴さんはじろり、とあたしを睨み付けた。眼光の強さに思わずびくっとしてしまう。ま、間違つてたかな、っていうかちよつと考え方が感傷的過ぎた？ びくびくするあたしをじいっと睨みながら、空鶴さんが口を開く。と、

「…………ただいまー姉ちゃん！ 虎吉の団子、買ってきたぜー！」  
家の方から元気の良い子供の声が聞こえてきた。ガンジユ殿、と

言いながら双子が飛ぶように走っていき、空鶴さんがチツと舌打ちする。

「めんどくせえのが来たな。悪いが、今日はもう帰ってくれねえか。死神のお前がいると、ちょっとややこしい事になる」

「へ？ あ、は、はい」

何だか良く分からないけど、今の子供とあたしを会わせるのはまずい事らしい。でも元々こっちが押しかけてきたんだから、長居するつもりはなかったので、

「それじゃ、急に訪ねてきたのに、お墓参りさせてもらって、有り難うございました」

急いで立ち上がったお礼に頭を下げる。空鶴さんがおう、と鷹揚に答えてくれたのを潮に身を翻したところで、

「おい、鑑原！」

「はいっ!？」

急に名前を呼ばれて、びくつとして振り返ると、空鶴さんがお酒の瓶を軽く振って、笑った。

「暇になったら、また来いよ。今度はお前が俺に、アニキの話を聞かせてくれ」

一瞬きよとした後、あたしはほつとして、笑い返す。

「はい。また、絶対来ます！」

「おう。土産を忘れんな」

ちゃっかり請求してくるところは、海燕さんに似てる。あたしはもう一度ぺこりと頭を下げると、足早に志波家を去った。

帰る道すがらに、振り返った。志波家はもう小さく見えるだけで、その背後に立つ煙突が青い空を背景に黒々とした影を落としている。来る時はあの変なオブジェに圧倒されて気づかなかったけど、離れてみると、煙突の方がより存在感があった。

（海燕さん）

ここに来る前は怖かった。海燕さんの死を、現実のものとして受

け入れるのが怖くて、来たくはなかった。だけど今、不思議なほど穏やかな気持ちで、海燕さんの名前を口に出来る。

「海燕さん」

声に出して呼びかけて、あたしはにっこり笑う。

見上げた空は、まだ見た事のない海はこんな色なのかもしれない、そんな風に思えるほど鮮やかな青で美しかった。

## 手

手をかざす。雲一つない青い空を、手でさえぎる。あるいは、手を伸ばす。

どうして、と叫んだ。

何故、と泣いた。

全てが壊れていた。

何もかも、無くなっていた。

自分が知らないうちに。

そんな事がしたかった訳じゃない。

望んだ事は、ただ一つ。

自分自身を消し去る。それだけだったのに。

「ゆつきー、何してんの？」

ひよい、と明るい桃色が視界を覆う。あまりの近さに思わずおう、と叫んで、それからやちるの顔を認識する。雪音は慌てて起きあがった。

「やちる副隊長！」

「おひるねしてたの？」

「あ、いえ、えっと……休憩です」

休憩は本当だが、少し時間を長く取りすぎている事は自覚していた。こんなところでさぼってるなんて、不真面目な隊員だと思われるかもしれない。焦ったが、

「そっかー、じゃあ一緒にあそぼ！ 剣ちゃんが虚たいじにいつちやって、ひまなのー」

やちるはいっこうに気にせず、にぱ、と笑う。天真爛漫なその笑みに、顔が土砂崩れを起こしそうなほど笑み崩れて、雪音はうんうんと頷いた。頷いた後で、仕事を思い出してうなだれる。

「うつ、申し訳ありません、副隊長……。雪音はこれからお仕事に  
いかないといけないんです」

「えー！？ やだやだ、いこうよーあんじゅやが、十人前どらや  
き作ってくれるっていつてたのにー」

「ああ、やちる副隊長とどら焼きを頂くんなんて、至福の時ですが…  
…すみません。病気で休んでいた分、仕事がたまっていて」

「むー」

やちるは不満そうに頬をふくらませた後、じゃあいいもん、と背  
を向けた。

「あつ、副隊長……っ！」

呼び止めようとする間こそあれ、小さな姿はあつという間に跳び  
去ってしまう。ああああ、とうちひしがれた雪音は、がっくり地面  
に頭を落とした。

「仕事が……。仕事があれば、やちる副隊長とこ一緒にできたのに…

…！」

地面に穴が出来そうなほど凹んだ雪音だったが、「とつとと終わ  
らせば、やちる副隊長に随伴できるかも！」、気合いを入れてが  
ばつと立ち上がると、ずんずん足音をたてて隊舎に向かう。

胸によどんでいた遠い記憶は、再び心の奥底へとしまい込まれた。

## 表裏

惚れてねえ。たとえ隊長がそう言ったとしても、俺はあんな奴には惚れてねえんだ。

「一角」

「……」

「ちよつと、一角！」

「うおわっ!？」

耳のそばでデカイ声を出されて、俺は飛び上がってしまった。驚きすぎて椅子から落ちそうになって、慌てて体勢を立て直す。

「何してるのさ、一角」

呆れたように言うのは、書類を手にした弓親だ。

「な、何してるって、お前のせいでこけそうになってんだろ!？」

何、馬鹿な事してるなあって顔してんだ、てめえ！怒鳴ると、

弓親はふ、とため息をついた。

「僕の呼びかけに全然気づかないのが悪いんじゃないか。何見てたのさ」

「あつ、ちよつと待て！」

慌てて止めようとするも遅かった。弓親は俺を押しつけて外を見、それからああ、と声をもらす。

「雪音ちゃん、こつち来てたんだ。何だ、また見とれてたの？」

「みつ、見とれてなんかいいえ！ちよつと思索に耽ってただけだ！」

とつさに心にもねえ事を言い訳に使ったが、我ながら説得力は皆無だ。弓親はふーん、と半眼で俺を見やがる。

「思索じゃなくて妄想じゃないの？そんな必死になって否定するところを見ると」

「う、うるせえ！　違えよ！　あんな奴に何で俺が……」

「あんな奴、だからだろ？」

弓親は俺の動揺なんて関係ないとばかりに、机に座って、書類を広げた。

「別に好きなら好きで良いじゃないか、変に誤魔化さなくても」

「なっ……」

ずばっと言われ、俺は顔に血が上るのを感じた。だん、と椅子を蹴って立ち上がり、

「だ、誰もそんな事言ってねえだろ！」

詰め寄るが、弓親はしっしっ、とすげなく手を振った。

「はいはい、分かったから、五月蠅くするなら余所へいきなよ。僕はこれから仕事するんだから」

違う。俺はあんな奴になんて、惚れてねえ。絶対に惚れてなんかねえんだ。

弓親に部屋を追い出された俺は、敢えて雪音が居ない方へ足を運びながら思う。

妙に雪音が目につくようになったのは、あの見舞いの時からだ。

それまでどうって事も無かった雪音の一挙手一投足が、なぜか氣になって、いや関係ねえだろ俺には、と無理矢理視線をはがす事が多くなった。

そうだ、俺は別にあいつに惚れてなんかいねえ。

言い聞かせるように胸の中で繰り返す。どうして俺が、あんな奴に惚れなきやいけねえんだ。あんな、乱暴で口が悪くて色氣が無くて酒癖悪い女、誰が。

\* \* \*

と、思っていたのに。

\* \* \*



「一角、ついでついでー！　どんどんっげー！」

いつもの飲み会で、いつも通り酔っ払って俺に酌を強要してくる雪音。

「うるせえな、ちよっとは黙れこの酔っぱらいが！」

こっちの気も知らねえでこの野郎、と苛々した気持ちで怒鳴りつけると、雪音はむうっとな眉間にしわを寄せた後、いきなり俺に抱きついてきた。

「うおっ？！」

横から、右手ごと腰を抱え込まれて、俺はびびって声を上げてしまった。酔っ払ってるせいか、雪音は思いの外強い力でぎゅうっとなしがみついてくる。

「な、何しやるー！」

つい焦ってどもとると、雪音は顎で俺の腕をぐりぐり押しながら、  
「なによーこのハゲ、あたしの酒が飲めないってのー！？　文句言わずにとっとと飲めってのよー！」

それの怪しい口調でぐだぐだと絡んでくる。しかしその口調はともかく、俺にくっついたまま上目遣いにこっちを見上げる雪音の、顔が。

酒で我を忘れてるせいか、上気した頬と潤んだ目が、とんでもなく色っぽく見えて、しかも押しつけられる柔らかい感触、が。

「……………！」

瞬間、俺はくらっとした。血が逆流する音さえ聞こえそうなほど身体が熱くなつて、腹が疼く。

（やべえっ……………！）

「うひゃあー！」

「きゃっ！？」

そう思った次の瞬間、思わず力一杯雪音をはねのけてしまった。吹っ飛ばされた雪音は、後ろに居た伊勢に勢いよくぶつかる。雪音は仰向けに転がって悲鳴を上げた。

「いたーいつ！ 何すんのよーうー！」

「な、ど、どうしたんですか、鑑原さんっ」

ずり落ちかけた眼鏡を直して問う伊勢。雪音は唇を尖らせてくるつと向きをかえ、

「伊勢さあん、あほハゲに暴力振るわれたー！！」

泣き言を言いながら、今度は伊勢にガバツと抱きつく。

「きやあつ！ ちょ、ちよつと鑑原さん、しがみつくの止めてくださいー！」

伊勢は焦って雪音を引きはがそうとしたが、酔っ払いにはその抵抗も楽しいらしく、

「ええーやだあ、伊勢さんいー匂いするもーん。やっぱり女の子って柔らかくて気持ちいいー」

などと言いながら、伊勢に頬ずりしている。

「何を言ってるんですか、は、早く離れて……」

「ああいいなあ、雪音ちゃん。ボクも七緒ちゃんだつこしたいなあ」

二人がじゃれているところに、京楽隊長がだらーん、と鼻の下を伸ばしていざりよっていく。伊勢は雪音を押しつけようとしながら、「却下です！ 隊長はそれ以上近づかないでください！ ま、斑目さん、呆然としてないで、鑑原さんをどうにかしていただけませんか？！」

俺に助けを求めてくる。

「……あつ、ああ」

俺はハツと我に返って、雪音の襟首を掴んで引きはがした。

「うにゃー！ はなせつるりんー！」

じたばた、と暴れる雪音。いつもならここで説教の一つでも始めるところだが、俺は自分の鼓動が激しくなってる事に動揺して、雪音を見ていられなくて、そのまま投げ捨てるように放り出してしまった。

「うきやーっ！」

「うわっ？！ ちょ、一角さん何してんスカ、雪音さん怪我します

って！」

ちょうどそこに居た恋次が、一瞬宙を舞った雪音を受け止めて、俺に抗議の声を上げる。だが俺はうるせえ、と怒鳴って席を立った。草履を引っかけて店の中を足早に抜け、廁へ飛び込む。

「……はっ……」

誰もいねえのが幸いだった。俺はずか入り込んで洗面台にバソツと手をつき、息を吐き出した。

口から吐きそうな勢いで、ばくばくと激しい鼓動がする。熱くなつた身体はにじんだ汗のせいで冷えて、熱と冷気を同時に発している気持ち悪い。

酔っ払ったあいつに、あんな風に抱きつかれる事なんて、これまで何度もあった。それなのに、今更馬鹿みてえに狼狽えるなんて、どうしたんだ俺。

「はっ……くそっ」

俺は息を荒げたまま顔を上げた。そして息を止めた。

薄汚れた鏡に映った俺の顔は動揺して、みっともねえくらい赤くなっていた。飢えた顔だ。ねだる顔だ。欲しい欲しい、と叫んでる、そんな顔だ。

こんな顔を、俺はあいつに見られて。

「っ……！」

俺は喉を鳴らして唾を飲み込むと、蛇口をひねり、勢いよくほとばしり出た水を浴びた。火照った頭は冷たい水をかぶって、少しずつ冷やされていった。

\* \* \*

「一角」

「……」

「おい、一角？」

「さっきから何だよ」

後ろからかけられた弓親の声に、振り返らないまま応えたら、弓親は驚いたようだった。

「あれ、今度は気がついてたんだ。また、雪音ちゃんに見とれてたのかと思ったのに」

「うるせえ」

俺は低い声で唸った。弓親の言う通り、視線の先には、ファイルを抱えて廊下を歩いていく雪音の姿がある。前と同じ状況だったが、もう否定する気はねえ。

「弓親」

「ん？」

俺に倣って木陰に腰を下ろす弓親に、俺は言う。

「俺、あいつに惚れてるわ」

「え」

さらっとした告白に、弓親は俺を振り返り、俺の顔を見て、それから、

「……ふーん。そうなんだ」

そう言って、幹にもたれかかる。

「おう」

俺は短く応えた。

弓親とは長い付き合いだ、顔を見れば俺が何を考えてるかくらい、分かるんだろう。余計な事を聞いてこない距離感が心地良くて、こいつになら言っても大丈夫だと思うから、初めてそれを、言葉にした。言葉にしたら、もやもやしてたものが晴れて、すっきりした。

雪音はこっちに気づかないまま、建物の中へと入っていく。

目を閉じ、その微かな霊圧を追いながら、俺は思う。

しょうがねえ。一度でもあいつが女だと意識しちゃったら、もう口先の言葉で誤魔化してなんかいらねえから、認めるしかねえよ。惚れてる。俺の理性がただだけ否定しようとしても、俺はあいつに惚れてるんだ。

## 君という日

「勇音、今日何食べる？ メニューもらってきちゃった」

帰り支度の最中、うきうきとメニューを広げた雪音の手元を覗き込んで、勇音はそうねえ、と顎に手を当てた。

色鮮やかで、今にも匂いたちそうな料理の数々に思わず目を輝かせ、まだ食べたことのないのってどれだっけ、と楽しく語らっていたら、

「雪音」

「うわ！？」

「きゃ！」

いきなりぬ、と人の顔が目の前にきて、思わず二人して悲鳴をあげた。その反応にむっとしたのか、身を引いて鼻を鳴らしたのは、

「い、一角？ びっくりしたあ、急に顔出さないでよ」

十一番隊第三席の斑目一角だった。

「斑目三席、どこか怪我されたんですか？」

四番隊では患者に対して決まった担当というものはないのだが、この一角は来るたび、雪音をわざわざ指名して治療を受けている。

なので、また雪音を指名しに来たのかな、と思った勇音だったが、一角は首を振って、雪音を見た。

「あー。お前、この後空いてるか」

「は？」

きよとん、と目を瞬く雪音。

「いや、あのな。飯食いにいかねえか。俺と」

「え、いきなりそんな事言われても」

何やら言いにくそうに、ぶっきらぼうな口調で言う一角と、素で困ったように答える雪音。端で見えてすぐ分かる、一角の独特な雰囲気、勇音の方がぴんと来た。

「あたし達これから、ご飯行くところで」

「あーいはいやいや！ あたしは良いから！ 雪音、三席と一緒に  
行きなさいって」

「は？ なんで！？ だってもう、お店予約したって」

「大丈夫大丈夫、予約は明日にずらしてもらうから。あたしが連絡  
しておくから！」

「え、でもそれだとキャンセル料が」

「良いから！ ほら行くすぐ行く！ 三席、雪音をよろしくお願い  
します！」

「ごちゃごちゃ言う雪音をぐいー、と無理やり一角の前に押し出し、  
笑顔で言うと、一角は少し照れたような表情で「悪いな。借りてく  
わ」呟き、雪音の手を掴む。

「ちよ、ちよ、ちよっと、勇音、一角~~~~~?！」

いつてらっしゃーい、と手を振って見送る勇音は、二人の姿が見  
えなくなつてから、ほうつとため息をついた。

四番隊に担当というものはないのに、毎度雪音を指名する一角。  
どれだけその事に文句を言われても、絶対に変えようとしないとこ  
ろからして、一角に何か思うところがあるのは間違いないだろう。

そして文句を言いつつ、結構楽しそうに一角の相手をしている雪  
音だって、悪い気はしていないと思う。だから、

（斑目三席、頑張ってくださいね）

勇音はうふふ、と含み笑いをしながら、店に連絡をするため、伝令  
神機を取り出したのだった。

雪音が引つ張っていかれた先は、少し暗めの照明で、全ての部屋  
が個室になっている、お洒落な雰囲気居酒屋だった。すでに予約  
を取っていたのか、一角が入口で名前を告げると、すぐ一室に案内  
された。

成り行きで部屋に入り、腰を落ち着けとりあえずの一杯が来たと  
ころで、

「あのー、何かすっごい無理やり連れてこられた気がするんですけ

ど。何ですかこれ、誘拐？」

ようやく雪音は疑問を口にした。座卓を挟んで向こう側に座った一角が、悪かった、と気の無い返事を返してきたので、むっとする。

「勇音と先約あったのに。あんたが無駄に迫力あるから、びびらせちゃったじゃないの」

「別に、びびらせてやしねえよ」

「嘘つけ。あーもう、せつかく東雛<sup>あずひな</sup>の全品制覇にチャレンジしよう  
と思つてたのに……」

「色気より食い気だな」

呆れたような声音に、更にかちんときて声を荒げようとした時、いきなり目の前に箱が突き出された。

「うわつと！？ な、何？」

「誕生日」

一角は早口に言つた。

「……なんだろ？ 今日。だから、やる」

「……え。ええ？」

ぱちぱち、と瞬きした後、雪音はえーっ、と驚きの声を上げてしまった。

「え、嘘、何であんたがあたしの誕生日知つてんの？」

「人に聞いた」

「ええええ、嘘。じゃあ何、これプレゼント？」

「そうだよ」

「う、っそお」

「嘘じゃねえよ！ 早く受け取れよ！」

嘘、と連発されて腹が立ったのか、一角が雪音の手に箱を押し付けてくる。勢いのまま受け取った雪音は、まじまじとそれを見つめた。

長方形の箱は黄緑と青の漉き和紙で綺麗に包まれており、造花の椿がちょこんと右上の方にくっついている。箱の地は薄い桃色に、白で桜の花びらが描かれていて、何とも可愛らしい。

「わー、ほんとだ、嘘じゃないんだ」

手の中でひっくり返して見ているうちに、何だか嬉しくなってきた、

「ね、ね、これ開けてもいい？」

うきうき尋ねる。一角が、拗ねたように横を向いたまま、好きにしろ、と言つので、丁寧<sup>かんざし</sup>に包装をはがし、ふたを開ける。

「わ、簪？」

箱から出して、行灯の下にかざしてみる。銀の棒にとんぼ玉がついているシンプルな簪で、白色のとんぼ玉の中に描かれた金箔と銀箔の桜文様が、明かりにきらりを光った。

「すごい、綺麗。一角の趣味とは思えないわー、これ弓親に見立ててもらったんじゃないの？ つけてみてもいい？」

「うるせえな、好きにしろつつつてんだろ」

「はいはい」

適当に髪をまとめて挿して、鏡が無いので、背を向けて一角に尋ねる。

「どう？ 似合う？」

「……………」

一角は無言だった。ちょっと、感想くらい言いなさいよ、と振り返ったら、一角は雪音をまっすぐに見つめて、

「ああ、似合う。お前にぴったりだ」

眩しそくに目を細めて、見たことがないくらい晴れ晴れとした顔で、心底嬉しそくに笑った。

「う。そ、そう」

それを見て、雪音は言葉に詰まった。あんまり真っ向から褒められたので、思わず身を引いてしまう。多分今、顔が赤くなっている。その事に慌てて雪音は、一角から目をそらし、

「え、えーと、ありがとう。嬉しいわ」

早口に礼を言った。どういたしまして、とおかしそうに応える一角。もしかしてからかわれているのだろうか、と思った矢先に、



「お前もいい年なんだから、簪の一つくらいつけて、少しは女らしくしろよ」

ぐい飲みにも口をつけながら、いつもの口調で言ってきたので、思わず口をとがらせる。

「悪かったわね、女らしくなくて。だって仕事中、余計なものつけるわけにはいかないんだもの」

「あん？ 何でだ。つーかお前、化粧もろくにしてないよな」

「うるっさいな、しょうがないでしょ。はたいた白粉が調合中にまじったらか、手術の時、飾り玉が患者の体の中に落ちたら、とか思ったら、飾り物だの化粧だの、してられないわよ」

「ああ、そういう事か。あ？ でも、卯ノ花隊長やら虎徹やは、化粧してないのか？」

「……してるわよ。あーもう、分かってるわよ、その気になれば化粧でも飾り物でも、いくらでもつけられるわよ、あたしは怠慢なだけですよ！」

ふん、と雪音は拗ねて膝を抱えた。

雪音だって常日頃、少しは化粧をすべきだ、と思っではいる。

しかし、四番隊が他の隊より立場が弱く、また隊員も弱腰の連中が多いため、気の強い雪音になぜか、本来の業務以外にも他隊との折衝（別名こたごた）が回ってくる。それこそ毎日、目の回るような忙しさなのだ。そのせいでつつい、身の回りのことが疎かになってしまつのも、仕方ないと思う。それが言い訳に過ぎないことは、重々承知なのだが。

「分かった、分かったからそれ止めろよ」

壁に向かってぶつぶつ唸っていたら、一角がとりなすように言ってきた。

「自分で気になってんなら、今日からすりゃいいじゃねえか。とりあえず、その簪つけてよ」

「……うん。まあ、これは邪魔にはならないし」

「だろ？ せつかくの誕生日に、つまんねえ事でキレるなって。ほ

ら、飲めよ」

言いながら、空になったぐい飲みに酒を注いでくる。それを大人しく受けた雪音は、まあそうよね、と気を取り直した。

せっかく一角がわざわざ祝ってくれたのだ、関係のない事でいちいち拗ねるのも申し訳ない。ぐい、と杯をあおって、旨い酒にごろごろ喉を鳴らしてから、

「あ、そういえば、一角っていつ誕生日？ お返ししなきゃね」

ふと尋ねると、一角はげぼつとむせた。顔が赤くなる。

「そ、そんなもんいらねえよ。お返し目当てで祝ってるわけじゃねえぞ」

「いや、そうかもしれないけど、お礼したいし。いつ？」

「……十一月、九日」

「了解」

心のメモ帳にすっかり書いておく。どんなお返しにしようかなあ、と早くも考えをめぐらせながら、徳利を手にとって一角に差し向けた。

「その誕生日って、一角が自分で決めたの？ あんたも流魂街出身よね」

「あ？ 何で知ってたんだ」

「何でって、あんたみたいな貴族の子弟が居てたまるか。弓親ならまだしも」

「あいつだって、俺と同じところの出だぞ」

ぶすつとした顔で言うのがおかしくて、雪音はつい笑ってしまう。

「分かってるって。でも見た目の雰囲気かね、全然違うから。あんたは見るからに野生児だもん」

「野生児ってお前な、俺を何だと……。ああ、もう良い。言うな」

藪をつついて蛇を出したくないと思ったのか、一角がぶちつと話を断ち切った。そのまま黙るかと思いきや、

「そういうお前だって、流魂街の出だろ。誕生日、どうやって決めたんだ」

逆に尋ねてきた。店員が持ってきた食事と酒を受け取りながら、雪音は応える。

「あたしのはねー、護廷十三隊に入った日。誕生日なんて知らないって言ったら、隊長がじゃあ今日にしましょう、って決めてくださったの」

「隊長、って卯ノ花隊長か？」

「そそ。わざわざお祝いしてくれたんだよー、ペーペー隊員のために。優しいでしょ、うちの隊長」

へえ、と言った後、一角はばつの悪そうな顔になった。

「もしかして、今日は卯ノ花隊長とも、飯食いに行く約束があつたのか？」

「あ、ううん、それは大丈夫。今日は隊長が外に出る用事があるからって、先にお祝いしてもらっちゃったの。でも、勇音には悪い事しちゃったなあ、お店も予約してくれたのに。あんた、無理やり引っ張ってくるんだもん」

ぐ、と一角が詰まった。後ろめたげなその顔を見たら、余計勇音に対して申し訳ない気持ちになってきて、雪音は伝令神機を取り出した。

「どうせだから、勇音とか弓親とか、他の人も呼ぼうか。お祝いとか関係なしに、皆で飲むのも楽し」ばつ、よせ！」「きゃっ！？」

いきなり一角が伝令神機ごと、手を畳に押さえつけたから、雪音はびっくりして悲鳴を上げた。呆氣に取られて一角と目をあわせたら、まるで火傷でもしたかのような勢いで手をのけた。一角は逃げるように壁にどん、ともたれかかって頭をかく。

「いや、あのな。虎徹も弓親も、きつともう部屋に帰ってるだろ。

わざわざ呼び出すのも、どうかと思うぜ。虎徹への詫びなら、俺が後で入れとく」

「え、でも」

「この個室は二人限定なんだよ！」

反論しようとしたら、かみつくような勢いで返された。が、視線

が合うと、一角の顔が赤く色づき、目が泳ぐ。

「その……他の奴呼んだら、大騒ぎになって店に迷惑かかんだろ。今日のところは、やめとけ。絶対」

「えー……っ」と

何だろっ、一角のこの動揺ぶりは。事態が良く分からず、ハテナマークで呟いた雪音だったが、しかし一角がここまで言うからには、何か理由があるのかもしれない。

そうか、もしかしたら、女にプレゼントなんて柄でもない事をしたから、照れているのかも。意外とシャイなところもあるようだし、それなら、ここに人を呼ぶのも嫌だろう。

「分かった、じゃあやめとく」

勝手に納得して、雪音は伝令神機をしまい、一角にずい、と徳利を差し出した。

「それじゃ飲みましょ、とりあえず」

「おう、そうだな」

一角はほっとしたような顔で杯を受けた。互いの手元に酒を注ぎあつた後、

「じゃ、あらためて……お祝いありがと、一角」

「……誕生日おめでとっ、な」

何となく照れくさい気持ちで、きん、とぐい飲みをぶつけ合う。

## 竜虎

いつものように仕事仕事、と廊下を歩いていたら、藍染隊長に出くわした。廊下の角でぶつかりそうになって、お互いたたらを踏んでしまう。

「あつ、藍染隊長。すみません！」

勢いよく衝突するところだったので、あたしは慌てて頭を下げた。藍染隊長は「いや、いいよ」といつものように優しい声で言った後、

「ん？ おや珍しいね、鑑原君。簪かんざしをつけてる」

「ひゃっ」

す、と何気なく手を伸ばして、あたしの髪に触れる。思いがけず頭を撫でられ、あたしは思わずびくつとして、後ろに下がってしまった。

う、うわ、びくくりした。元々人に触られるのは苦手だけど、男の人に髪を触られるのは、抵抗がある。

しかも相手が、そうでもなくとも緊張してしまう藍染隊長だったら、尚の事。びくくりしすぎて、ちよつとどきどきしてしまう。

「はは、すまない。誰かからの贈り物かい？」

思いつきり不審な態度を見せちゃったのに、藍染隊長は気にせず朗らかに笑う。一人でおたおたしてるのが恥ずかしくて、あたしはつい赤くなってしまった。

「あ、えつと、はい。昨日誕生日だったので、貰ったんです」

もごもご答えると、藍染隊長は眼鏡の奥で目を丸くする。

「昨日が誕生日だったのかい？ それはおめでとう。何だ、そうと知っていたら、僕も何か用意したのに」

「え、ええっ？！ と、とんでもない、お心遣いだけで十分……」

「僕からのプレゼントは、いらない？」

「や、そ、そんな事は無いです。でも、あたし違う隊の人間ですし、藍染隊長にわざわざお祝いしていただくなんて、そんな恐れ多

います」

「大げさだなあ。誕生日のお祝いくらい、僕だつてするさ。特に君のように、仕事熱心で真面目な隊員は好きだからね。贈り物の一つもしたくなるよ」

「すっ……?!」

好きって好きって、そんな事言われましても！ 深い意味なんて無いんだろうけど、さらっと言われてますます顔が熱くなってしまう。

あわわ、と言葉を無くしてしまうあたしに、藍染隊長はにこっと笑って、

「そうだ。これから街へ出るところだったんだけど、鑑原君はまだ、昼食を食べてはいないよね？」

「え、は、ま、まあ」

「それなら僕が美味しいご飯を奢ってあげるよ。誕生日の贈り物にしては、色気が無いけど」

「え、ええっ?! そ、そんな、本当に気になさらないで下さい、無理なさらなくても」

泡食つてばたばた手を振りながらそう言った時、

「そうやね、無理強いしたらあかんよ、藍染隊長」

「うわっ!」

真後ろから人の声が降ってきて、あたしはびくつとしてしまった。すわ何事かと振り返るより先に、冷たい指先が首筋を下から上につうつ、とのぼって、

「雪音ちゃんに簪やるなんて、どこの助平男やの? こんな綺麗なうなじ出してたら、そそるやないの」

「ひ……ひいひいっ?!」

低い声が息とともに耳元にかかったので、あたしは総毛だつて奇声をあげてしまった。

こ、この口調にこの声にこの仕草、こんな事するのはどう考えてもあの人しか……!

「よせ、市丸」

鳥肌立てて硬直するあたしをかばうように、藍染隊長がきつい口調で咎めた。すると、簪のトンボ玉に触れていた指が、ふっと離れる。ほっとしたのもつかの間、後ろから前に手が伸びてきて、あたしの顎を撫で、って……ギャー……？！

「何やの、藍染隊長。雪音ちゃんの彼氏とちゃうんやし、そない怖い顔せんでもええやん」

市丸隊長は、ねこなで声で藍染隊長に喧嘩を売りながら、あたしの顔の輪郭をなぞる。

細長い指が、まるで愛撫するみたいに優しく撫でていくけど、気持ちいいどころか、触れた場所からどんどん熱を奪われていくような不快感だけ積もっていく。

こっ、この触り方、この冷たさ、心底気持ち悪い、けど全然動けない。蛇に睨まれた蛙ってこんな気分かも、何か全身から脂汗出てきた……！

「市丸」

藍染隊長があからさまにむっとした表情になって、市丸隊長の手を掴んだ。力任せに剥がして、あたしと市丸隊長の間に割り込んでくる。

「止めろ、と言っているんだ。鑑原君が嫌がつてるだろう」

「ややなあ、ボクはただ助けてやろて、思うただけやのに。雪音ちゃん、藍染隊長とご飯なんか、行きたないんやろ？」

市丸隊長は袖の下で腕を組み、身体をかがめて、あたしの顔をのぞき込んでくる。

いつも笑っていて、かえって表情の読めない市丸隊長の笑顔は、怖い。あたしは思わず藍染隊長の羽織を掴んで、ぶるぶるっと勢いよく首を横に振る。

「そ、そ、そんなことないです！喜んでご一緒するつもりです！」すると市丸隊長はあらま、と口を曲げた。

「何や、そつやの。せっかくボクがご馳走してあげよ思ったのに。」

まあええわ、せやったらここは藍染隊長に譲るわ。今度あらためて、ボクと一緒に、雪音ちゃん」

「彼女は君と居るのは嫌だそうだ。諦めたまえ」

藍染隊長が冷たく言うのと、市丸隊長は肩をすくめて、

「藍染隊長には聞いてへんよ。ま、ここは大人しく退散しましょ。

また今度な、雪音ちゃん」

そういつて、足音も立てずにすたすた廊下を歩いていってしまふ。

その姿が角を曲がって見えなくなって初めて、あたしは硬直から脱して盛大に息を吐き出した。

「うああ……こ、怖かった……」

思わず本音をぼろつとこぼしたら、藍染隊長がふつと笑って、あたしの背中をぽんぽん、と叩いた。

「大丈夫だよ。口では色々言っているが、あの男が本当に何かしてくるような事はないさ。

だが、危険を感じたらすぐ離れて、誰かに助けを求めるんだね。その場に僕がいればどうにでも出来るが、流石に四六時中、目を光らせてられないからね」

「は……はい、つてうわ、ご、ごめんなさい！」

あたしはそこでようやく我に返って、愛染隊長からばつと離れた。市丸隊長に対する恐怖のあまり、ついついすがりついてしまった、は、恥ずかしい！ 脂汗とはまた違う汗がぶわつと出て、顔がぼつぼつと熱くなる。

藍染隊長はきょとんと目を瞬いた後、あつはつは、と軽やかに笑い出した。

「いやいや、これは役得だ。それじゃ、これからお昼を奢らせてもらえるね？ 鑑原君」

う……。一瞬言葉に詰まったけど、さっき思い切り一緒に言っただけで、大体ただの食事のお誘いなんだし、あたし意識しすぎなのかも。ここで断るのって相当失礼、よね。

「……は、はい。あの、有難うございます……」



あたしが熱い頬を手で覆いながら頷くと、藍染隊長はもう一度笑って、

「どういたしまして。こちらこそ君と食事が出来て、光栄だよ。さ、行こうか」

こっちの背中を軽く押して、歩き出したのだった。

## 亀裂

詰まらない書類仕事に忙殺され、ようやく執務室から開放された俺は、げんなりため息をつきながら家に向かっていた。

十一番隊の事務を取りまとめて、つーか全部押し付けてる下っ端が休んだせいで、俺や隊長まで、慣れない仕事をやる羽目になっちまった（まあ隊長は途中でどっかいつちまったけど）。

普段さぼってるからさ、と鼻で笑う弓親を巻き込んで、終わったのが丑の刻も回ってからだから、そりゃ疲れも溜まる。こんな日はゆっくり一杯ひっかけた寝よう、と顔を上げた俺は、そこで驚いた。垣根越しに見える部屋に、明かりが灯っているのだ。

（弓親……なわけねえか）

俺の部屋に時々無断で入りやがる弓親は、今日は自室に戻ったはずだ。他に俺の家に入り込みそうな奴、と考えを巡らせてみるが、思い当たらない。まさか俺に不意打ち食らわそうって奴が、行灯をつけるわけもなし。

考えても分からなかったので、俺は庭に入る木戸を開けた。しゅ、と足を滑らせて忍び寄り、中の霊圧を探る。

……ほとんど感じねえ。ちらりちらりと障子に人影が映るので、中に誰かいるのは確かだが、霊圧が驚くほど低い。こいつあよほど弱いか、あるいは故意に霊圧を抑えて潜んでるかのどっちかだろう。なんにしても、勝手に人の家に入るたあ、いい度胸だ。少し痛い目にあわせてやる。俺は斬魄刀の鯉口を切ると、一息で障子を開いた。

「てめえ、俺の家で……何、を……」

「あー。おかへりー」

怒号にも似た俺の誰何に、<sup>すいか</sup>気の抜けた声が返ってくる。俺はひく、と顔がひきつらせた。俺の部屋の中で、飯の膳やらつまみやらを広げ、酒瓶を振ってみせたのは、

「ゆ、雪音!？」

の、馬鹿だった……。

「……ったく、お前は勝手に何してんだよ」

ひとまず腰を落着けた俺は、まず雪音に問いただした。

こいつと飲み歩く事はよくあるが、こうして俺の家まで入ったことはこれまで一度も無かった。俺も入れなくなかったから、誘った事がない。

それが何で、我が家のごとく寛いでるんだか、文句の一つもつけなくなつて当然だろう。

対して雪音は、ずいぶん飲んでいるらしい、ごろごろ転がる酒瓶の中で、だつてー、とへらへら笑った。

「あのねー、雪原ゆきはらをねー、風弦洞のおじさんがかくやすで売ってくれたのー。美味しいからー、一角と飲もうと思つたら、仕事で忙しそうだったからー、邪魔しちゃ悪いと思つてー。

そしたら弓親が一角の家、教えてくれたからー、待つてよーと思つてー。あたし明日お休みだしー」

弓親、殺す。何勝手に俺の家バラシてんだ、あの野郎。

「そーかよ……」

仕事とはまた違う疲労を感じてため息をつく俺に、雪音はぐい飲みを持たせて、雪原を開けた。

「ほらほらー、早く飲もうよー。一角が帰るまでーめちやくちや待つたんだからー、待ちくたびれたー!」

「知るかよ、そんなの。お前が勝手に待つてたんだろが。あーくそつ、だいたい何でこんなに散らかしてんだつ、酒臭えし!」

別に綺麗好きつてわけじゃねえが、そこいらに酒瓶やら、酒のつまみやら散らばつてるのは気になる。つーか、俺があくせく働いてる間、こいつが俺の部屋で勝手に盛り上がったのが、心底むかつく。

「まーまー、気にしない気にしない。後で片付けるよー」

注ぎ終わって瓶を抱えた雪音を、俺は睨みつける。

「お前、出入り禁止。もう絶対来んな」

我ながら険悪な表情をしたと思うが、雪音は、

「えー、やだー、つまんなーい。そんなことより一角、あたしにもちよーだいー」

ぐい、と瓶を俺に押し付けて、得意げに盃を差し出して、ほらほら、と催促する。

そんなことって何だよこの酔っ払い、もう十分べろべろじゃねえか。ぶつぶつ言いながら、俺は嫌々、雪音の盃に酒を注いだ。

透明な酒が、さらさら音を立てて、注がれていく。その様を嬉しそうに見つめる雪音は、今気づいたが、浴衣姿だった。こいつ、仕事終わってから、いっぺん部屋に戻って着替えてきやがったな。寛ぐ気満々かよ。

……っか、寛ぎすぎだろお前。帯が緩んでんのか、ふとした拍子に胸元が動いて、こっちが思わずびくっとするほど襟ぐりが深くなる。下手すりゃ、胸のふくらみさえ見えそうな……いやいや、それはやべえだろ、また妙な気になっちまう。

「いただきまーす」

顔が熱くなったのに慌てて、目をそらした俺の様子なんざ全く気がつかず、雪音はうきうきでぐい、と盃をあおった。喉を鳴らして飲み干した後、満足した様子で、うつとりため息をつく。

「んー、幸せ……やっぱあれだね、あたしと一緒に、名前に雪がつくものは良いねー。さいこーだーあ……」

「あほか。雪の字がついても、お前は全然さいこーじゃねえよ」

強いて雪音を視界から閉め出して、立てひざで雪原を飲む。俺にはちよつと上品すぎる味だが、良い酒だとは思う。が、普段なら舌鼓を打って飲むそれが、何でか今日は味がしない。

何だ、味もわかんねえほど疲れてんのか、俺は。雪音から瓶を奪う。ぐい飲み注ぎうとして面倒になった。一升瓶に口をつけて一気に煽る。ようやくじんわり、と雪原の味が口になじんだ。美味い。

「あー！ 一角、飲みすぎー！」

雪音が声高に叫んで、俺の手から瓶をさらった。半分ほどに減った中身を見て、いやー、と悲鳴をあげる。

「もーしんじらんなーい！ そこいらの安酒じゃあるまいし、あんな飲み方するなー！ 勿体無いー！」

「うるっせえな。文句あんなら帰れ、馬鹿」

「やだ」

「あ？」

「一角嫌いだから帰んない。言う事きかなーい」

「ああ？」

ガキかお前は。なに天邪鬼してんだよ。しかも意味わかんねえ、嫌いならなおさら帰れっての。

雪音は瓶を抱えたまま、逃げるように後ろへ下がる。酔ってるせいか動きが乱雑で、ずり、と浴衣が動いた。裾がめくれて、ふくらはぎが外に出る。

(うつ)

どっ、と鼓動が鳴る。

不意打ちで、しかも素足なんて普段見る機会が無いから、思わず息を飲んだ。

焦点がぶれた、ぼんやりした目。のぼせた顔。袖から出た肘。緩んだ胸元から覗く鎖骨。意外なほど白くて細い足。急に雪音の色んなところが、はつきり見えるようになる。

やばい、と思った。

疲れてるせいかな。酒を煽ったせいかな。それとも、今更二人きりだという事に気づいたせいかな。腹の底が熱くなって、蠢く。喉が渴く。こめかみで血が鳴る。手に汗がにじむ。

やばい。本気でやばい。

「……帰れ、お前」

俺は目を手で覆い、唾を飲み込んで言った。急に、部屋にこもった酒臭さに混じる、かすかな匂いが気になりだした。雪音の香か。

俺の部屋にはない、わずかに甘い匂いが、脳を刺激する。

「泊めるわけにや、いかねえんだから」

精一杯感情を抑えて、俺は言い捨てる。だが、

「えー、へや遠いからやだー、泊めてようー。明日こっから帰るからさー、いいじゃーん一角ー」

雪音は頓着しない。雪原を脇に置いて言い放った。至極明るい声で、何の心配もなく。

血管の切れる音が聞こえた。ぶち、つてのが。

「お前、いい加減にしろよ」

俺は、へらへら上機嫌で笑っている雪音の肩をつかんだ。

「ほ？」

雪音が間の抜けた声をあげた。きょとん、と目を瞬く間に押し倒す。

「え？」

床に倒されたのに、まだ状況が掴めていないらしい。雪音はぼんやりと俺を見上げる。そのぶれた視線が、妙に腹立たしかった。雪音に乗ったまま、俺は死覇装の上をばつと脱ぐ。

「ハ？」

意味が分からない、そう言いたげに雪音の目が点になる。だが俺は雪音の困惑を一切無視して、

「な、ンっ!？」

顎をガツと掴んで、口を塞いだ。

酔いが飛ぶ。問いかけようと開きかけた口が、こじ開けられて舌に侵入される。無理矢理舌をすくい上げられて、吸われる。

「っ」

ぬるりとした感触に強烈な違和感を覚えて、逃げようとしたけど、一角の手が顎をとらえて離さない。絡み合った唾液が口の端からこ

ばれる。長いか短いか、それさえも分からない時間、口の中をかきまわされた後、ようやく唇が離れる。

な、何？ 今、一体何が起きたの？

あたしは思考停止状態のまま、呼吸困難でせわしく息をつく。繋がって伸びた唾を舌で舐め取って、一角はこつちを睨み付けた。

「男の部屋に気安く入ってんじゃねえよ。馬鹿が」  
低い声で言う。

その声が、掛け値なしに本気だと悟って、あたしはようやくこの後の展開に思い至った。もしかして、これは……もしかしくても、アレですか！？

「い、かく、ちょ……つとお？！」

つばを飲み込み、冗談でしょ、と顔をひきつらせるが、一角はあたしの襟をひっぱって、首筋にかみつくような勢いで唇を寄せてきた。一角の手が浴衣の裾を割り、足をつかむ。一角の吐く息が、荒くなる。

「や……ちょ、一角、やめ！」

（男）

手で一角の体を押し戻そうとしても、びくともしない。

（男）

力が、体格が違いすぎて、抵抗出来ない。

（男、だ）

一角は、男だ。

まるで今初めて知ったかのように、その事実が目の前にたたきつけられる。

まるで一角が、知らない男になってしまったようで、恐怖に近い感情がこみ上げてくる。

怖い、嫌だ、と叫ぼうとしたその時。

チリッ。

耳の奥で、微かな音がした。

あたしは目を見開いた。体がこわばる。亀裂の入った時に鳴るそ

の音は、内と外両方からの圧力でチリチリチリ、とすぐに連続して鳴り響きはじめ、突然ど、と上からのしかかってきた重力で、更に高まる。

「く」

耳を聳するほどの音が、喉をつまらせるほどの酒の匂いが、目がつぶれるほどの灯台の光が、口の中に残る唾液の味が、全てが殴りかかってくるような強さで襲いかかってくる。

でも、いつもの状態であれば気にかからないほど些細なそれらよりも、更に密着した一角の存在は、膨大といって良かった。

一角の霊圧が、息が、体の音が、匂いが、その全てがあたしの感覚を覆う。とたん、足先から脳天まで突き抜けるような感覚が走って、

「あっ……!!」

つい唇から、息を含んだ声をもらしてしまった。

その声を耳の間近で聞き、俺は心臓が飛び出しそうなほど驚いた。雪音はさっきまで必死で抵抗し、俺の腕から逃れようとしていた。俺は、多分最後までそんな状態のまま、自分は雪音を犯すんだろう、こうなったらなるようになっちまえ、と思ってた。

それなのに、思いがけず良い反応が返ってきた。それが自分にとって望むべき状況だったにも関わらず、俺は心底ぎょつとして、凍り付いてしまった。

「……!!」

その機会を逃すまいと、雪音は勢いよく俺を突き飛ばした。あっけなく転げ落ちた俺を振り向きもせず、部屋を飛び出していく。

あ、と思った時にはもう遅い。雪音の足音はすぐに聞こえなくなってしまった。

床に投げ出された俺は、雪音を捕まえようと前につきだした手が格好悪くて、下に落とした。その手を見下ろし、掴んだ雪音の胸の柔らかさを思い出して、思わずわきわきと指を動かし、



「……何やってんだ、俺……！」  
次の瞬間怒濤のごとく押し寄せてきた後悔の波に、拳で床板をたたき割った。

\* \* \*

「は、は、は」

短く息をつきながら走る。深夜で人と会わないのが助かった。

もし今誰かと出くわしたら、明らかに襲われたと分かる着衣の乱れを指摘されて、答えに窮したろう。

いや、それよりも、もし今誰かと出くわしたら、相手がもたらす「音」や「匂い」に圧倒されて、倒れてしまう。

あたしは自分の感覚を襲う全てのものを、聞くまい見るまい感じるまいとしながら走り、走り、走って、ようやく自室へ飛び込んだ。バン、と音を立てて扉を閉め、その音と衝撃に押されて、床に倒れ込む。息がつけない。汗が滝のように流れていく、その一つ一つの感触さえはつきり分かって煩わしい。このままでは遠からず、何も出来ないまま意識を手放してしまう。

「う、く」

自分の中で鳴り響く声にさえたじろぎながら、あたしは腕で上体を支えて起こした。もう一方の手で、机の上に置いてある銀の棒を取り、握り込み、

「……戒つ……揺るがす世界を、掌握し、押しつぶし、新たなる一を爆ぜろ……縛道の三十二、過墜天！」

叫ぶ。と、あたしの周りで白の光が小さな爆発を起こして舞い散り、降り注いだ。光が爆ぜるほど、チリチリと鳴っていた音が止んでいき、開きかけていた口が閉じていき、それまであたしに覆い被さっていた世界の存在が退いていく。

跳ねる鼓動が、通常の脈拍に戻るまで、長いことじっとしていたあたしは、やがてのろのろと起きあがった。

「はあ……びつくり、し、た」

久しぶりに縛道がゆるんで、世界に「襲われた」事にも驚いたが、何が一番の驚きだったかって、一角だ。

「あいつ、あんなに、霊圧、強かった、の・ね……」

十一番隊三席なのだから、当然その霊圧も高いに決まってる。けど、これまで知覚してこなかったから、まさかあたしの縛道を揺るがすほどとは思わなかった。

というか、そもそも、酒を飲んで油断して、さらに一角があんなふうに押し倒してこなければ、ゆるむはずもなかったけど……

「って、う、わ、」

急に先ほどの事を思い出して、血の気が引き、ついで上がってくる。あたしは慌てて衣服の乱れを直し、真っ赤になった頬を押さえた。

「ちょ、も、どうしょ！ 何であんな事になるの！ って、いうか、あたし！」

そんな気なかったのに、縛道がゆるんだせいで、一瞬かなり感じちゃったし！ 普通、あれくらいであんな声出さないって！

「ああああああああああ、もーありえないって！！」

まざまざと快感の瞬間を思い出し、あたしは床につつぶして、絶叫をあげてしまった。

## 脱兎のごとく

「本っ当に、雪音はいねえのか？」

苛々しながら問うと、四番隊の女は怯えた様子でおどおどと俺を見上げた。

「は、はい、先ほど外へ出て行きました……どこにいるかは、ちょっと……。あの、もしお急ぎでしたら、探しにいきますけど」

「……いや、良い。邪魔したな」

チツと舌打ちして隊舎を後にする。

たまたまそこにいただけの隊員に当たったところで、意味が無いのは分かってたが、どうにも気分が収まらない。

（ちくしょう、雪音の奴。絶対、俺の事避けてやがる）

あの夜以来、俺は雪音と顔を合わす機会が無かった。

俺は仕事の合間を縫って、あるいは怪我をして、四番隊隊舎と総合救護詰所に何度となく足を運んだが、いつ行っても雪音は居なかった。どっかで仕事をしてるには違いないんだが、どうも俺が来ると、逃げるらしい。

隊員の連中もきつく口止めをされてるのか、あるいは本当に知らないのか、俺が雪音の行方を聞くと、決まって「知らない、どこかへ行ってしまった」と答えるだけで、役にも立たねえ。

俺は怒りのままに、ドンドン、と床板を踏みしめながら、廊下を歩いていく。

（少しくらい、話をさせろってんだ）

胸中でそう愚痴るが、雪音が逃げるのかもしれない、とも思う。そりゃ、自分を力尽くで犯そうとした男の話なんぞ、聞く価値もねえ、顔を合わせるのも御免だっけんなら、そう言われて当然だろう。

だが俺だって、自分でああいう展開を望んだわけじゃなかった。雪音に惚れてるとはつきり自覚しちゃった今、あんな事をやらかし

た自分に心底嫌気がさしていた。

俺は土下座してでも、雪音に許して欲しいと思ってる。いや、もし許してもらえなくとも、とにかくあいつに謝りてえ。

一時の感情にまかせて襲ったりしなきゃ、今頃いつも通り、あいつと口喧嘩でもしてただろう。情けない話だが、顔見られねえのが嫌だ。すっげー怒っててもいいから、あいつの顔が見てえ。

なのに、あいつは話さえさせてくれない。顔を合わせる事も出来ない。それが、腹立たしい。

（やっぱり手紙の方がいいのか？）

文机に座っては、白い紙を前に何を書いたらいいか、言葉が思いつかず、結局挫折してるんだが。そっぴやこないだ硯を割ってそのままだったか、と視線を何気なく動かした時、

「あつ」

俺は思わず呟いた。庭を挟んで向こう側の通路に雪音が居た。手に持った書類に目を落としているので、俺に気づいた様子はない。今なら、捕まえられる。

「おい、雪音！」

そう思った俺は、すぐさま雪音の名を呼んだ。静かな空間に俺の声が響き渡り、木に止まっていた鳥がばさばさと飛び立つ。

そんなにでかい声を出したつもりは無かったが、雪音はびくっと背筋を伸ばした。

一瞬、こっちを向くか、と思わせる間があいた後、しかしあいつは、いきなりダッシュで建物の中に逃げ込んだ。

「あつ、こら雪音、待ちやがれ！」

俺は手すりを飛び越え、反対側の廊下へ走った。

床板が割れそうな勢いで廊下に踏み込み、方向転換して雪音を追う。たまたま通りかかった連中が何事か、と驚いた顔で道を空ける中、雪音は一瞬だけ後ろを振り返り、スピードを上げた。

野郎、この俺から逃げ切れると思ってんのか！

あくまでも俺から逃げようとするその態度にムカムカして、俺も

足を速めた。瞬歩まではいかないが、かなりの速さで走り、どんな雪音との距離を縮めていく。

雪音はダンッ、と床を蹴って、角を曲がった。俺もその後が続いて、向こう側へ飛び出す。と、

「きゃあっ!？」

「うわっ!」

ちょうど行き会った奴と思い切りぶつかった。吹っ飛ばされて後ろの壁にぶつかり、目の前が衝撃でぶれる。相手は俺の勢いで弾き飛ばされ、床をごろごろ二・三回転はしてやっとなまった。

そしてしばらく沈没した後、くるくる目を回したまま顔を上げる。

「あ、あいたたた……あ、ああ……、ま、斑目さん、せき？」

「おま……、虎徹、か？」

俺とぶつかったのは、四番隊の虎徹だった。女にしては背が高く、わりとがつちりしてるから、俺とぶつかってもさほど飛ばされなかったらしい。

「悪い、怪我ないか？」

ひとまず近寄って、立つのに手を貸す。虎徹はくらくらするのか、頭をおさえたまま、大丈夫ですと答えた。

「び、びっくりしました……。どうしたんですか、三席。何か凄い勢いで走ってたみたいですけど、何かあったんですか？」

そう言われ、慌てて周囲を見渡すが、どこにも雪音の姿が無い。耳を澄ましても、足音はしなかった。

「お前、今雪音を見なかったか？ こっちに来たはずなんだけどよ、念のため聞いてみたが、虎徹はさあ、と頼りない様子で首を傾げた。

「私は向こうから来ましたけど、誰ともすれ違いませんでしたよ」「そうか……」

この廊下はまた壁がなくなっ、両側に庭が広がってるから、虎徹とぶつかってる間に、そっちのほうへ逃げちまったのかもしれない。あと少しで捕まえられたってのに、くそっ。

「悪かったな、虎徹。俺急いでるから、行くわ」  
俺は虎徹に謝って、廊下の先へ歩き出した。もしかしたらそつちで、雪音が捕まえられるかも、そう思いながら。

\* \* \*

ぺこり、と下げた頭を上げた私は、斑目三席が遠ざかっていくのを黙って見送った。

角を曲がって、足音がもう十分遠くなった、というところで声を出す。

「行っちゃったわよ、雪音」

と、屋根から影がドンツ、と落ちてきた。地面に着地した雪音はすぐに立ち上がって、

「勇音、ありがと。助かったわ」

顔の前に手を立てて感謝してくる。私は思わずため息をついてしまった。

「もう、びっくりした。どうしたの？ いきなり、斑目三席が来ても、あなたの事は言わないで、なんて。喧嘩でもした？」

前までは、喧嘩するほど仲が良いつて、雪音と斑目三席のような二人の事を言うんだろーな、なんて思ってたのに。

でも雪音は、

「別に何でも。あ、さっき頭打ってたでしょ、たんこぶできてる。お礼に治すわ」

私の頭に手をかざして、術をかけた。すうー、と痛みがひいて、ずいぶん気持ちが悪かったんだけど、はぐらかされたのは嬉しくない。

「雪音」

私にくらい相談してよ、そういう気持ちを声音に込めて言った。けれど雪音は、

「ほんとになんでもないから。じゃっ、またね」

斑目三席が向かった先とは反対方向へ歩いていってしまふ。

「もう、ゆきねえ……」

私は転がったせいで緩んだ襟を正して、もう一度ため息をついた。雪音はいつも自分だけで悩みを抱え込んで、頼ってくれないから、悲しくなる。本当に、水臭いんだから。

## 寒椿

夜。自宅に帰ったあたしは、庭に面した居室に腰を落ち着けた。手に、滅多に抜くことの無い斬魄刀が持つて。

「はあ。何か今日は疲れた……」

思わず独り言を言いながら、縁側に座る。

仕事が忙しかったからじゃない。むしろ珍しく緩やかな日で、花君とのんびりお茶をしていたくらいで、非常に落ち着いた時間を過ごしたのだ。それなのにこれほど疲れているのは、やっぱりあの追いかけてこのせいだろう。

（まさか、追っかけてくるとは思わないもんなあ……）

あたしはあの一件以来、一角を避け続けている。

彼が四番隊に来る気配がある時は必ず他の場所へ行くか、隊員にきつく口止めをして、隊舎内に隠れたりして、かなりあからさまに避けているので、一角も良い気分はしていないだろう。今日だって廊下で声をかけられて、とっさに逃げたのは悪かったと思う。

でも、そこで諦めてくれるならともかく、鬼気迫る雰囲気で追いかけてこられると、はつきり言って怖い。

何しろ相手は戦闘部隊・十一番隊の第三席だ。身体能力はあたしのそれを遥かに凌駕している。その一角に殺気だって迫ってこられれば、あたしが何としても逃げたいと思ってしまうたのも、仕方ないだろう。

「……………」

あたしは座布団の上に正座をし、鞘を払って斬魄刀を眼前に掲げた。久方ぶりに抜いた刀は露を帯びて、まっすぐな刀身が月の光に白々と輝く。我ながら綺麗な刀だと思い、そう思うからこそ、申し訳なさな胸が詰まる。

（ごめんね。いつも、使ってあげられなくて）

心中でそつと謝る。と、答えるように刃が僅かに振動した後、緩



やかな湾曲に変形する。そして、あたしの正面に白い獅子が姿を現していた。中空に座し、紅のつぶらな瞳でじっと見つめてくる。

「寒椿」

名を呼ぶと、寒椿は軽く尾を振った。そして、

『わしの事は良い。だが、このまま逃げ続けて、良いのか』

これまで話を続けていたかのように、ごく自然な調子で語りかけてくる。

「う、ん」

あたしは視線を落とした。良いとは思っていなかった。思っていなかったけど、

「……だって、怖いんだもの」

寒椿の静かで、確かな存在を感じながら、小さく呟いた。

『男だからか』

寒椿の問いに、首を振る。

「違う。ううん、それもある。だけど、それだけじゃないの」

これまで一角を男として見ていなかったから、あの時は本当に驚いたし、本気で怖いとも思った。けれど、あたしが一角から逃げてしまうのは、それ故ではない。

『力が、怖いのか』

「……うん」

あたしは小さく震えて目を閉じた。

そう。襲われたあの時に初めて知った、一角の霊圧の強大さが、恐ろしい。

霊力の強さは、すなわち戦闘力の高さを意味する。護廷十三隊最強の十一番隊で上位に位置する一角が、それに相応しい高い霊圧を備えているのは当然の事だ。

けどあたしは、知ってはいても、理解していなかった。

自分の霊圧を極端に制限し、霊圧知覚も鈍っているあたしには、どれだけ側にいても、一角の霊圧を感じ取る事が出来なかった。だからこれまで安心して、彼と付き合ってきたのだ。

『安心。油断、だな』

寒椿がこちらの思いを読み取って、否定してくる。あたしは情けない気持ちで、力なく頷いた。

「そうね。油断しすぎだった」

霊圧を制限する縛道は、あたしが自分でかけている。となれば、術の硬軟はあたしの精神力に依存する事になる。

普段の生活を送っているときは、それでいいのだ。多少気を緩めたところで、縛道を揺るがすような霊圧に触れる事などないから、問題はない。

だけど、一角の霊圧は、普通のそれではなかった。ただ単純に霊圧が高い、というだけではない。

戦闘を好む故か、生来のものかは分からないが、一角のそれは、触れるものを全て食らい尽くそうとするかのような、とても攻撃的なものだった。

あたしを押し倒した時、一角も気が高ぶっていたのか、妙に殺気だっていた。また、酒を飲んで油断していたあたしも、自然、縛道を緩めてしまっていた。

それゆえに、常より鋭く発した一角の霊圧は、縛道にひびをいれ、その封印を解きかけてしまった。

あたしが魂の奥底に沈めてしまうほど遠い昔、世界に襲われ、その恐怖故に命を落としたかけた、あの時の記憶を、まざまざとよみがえらせた。

「もしまた一角に近づいたら。もしまた、あんなことが起きたら。

今度は、縛道が壊れてしまいかもしれない。そうしたら、あたしは

……」

きっと、ここには居られなくなる。

言葉を飲み込み、あたしは俯いた。その事を思うと、背筋に冷たいものが走る。

数々の苦勞と人々への迷惑を積み上げて、やっと手に入れた、自分の居場所。悩む事もあれこれあるけれど、自分が自分として存在

してられる今。

失いたくはない。手放したくない。切にそう願っているから、それを壊しかねない一角の存在が、恐ろしい。

『だが、このままで良いのか』

寒椿が再度、同じ質問を口にした。赤い瞳があたしの、困惑した表情を映し出す。あたしは逃げるようにその視線を避けた。

「良くないよ。一角は、良い奴で。……友達、だもの」

一角のそばは、居心地が良かった。

あんな風に余計な気遣いなく、言いたい事を言い合える関係は、他に無かった。

ああいう事になった以上、一角がどう思っているか、もう分からない。だけど、少なくともあたしにとって、一角は大事な、大切な友人だ。

失いたくはない。手放したくない。彼のそばにいる事が、自分の中に恐怖を宿らせるとしても。

『なれば、選ぶが良い』

寒椿は静かに言った。

『己を選ぶか、かの男を選ぶか。何を選ぶにせよ、後は主の心の問題だ』

「心の問題？」

『左様。心が揺らげば枷は緩み、奔流となって溢れ出す。だが心が堅固なれば、主は主のまま生くるも出来る』

寒椿の視線は揺るがない。まっすぐな目は、何もかもを見通すように深遠で、穏やかだ。

「寒椿」

名を呼ぶと、獅子は獣の顔を和らげて笑った。立ち上がってあたしの前に頭を垂れ、

『信ずる事だ。主は主が思っているほど、柔弱ではない。儂の主であるが故に』

そのままふ、とかき消えた。後には、掌中で凜とした輝きを放つ斬

魄刀のみが残される。

「寒椿……」

その弓なりの刀身を見つめて、あたしは、く、と唇をかみしめた。寒椿の言葉は、泣きたくなるほど優しく体に染みいったが、胸中にはまだ不安が渦巻いて、苦しかった。

## 硝子細工

全部、欲しい。だから、壊せない。

\* \* \*

日が傾き、仕事を終えた連中が帰り支度を始める頃。飲み仲間達とわいわい騒ぎながら、道を歩いていたら松本が、道の向こう側を走っていく雪音の姿に気がつき、

「あ、雪音ー！　これから飲みに行くんだけど、一緒に行かない？」

口の横に手をあてて、声をかける。雪音は立ち止まるも、大きく手を横に振った。

「すみません、あたし宿直なんで！」

大声で返事を返して、走り去っていく。

「忙しそうっすね、雪音さん」

その姿を見送った檜佐木が言うと、松本は不満そうに唇を尖らせた。

「最近、付き合い悪いのよねー。前は残業の後でも飲みに来たのにさ」

「そっぴやそうだねえ」

同意した京楽隊長が、後ろを歩く弓親を振り返った。

「雪音ちゃん、三度の飯より酒が好きって感じだったのに、どうしちゃったの？　何か知ってる？」

問われた弓親は、髪を指ですきながら、ちら、と自分の隣に連れ立つ俺を見やった。

「さあ、知りませんよ。僕達も四六時中、彼女と一緒にいるわけじゃないですし。ね、一角？」

「……………」

声をかけられて、俺は眉間のしわを更に深くした。あからさまに不機嫌な俺の様子に、松本が「なによ、雪音が来ないからって、そう怒る事ないじゃない」とからかい半分に言ってきたが、返事に出たのは唸り声だけだった。

俺と気まずくなつてからというもの、雪音は飲み会に顔を出さなくなつた。飲むのも、皆で集まるのも好きだと言っていた雪音だから、急に参加しなくなったのは、やはり自分との事があつたせいかなと思う。

（くそつ。あくまで、顔合わさねえつもりかよ）

どんちゃん騒ぎを端で見ながら酒を煽り、俺は鋭く舌打ちする。隣に座つた弓親が、嫌そうに顔をしかめた。

「一角、そんな不景気な飲み方しないでくれる？　こっちの酒までまづくなるよ」

「うるせえな。嫌なら向こう行きやいいだろ」

「向こうは静かに飲めないから、嫌なんだよ。醜いものまで見なきゃいけないし」

興に乗つてか松本に乘せられてか、脱ぎ始めた檜佐木を拒絶するように、視線をそらす弓親。そうかよ、とそっけなく言い捨てた俺を見て、言う。

「そんなに気になるなら、会いに行けば？」

俺は、焼き魚を箸でほじくつた。

「……あいつは会わねえよ。どんだけ避けられてると思つてんだ」  
頭から尻尾まで、綺麗に骨を持ち上げると、口の中に放り込んでばりばり噛み砕く。

「だからって、いつまでもこのままじゃ、お互いすつきりしないだろ？　今回の件はどう考えても一角が悪いんだから、土下座でも何でもして、謝りなよ」

「だから、そうしたくても、あいつが俺に会いたがらねえって言つてんだろ?!」

いらつとして噛み付くと、弓親はとんだ骨の欠片を手でさえぎって、

「そんなの、一角が本当に雪音ちゃんに会いたい、謝りたいって思ってるなら、どうにでも出来るじゃないか。部屋に押しかけるなり、何なりさ。こんなところでうじうじしてるなんて、らしくないよ」

「……………」

俺は顔を背けて、箸を握り締めた。らしくないのは分かってる。普段の自分なら、さっき雪音を見た時に追いかけてって、捕まえて何が何でも話をしようとしていたはずだ。だが。

これ以上避けられ続けるより、面と向かって罵られた方がましだ、と思う気持ちと。

会って雪音に引導を叩きつけられるくらいなら、今のように避けられ続ける方がまだ、ましだ、と思う気持ちと。

その二つが心中で、激しくぶつかり合っている。

会いたい。けれど、会えば拒絶されるかもしれない。それが怖い。惚れた女であり、気の合うダチでもあるあいつを、俺は手放したくなかった。失いたくなかった。だから、今一步、踏み出せない。

「……………まあ、僕には関係ないけどね」

黙りこんだ俺の様子に、弓親はため息をついた。猪口を傾け、すいと飲み干し、

「でも、何もしないより何かした方が、後の悔いは少ないと思うよ。お互いに、さ」

静かな声で言う。

「……………おう」

俺は呟いて、魚を食べた。肝の苦い味が口の中に広がる。

\* \* \*

時間は、苛々するほどゆっくり流れていった。

昨日の飲み会から明けて、今日こそ雪音と話をしようと思った俺は、朝から落ち着きがなかった。気晴らしにと始めた部下との手合わせも、全員叩きのめして終わっただけで、一向に気分が晴れねえ。(何いらついてやがる、斑目一角。たかだか女一人に会いに行くだけじゃねえか、もっとドーンと構えてろ)

心中でそう自分を叱咤するも、そう簡単に落ち着ける訳もない。みっともねえと思いつながら、道場の上座に腰を下ろして貧乏ゆすりをしていると、

「あ……あのう、三席……」

青ざめた顔をした隊員が、ぶるぶる震えながら声をかけてきた。目を向けたら、そいつはびくつと大きく震えて後ずさる。俺の顔がよほど凶悪に見えたらしい。震え上がって声も出せない様子なので、俺は舌打ちして、

「何だよ。用があんなら言え」

ぶつきらばうに命令する。隊員は床板に額をこすりつけるようにして叫んだ。

「あ、ああああああの、よ、四番隊の鑑原が、三席にお会いしたいと来てるんですがっ！」

「……………。あ、ああ?!」

雪音は、道から外れた木の陰の下に立っていた。地面をえぐるように蹴って、足早に近づく俺に気づくと、改まった様子で向き直る。「ごめん、急に呼び出したりして。今、大丈夫だった?」

「……おう」

俺は言葉すくなく答えて、雪音の前で立ち止まる。

久しぶりに間近で見る雪音は、以前とは違って見えた。

憔悴しているとか、俺に対して嫌悪の表情を浮かべているとか、そういうマイナスの意味ではない。例えば、髪を軽く払うとか、躊躇うように目を伏せるとか、そういう何気ない振る舞いが、妙に女らしく見えて仕方がない。



雪音が変わったのか、自分の見方が変わったのか。どちらだろうと考えて、まず後者だろうな、と思う。

雪音がそこにいる、というだけで、体の霊子ひとつひとつがざわめき、鼓動が早くなる。落ち着け、と言い聞かせながら、あの夜奪った唇に目が吸い寄せられて、釘付けになる。

やべえ、今すぐ抱きてえ。

こんな時に、昼日中、野外で考えるような事じゃねえのは分かったが、これまで我慢してきた分、箍<sup>たが</sup>が外れちまったみてえだ。俺は雪音へ手を伸ばしそうになって、慌てて止めた。ここで手を出したら、本気で止められなくなる。

中途半端なところで固まった腕を、何とか下ろそうと四苦八苦していたところで、突然、

「ごめん！」

雪音が勢い良く頭を下げた。

「……………は？」

虚を突かれて、思考が停止した。凍りついた俺の前で、雪音は頭を下げたまま、早口にまくしたてる。

「あの時の事、部屋上がり込んだり、無茶言ったり、その後避けまくったり、その……色々、すつごく無神経だった。

こんな事、謝って許されることじゃないかもしれないけど、どうしてめちゃんと言いたかったの。本当に、ごめんなさい」

「……………おま………ちょ、待て雪音、お前何言つてんだ?!」

立ち直った俺はぎょつとして、雪音の肩を掴み、上体をぐいと押し上げた。だが、手の下でびく、と雪音の体が震えるのを感じ、間近に迫った顔が強張るのを見て、慌てて離れる。

「な、何でお前が謝るんだ、悪いのは全部俺だろ?! 部屋上がり込むとか、そんなんでもいいっつーか、気にしてねえよ。あれはとにかく俺が、その何だ、あぁっと、機嫌悪くてキレただけで、お前は全然悪かねえよ」

一部嘘だと思いがら言つと、雪音はでも、と俯いた。強張った

頬がすっ、と赤くなる。

「でもあたしもお酒入ってたとはいえ、無用心だったから。その…、ああいう事になっても、仕方ない状況ではあったと思う、し」  
「……………」

頬を紅潮させ、もじもじ、と指を絡ませる雪音は、いつもよりかなり可愛らしく見えて、かなりやばい。しかも、見とれて言葉を失う俺を、とどめとばかりに上目遣いに見上げ、

「あの……でもね、あたし、いつまでもこんな風に、ぎくしゃくしてるの嫌なの。またあんたと喧嘩したり、飲んだり、遊びに行ったり、色々したいから、だから……仲直り、したいなって」

などと言い出したので、思わず俺は後ずさった。腹から胸にかけて、熱いものが駆け抜けて焦る。

（こいつ、わざとやってんのか？ 色々ってなんだ、色々って！ つかこれはあれか、告白か告白じゃねえのかどっちなんだ！）

感情的にはこのまま雪音を押し倒したいくらいだが、理性的に考えて言葉だけ汲み取ると、単純に仲直りをしよう、というだけで、他の意図が無いみてえだ。

雪音がその気になって、付き合おうというつもりで言っているのならともかく、そうでない場合、ここで手を出したら、永遠に絶縁しかねえ。

だとしたら、どう答えれば良い。ただのダチになんて、今更戻れるわけがない。だが、それ以下になるのはごめんだ。だが、だが。  
「……………」

進退窮まり、ぐるぐる考え込む俺をしばらく見上げた後、雪音は小さくため息をついて俯いた。

「……そうだよ、虫が良すぎるよね、こんな事」

そして顔を上げると、無理に明るい笑みを浮かべて、

「これからはもう、一角に迷惑かけないようにするね。仕事にお邪魔してごめんなさい。じゃあ」

そのまま身を翻した。その後ろ姿を見た途端、俺の胸にズキ、と鋭

い痛みが走る。

誕生日にやって以来、雪音がいつもつけていた簪が、今日は無い。雪音が、離れていく。手を伸ばしても、届かない場所まで。

「ばっ……ま、待て、行くな！」

俺はその場に膝をつくとき、がばつと土下座して、大音声で叫んだ。

「雪音、俺が悪かった！」

「い、一角、ちょっと!？」

驚いた雪音が駆け寄って、起き上がらせようと服を掴んだが、俺は頑として動かなかった。

「許してくれなんて、都合の良い事はいわねえ。けど俺は、お前を傷つけるつもりは無かったんだ。あの時のことは何もかも、俺が悪かった。もう二度と、あんな事しねえ！ 済まなかった！」

「一角……」

気持ちのまま言葉を进らせると、ここしばらく胸に居座っていたつかえが軽くなった気がした。許されなくてもいい、やっと謝れた、と息を吐くと、

「……いいよ、もう。顔上げて」

雪音が優しい手つきで触れてきたので、どきりとして起き上がる。雪音は俺の前に膝をつき、穏やかな表情で俺を見ていた。視線が合うと、目を細めて笑い、

「これでお互い謝ったから、もう帳消しって事にしようよ。全部忘れてさ、今日からまた友達になろう。ね？」

「雪音」

許して、くれるのか。あんな事した俺を。柔らかい笑顔に見惚れて、湧き上がる喜びに顔が緩みそうになる。が、雪音の言葉が引つかかって、今度は頬がひきつった。

（ちょっと待てお前、友達ってそれは結局もとの木阿弥って事か？ こっからお付き合い始めましょうとか、そういう話にはならねえのか?!）

盛大に突っ込みを入れたかったがしかし、嬉しそうにニコニコ笑

う雪音にこれ以上どうこう言えるはずもなく、

「お……お、おう。そうだな」

甚だ不本意なまま、そう呟く。軽くなつたはずのつかえが、再び重みを増してドン、とのしかかつてきたような気がして、俺は心底うんざりした。

## 鋼

あたしは、ちゃんと笑えただろうか。和解の言葉を口にして、あの人を拒絶しながら。

\* \* \*

「雪音ー！」

「うわっ！」

後ろからいきなり首に手を回され、悲鳴が出た。わさ、と金髪が耳にかかる。

「ら、乱菊さん？！ く、首締めてる締めてる！」

「んっふっふっ、きょ・う・こ・そ、飲みに行くわよー！」

そのままするずる引っ張っていかれそうになって、あたしは慌てて踏ん張った。

「ちよつと、あ、あたしまだ仕事がつ」

「明日明日！ 仕事は逃げないから！」

「い、いやー？！」

というわけで、強制的に飲み会参加になってしまった……。

「うーん……」

とりあえず隅っこの方に座ったあたしは、お酒がなみなみつがれた杯を見下ろす。久しぶりの匂いに喉が早くも乾き始めてるけど、しかし、飲み干すには躊躇してしまう。

そもそもあの時、縛道がゆるんだのは、際限なく飲んで、気をゆるみまくったせいだ。だからあれから、飲み会参加を自主的に禁止して、部屋でも飲まないように我慢してる。

まあこれまでガンガン飲みまくってた分、禁酒は相当きついんだけど、あたしは一度飲み始めたら、ぱーっと盛り上がったから

なあ。途中で止められるならともかく、そんなの絶対無理だし。

だからどうしようこれ、飲みたいけど、飲んだらぐだぐだになるよ、どうしようどうしょ。

「何してるの？ 雪音ちゃん」

「へっ？」

悩んでるところに急に声をかけられて顔を上げると、弓親があたりを見下ろしていた。前を横切り、とんと横に座って、

「飲まないの？ それ」

こちらの手元を指さしてくる。ええっと、とあたしは曖昧に首を傾げた。縛道の事は話せないけど、飲んべえのあたしが飲めない理由で自然なのって、何かあるかな。

「……………」

不自然に落ちた沈黙の間、じ、とあたしを見ていた弓親は、猪口にとつくりを傾けながら、

「今日は一角が居ないから、酔っても他の人が送ってくれるよ。そう、用心しなくても良いんじゃないかな」

淡々とした口調で言う。

「…………え」

一瞬意味が分からなくて目を瞬いたあたしは、間を置いてから気がついて、慌てた。

「え、違う、違う違う！ 一角関係ないし！」

「そう？」

弓親はく、とあおって、息を吐き出した。

「雪音ちゃんが飲み会来なくなったのは、一角と一悶着あったせいかと思ったけど」

う。まあ。それは……全くの無関係、ではない。縛道がゆるんだもう一つの原因は、一角だし。だけど、さっき考えてた事の方が主な理由だったから、あたしは手を振った。

「違うわよ。このところ仕事忙しかったし……それに、ほら、あたし前から飲みすぎだったから、隊長に控えなさいって怒られちゃっ

てね」

うん、これは本場で、嘘じゃない。建前としては十分と思わず息をついたら、弓親は流し目でこっちに視線を送ってきて、

「雪音ちゃん。一角の気持ち、分かってるよね」

辺りをはばかりように低い声で呟く。

「！」

不意の言葉に、思わず背筋が伸びてしまった。見返したら、弓親は無表情だ。

「一角から仲直りの話聞いたけど、狡いと思うよ。一角の気持ち無視して、友達のままでいよう、なんてさ」

こっちの心の中まで全部見通すような鋭い目が、あたしを見ている。あたしは凍り付いたように、その目を見つめ返す。

「分かってて、いつまではぐらかすのかな。それとも、この男は自分に惚れてるって、優越感に浸っていたいの？ 何を言っても何をしても、一角なら傷つかないし、裏切らないと思ってる？」

「……違う、わよ」

ぐ、と齒を食いしばって、あたしは弓親の視線から逃げた。杯を握りしめると、手の震えでさざ波が起きる。

弓親の言う事は当たってる。

押し倒された上、あんな目で見られれば、一角があたしの事をどう思ってるかなんて、すぐ分かる。一角が土下座した時、どれだけ真剣に向き合ってくれてるのかも伝わってきて、正直嬉しいと思う気持ちもあった。

だけど。だけど、あたしは。

「……怖い」

言葉を落とすと、弓親は猪口を持った手を下ろして、

「一角が？」

問いかけてくる。ああ、寒椿がしてきた問いを、またされている。なら、同じ答えを返すしかない。あたしは顔を歪めて笑った。

「違う、自分が」

一角がどうこう、じゃない。

「一角がいい男だと思うから。だから、駄目なの」

ただ、あたしが。こんなに弱くて、自分の事さえどうにも出来なくて、あがいているだけのあたしが、

「あたしが、一角に相応しくないの」

弓親は、あたしの足りない言葉から何か察してくれたのか、それ以上何も言わず、そばから離れていった。

あたしは壁にもたれかかり、深く息を吸い込み、はき出した。ざわざわと騒がしい店の中、一人だけ音のない世界に迷い込んだように、耳が遠くなる。

手放したくなくて、近づきたくもなくて、だから友達でいようなんで、都合の良い申し出。やっぱりあのまま、会わずに縁が切れるのを待っていたほうが良かったのかもしれない。

もう、誰の手にもすがらず、生きていけると思っていたのに。

あたしは手の中の杯を見下ろし、それを静かに卓の上に置いた。

もう、飲む気分では無くなっていた。



## カレイドスコープ

日々忙しい仕事の合間、たまたま空いた時間があつたので、雪音は休憩がてら、救護靴の整理をする事にした。

靴の中身を机の上に並べ、量や質のチェックをしながら、足りないものを足し、古くなったもの・交換する必要があるものを脇にしておく。

そうして手を動かしながら、しかし思考はいつしか別のところへ飛んでいってしまう。

『分かってて、いつまではぐらかすのかな』

昨夜、弓親が言った言葉を思い返して、雪音は思わず顔をしかめた。

『この男は自分に惚れてるって、優越感に浸っていたいの？』

（そんな事、ない）

一角が自分に惚れてるとか、惚れていないとか、そういう事が問題なのではない。

（ただ、怖いだけ）

自分の枷が外れた時、何が起こるか分からない、それが恐ろしい。寒椿は雪音の恐れに対して、心の有り様だ、と言った。心が強ければ、雪音は雪音の思うように生きていけるのだと、その強さを持つ己を信じよ、と。

だが、どうして自分を信じることなど出来るだろう。あの記憶を思い返すだけで、恐怖のあまり震えてしまうような、こんな弱い自分を。

『何を言っても何をしても、一角なら傷つかないし、裏切らないと思ってる？』

そんなふうに思っていない。

友達になろう、と言った時、ありありと失望の表情を浮かべた一角の顔が忘れられない。一度でも、男と女になって対峙した以上、

一角が雪音に惚れているのなら、そこから先の展開を望むのも当然だと思う。

だが、雪音には出来ない。

いつまた、一角の霊圧を受けて縛道が外れるかと怯える雪音に、一角の好意を受ける覚悟など無い。

（やつぱり、駄目だ。こんな半端な気持ちで、一角と友達付き合いしていけるわけがないよ。一角に、悪い）

報いる気がないのに、側に居て欲しいなんて、我が儘だ。仲直りはしたけれど、これまでとは距離を置かなければ。そう思ったところで、

「……ん。鑑原さん！」

「きゃあっ！」

不意に大きな声をかけられたので、雪音は飛び上がってしまった。

「な、なに?!」

がばつと振り返った先には、雪音以上に驚いた顔で硬直した花太郎がいる。

「は、花君? 何、急に声かけないでよ」

「え、あ、す、すみません。あの、何度も声かけたんですけど、鑑原さん、気づかれなかったので、つい……」

花太郎は申し訳なさそうに肩をすばめた。名を呼ばれている事など少しも気づかなかった。雪音は、しまったと慌てて手を振る。

「い、良いわよ。あたしがぼーつとしてたのが悪いんだから。何? 仕事?」

「はい、あの、患者さんがいらっしゃってるので、診療室へ出て頂けませんか?」

「あ、はい、了解。ちょっと待っててもらって」

雪音は急いで救護用品を鞆に詰めなおし、それを手に持って足早に診療室へ向かった。がらつ、と扉を開け、

「すみません、お待たせし」

まで言って、固まる。

救護室の椅子に座って待っていたのは、一角だった。

「……おう」

雪音を見ると、一瞬虚をつかれて目を見開き、それからばつが悪そうに視線をそらす。

そのそらし方があまりにも露骨だったので、雪音はどきりとした。この間の、友達宣言で傷つけたせいで、機嫌を損ねたか。

居たたまれない気持ちになりながら、しかし一度跳ねた鼓動が、ど、ど、ど、と早いテンポで鳴り始める。

「あ、と」

顔が熱くなってきた事に焦って、雪音もまた視線を外した。急くように部屋の中に足を踏み入れ、

「け、怪我したの？」

早口に問いかける。一角は無言で頷いて、手を差し出した。

死覇装の袖を捲り上げた腕には、斜めに引つかき傷が走っていて、じんわりと血をにじんでいる。雪音が躊躇いながら一角の腕を取って、

「虚に、やられたの？ 浅いけど、長いわね」

問いかけたら、一角はおう、と短く答えたが、まだそっぽを向いていた。

やはり、怒っているのかもしれない。しかし怒るのも当然だ。雪音はきゅ、と唇をかみしめて、消毒液の蓋を開けた。脱脂綿にしみこませて、丁寧に傷を拭き始める。

「……………」

「……………」

部屋の中に、緊迫した沈黙が落ちた。雪音も一角も一言も話さないまま、治療だけがてきばきと進み、

「……はい。これで終わり。帰っていいわよ」

雪音の声を潮に、どちらともなく離れる。一角は居心地悪げに椅子の上でもぞつと身じろぎした。雪音は逃げるように背を向けて、片づけをしているふりをする。が、

「……あー、雪音」

「は、はい？」

びくつとして振り返ったら、まともに目が合って、雪音は軽く息を飲んだ。

細めた一角の目は、どこか切なげで、熱を帯びていて、言葉より雄弁に一角の気持ちを表しているように思えた。見つめていると、また鼓動が激しくなってきたので、狼狽して視線を落とす。

と、一角は短く息を吐いた。

「……もうしねえって言ったる。そうびくびくするなよ」  
「え」

「だから。もう、お前を怯えさせるような真似しねえっての」  
顔を上げると、一角は頭をぼり、とかいて立ち上がった。苦笑いに近い表情で雪音を見下ろし、

「友達、なんだろ？ 頼むから、普段通りにしてくれよ。ンな大人しいお前なんか、気持ち悪くて仕方がねえよ」

請うように言う。目は変わらず、優しいでさえあるのに、言葉はそれを裏切っているようだった。どちらを信じればいいのかと戸惑った雪音が、辛うじて「う、うん。ごめん」と答えると、一角は手を伸ばして、雪音の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「うわっ」

びっくりして声をあげる。一角はく、と笑って手を離れた。

「今日、風弦洞に昼飯食いに行くけど、お前も来いよ」

「は？」

「たまにや、昼に行くのもいいだろ。親父が、最近お前の顔見ないって寂しがってたぞ」

「あ……う、うん。分かった」

断る理由は無いので、小さく頷く。

「おう。じゃ、後で弓親と一緒に来るわ」

一角はそう言って手を振り、さっさと部屋を出て行ってしまふ。その背中を見送った雪音は、ぐしゃぐしゃにされた頭を無意識に

手で梳かし、しかしその指が簪に触れたので、動きを止めた。血の音が聞こえそうな勢いで顔が赤くなる。

（や、やだ、何で？）

距離を置かなければ。そう思っただけなのに、どうしてこんなにどきどきしているのだろう。こんな間違ってる。勘違いだ。あの目で見つめられると、胸が苦しくなるような気がするなんて、気のせいだ。

雪音は違う、違うんだってば、と呪文のように何度も言いながら、頭を抱えた。胸の動悸は、まだおさまらない。

廊下をどすどす歩いていた一角は、曲がり角で出てきた小柄な人間とぶつかりそうになった。

「あ？」

「あつ、わつ、す、すみません！」

手に持っていた包帯をいくつか落としながら謝ったのは、一角がここに来た時対応にあたった少年、確か花太郎という奴だ。一角はびき、と額に青筋を浮かべると、

「てめえ！」

がつ、と花太郎の胸倉を掴んだ。

「ひいつ?!」

包帯を押しつけて突進してきた腕をよける事も出来ず、花太郎はそのままに吊り上げられた。力任せに引き寄せられた先には、背後に炎さえ背負っていそうなほど凶悪な一角の顔。

「ぐっ、ぐっぐっぐごめんないー?!」

花太郎は意味も分らないまま、とりあえず謝ったが、一角はドスのきいた声で、

「てめえ……さっきの俺の話聞いてなかったのか？俺は雪音以外の奴を連れてこいっつったろうが……」

ぎりぎり、と締め付けてくる。ひいいい、と声にならない悲鳴をあげる花太郎。

「す、す、すみま、で、でも、他に出られる人が、いなくてっ」

「そんならそうと言え！ 今日という今日は、あいつの治療なんて受けたくなかつたんだぞ俺は！」

「きゃー！ーっ！」

そのまま勢いよく壁に叩きつけられる。恐怖のあまり少女のような悲鳴をあげる花太郎を、

「てめえのおかげで、俺あ心底居心地悪かつたんだぞこら、失神してんじゃねえ！」

まだ足りないとはかりに、がくがく揺さぶった一角だったが、

「ま、斑目三席！ 何をなさってるんです！」

騒ぎを聞きつけた伊江村三席が部屋から飛び出してきた。叱責しようとして、しかし一角のただならぬ様子にたじろぎ、

「う、うちの隊員が何か、失礼をしましたか？」

思わず低姿勢で尋ねてしまう伊江村。一角はじろ、と底冷えするような眼差しで伊江村を見た。

「けっ。何でもねえよ」

吐き捨てるように言つと、花太郎を放り出し、苛々した荒い足音を立てながら詰所を出て行く。取り残された伊江村は、

「や、山田！ 貴様一体、斑目三席に何をしたんだ！」

花太郎に鋭く問いかけたが、花太郎はくらくらする頭をようやく持ち上げたところで、答えるどころではなかった。うっ、と頭を抱えたところで、

「……あれ？ 香の匂い……？」

不意に香った匂いに、鼻を動かした。微かでも、詰所に似合わないきつい香りに、一体どこから来たものだろう、と首を傾げたが、

「山田ー！」

「ひいつ、すみません！」

伊江村の怒声が降りかかってきたので、そんなことはすぐ忘れてしまった。

\* \* \*

隊舎に戻ってきた一角の話を聞いた弓親は、深々と嘆息した。

「馬鹿だね一角、他の女につけられた傷を、雪音ちゃんに治してもらうなんて。だから、憂さ晴らしに遊郭行くのなんてやめたら、っていったのにさ」

「う・る・せ・えっ！ 雪音にはぜつつつたい言っんじゃねえぞ！」

「言えないくらいなら、行かなきゃ良いだろ」

青筋立てて念を押す一角に呆れて、弓親はもう一度、しみじみした口調で馬鹿だね、と呟いたのだった。

## 縁

十一番隊隊舎に戻ってきた弓親は、入り口近くをうろついている不審な人影に気がつき、足を止めた。

その人物は出入り口の前を行ったりきたりして、時折覗き込んで入るかと思いきや、くるっと身を翻して帰る素振りを見せ、しかしやっぱり足を止めて、未練がましい仕草で隊舎を振り返る。

（……雪音ちゃん？）

目をこらして人影を見分けた弓親は、何事かと眉を上げた。

このところ十一番隊に姿を全く見せなかった雪音が、隊舎前にいるだけでも珍しいのに、あんなに挙動不審では、いずれ柄の悪い隊員に絡まれてしまうだろう。

それでどうこうされるような彼女でない事は分かっているが、放っておいたら、ややこしい事になる。それにどうせ隊舎に入る入り口は、そこしかない。弓親は雪音の挙動に疑問を感じながら近づき、「雪音ちゃん。そんなところで、何してるのさ」

声をかけた。途端、

「ぎゃっ」

蛙をつぶしたような悲鳴をあげて、雪音が飛び上がった。必死の形相でこちらを振り返り、

「……ああ、弓親か。びつくりした……」

心底安堵して、大きなため息を吐き出す。ますます怪しい。

「話しかけただけで、随分な反応だね。何、うちに用があるの？」

それなら中に入ればいいじゃないか」

「う、あ、いや、その……」

雪音は赤くなったり青くなったり、首や手を振ったりと、ばたばた忙しなく動いてから、

「……そ、そうだ、弓親お願い！」

いきなりずい、と何か差し出してきた。



「？ 何、これ」

受け取ったそれは、和紙の袋に包まれた、手のひら大の包みだった。持った感じはかなり軽い。

「それ、一角に渡しておいてほしいの」

いぶかしげな弓親へ、雪音が顔の前で手を合わせて言った。

「一角に？」

その名前が出てきた途端、なぜ雪音がああも逡巡していたか、理解した。

雪音と一角はこのところ、かなりややこしい事になっている。

そのきっかけは一角が思い余って雪音を押し倒した事で、その後「友達として」仲直りをした方がいいが、お互い意識してしまい、以前のように気軽に話すことが出来ないらしい。

「一角に用なら、雪音ちゃんが直接行けばいいじゃないか。今なら昼寝でもしてる時分だよ」

ためしにそういつてみたが、雪音はやっぱりぶるぶると首を横に振った。白い頬にぱ、と朱が散る。

「い、いいの！ それ渡してくれるだけでいいから、よろしく！」

「あ、ちよつと！」

止める間もない。雪音は言いたい事だけ言って、脱兎の如く逃げ出した。瞬歩まで使ったの、鮮やかな逃げっぷりだ。中途半端に上げた手を下ろして、弓親はふ、と息を漏らした。手の中の包みを見下ろす。

（何だか知らないけど、直接渡したほうが、喜ぶと思うけどな）

だがそれさえも、今の雪音には相当難儀な事なのだろう。やれやれと呆れながら、弓親は隊舎に入った。

すれ違う隊員達の会釈を鷹揚に受けて廊下を歩いていき、一角の部屋へたどり着く。一角、と呼びかけて障子を開けると、畳の上に座布団を枕にして、一角が横になっていた。

「…… ああん？ 弓親？」

ちょうど寝入りばなだったらしい。とろとろと閉じかけた目が、ぼんやりと弓親を見上げる。弓親はその腹の上に、雪音から預かった包みをぼんと投げ置いた。

「？ 何だ……こりゃ」

「一角に渡してくれて頼まれたんだよ。雪音ちゃんに」  
「ああ?!」

雪音の名を聞いて、弾かれたように一角が起き上がった。包みを掴んで凝視し、弓親と見比べる。

「ほ、本当か？ あいつがお前に渡せて？」  
「嘘ついてどうするのさ」

隊舎の前まで来たが、中に入ろうとしなかった事は言わないほうがよさそうだと、弓親はすました顔で答えた。

一角はその表情を半信半疑で見据えた後、包みを開き始めた。綺麗な千代紙が無骨な手でびりびりに破かれていくのを、美しくない開け方だ、と顔をしかめる弓親の視線に全く気づかないまま、一角は中身を引きずり出す。

ぷらん、と垂れ下がったのは、絹を編んだ紐だった。幾重にも束ねた、かなり長い紐だ。落ち着いたえんじ色を地に、白い龍が空を飛ぶようにのびのびと身体を伸ばしているのが見える。

「下げ緒、かい？」

手元を覗き込んで言うと、らしいな、と一角は手の中で紐をくるくる回した。ためつすがめつ眺めた後、にやつき始める。

「うわ、何だいその顔。気持ち悪いな」

いきなりの変貌に、弓親は思わず身をひいてしまう。しかし一角は気を悪くする様子もなく、指に紐を絡めた。

「あいつ、ちゃんと覚えてたのか」

「は？ 何を」

「誕生日」

「………………。あ、そうか。今日一角、誕生日だったね」

本気で忘れきっていたので、弓親は間の抜けた声を上げてしまっ

た。一角がじろり、とこちらを見上げたが、強面もすぐ緩んでしま  
う。

「あいつの誕生日に簪やった時、礼するとか言ってたからよ、多分  
それだろ、これ。もう忘れてるかと思っただけだな」

「へえ……」

雪音の誕生日といえば、確か半年以上前ではなかったか。長年一  
緒にいる自分さえ忘れていた一角の誕生日を覚えていて、きちんと  
贈り物をするあたり、律儀な雪音らしい。

……いや、ただ単に律儀なだけ、ではないか。

「意味深だね、下げ緒なんて」

「あ？ 意味深って、どこが」

弓親が言つと、一角が疑問符を顔に浮かべてこちらを見やる。弓  
親はに、と口の端を上げた。

「君みたいにもいつも刀を持ち歩いてる人間に、刀につける下げ緒を  
寄越すのは、意味ありげだと思わないかい？」

まるで、いつも一緒にいたい、と言っているかのようじゃないか。  
言外にそう告げると、目を丸くした一角の顔が、すう、と赤くな  
った。まじまじと下げ緒を見つめると、改まった様子で正座をして、  
刀を引き寄せる。

「さっそくつけるのかい？」

「まあ……そりゃな」

もごもごと曖昧に答えるのは、照れているせいかもしれない。弓  
親は一角の様子に、くつと笑ってしまった。それを聞きとがめた一  
角が鋭い視線を向けてきたので、明後日の方向を向いて誤魔化す。  
（ま、雪音ちゃんの真意なんて分からないから、単なる推測だけど  
ね）

だが、雪音のあの様子からして、全く何の意味がないとも思えな  
いし、さほどの外れでもあるまい。

（これで二人が、結び付けられれば良いんだけど。……でも素直じ  
やないからなあ、両方とも）

これですんなり行くくらいなら、とつくに付き合っているだろう。  
弓親は縁側に腰掛けて、柱にもたれた。紐がこすれあう微かな音を後ろに聞きながら、ひっそり嘆息する。男と女は、特に一角と雪音は、本当に難しい。

## 犬もほかす

はあ、とため息が聞こえてくる。さつきから、連続して十六回目。僕が鏡の中の自分を見て、あまりの美しさにため息をつくのならともかく、一角が窓の外をぼんやり眺めて、物思いに耽るなんて、かなり気持ち悪い。

（まあ、一角がああなる理由は、大体決まってるけど）  
どうせまた雪音ちゃんがああしたこうした、どうだこうだで悩んでいるんだろう。

お互い素直じゃないから、二人はしょっちゅう衝突しては離れ、衝突しては離れを繰り返していて、一向に進展しない。それを端から見ている分には、犬も食わない喧嘩だなと笑っていられるだろうけど、何かあるたび、一角が僕に相談してくるから、とても面倒くさいのだ。

またその内何か言い出すだろうな、と思いながら雑誌をめくっていたら、十七回目のため息を吐いたところで、ようやく一角が口を開いた。

「なあ、弓親。雪音の奴、今好きな奴いると思うか」

「何？ 他の男のことでも話し始めたの？」

予想外の質問にびっくりして問い返すと、こっちに向き直った一角は、曖昧な表情で顎を撫でた。

「そうじゃねえんだけどよ。なんつーか……お前の目から見て、どう思うよ」

一角らしくない、妙に回りくどい言い方だ。何を聞きたいんだろうと思いつながら、僕は答えた。

「特にそーいうのは居ないと思うけど。と、いうより、雪音ちゃんは一角が好きなんじゃないの？」

「そ……、そうか！ お前もそう思うか！」

うわ、思いつきり身を乗り出してきた。暑苦しいよ、といったら

一角はすぐ後ろに引いたけど、顔を赤くして、落ち着きなくもぞもぞ動いてる。

「いや、なんかよ、俺の勘違いかと思ってたんだけどよ。ほら、あいつを押し倒して以来、なんかこう、前より距離があるなってーか避けられてるってーか」

「しばらくの間、思いつきり警戒されてたよね」

ずばつといったら、一角がぐっさり傷ついた顔をした。しょうがないじゃないか、本当の事なんだから。

いくら思い余ったからって、友達と思ってた男に襲われかけたら普通、女の子の方は注意するようになるよ。

「……まあ、何だ。一応仲直りさせてもらったとはいえ、もう希望はねえなと思ってたんだけど、よ」

あぐらをかいて一角はぽりぽり、と頭をかいた。顔の赤みが増してきてるから、見た目、気持ち悪い。男が赤面する様なんて、美しくないな。

「それがどうもこの頃、雪音の俺に対する態度が、変わってきた気がしてならねえんだよな。こう、もしかしてこいつ、俺の事好きなんじゃねえか、と思わせられるっつーか」

「あー、そう」

何だか脱力しちゃうよ。今更こんな事言い出すなんて、一角も相当抜けてる。恋をすると盲目になるっていうのはこういう事だっけ。ちよつと違うか。とにかくもう馬鹿馬鹿しくて、笑う気にもなれない。

呆れる僕の様子に気づいているのかいないのか、一角は真剣な様子で、

「俺が期待してるからそう見えんのかと思ったけど、お前がそう言うなら、間違いねえかもな。なら、今度こそ」

「だからってまた押し倒すのはどうかと思うよ」

「しねえよ！」

先んじて念を押したら、耳まで赤くなって否定してきた。あ、さ

すがにそこは懲りてるんだ。そりやそうか、雪音ちゃんにあからさまに避けられてたから、そうとう苛々してたもんね、あの時。

「そういう事なら、今度はもう少し慎重にアプローチしてみれば？  
まずは、雪音ちゃんの気持ちを確認するところから始めてさ」

「おう……そう、だけだよ」

「ばたばた、と赤い顔を手で仰いで、一角は悩ましげな顔になった。  
「確認つつたつて、どうすりゃいいんだ？ いきなり真っ向から聞いたんじゃ、引かれそうな気がするし」

「うわー。何か青い春みたいなさ言ってる人がいるよ。別に初恋というわけでもなし、何でも弱気なんだろうね。普段の勢いはどこへやらだ。」

「僕はいい加減にしてくれ、と思いながら、柱にもたれて雑誌のページをめくった。」

「別に言葉にしなくても、態度で示せばいいんじゃないの。例えばほら、さりげなく手を握ってみるとか、肩抱いてみるとか。」

「ま、いきなり肩抱いたら、びっくりして逃げられるかもしれないから、手からがいいんじゃない？ 触られて嫌じゃなければそのままだろうし、逆に嫌だったらすぐ逃げるだろうし」

「そうか、手が……。そうだな、それならすぐ分かるよな」

「自分の手を見下ろして、開き閉じしてから、一角は気合を入れるみたいにぐつと拳を作った。」

「よし、今度そうしてみるわ。ありがとうな、弓親」

「んー」

「何だか妙に目をきらきら輝かせている一角から視線を外して、僕ははるる、と柱をすべり、床に寝転がった。」

「本当に、僕はいつまで悩みと称したのろけを聞き続けなきゃいけないんだろう。とつとと結婚でもして、落ち着いてくれればいいのにな。疲れるよ、本当に。」

病氣にでもかかったみたいだ。自分で自分のことが、どうにも出  
来ない。

「はい、皆準備はいい？」

騒がしい居酒屋の中で、一際大きな掛け声をあげる乱菊さん。彼  
女が立つて場を見渡すと、皆手に持った杯を示して、飲み物がいき  
わたっている事を示してみせる。

「それじゃ、本日はお忙しい中、お集まりいただき有難うございま  
した。今年もいよいよ終わり、残してきた憂いは今日全部洗い流  
す事にして、今日は上司部下関係なく、無礼講でいきましょう。で  
は、乾杯っ！」

『乾杯！』

乱菊さんは、仕事中にはとても見られないほどいきいきとした顔  
で、乾杯の音頭を取った。皆は杯を掲げて唱和した後、思い思いに  
話し始める。

忘年会でいつもの飲み会よりメンバーが多い分、騒々しさも増し  
てみたい。あたりの喧噪は誰が何を話してるのか、分からないく  
らいだ。

杯の半分まで飲んだあたしは、ふうっ、とため息を吐き出した。  
久しぶりに飲むせい、少し含んだだけでも、じんわりと体に染み  
入っていくような感じがして、とても気持ちが良い。と思っていた  
のに、

「なによ雪音、その飲み方。もっとぐーっといきなさいって」

「うわ、乱菊さんっ」

乱菊さんが、不満そうに言いながらやってきた。まずい、このま  
まだとまた、一緒に大酒をかつくらって管を巻いていた以前と、同  
じペースで飲む羽目になってしまう。



「やー、ちよつと調子悪いんで……」

單純に飲むのを控えてると言っても聞かない人なので、曖昧に言っただけで、乱菊さんは、

「だーいじょうぶ、ちよつとくらい調子悪くても、飲みまくれば吹っ飛ぶって！ ほらほら、早く空けて！」

にこにこ笑顔で、ずいずい徳利を押し付けてくる。駄目だ、飲まされる。

しかたないので、あたしは一度だけ乱菊さんから杯を受けると、後は何やかんやと言いつつ訳をして、その場を離れた。徳利と銚子をもつて、隅の目立たない場所に腰を下ろし、一息つく。

「あ」

だけど、目を上げた先で一角と視線があつて、あたしは硬直した。つい顔を背けてしまったのは、一角を見ただけで鼓動が跳ね上がってしまうからで、やった後にしまったと思つたけど、もう遅い。

少しの間を置いた後、一角はずんずんこっちに歩いてきた。

「へ、あ？」

まさか近づいてくるとは思わなかったの、あたしは思わず間の抜けた声をあげてしまう。一角は目の前までやってきて、ちよつと迷うみたいな顔をした後、

「隣、いいか」

ぶつきらぼうに聞いてくる。宴会であたしと一角が席を並べて飲むのは、いつもの事で、あんな事があつたとはいえ、一応仲直りはしたんだし、断る理由も無い。

けど、あたしは言葉に詰まってしまった。

嫌、というより、困る。一角を見るだけで落ち着かないのに、隣で飲まれたら、なんというか、居たたまれなくなってしまう。でもそれをそのまま言うわけにはいかないし……とぐるぐるしてたら、

「……座るぞ」

むっとした表情の一角がどさつ、と勢いよく隣に座つたので、ついびくつとしてしまった。うわ、ちょ、近い。一角の死覇装の袖が、

こっちの腕に触れてるし。

「……………」

「……………」

そのまま沈黙。周囲はお酒が進んで騒々しさが増す一方だっというのに、ここだけ切り取られたみたいに静かだ。

お互い口が悪いから、いつも喧嘩ばかりしてたくらいなのに、何でこんなに居心地悪いんだろう。

いや、だから別に側にいるのが嫌だとか、そういうんじゃないんだけど、こう、ちょっと離れたいつていうか何ていうか……とか何とか考えて、距離を置こうと、もそもそ落ち着き無く動いた、その時。

畳についた手が、ぐっと握られた。

「！」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。ぱつと見たら、一角の手があたしの手をすっぽり覆って、握り締めていた。

「え」

何を、と一角の顔を見上げたけど、一角は前を向いて杯に口をつけたまま、こっちを見ようとしなかった。でも顔がちょっと、赤くなってるように見え……るよう、な。

（う、わ）

あたしも顔に血が上るのを感じて、目をそらした。お酒を初めて飲んだ時みたいに、急に鼓動が激しくなってきた、じっとり汗がにじんでくる。

口の中が乾いて、慌てて猪口を傾けたけど、辛口のお酒は余計に渴きを与えるばかりで、全然意味が無かった。

（あ、あほかあたし、たかが手を握られてるだけで、こんなに動揺してどうする！）

自分を叱咤して、目を閉じて一角の事を意識から締め出そうとしたけど、逆効果だった。かえって、まめのつぶれた固い手のひらとか、意外と細長くて、力強い指の感触が鮮明になって、ますます意

識してしまう。

い、居たたまれない、今すぐここを逃げ出したい！

そう思うんだけど体が動かなくて、息さえ苦しくなってきたような気がする。うう、このままだとあたし、倒れるんじゃないかなろうか、ときどきすぎて、めまいがしてきた。

(……はっ、いや！ 違う！ ときどきしてるんじゃないから！

予想外の事にびっくりして、それでどうしていいか分からないだけだから！

そ、そう、だって一角が手握ってくるなんて思うわけないし、っていうか飲み会で何でこんなことするのかとか、そうか一角酔ってるのね、酔ってるからなんかこう意味も無くやってみたって感じで、特に理由はないっていうか！)

もう完全にパニック状態になって、あたしはだらだら汗をかきながら、支離滅裂な事を並び立てて、必死に現実逃避に走ってしまう。このままだと、本気で意識とぶかも、と思った時、

「ゆっきねえ〜！ こんなところで、湿っぽくなにしてんのよう〜う！」

「へ、ぎゃー!?」

いきなり乱菊さんがドーン！ と抱きついてきたので、あたしは悲鳴をあげて後ろに倒れてしまった。がん、と思い切り床に頭を打ち付けて、目の前に星が飛び散る。

「う、うぎゅ……」

「ほらあゝ、まだ寝るには早いわよう、あたしと飲み比べしよ〜」

「の、飲み比べって……いた……お、おも……」

痛む頭に手を当てながら、乱菊さんを押しのけようとしたけど、「重たいですって、このあたしが重たいわけないでしょ〜！ 失礼な子には罰よ〜！」

乱菊さんはかえってきつくしがみついて、しかもあのおっきい胸をぎゅーぎゅー押し付けてくるので、圧迫されて息が出来なくなる。

「ちょ、乱、さ、くる、し……!」

「ああ……いいなあ……」

それを見ていた檜佐木君が、心底羨ましそうに、代わって欲しいとか思ってたような顔で呟く。

（あ、あほか！ 檜佐木君助けてよ、とりあえず！）

必死で押し戻しながら、あたしが心中で叫び、もがいてると、騒ぎを聞きつけた雛森ちゃんと日番谷君がやってきて、

「おい松本、他の隊の奴に迷惑かけるな」

「そうですよ、乱菊さん。ほら、鑑原さんつぶしてるから、起きて」

「いやーん、いじわるう！」

身をよじって暴れる乱菊さんを引き剥がしてくれたので、あたしはどつ、と息をついた。窒息して目の前ちかちかしたわよ、今。

「し、死ぬかと思った……」

「鑑原さん、大丈夫ですか？」

雛森ちゃんが心配げにあたしの背中を撫でてくれる。ああごめんね、と顔を上げて、あたしはまたどきりとした。

雛森ちゃんの後ろでは、乱菊さんが今度は日番谷君に絡んで、お酒を飲ませようと、無理強いしていたのだけれど、その向こうに居る一角が目に入っただのだ。

一角はじ、とあたしを見つめていた。その眼差しは怖いくらい鋭くて、真っ向から受けるには強すぎて、あたしは慌てて視線をそらした。

でも、乱菊さんの襲撃で一瞬忘れかけたけど、我に返ったら、一角の手の感触がまざまざと蘇ってきてしまう。

「鑑原さん、もしかして今、すごく酔ってます？ 顔真っ赤……お水、もらってきましようか」

「へ、う、あ」

あたしの顔を覗き込んだ雛森ちゃんに指摘されて、あたしはまず顔が熱くなった。やばい、駄目だ、落ち着かなきゃ。

「う、ううん、えっと、その、ちよっとお手洗い行ってくる」

「大丈夫ですか？ 一緒に行きますか？」

「いや、平気だから！ ごめん、有難う、雛森ちゃん」

あたしは自分でもわざとらしいと思うくらい、ばたばた手を振って立ち上がり、足早にお手洗いへ向かった。背中を向けたのに、まだ一角の視線向けられているように思ったのは、自意識過剰だろうか。

（違う、だから違う、一角は、友達！）

あたしは店の中を駆け抜け、他のお客さんやお店の人にぶつかりそうになりながら、そう強く言い聞かせる。

だけど気がついたら、さっき握られた手を、もう片方の手でぎゅく掴んでいた。手にはまだ、一角の温もりが残っているようで、なぜか無性に恥ずかしくて、仕方がなかった。

## 綻び 1

新年も過ぎて一ヶ月。

仕事かひと段落ついて窓の外に目をやると、屋内にいるのがもったいないくらいの青空が広がっていた。

「うーん……」

窓から身を乗り出していたら、勇音がなゝに、と後ろから声をかけてくる。

「何見てるの、雪音」

「いや、何かすっごい良いお天気だから。お昼、外で食べようかなあと思つて」

「あらいいわね。今日は暖かいし、きっと気持ち良いわよ」

「勇音は、まだ駄目？」

振り返ると勇音は、机の上にとっさり乗った書類を示して苦笑した。

「うん、無理ね。だから気にせずいつてらっしゃい。ここの手伝いはもう良いから」

「……じゃあ、お言葉に甘えて。また手伝う事あつたら声かけてくださいね、虎徹副隊長」

改まって退室を申し出ると、勇音はやだ、と身じろぎした。

「からかわないでよ、雪音」

「からかつてなんていませんよ。同僚とはいえ上司、しかも副隊長様ですから、公私の別ははっきりしませんとね」

反応が面白くて、真面目なふりをして言うと、勇音は顔を赤らめて、

「もう、良いから、早く行きなさい！……あ、そういえば。十番隊舎のあたり、梅が咲き始めてるわよ。どうせならあっちのほうに行ってみれば？」

梅、か。この好天なら、梅見のお弁当っていうのも、確かに良い

かもしれない。

「うん、そうするわ。それじゃ、お先に」

「はい、いつてらっしゃい」

あたしは勇音と手を振り合って、部屋を出た。

\* \* \*

炊事場に置いていたお弁当を持ち、隊舎を出て、十番隊隊舎の方へ歩き出す。二月にしてはうらかな日差しに誘われてか、外をふらついている人達が多いみたい。

お弁当を広げてお昼にしてる人、特に何をするでもなくぼうつとひなたぼっこをしてる人、芝生に寝転がって高いびきをかいている人……。このところ、詰所にやってくる患者も少ないし、何だか自分の仕事を忘れてしまいそうなくらい、平和だ。

（平穩っていいなあ……心が和むわ）

しみじみとそんな事を思いながら歩いていたら、不意に後ろからどん！ と強い衝撃がきた。

「ひあつ?!」

油断してたところだったので、あたしは思いっきり前につんのめる。

とつさに足を出して、転ぶのは何とかこらえたものの、衝撃で手から滑ったお弁当がどしゃ、と地面に落ちて、しかも結び目がゆるかったのか、包みがほどこけて蓋がはねとび、中身が見事に四散した。  
「あ、あぁっー!」

あたしは慌てて地面にひざをつくも、砂の上にとつ散らかったご飯は如何ともしがたかった。あああ、せっかく早起きして作ったのに……。がつくりと肩を落とした時、

「ゆつきー、おっはよー!」

「へ、や、やちる副隊長?!」

ひよい、とピンク髪の女の子が後ろから顔を覗かせてきたので、あ

たしはびっくりしてしまった。そ、そうか、飛びついてきたのは、やちる副隊長だったのね。

「あ。……ゆつきー、ごはん駄目になっちゃったの？」

相変わらずぷりていな顔を間近に見ることが出来て、あたしは顔が緩みそうになったけど、でも同時に、彼女のせいでお弁当が台無しになったというのも事実なので、困ってしまう。

「ええつと……」

どうしたものかな、と思っていたら、やちる副隊長はぴょん、とあたしの背中から離れて、ぺこり、と頭を下げた。

「ごめんね、ゆつきー。ゆつきー見つけたから抱っこしてもらおうと思ったんだけど、それでごはん落としちゃったんだよね。あたしがわるかったです。ごめんなさい」

「や……い、いえいえいえ！」

眉を八の字にして殊勝に謝る姿もまた可愛くて、あたしは盛大に手を振った。

「そんな、気になさらないで下さい！ これ事故だし、ちゃんと持つてなかったあたしも悪いんだし、そんな謝らなくても良いですよ！」

「でも、それゆつきーのおひるごはんでしょう？ ゆつきー、ごはんたべられなくなっちゃう」

「それは……」

まあ、お弁当は駄目になっちゃったけど、お昼なら食堂いけば済む話だし、そう大した問題では。

落ち込むやちる副隊長を見ていられなくて、慌てて言葉を継ぎ足そうとしたあたしを、しかしぱつと顔を上げたやちる副隊長が遮った。

「そうだ、ゆつきーうちに食べるにおいでよ！ 今日ね、剣ちゃんとお外でごはん食べるんだよ！」

「へ、更木隊長……と、ですか？！」

うわ、速攻ご遠慮申し上げたい。更木隊長と一緒にご飯なんて、



全くもって心とまらない。そう思って口ごもったけど、やちる副隊長はすっかりその気になっちゃって、

「それじゃ早く行こうよ、ゆっきー！ こっちこっち！」

「う、わっ？！」

手をとって、止める間もなく走り始めてしまう。ああちょっと待ってやちる副隊長、お弁当箱落としたままだし、心の準備があー！

## 綻び 2

……準備が整う前に、現場についてしまった。

あたしはあれよあれよという間に、十番隊隊舎近くの土手まで引っ張ってこられた。

勇音が言っていた、大きな梅の木の下で、先に来ていたらしい更木隊長が、どぶろくを抱えてすでに一杯やっている。その周囲には弓親と一角、それから元十一番の射場さんが行楽弁当みたいなのを広げて、ご相伴に預かってるみたいだ。

「剣ちゃん、ゆっきーね、一緒にごはん食べるのー!」

やちる副隊長はぴょんと身軽にはねて、更木隊長の肩に飛び乗った。更木隊長はそうか、とさほど興味のなさそうな声を漏らしてあたしを見、

「一杯やるか、雪音」

杯をずい、と差し出してくる。

「ええっと、その、ちよつと都合が悪いっていうか……」

心底ご遠慮したいんですが。そう思ってたあたしは口ごもったけど、  
「何じゃ鑑原、らしゅうない、遠慮すな。弁当特別に作らせたけえ、  
うまいぞ」

射場さんが、強面の外見とは裏腹に、気さくな調子で誘ってくれる。  
弓親も、

「そうだよ、雪音ちゃん。ここから見る梅は、とても美しいよ」

そういつてうつとりと梅の木を見上げる。でも一角だけは、

「……」

無言だった。杯に口をつけたまま、そのふち越しに、またあの鋭い視線をこちらへ向けてくる。

「え……っと」

その眼差しに困惑して、あたしはふいっと顔を背けた。本当は、更木隊長や一角がいるこの場から、一刻も逃げ出したかった。

特に一角を見ると、以前強く手を握られた時の事を思い出して、かあつと顔が熱くなつて、落ち着かなくなつてしまう。

だけど、こうまで誘われては断るに断れない。しかも悪い事に、特別に作らせたっていうお弁当は本当においしそうで、お昼を駄目にしてしまった身としては、ぜひありつきたいと思つてしまう。

「……じゃ、じゃあ、ちよつとだけ、お邪魔します」

逡巡した後は結局誘惑に負けて、あたしは射場さんの隣に腰を下ろしたのだった。

そんな風に、どうなる事かと危惧しながら始まつたお昼は、しかし意外と平穩に過ぎ去つた。

更木隊長とお昼なんて、苛々して駄目なんじゃないかと思つたけど、隊長はほとんど口を利かずにお酒を飲んでただけ。

ご飯を次々食べながら、終始途切れる事なく話をしていたのはやちる副隊長くらいで、弓親も射場さんもそう騒ぐタイプではないし、一角も口を挟まなかつたので、予想外に落ち着いた観梅の集いとなつた。

「……それじゃ、そろそろ失礼しますね」

何事も起きなかつたのにほつとして、あたしは食後のお茶を飲み干すと、それを潮に立ち上がった。

「ええー、もういつちゃうの、ゆっきー！」

こつちに背を向けてごろん、と横になつた更木隊長に寄りかかつていたやちる副隊長が、甲高い不満の声を上げる。うつ……そりや出来ることならあたしだって、やちる副隊長と穏やかな午後を過ごしたいけど……

「駄目だよ、副隊長。雪音ちゃんは忙しいんだから」

「そうじゃ、わがママをいつちゃあいけんよ」

後ろ髪引かれて足をすくませるあたしを見かねてか、弓親と射場さんが口ぞえしてくれる。でもやちる副隊長はぷーっと顔を膨らませて、

「えーやだやだ、ゆつきーと一緒に遊びたい！」

「わっ、危ないっ！」

ぽーんと跳んで突っ込んできたので、あたしは慌てて受けとめた。やちる副隊長はあたしにしがみつき、

「ゆつきー、またおままごとしようよ、あれ楽しかった！ あたしが剣ちゃんで、ゆつきーはあたしで、ばしばしたおすのー！」

「……それ、どんな遊びしてたの……？」

「いや、まあ……虚退治ごっこ？」

子供の遊びにしては、モデルになってる人とか、ちょっと笑えない……。

でも、やちる副隊長、おれはけんぱちだー、さいきょうのしにがみだー、とか言いながら刀振り回して、かなり楽しそうだったなあ。ちなみにあたしは、やちる副隊長の肩に手を乗せて、背中に乗っかるふりしてました。

「ねー、こんどは剣ちゃんもいつしよにやろうよっ」

「へ?!」

あたしが弓親に説明していたら、やちる副隊長がとんでもない事を言い出した。

「ゆつきーと剣ちゃんとあたしで、おままごとするの。こんどは、ぱばままごっこがいいな。剣ちゃんがあたしのぱばで、ゆつきーがあたしのままなの！」

「な……な、なななな何言ってるんですか、やちる副隊長！ おままごとはともかく、何でその配役?! いくら何でもその夫婦、おかしいから！ ありえないから！」

恐ろしい想像力から発したやちる副隊長の言葉に、あたしはつい焦って大声を出してしまった。すると、

「……うるせえな」

寝ていたはずの更木隊長が起き上がって、じろつとこっちをにらみつけてくる。うわ、人相悪。普通の子供なら、一発で泣くわ。だけどやちる副隊長は、勿論慣れてるんだろっ、むしろ嬉しそうに笑っ

て、

「剣ちゃん、これからゆつきーと一緒に遊ぼうねーっ」

弾んだ声で呼びかけてしまう。ごきごきつと首を鳴らして、更木隊長は胡座をかいた足に右肘をついた。馬鹿か、とか一言のもとに却下するか、と思いきや、

「そのままごとじゃ、雪音が俺の女の役をするのか」

「は、はあっ?!」

さらつとまたあり得ない事を言ったので、あたしは素っ頓狂な悲鳴をあげてしまった。

「い、いやいやいやいや、そんな身がもたなさそうな役、絶対ごめんです！ 断固拒否します！」

「まあ、一度見てみたくはなるね、そのおままごと」

「ある意味、おもしろい家族になりそうじゃの」

「そこ、他人事だと思つて無責任なこと言わない！」

適当な事をいう弓親と射場さんにビシッ、と突っ込みを入れるあたし。しかし、やちる副隊長がよじよじと上にのぼってきて、

「ええー、ゆつきーまま嫌？ やりたくない？」

息がかかるほどの間近であたしの顔を覗き込んできたから、あたしはつい口ごもってしまった。うう、ちよつとこれは反則だ、やちる副隊長可愛すぎて、断りの言葉が引っ込んでしまう。

「え、ええつと、ですね……」

それでも何とか抵抗しようと、もごもごしていたら、不意にぐいとやちる副隊長が後ろに退いた。

「え？」

「う？」

あたしとやちる副隊長、二人の声がかぶる。いつの間に近づいてきたのか、一角がやちる副隊長の襟首をつかんで、猫の子みたいにぶらん、と手にぶらさげていた。眉間にしわを寄せたその顔には、くつきりと不機嫌の色が浮かんでいて、思わずどきりとする。一瞬間を置いてから事態に気づいたやちる副隊長が、

「いやー、離せハゲピカー!!」

やたらめったら手足を振り回して暴れ出したけど、一角はまるで意に介さず、

「いい加減にしろよ、どチビ。こいつが帰るって言うてんだ、いつまでも駄々こねてんじゃねえ」

低い声でそういった後、あたしにしつ、しつ、と手を振る。

「ほら、行けよ。仕事あんだろ」

「あ……う、うん。有難う」

そっけない素振りに虚を衝かれて、あたしはぎこちなくお礼を言った。

「そ、それじゃ、失礼します。ご馳走様でした!」

ぺこっと頭を下げて、そそくさとその場を辞す。

### 綻び 3

びっくり、した。

並木道を一人歩きつつ、あたしはほう、とため息をもらした。

やちる副隊長が、更木隊長と一緒にいままごをしよう、なんて言い出したのも大概驚いたけど、あそこで一角が手助けしてくれるなんて、思いもしなかった。あの怒り顔を思い返すと、訳もなく居たたまれない気持ちになってしまう。

年末の飲み会以来、一角とは特に何も無かった。だけど会うたびに、あの何か言いたげな強い眼差しを向けられるから、あたしはまた少し、一角を避けてる。

一角が嫌いなわけじゃない。だけど、気詰まりだ。一角とはあくまでも友達でなきゃいけないのに、側にいるとちよつとしたことで気が動転してしまう。それじゃ、駄目なのに。

「何でよ、もう、一角の、あほ」

歩きながら、ぼろ、と独り言が口からこぼれる。ほとんど無意識のうちに発していたその言葉に、

「人をあほ呼ばわりすんな」

まさか、返事があるなんて思わなかった。

「?!」

ぎよつとして顔を上げると、青々とした葉を茂らせた並木道の中、一角が幹に寄りかかって立っていた。

「え……え、え？ な、何してんの、一角。何で、こんなところに」

あたしが後にしてきた花見の席に、当然残ってるものと思っていたのに、何で道の先にいるんだろう。一角は驚いて立ち止まったあたしを見、幹から体を離して、ずんずん近寄ってきた。たじろぐあたしの前までやってきて、

「話があるから、先回りした」

きっぱり、言い切る。

「は……なし？」

何の事だろう。ただ鸚鵡返しをするあたしに、一角は目を細めた。ためらうように視線をさまよわせ、ぼり、と頭をかいた後、ふーつと息を吐き出す。そしてようやく目線をあたしに戻して、一角は言った。

「お前が俺の事を今どう思ってるのか、知りてえ」

「えっ」

どきっとして体が震えた。

どう、思ってるか、なんて、そんな事。息を飲んで凝視していたら、一角の瞳にまた、あの鋭い光が浮かぶ。

「このところのお前見てると、俺は、……勘違いしそうになんだよ」  
ふ、と手が自然に伸びて、反射的に身をひこうとしたあたしの両腕をゆるく掴んだ。

「っ……」

「なあ、教えるよ。俺はお前にとってまだ、『友達』か？」

「そ、それは」

そうだ、と一言肯定すればいい。それでこの話は終わる。そう思ったけれど、声が出てこなかった。その言葉が、きつと一角をまた傷つけると思ったら、口にする事が出来なかった。

「……雪音」

「！」

凍りついたあたしを、一角はぐい、と引っ張った。前に引かれたあたしは一角の胸にどん、とぶつかって、そのまま腕の中に閉じ込められてしまう。

「い、一角っ……」

声を上げると、一角の腕に力がこもる。逃げられないほどじゃない、ただ心締め付けられるような、強さ。

ど、と大きな鼓動の音を立てたのが、あたしか一角か、分からない。筋肉の引き締まった胸にしっかりと抱きしめられて、全身火に包まれたように、かあっと熱くなる。



「雪音」

一角の低い声があたしの名を呼ぶ、それだけでくらくらめまいがして、鼓動が激しくなっていく。多分真っ赤になってるだろう顔を見られたくなくて、必死に俯いたけど、一角はあたしの顎に手をかけて、くい、と持ち上げた。

「あ……」

すぐ間近、さっきのやちる副隊長と同じくらい近くに、一角の顔がある。やちる副隊長の時は、可愛くて可愛くて抱きしめたくなくなけど、今は、息が詰まりそうなくらい、どきどきしてしまう。

一角の口から漏れる吐息が、顔に触れた。顎を捕らえる指に微かに力がこもって、一角の目が細まる。

まずい。このままじゃ、キスされる。逃げなきゃ。この手を振り払って逃げなきゃ。頭の中を駆け巡るその思いとは裏腹に、体は微動だにしない。

「雪音……」

ふ、と傾けた一角の顔が、もうほとんど間近に来て、

「……だ、駄目……」

あたしは弱々しい制止をしながら、つい、目を閉じてしまった。

ああ、もう駄目だ。唇に一角が触れる。

\* \* \*

……そう思ったとき、

「つるりんてんちゅー……!!」

「うごっ!？」

不意に少女の声が響き渡って、ドゴッ、と何だかやたら重たげな衝突音が響いた。

「え?!」

びっくりして目を開くと、今まで眼前にあった一角の顔がのけぞ

り、その上に足が乗っている。それを見上げて、あたしはあんぐり口を開いてしまった。

「な……や、やちる副隊長?!」

「えいえいえいえいえいえいえー！」

[illegible]

一角の上に乗ったやちる副隊長は、その場でどこかどかっと足踏みをした。一角は顔を何度も足蹴にされた衝撃で、そのまま後ろにばたーん、と倒れてしまう。

「ゆーっき。だいじょうぶだったあ？」

「わ、わわっ！」

一角の頭が地面につくより前に、その顔を蹴って跳んだやちる副隊長が、こっちの肩に乗ってきたので、あたしはよろめいてしまった。

「や、やちる副隊長、な、何ですかこれ……」

事態が理解できなくて尋ねると、やちる副隊長はあたしの背中に  
おぶさり、得意げに言った。

「つるりんがゆっきーにいたずらしてたから、せいばいしたの！」

「い、いたずらっで……」

どこの誰だ、そんな言葉をやちる副隊長に教えたのは。あたしはひく、と顔をひきつらせる。と、

「……てんめえ、このくそチビ……」

地面に倒れ伏していた一角が、足跡をいくつもつけた顔を上げ、ドスのきいた低い声で唸った。

「今いいところだったのに、邪魔してんじゃねえ！」

「つるつるのくせになまいき言うなー！ ゆつきーはやちるのままなんだから、いたずらしちゃだめなのっ！」

「うるせえ、黙れ、つるつる言うな！ あと雪音はお前のお袋じゃねえだろ！ 畜生、俺はもう堪忍袋の緒が切れたぞ、今日こそてめえを叩つ斬る！！」

「べーだ、できるもんならやってみなー、だよ。パチンコ玉になん

かつかまらないもんっ」

「あっくら、待ちやがれ！」

べーっと舌を出したやちる副隊長は、木に飛び乗ると、枝から枝へすごい勢いで移動し始めた。額に青筋を浮かべた一角は刀を抜き放ち、怒気をまといその後を追う。

「……」

取り残されたあたしは、呆然と二人を見送った。一角の罵声と、やちる副隊長の挑発が聞こえないほどに遠くなった頃、ようやく我に返って、

「あ……」

いつの間にか唇に指をあてていた事に気がつき、ぼ、と音が出そうなくらい赤くなった。

後少し、もしあそこでやちる副隊長の飛び入りが無かったら、あたしは、確実に、……一角とキスしてた。

（や、だ。駄目、なのに）

顔が、熱い。自分を抱きしめるように手を回したら、一角の太い腕の感触が蘇って、身体も熱くなる。

（だ……だ、め）

ぎゅ、と目を閉じて、胸の中にわき上がりつつある思いに、必死で抗った。

認めない。この気持ちを認めるわけには、いかない。認めたら、あたしは、あたしは……！

「っ……」

身を焦がすような思いは、冷たい恐怖に蝕まれていく。

あたしは瞳を開いて、唇をかみしめる。暖かな日差しが降り注ぐ中、指先が氷のように冷え、腕にきつく食い込んだ。

## 恋愛マニュアル

「あ」

「お」

廊下の角を曲がったら、雪音と鉢合わせた。

「お……おお」

「う……うん」

顔を見合わせて、お互い、意味のない言葉を交わし合う。俺は何を言っているかわからなくて、それ以上声を出せなかったし、雪音も視線を下げて、無言で立ちつくした。

前までなら、そのそぶりを見て、まだ俺の事避けてるのかと思っただろう。だが、今は違う。俯いた雪音の顔が少し赤らんでるのだから、ちゃんと見えてる。

（雪音……）

顔を見たら、つい唇に目が引き寄せられた。

この間、あのチビの邪魔がなければ、本当に後もう少しで触れるところだった唇。

あの時、嫌なら振り払えるくらいの余裕は残したのに、雪音は逃げなかった。どころか目を閉じて、受け入れるそぶりさえ見せた。（ってことは、あれだよな。雪音はもう俺の事、ダチじゃなくて、ちゃんと男だと思ってるんだよな。むしろ好きなんだよな？）

そう思ったら、俺は途端に顔が緩みそうになった。やべ、今すげー間抜け面してるぞ俺。

「あー……雪音、これから昼飯、食いにいかなえか？ その……二人で」

口の辺りを手で隠しながら、とりあえず誘ってみる。

「えっ」

雪音はぱっと顔を上げた。が、俺と視線を合わせた途端、きよときよと落ち着きなく目をさまよわせた。

「あの……えっと」

言いたい事は何でも言うこいつが、こんな風に口ごもるなんて、らしくねえ。つーか、眉を八の字にして困ってた顔は赤らんでいるせいで、嫌がつてるというより、照れてるように見える。俺の希望かもしれないけど。とにかく、もう一押しすればいけそうな感じだ。……行こうぜ」

「あつ」

だから俺は強引に腕を掴んで、軽く引つ張って、歩き出す。雪音は一瞬足をもつらせたが、そのまま大人しくついてきた。ちらっと振り返ったら、まだ困惑した表情のままだ。

でも……嫌じゃ、ねえんだよね？ その証拠に、草履を履く時に手を離しても、隊舎を出て店に向かうようになって、素直についてきてんだから。

「時貞で、いいよな。近えし」

「う……ん」

一緒に道を歩きながら、目を合わせないで躊躇いがちに頷く雪音。  
「……」

（いけるか。いける、よな？）

俺は首の後ろをぼりぼりかいた後、思い切ってその手をそのまま、雪音の肩に回した。

「！」

ぐつと肩を抱いて引き寄せると、雪音がびくつと震えて、身体を強ばらせた。目だけ動かして見下ろしたら、雪音は柔らかそうな頬をぱあっと赤らめて、恥じらうようにまつげを伏せた。それを見て、俺の顔も熱くなる。

（うわやばいってお前、何だその顔、すっげー可愛いんだけど）

何だよ、普段あんだだけ口うるせえくせに、どうしてこんな初々しい反応すんだよ、意識しちまうじゃねえか、つーかこの間の続きしてえだろつが。

「雪音」

「ひゃっ……ちょ、っと、近い……」

ぴた、と足を止めて前に回り込むと、赤面した雪音は顔を背けた。その顎を掴んでこっちを向かせて、

「……いい、よな？」

「……っ」

目をのぞき込んで問うと、雪音は更に赤くなって縮こまった。口が微かに開いて何か言おうとしたが、声が出ないのか、何も言葉にならない。

（よし、これならいける！）

心の中でガツポーズしながら、ぐ、と顔を近づけようとした……

…時、

「あ、一角さん！　ちょうど良かった、聞いて下さいよ！」

「うおっ！」

背後からでけえ声がかかって、俺はがくつとこけた。がしがし足音をたてて近づいてきたのは、恋次の奴だ。

「へへっ、俺、六番隊にいく事になっ」……………恋次イ……………

……………「おわっ?!」

振り返った俺を見て、へらへら笑っていた恋次が顔を引きつらせて後ずさった。どいつもこいつも、何でいつも良いところで邪魔しにきやがるんだ！

「な、なんすか、俺なんかしましたか？」

その通りだ馬鹿野郎！　と怒鳴りつけようとしたら、雪音がすると俺から離れて、恋次のほうへ駆け寄った。

「いやっ、阿散井君、何でもないわよっ！」

「あ、あれ、居たんすか、雪音さん」

俺の影になって見えなかったのか、恋次は雪音を見下ろす。雪音はぱたぱた、とせわしなく手を振った。

「う、うん、居たの。えっと、何？　さっき六番隊がどうって言うてなかった？」

「え、ああ。あの俺、今度の異動で六番隊に行く事になったんす。

正式な任官はまだなんすけど……なんか、副隊長とかで」

「えっ……副隊長?! うわ、大出世じゃない、すごい! 良かったね、おめでとう!」

「あ、有り難うございますっ」

「いつも頑張ってたもんね、阿散井君。そうだ、これからご飯食べに行くんだけど、せっかくだからおこつてあげようか」

「ああ?!」

雪音が妙な事を言い出したので、俺は思わず苛立ちの声をあげてしまった。ちよつと待て、俺あさつき『二人で』って言っただろうが!

「え、それは……ええつと、それは……その」

俺の思いつきり不機嫌な顔を見たせいか、恋次が顔を引きつらせる。だが、俺に背を向けた雪音はそんな事に気づいてないのか、恋次の腕に触つて……つて、何だよその妙に親しげな態度は!

「時貞行くところだったの。お魚大丈夫だね、阿散井君」

「え、ええ、まあそれは……。あの、一角さんと一緒に、なんですよね?」

どす黒い殺気を放つ俺が気になるのか、若干青ざめた恋次が俺と雪音を見比べる。雪音はちらつと俺を見て、何とも言えない表情をしてから、

「うん、そう。……行こうよ、一角。後輩の栄進なんだから、お祝いしなきゃ」

普段通りの声を装つて俺に声をかけてくる。

「……おう」

俺は心中で不満の声を盛大に上げながら、それでも渋々、喉の奥から同意のうなり声を漏らした。

「……ああつ、わっかんねえな、畜生」

どつ、と勢いよく道場の床に座り、手ぬぐいで汗をぬぐいながら唸ると、

「どうしたの、一角」

書類を手にした弓親が入ってきて、声をかけてきた。俺にぶったおされて、救護室へ運ばれていく隊員どもを横目に見て、

「何か今日はいやに荒れてるね。嫌な事でもあった？」

少し距離を置いた場所に座る（汗くせえから近くは嫌だと思つてやがるな、こいつ）。どうもこうも、と俺は木刀で苛々と床を叩きながら、昼の一件を弓親に話した。

「ふーん……それで？ 何が気に入くないのさ」

「ああ？ ンなもん決まってるんだろ、雪音だよ。あいつ絶対俺に惚れてんのに、何で他の奴に愛想ふりまきやがるんだ」

「愛想ふりまくって、恋次相手でしょ？ 雪音ちゃんは元々、恋次の事を結構可愛がってたじゃないか」

「だからつてよ！ 二度もちゅーしかけた俺の前で、なれなれしく男の腕さわったりするか？！」

「するんじゃないの、別に。……うわ、その顔不細工だよ、一角」

ほっとけ、くそつ。惚れた女が他の男にべたつくのを、黙って見過ごせるか。

「……まあ、前後の関係から考えてみたらあれかな。雪音ちゃん、照れてたんじゃないの」

むすつとして黙り込んだ俺を宥めるように、弓親は言う。

「一角の話聞いていると、雪音ちゃん、結構シャイみたいだからさ。

キスしかけたところに恋次が来たから、恥ずかしくて、一角から教えて離れたんじゃないのかな」

「……だとしてもよ、恋次まで飯に誘う事ねえだろ」

結局あの後、三人で食う羽目になって、俺は心底がっかりしたんだぞ。つーか、多分怒り丸出だったろうな、恋次の奴、飯が喉を通らないって面で食ってたから。

「うーん」

弓親は首を傾げ、顎に手を当てて考え込んだ。

「……もしかして雪音ちゃん、段階踏んで付き合いたいと思ってる



んじゃないの？」

「あ？ 段階？」

「うん。ほら、一角と雪音ちゃんって、付き合いましょって告白して、始まったわけじゃないだろ。一足飛びで」

「……まあな」

最初は友達、次は俺があいつを押し倒して、ぎくしゃくしちまつたからな。

「だから一度リセットして、今度は一からやり直そうって思ってるんじゃないかな。今日のも、いきなりキスされそうになったから警戒して、間に恋次を入れたとかさ、ありそうだと思うけど」

「今更、警戒なんてする必要ねえだろ。何だよ、一からやり直すって」

「がつついてキスするのは、まだ早いってこと」

「何でだよ、あいつだって嫌とは……」

「言っていないかもしれないけど、良いとも言っていないだろ？」

「ぐっ……」

それは、確かに。今日だって言葉に詰まって、固まってたしな。

「雪音ちゃん、あれで真面目だからさ。いくら好きでも、そういうところは、きちんとしたいんじゃないの。だから、一角も雪音ちゃんと付き合いいたいなら、もう少し相手に合わせてみたら」

「……何すりゃいいんだよ」

あいつに合わせてって言ったって、雪音が何してえかなんて、わからねえ。困惑して尋ねると、弓親は髪をさらりとかきあげて、  
「そんなの自分で考えなよ。ま、たまには健全なデートから始めるつてのも、いいんじゃないかな」  
すつと立ち上がった。

「おい、弓親……」

「ああそうだ、忘れるところだった。この書類、字間違ってるから、提出し直して。今日の定時までだよ」

弓親は俺が呼びかけるのを無視して、ずい、とこっちの鼻先に、

持っていた書類を差し出してくる。げつ、何かすげー赤入ってるぞ、これ。

「何だよ、どうせチェックするなら、お前が直して出しゃいいだろ。いつもそうしてんだし」

「駄目。いい加減書類の書き方くらい覚えてもらわないと、僕の負担がちつとも減らないんだよ。それに、仕事も女も、手を抜くところな事にならないよ」

「うっ……」

そんな風に言われたら、ぐうの音も出ねえ。

「じゃ、宜しく」

弓親はひらひら手を振って、すたすた道場を出て行った。書類を両手で持った俺は、

「……ちっ、しょうがねえな」

深々とため息をつくのと、腰を上げる。

弓親の指摘はいつもの的を射て、逆らいがたい。特に雪音の事に関しては、第三者の視点で為になる意見を相当聞かせてもらってる。

あいつが、段階を踏んで行けというなら、それは間違いじゃねえんだろう。

なら面倒くせえけど、もう二度と雪音を傷つけないと約束したのもあるし、ここは慎重にいくか。しっかし……

「健全な、でえとねえ……」

何だよ、健全なつてのは。何すりゃいいんだかわかりやしねえ。居酒屋行っくつてのは駄目なのか？

## 鑑原 1

「……はい、地獄蝶の返却、承りました。現世任務、お疲れ様でした。斑目三席」

恋次に似た刺青を額に入れた（流行ってんのか？ あれ）六番隊の奴が、俺の周囲を飛んでいた地獄蝶を紐につなぐ。おう、と応えて手を振り、俺は部屋の出口に足を向けた。

現世での任務を終えた後はいつも、良い酒が良い女が欲しくなる。前までなら、遊郭に行けばそのどちらも事足りたが、今は無性に雪音の顔が見たかった。一週間の短期駐在でも、あいつの顔が見られないのは落ち着かなかった。

（とりあえず、飯誘ってみるか。そのまま夜まで一緒にいられりや御の字だが、そうはいかねえんだろうなあ）

健全な付き合いをしろと弓親に忠告された事だし、そこは自重しなきゃな、と顎を撫でたところで、何かが視界の隅にひっかかる。

何気なくそちらへ視線を向け、俺はあ、と動きを止めた。俺が出てきたばかりの六番隊隊舎に入っていく女、背中しか見えなかったが、頭にあの簪をつけてる女なんて、一人しかいねえ。雪音だ。

（ちようど良いじゃねえか。もしかして俺が帰ってくるの、待ってたか？）

まさかそんな都合のいい事、と思いながら、俺は踵を返した。再び隊舎の敷居をまたいで入ると、部屋から出てきたさっきの六番隊員が、訝しげに俺を見た。

「あれ？ 何かお忘れ物ですか？」

「いや、……ん？」

辺りを見渡し、俺は眉をあげた。雪音が居ない。ついさっきここに入ったばかりなのに、姿が見えなかった。おかしいな、見間違いつて事あ無かったと思うんだが。

「おい、さっき雪音……鑑原の奴が来なかったか？」

念のため尋ねてみると、隊員はああ、と頷いて、反対側の戸口を指で示した。

「いらつしゃいましたよ。たった今あつちの出口から、穿界門へ向かわれました」

「穿界門つて、あいつ現世に行つたのか？」

珍しいこともあるもんだ。あいつは瀟靈廷のあちこちで忙しく仕事をしているが、俺の知る限りでは、現世に降りるような仕事はない。

「つーかそもそも、四番隊は戦闘より治療がメインの隊だから、単独での現世出向任務なんて、ほとんど無いはずだ。」

「何だ、救援にでも行つたのかよ」

虚退治やなんかで現世に降りた連中が、鬼道でも手に負えない怪我をした場合は、四番隊が後から出向く事もある。そう思って聞いてみたが、隊員は首を振った。

「いえ、仕事ではなくて、私的なことみたいです。鑑原五席、時々ですけど、ふらつと現世に出かける事があるんです。いつも同じ場所ですから、何か思い入れのあるところを訪ねているんじゃないですかね」

「へえ。思い入れ……ねえ」

呟いて、俺は天井を見上げた。雪音が現世にそれほどこだわっているなんて、これまで聞いた事が無い。一人でこっそり出向くくらいだ、よっぽど気に入っているとかなんだらう。

……そうと知りや、気になるな。

「おい、地獄蝶をもう一回貸せ」

「え？ でも一度返却されましたし、貸与申請をあらかじめして頂かないと……」

隊員がきょとん、と目を瞬かせて言うのがじれったくて、俺は奴の胸倉をつかんで引き寄せ、

「良いから貸せって言ってたんだよ、ぐだぐだうるせえ！」

「ヒイツ?!」

カッと怒鳴りつけてやった。

## 鑑原 2

穿界門をくぐった先は、森の中だった。鬱蒼と生い茂る木々の合間から、白っぽい陽光がちらちらと瞬き、風が吹き抜けて葉擦れの涼やかな音を立てる。遠くで鳴く鳥の声は暢気なほど明るくて、人のいる気配は微塵も感じられなかった。

「色気のねえところに来てんだな、あいつ」

澄んだ霊子は気持ちいいが、若い女ならもつと賑やかなところに遊びにいきたいものを。松本なら絶対、町に繰り出して大騒ぎするぞ。そう思いながら、目を閉じて雪音の霊圧を探す。

人間が居ない分、あいつの低い霊圧でも探しやすくて、すぐに見当がつく。

「こっちか」

俺は獣道に足を踏み入れ、歩き出した。多分雪音も同じ道を辿ったんだろう、ほんの微かだが、あいつの霊圧の欠片が残っているのが感じられる。

途中、狸に出くわした他はこれという事もなく、しばらく歩を進めていると、前方にきらきら光るものが見えてきた。森はそこで一度途切れている。戦闘の時の癖で、広い場所に入る手前で足を止めた俺は、木の影から前をすかして、へえ、と呟いた。

そこにあつたのは、湖だった。

かなりでかい湖で、鏡のように澄み切った湖面には空の色を青々と映し出し、向こう岸は若干霞がかかって見える。

そっち側にもまた木々が生い茂っているらしいが、奥に行くほどなだらかな坂になっている。それを目で追っていくと、森の背後には山がそびえていた。それほど高い山じゃないが、上にいくほど急峻で、山の表面にはちらほらと山桜が咲いているのが見える。

雪音は、湖の前に居た。腰に珍しく斬魄刀を差していて、その周りを地獄蝶が、ひらひらとあてもなく飛んでいるのが見える。

俺は何となく息を潜めて、しばらくの間眺めていたが、雪音は特に何をするわけでもなく、ただじっと眼前の風景を眺めているようだった。

（何してんだ？ あいつ）

風光明媚なといえは聞こえは良いが、いかにも鄙びた光景だ。目を楽しませるほどの絶景というわけでもなし、何をそんなに見入っているのだろう。

不思議に思いながら、俺は無意識に足を横に動かした。と、草鞋の下にあつた枝がぱきん、と乾いた音を立てて折れる。

（あ）

さほど大きな音じゃなかったが、静まり返った森の中じゃ、十分響く。しまったと思った時には、雪音がこつちを振り向き、

「……い、一角?!」

心底驚いた様子で目を丸くした。

「あー……よ、よお」

まずった、見つかった。今更逃げるわけにもいかず、俺は仕方なく茂みを踏み越えた。ずかずか近づいていくと、雪音は最近お決まりの、少し困ったような顔で向き直る。

「ど、……どうしたの。こんなところに、居るなんて。任務でも、あつた?」

「いや……」

一瞬誤魔化そうかと思ったが、そんな事をしても意味が無いばかりか、雪音を警戒させかねないと考え直し、俺は額をかいだ。

「現世の駐在任務から戻った時、お前が六番隊に来たのを見たからよ。現世に行くなんて珍しいと思って、つい追って来ちゃった」  
「つい、って……それだけで、わざわざ後ついてきたの?」

雪音は目を瞬き、それからぽつと赤くなった。俺の視線から逃れるように、慌ててそっぽを向いたが、手が死覇装の袴をつまんで、もじもじしている。

……ああくそ、何でそういう反応しやがるんだお前は、それは俺

が追っかけてきて嬉しいって事かよ畜生、いい加減にしねえと本気で押し倒すぞ、今度は逃げ無しで。

「あー、なんだ、いいところだな、ここは。お前、良く来るんだって?」

照れる雪音があんまりにも可愛くて、自制が利かなくなりそうになったので、俺もあさっての方向に無理やり顔を向けた。それでもちらつと目線をやると、雪音は赤くなった顔を手で覆いながら、うん、と頷き、

「……ここに来ると、何だか落ち着くの。綺麗だし、静かだし、人も来ないし」

再び湖に目を転じた。途端に表情が和らぎ、口元にふわ、と笑みが浮かぶ。……驚いた。こいつがこんなに穏やかな顔してるのを見るのは、初めてだ。

「……何か、良い思い出もあるのか?」

気になってつい尋ねたら、雪音はもう一度頷き、はにかんだ。うわ、だからよせててそういう顔、やばいから。赤面して焦る俺に気づかず、雪音は湖に向かってよいしょ、としゃがむ。斬魄刀の鞘がガチャリ、と鳴った。

「ここ、烈様に初めて、現世へ連れてきてもらった場所なの」

「卯ノ花、隊長に?」

「そう」

手で周囲を漠然と示して、

「今はもう残ってないけど、ここは冬になると、雪が積もってすごく綺麗なのよ。あたし、自分の名前に雪ってついてるけど、見たことなくて」

「まあ……そりやそうだろうな。現世ならともかく、ソウル・ソサエティで天気が悪くなる事あ、そう無いしな。雪を見られるとすりゃ、十番隊の……あー、何だったか、今度隊長になった、あの」

「日番谷君?」

「ああそうそう。あのガキが斬魄刀解放するくらいでしか、見られ



ねえだろ」

「……ぷっ」

「あん？ 何笑ってんだよ」

「だって、雪見たいから解放してなんて言ったら、きつと怒るわよ、日番谷君。俺の斬魄刀は見世物じゃねえ、とか何とか言って」

「いいじゃねえか、減るもんじゃなし」

「そういう問題じゃないでしょ、もう」

俺の前では久しぶりに、くすくすと楽しそうに笑って、雪音は湖に向けて腕を伸ばした。

指先をぬらしてみte気に入ったのか、袖をおさえ、水の感触を楽しむように湖面に手を滑らせる。

きらきらと輝く水面の光を受けて、細く白い手が輝いて見えて、思わずどきりとしてしまう。

（あーくそ、あの腕にちゅーしてえ）

汚れない雪面に、足跡を残したくなる心境と似てるかもしれない。真つ白な肌に赤い跡を山ほどつけてやりたい。そんな事を思い、思った自分に思わずため息を吐く。

本当にやばいな俺、雪音を見ると、ところ構わず盛っちゃう。

女は昔からそれなりに好きだったが、ここまで節操なしじゃあなかつたよな、本気で惚れるってのはこういう事か。理性も糞もあつたもんじゃねえ。つーかマジでやばいだろ、こんな調子じゃ俺、いつまで耐えられるんだ。

「……ここで雪景色を見て、初めて自分の名前が好きになったの、あたし」

自分の衝動を抑えようと深呼吸する俺とは逆に、雪音は至極落ち着いた顔で話を続ける。

「烈様に教えてもらうまで、名前に意味なんて何も無いと思ってた。誰がつけたのかもしれない、無意味な記号でしかなかった。だから、

……」

「……だから、何だよ」

不意に言葉が途切れたので促すと、雪音は手の水を払い、膝頭に顔を伏せた。上から見えるその表情は、どこか物思わしげだった。

「……うん、だからね、ここの名前を貰ったの」

「あん？」

意味が分からない。つい、つっけんどんに声を上げたら、雪音は棒を拾った。鏡原、と地面に書く。

「ここの地名、鏡原っていうのよ。この字でかんばらって読ませるんだけど、昔は鑑原って言う名前だったんだって」

原の上、鏡の横に、鑑を書き足す。

「あたし、ここの名前を貰う時にどっちにしようか迷って、姓名判断してみたら、鑑のほうが良かったから、この名前を苗字につけたんだ」

「じゃあお前、昔は名前違ったのか？」

「烈様が卯ノ花家に養子で迎えて下さったから、卯ノ花雪音って言うてたわよ。だけど、色々知るうちに、その名前が重くなってきたやつて」

卯ノ花、と書いて、雪音は膝の上に頬杖をついた。短く息を漏らす。

「烈様は気にしないでいいと言って下さったけど、あたしは元々貴族じゃないから、分不相応な名前だったのよ。」

それに、いつまでも烈様のご好意に甘えていられないと思ったから、自立の意味もあって、鑑原雪音に改名したの」

「……へえ」

こいつの苗字にそんな由来があるとは、知らなかった。

「名前につけるくらいなら、よっぽどこの場所が、気に入ったんだな」

何気なく言うと、雪音は頬杖を外して、俺を見上げた。そして湖に視線を戻し、ふ、と優しく笑う。

「……うん。ここは、特別な」

「！」

俺はその顔を見て、さつきとは違う意味で、どきりとした。

昔を懐かしむような、慈しむような笑み。

ここじゃないどこか、遠い、遠い場所を見つめるような瞳。

それは俺が今まで見てきた雪音の表情の中で、もっとも無防備で、もっとも近寄りがたいものだった。その顔は言葉よりも雄弁に、雪音の気持ちを物語っていた。

「……」

俺はざ、と地面を蹴って背を向けた。唐突な動きに驚いたのか、  
「え、一角？」

雪音が素っ頓狂な声をかけてくる。立ち上がる気配を感じて、俺は背を向けたまま、手を振った。

「そこいらうついてくるから、帰る時に声かけろ」

素っ気なく言い捨てて、足早に森のふちに入った時、有り難うという言葉が聞こえたような気がした。

俺はそれには応えず、茂みをかきわけ、張り出した木の枝を払い、道なき道を歩いて、湖から遠ざかる。

特別。この場所は、雪音にとって、本当に特別なところなんだろう。

忙しい仕事の合間、時々一人でやってきて、ぼうつと見つめているだけで、穏やかな気持ちになれる、そういう特別。

あんな雪音を、俺は知らなかった。俺の知らない雪音がまだ居るのが悔しくて、全部自分のものにしたいくて、歯がゆい気持ちになる。だが、思い出に浸るのを邪魔するような野暮はしたくねえ。あいつが一人でいたってんなら、そうしてやるさ。てめえがそうしたいからって、遠慮もなしにずかずか相手の懐に踏み込んでいけるほど、俺もガキじゃねえし。

俺は腕を上げてぐつと伸びをし、頭上に覆いかぶさる木々を見上げた。

日の光を透かした葉は青々と輝きながら揺らめき、息を吸い込めば草いきれの匂いが、胸いっぱい広がる。

「……良いところじゃねえか」

ついぽろつと呟いてから、俺は苦笑した。あいつの特別な場所だからって、さっきより景色が綺麗に見えるなんて、俺も大概単純だな。

### 鑑原 3

一角は急に背を向けて、森の中へ姿を消してしまった。

唐突な退場は、多分あたしに気を遣ってくれた為だろうと思ったから、「有難う」と言っただけで、聞こえたかどうかは分からない。草を踏み分けるがさという音にしばらく耳を澄ましていたけれど、やがて周囲は静寂に戻った。

「……………」

あたしは棒で地面を削りながら、再びぼうつと考え事に浸る。

陽光を受けて輝く湖は、空の青と森の緑と山の稜線を見事に映し出して、それは綺麗だったけれど、今あたしが見ているのは、烈様の凛々しく、そして少し悲しげな顔だけだった。

\* \* \*

「……………では、もう決めたのですね」

前に置いた死覇装を見つめていた烈様が、いつもの落ち着いた声で、尋ねてくる。ぐつと顎を引いたあたしは、

「幼き頃から今まで、烈様には大変お世話になり、言葉に尽くせぬほど感謝しております。護廷十三隊の死神となった今、やっとその御恩に報いる事が出来るようになりました。」

本日より私は、卯ノ花家より籍を抜き、新たに鑑原雪音と名乗り、烈様にお仕え致したく存じます」

そう言っただけで平伏した。烈様は細いため息を漏らす。

「あなたがそうと決めたのなら、仕方ありません。ですが、雪音」  
「はい」

「例え卯ノ花家から離れても、あなたは私の子で、私はあなたの母です。それは終生、変わる事の無い絆なのですよ。」

もし何か辛い事があれば、私の元へおいでなさい。私はいつでも、

あなたの味方ですからね』

『烈様……』

顔を上げたら、烈様はにこり、と笑いかけてくれた。昔から変わらない、包み込むような優しさに満ちたその微笑はとても美しく、あたしは胸が一杯になってしまった。

卯ノ花家から出て、一人で生きたいなんて我が儘を聞いて下さっただけでなく、傷ついたときの逃げ場所まで引き受けてくださるなんて。

『……有難う、ございます』

あまりの嬉しさに、つつかえながらお礼を言うと、烈様は畳の上の死覇装を取り、にじり寄ってあたしの手に渡した。

『死神の職務は決して、生易しいものではありません。時に己の心が張り裂けそうなほどの悲しみや苦しみに出会い、苦悩する事もあるでしょう。』

ですが、あなたはきっとそれを乗り越えられる。あなたにはその強さがあると、私は信じています』

『烈、様？』

烈様は不意に表情を曇らせた。あたしの姿を焼き付けるように、長い事見つめ続けた後、列様はぎゅ、とあたしの手を握りしめた。そして躊躇いを消した決意の表情で、告げる。

『一人の死神として立つあなたに、大切な事をお話します。あなたはこれから先、今から私が語る事を心に刻み、その荷を負っていかねばなりません。』

……例えそれが、どれだけ重い荷であつたとしても』

『何、……でしょうか』

これほど真剣な、それでいて悲しげな烈様の顔は、見たことが無かった。半ば怖気づき、聞きたくないと思いながら言葉を発したあたしに、烈様は真っ直ぐな視線を向けた。

『骸鴉。あなたが生まれ育つたあの街が何故、滅んでしまったのかその、真相です』

\* \* \*

ぴしゃん、と水が跳ねる音で我に返る。はっと目を向けたけど、湖の上には波紋が広がっているだけで、魚や鳥の姿は見えなかった。

「……は……あ」

あたしは緊張した身体の力を抜き、いつの間にか折れてしまった棒を、地面に落とした。

（骸鴉……空骸）

名を思い浮かべるだけで、身体に寒気が走る。心の奥にしまいこんだ過去の記憶が引きずり出され、頭の中に赤い情景が次々と蘇る。仰向けに倒れた身体。

闇に塗りつぶされた口。

落ち窪んだ眼窩。

空をむしりとろうとするかのように伸ばされた手。

それらが数え切れないほど折り重なって、目の前一杯に広がる。

「……っ」

お腹からせりあがってきた吐き気に、あたしは膝をついた。熱は喉まで駆け上ってきたけれど、

「ぐっ……」

辛うじて飲み下し、口の中に広がる酸っぱい味に顔をしかめる。

あの時聞いた烈様の言葉は、一字一句違わず覚えている。いや、それ以前に身体が、あの街の有様を覚えている。

それは、あたしの業だ。

決して逃れない、一生背負っていかなければならない業だ。

しばらく肩で息をついて落ち着かせた後、あたしは顔を上げた。どの季節に来ても、どこか懐かしい、不思議な暖かさで受け入れてくれるこの景色が、あたしは大好きだ。

でも今日、目の前に広がる光景は変わらず美しいままだったけれど、あたしの目には何故か色あせて見える。

（……あの時の事を、思い出したから？）

一角に話をして、思い出してしまったせいだろうか。あたしは小さく首を振って、頭の中を駆け巡る暗い情景を振り払おうとする。と、不意に場違いな電子音が鳴り響いた。

「?!」

驚いて懐の伝令神機を取り出すと、画面には虚の出現を知らせるメッセージが書かれていた。ぱつと表示が切り替わり、虚の居場所を示すアイコンが、地図上を移動し始める。

「こんなところに虚が出るなんて……っ」

あたしは鋭く舌打ちして伝令神機をしまい、そちらの方へ走り出した。森に飛び込み、走るといふより飛ぶように先を急ぐと、横手から黒い影が飛び出してきて、あたしに並んだ。

「一角！」

一角はあたしをちらつと見、すぐに前方へ視線を戻した。その口元に苦笑いが浮かぶ。

「お前も指令受け取ったのかよ。ったく、上の連中は人遣い荒えなお前、非番だろうが」

「しょうがないでしょ。虚出現時は、直近の死神が対応する事になつてるんだから」

「かーっ、くそ真面目だな、お前は。こういうのはな、俺に任せておきゃいいんだよ」

と言つて、一角はぐんとスピードを上げた。

う、うわ、さすが十一番隊、速い。あたしだって全速力で走ってるのに、一角が一步進むごとにどんどん距離が開いてしまう。

「一緒に来るつもりならとろとろすんなよ、雪音！」

「う、うるさいっ……！」

息を切らして走りながら、あたしは離れていく一角の背中を追いかけた。広々としたその背中を見つめていたら、胸にずきり、と痛みがよぎる。

（もし、一角があの手を知ったら、どう思うだろう）



烈様があたしに告げたあの事を知ったら、一角はどんな目であたしを見るだろう。

恐れるだろうか、軽蔑するだろうか、それとも今みたいに、離れていってしまうだろうか。

「……っ」

それを想像したら、胸の痛みが激しくなっていく。あたしは唇をかみ締めて、下を向いた。想像するだけでこんなに苦しいのに、それが現実になったらと思うと、恐ろしくて身体が震えてしまう。

言えない。とても言えない。言ったら、一角はきつと。

「ボケつとすんな、来るぞ、雪音！」

「！」

森を抜けたところで、一角の声が響く。反射的に顔を上げたら、向こうから咆哮をあげてやってくる小山のような大きさの虚が視界に入ったので、あたしは慌てて鞘を払った。

けれど、構えるより早く、黒い影が虚の眼前にこつぜんと現れ、  
「ひゅっ！」

一呼吸のうちに白銀の光が走って、虚の仮面を断ち割った。虚は悲痛な叫び声をあげて後ろに倒れ、地面が揺れる。悶え苦しみながら、虚の身体は雪のように溶け始めた。

「……」

それを見ながら、あたしはぼかん、と口を開いて硬直してしまった。

何、これ。今何が起こったのか、全然見えなかった。辛うじて分かったのは、さっきの影が一角だったって事だけ。

身軽く地面に降り立った一角は、刀を鞘に納めて、不機嫌そうに鼻を鳴らした。伝令神機を取り出し、

「ちっ、手ごたえねえな、あつさり終わっちまった。追加給金もねえし、雑魚だったな」

そしてあたしを振り返り、いきなり盛大に噴出す。

「お前、なんだその腑抜けた顔！ すっげー間抜け。俺様の戦いぶ

りに見とれてたのか？」

「うつ……」

悔しいけど、否定できない。間抜けな顔の左半分を手で隠して、あたしは言葉に詰まった。

霊圧高いのは知ってたけど、一角がこんなに強いなんて、知らなかった。全然動きが見えなかったし、虚を切り伏せても息一つ乱れていない。まるで、自分とは全く違う生き物のようにさえ思えるほど、一角は強かった。

だけど、笑う一角の顔は、いつもと同じ、悪ガキみたいな顔だ。そして一角の背後に広がる空が、目にしみるほど青く、澄み渡って見える。

ああ。空が、一角が綺麗だ。

(……つてえ！ 何それ！ おかしいよその感想！)

自分でツツコミを入れて、あたしは赤くなってしまった。

だっておかしい、さっきまで沈んでいた風景が、いつの間にかとても色鮮やかに見える。しかも、その中で一角がとても輝いていて、格好よく見えて、すごくおかしい。

やだ、もう見ていられない。このままじゃあたし、熱があがって爆発するかも。

「か……帰ろ、一角！」

あたしは焦って背中を向け、遅れてこちらへ飛んでくる地獄蝶のところへ、刀をしまいながら歩を進めた。でもその仕草が不自然だったせいか、一角がずんずん近寄ってきて、

「何だよ、もう良いのか？ 雪音」

ぱつと顔を覗き込んできたので、あたしは咄嗟にその顔を押し戻してしまった。

「ムげっ！」

「い、い、いいの！ 帰るの！」

「おま、何すんだおい、今首の筋グキツていったぞ、いてえだろうが！」

「う、うるさい！ 急に近づかないでよ！」

頭がぐるぐるして、胸がときどきしてくるから、ほんとに近づくな！

## 運命の輪 前編

斯くて

刃は

振り下ろされた

\* \* \*

その事を知ったのは、六番隊から四番隊に伝令が届いた時だった。机に居座る書類の山から、その伝令を取り上げた雪音は、途端に顔をしかめてしまった。

「隊舎牢の掃除い？ また下らない雑用を押しつけられて。こんな断つて……あつ、伊江村三席もう了承印押してるし！」

ああもう、こういう細かい仕事をはいはい快諾するから、他の隊になめられるんじゃないの、全く」

書類には、適当な人間を見繕って掃除夫をやらせろというような事が書いてあったので、ぶつぶつ言いながら雪音はそれを脇に避けようとした。

が、ふと何かが意識の片隅にひっかかった。  
「……？」

流し読みした書面を手元に戻し、もう一度、最後まで目を通す。そして、音を立てて息を飲み込んだ。

『六番隊隊舎牢 収容者：朽木ルキア（護廷十三隊十三番隊所属）

」

＊ ＊ ＊

「……失礼します！」

六の字が刻まれた扉をくぐり、押しとどめようとする隊員を振り切って、雪音は隊長室へ足を踏み入れた。

「うわっ！ え、あ、雪音さん？」

押し開いた扉が、バァンと壁に衝突する音で、中にいた恋次がびくつと肩を跳ね上げる。

雪音は部屋を見回した。執務室にも、隣の来賓室にも、朽木隊長の気配はない。目的の人物が居ない事にいらっとして、恋次に詰め寄る。

「阿散井君、朽木隊長は？！」

「え、ええ？ 今はちよつと、出払ってますけど。どうしたんすか、血相変えて」

「血相変えてって……」

何を悠長な事を。六番隊の副隊長にして、ルキアの幼馴染みたる彼がまさか、この事態を知らないなんて、あり得るだろうか。雪音は恋次の胸ぐらを掴んで、

「どうもこうもないでしょう、朽木さんが第一級重禍罪で極刑って、どういう事！？ 何で朽木さんがそんな処罰受けなきゃいけないの！」

声を大にして叫ぶ。と、恋次が顔を強ばらせて、立ちすくんだ。一瞬目が泳ぎ、しかしすぐ鋭い光を宿して雪音を見下ろす。続いて発した声は、硬く低い。

「……どうもこうも。そういう事です」

「そういう事って、朽木さんが何かしたって事？」

「あいつ。現世出向任務中、人間にテメエの力奪われちまったんです」

「に、人間に？」

人間への死神能力の譲渡。それは確かに、ソウル・ソサエティで定められた規律の中でも大罪とされている。

もし死神がその力を容易く人間に与えられるようになってしまえば、現世と死後の世界とのバランスが大きく崩れてしまうからだ。発覚すれば、刑罰を逃れる事は出来ない。

「で、でも、もし無理やり力を奪われたようなら、情状酌量の余地が……」

抗弁する雪音に恋次は目を細めて、首を振った。眉間のしわが更に深くなる。

「ルキアはすっかり人間に同情しちゃって、悪いのは自分だと言い続けてるんです。」

能力の譲渡が行われた経緯にしても、そこいらの雑魚虚に人間共々やられそうになって、仕方なくだったとかで、あいつの霊圧レベルを考えれば、不自然な状況だった。

人間に肩入れして、テメエの力をほいほいくれてやったなんて言ってるようじゃ、裁判官が納得してくれるわけがない」

「裁判官って……じゃ、じゃあもう、中央四十六室の裁定は下った、って事？」

中央四十六室。

それは四十人の賢者と、六人の裁判官で構成されるソウル・ソサエティ最高の司法機関であり、死神の罪に対する裁定は、絶対的な決定権を持っている。既にルキアの罪が中央四十六室で裁かれたというのであれば、その決定を覆す事は難しい。

という事、は。これから一ヶ月の猶予期間が過ぎてしまえば、ルキアは極囚として。

……殺されて、しまう。

「……！」

冷たいものが頭から足下まで一気に走り抜ける。

雪音はもう一度、恋次の服を掴む手に力を込め、怒鳴った。

「阿散井君、朽木さんの幼馴染みなんでしょう？　今でもまだ、好きなんでしょう？　だったら、何で牢に閉じこめて刑の執行を待ってるのよ！　どうして助けてあげないの！」

「……」

恋次は鋭く息を吸い込み、ぐつと顎に力を入れる。一瞬、何とも言い様のない悔しそうな顔をした後、恋次は雪音の手を乱暴に外して、後ろへ押しやった。

「今更どうしようもない。あいつだって、覚悟は決めてます」

「朽木さんが覚悟を決めたら、もう死んじゃっても良いっていうの？！」

思わず叫ぶと、恋次はきつと雪音を睨み付け、

「雪音さんには関係ないだろ！　俺にどうしろっていうんだ！」  
びりびり空気を震わすほどの怒声を上げた。

「！」

たたきつけられる怒りに圧倒され、雪音はびくつと身を縮ませる。大きく目を見開いて硬直したその姿に、恋次はハッと我に返った。

「あ……す、スンマセン、俺、そんなつもりじゃ……スンマセン！」  
がば、と勢いよく頭を下げる。

「……ううん。こっちこそごめん。言い過ぎた」

雪音は細く息を吐き出し、唇をかみ締めた。

そつだ、ルキアが罪人として裁かれる事に一番心を痛めてるのは、きつと恋次だ。自分は彼女と親しいわけではないし、関係ないというのは確かにその通りで、こんな風に恋次を責める謂れも無い。

だが……

「雪音さん、ルキアの事心配して、来てくれたんスよね。それなのに、本当に申し訳ないッス。その……正直言つて、俺もまだ、混乱してるところがあつて」

恋次は頭を上げて、困惑した表情で言う。

「……もつ、本当に駄目なの？」

「……………」

見上げて問いかけると、恋次が傷ついたような顔をした。しかしすぐ、それを隠すように、無理な笑みを浮かべて、

「いや、あいつの事だからきつと、執行前に派手に脱獄しますよ。意外と執念深いツスから大丈夫ですつて。雪音さんが心配する事ないですよ」

冗談めいて応えたが、それが嘘だという事はすぐに察せられた。先ほど恋次自身が言っていたではないか、ルキアはすでに覚悟を決めているのだ、と。

「……そんなの、無いよ」

雪音は呟いた。そんなの、無い。ルキアが死ぬなんて、そんな事、嫌だ。

「……雪音さん？」

様子がおかしい事を訝つてか、恋次が顔を覗き込んできた。雪音はそれを睨み返し、

「朽木さんが死ぬなんて、絶対駄目だよ。あたし、総隊長のところ行ってくる。総隊長ならもしかしたら、裁定も覆せるかもしれないから」

「えっ、雪音さん！」

驚いて目を瞬く恋次を置いて、隊長室を飛び出した。



## 運命の輪 後編

『海燕の身体は完全に虚に乗っ取られて、救いようが無かった。最後は、斬ったよ』

『……！』

淡々とした浮竹の言葉は、かえって生々しいほどに現実を突きつけてきた。目の前が一瞬白くなり、眩暈がする。

『鑑原、大丈夫か？』

がくつと足元から崩れそうになったのを、浮竹が支えてくれた。

しかし身体に触れた手は驚くほど冷たく、まるで死人のようだった。

『海燕……副隊長は……どこへ……？』

掴まれた腕からじわじわ広がっていく、冷たい感触に震えながら問う。浮竹は、まるで苦痛に耐えるように顔をしかめて囁いた。

『……朽木が、家に連れて帰った』

\* \* \*

カンツ、と杖が床を叩く。静まり返った総隊長室の中、その音は思わずびくりとしてしまうほど、大きく響き渡った。萎縮して肩をすくめる雪音の前に立った山本は、細い目をうつすら開き、

「ならん」

ただ一言で、雪音の嘆願を切り捨てた。

「！ どうしてですか！」

すがるように叫んだが、山本は顔色一つ変えず、あごひげをしいた。

「一度下った裁定は、例え隊長格が異議を唱えようと、覆されぬ。そのくらい、お主も分かっておろう」

「で、ですが……死神能力の譲渡は重罪です。でも極刑に値するほどの罪では無いでしょう。ましてや、罪人は四大貴族・朽木家の方なのだから、減刑を請われたはずでは？」

「それは無い」

「え……」

「四大貴族の者であろうと、罪は罪。しかるべき罰を受ける事に異存なし、と朽木家当主も申しておる」

「とう、しゅって……」

雪音は今度こそ絶句した。朽木家の現当主といえば、ルキアの義兄・朽木百哉その人ではないか。

(ど……どうして！ 何で、妹を助けてあげないの?!)

朽木家の兄妹仲がどうかは知らないが、ルキアは百哉に請われて、朽木家に入ったと聞いている。

大貴族の朽木家に、流魂街の平民を入れる事、それは雪音が卯ノ花家に入った事よりも、更に困難なことだったろうと思う。そうまでして迎えた義妹を、なぜ見捨てるのだろう。

理解が出来ない。腹立たしい。そんな思いで、きつく拳を握り締めて俯いていると、山本が問うた。

「雪音。朽木ルキアは、お主の友か？」

「……知り合いです」

友というほど、近しく付き合った事はない。山本は眉を上げて、「では、どうしてそこまで朽木ルキアにこだわる。単なる知り合いにしては、思い入れが強いように見受けられるが」

恋次にも言われた事だ。ルキアとは仲が良かった訳でもないから、総隊長にまで減刑を請うほど必死になるのは一見奇異に見えるかもしれない。だが、こだわる理由なら、存在する。

「朽木さん、は……」

雪音は一度ぐっと奥歯をかみ締め、それから顔を上げた。

「朽木さんは、海燕副隊長の最期を看取ってくれた人だからです。海燕副隊長が家に帰る事が出来たのは、朽木さんのお陰でした。」

私は、海燕副隊長を尊敬していましたから、虚に乗っ取られるような悲惨な状態になりながらも、せめて最期は人として、家族の元へ戻れた事が、何よりも嬉しかったんです」

名を口にするだけで、あの時の情景が目には浮かんで、涙が出そうになる。

横たわる都、訃報を告げる浮竹の顔。風にはためく隊葬の旗。

「……私は、嫌なんです。もう、知っている人が亡くなるのを見るのは」

きつくまぶたを閉じ、震える声で言う。ルキアが処刑される様を、その後、彼女が居たはずの場所が完全な空白になってしまう事を思うと、恐ろしくて悲しくて、苦しかった。

「……左様か」

山本は聞き取りにくいほど低い声で囁いた。目を開いた時、しかし山本の目には鋭利な光が浮かび、じっと雪音を見据えている。

「お主が人の死を恐れる気持ちは、よう分かる。じゃが、朽木ルキアの極刑は既に決定事項なのじゃ。隊員一人の感傷的な請願で曲がる法は無い」

「お……お爺様！」

最後通告だ。ぞつとして裏返った声を上げた雪音に、山本は羽織を翻して背を向けた。

「職務へ戻れ、鑑原五席。話は終わりじゃ」

\* \* \*

総隊長室を辞去した雪音は、黙々と廊下を歩いていった。自分でもどこへ向かっているのか分からないまま、ただ規則的に足を動かしていると、徐々に視界がゆがみ始める。

「……また」

雪音はぐいつと天井を見上げた。こぼれそうになるしずくをこらえながら、呻く。

「また、何も出来ない」

人の命が失われようとしているのに、また何も出来ない。無力すぎる自分を思い知らされて、息が詰まりそうになる。

悔しい。悲しい。齒がゆい。

その思いが身体を駆け巡って、四肢の力を奪っていくように思えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7565f/>

---

十一、四（BLEACH）

2011年10月10日03時18分発行